⑥　第Ⅰ～Ⅳ層出土の陶磁器

時期区分で概述したとおり遺構や層位堆積状況からは第Ⅰ層（第Ⅳ・Ⅴ期）・第Ⅱ層上部（第Ⅲ- Ⅳ期）・第Ⅱ層下部（第Ⅲ期）・第Ⅲ・Ⅳ層（第Ⅲ期の造成層）として位置付けた。前項までに第Ⅸ～Ⅴ層について層位順に項目を設け概述してきたが、本項Ⅰ～Ⅳ層は各層間で接合する資料も多く含まれ、資料整理を煩雑とさせた。一部Ⅱ層下部資料は年代観を判断するのに有効と考え抽出可能なものについて先行して紹介するにとどめ（Ⅱ層下部＝第40・41図・第56図1～6）以下、各分類ごとに記載していく。

土器（第38図-1～5）

壺－第38図-1～2はⅡ群の壺ｂに該当すると考えられる資料で比較的造りが粗造。

甕－同図-3は甕ｂで肩部はゆるやかで、張りは無く口縁部内外面には磨きが徹底し均整のとれた器形となる。

器種不明－同図-4・5底部資料で同図-4は立ち上がりが緩やかで丸く、器面はポーラスになる。同図-5は底部の立ち上がりが鋭角となり、外器面に篦状工具でケズリが縦方向に向け並ぶ。

カムィヤキ須恵器（第38図-6～10）

壺－第38図-6は壺ｃ、同-7は壺ｂで口唇部の一部を僅かに欠くのみで、本調査区では唯一の完形資料である。同図-8は壺ｄで短頸の壺形、肩部はナデ肩になるとともに厚みをもつ。**鉢**－同図-10は鉢形で口縁部を弱く折る。

沖縄産陶器（灰釉碗）

碗－第38図-11は灰釉碗でこれを含め2点得られる。年代的には新しく第Ⅴ期（17世紀以降）の資料と推測する。

瓦質土器（第39図-1～4）

鉢類－第39図-1～4は在地産の瓦質土器資料で同図-1は植木鉢で縄状突帯を口縁部、胴部中央に廻し区画内に花唐草文を押印する。同図-2は口縁部を屈曲させ内体面に10本単位の櫛で間隔をもって擂目が施される。同図-3は鉢。

器種不明－同図-4は完形資料だが類品を見ない資料で器種不明として保留する、いわゆるヒール（火炉）とされるものとも考える。内面には刷毛目状の調整痕が内面にみられる。

瓦器（第39図-5～7）

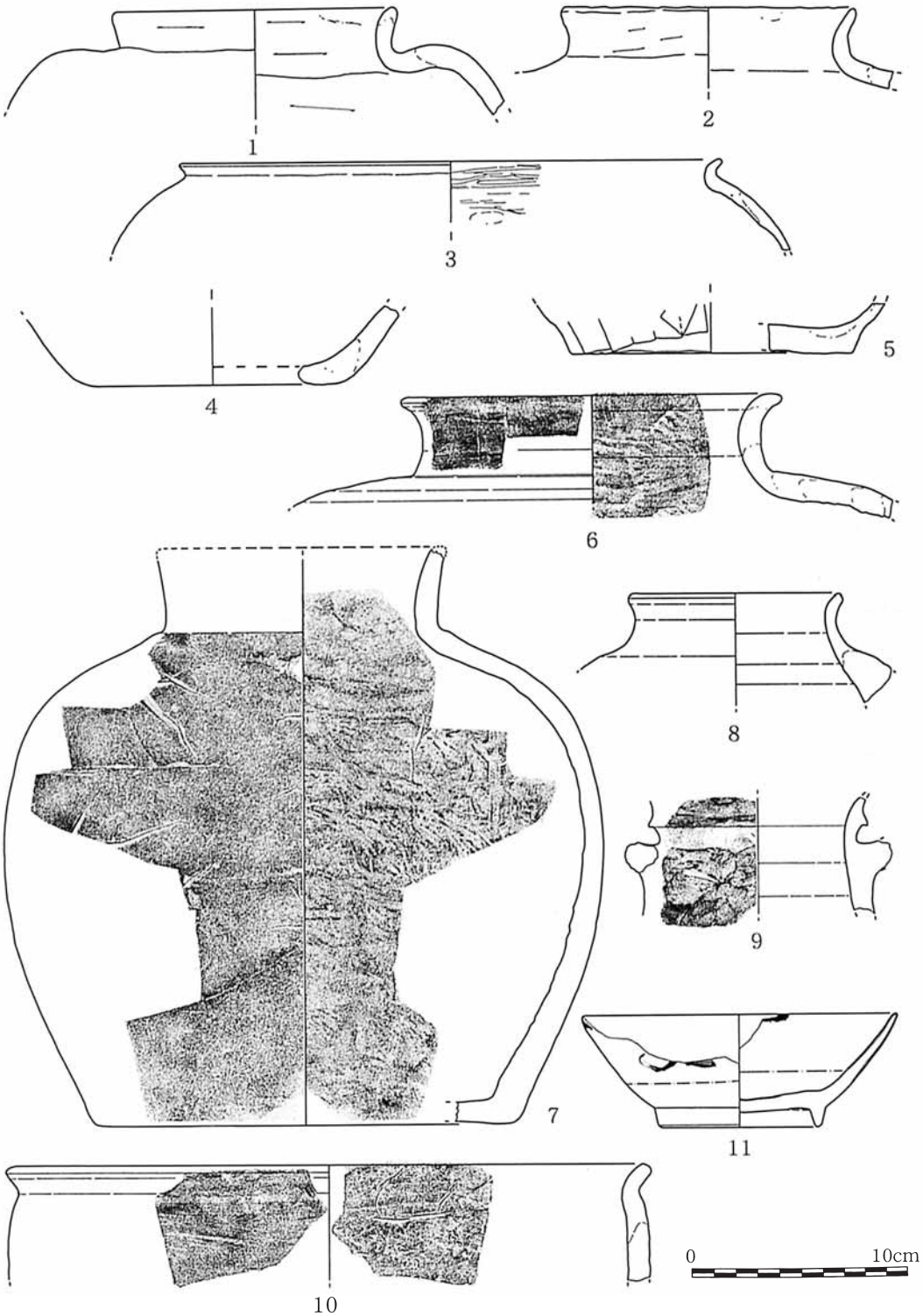
鉢－第39図-5～7は瓦質焼成された瓦器で、搬入資料と推測される。瓦質土器とした在地品に比して胎土は精製され緻密、鉱物粒を含む。菊花文が口縁外面に並び、同図-5・7は口縁部を内側に折り曲げ、同図-6は直口口縁外面に比較的大きな菊花文をスタンプする。

備前（第 39 図-8・9）

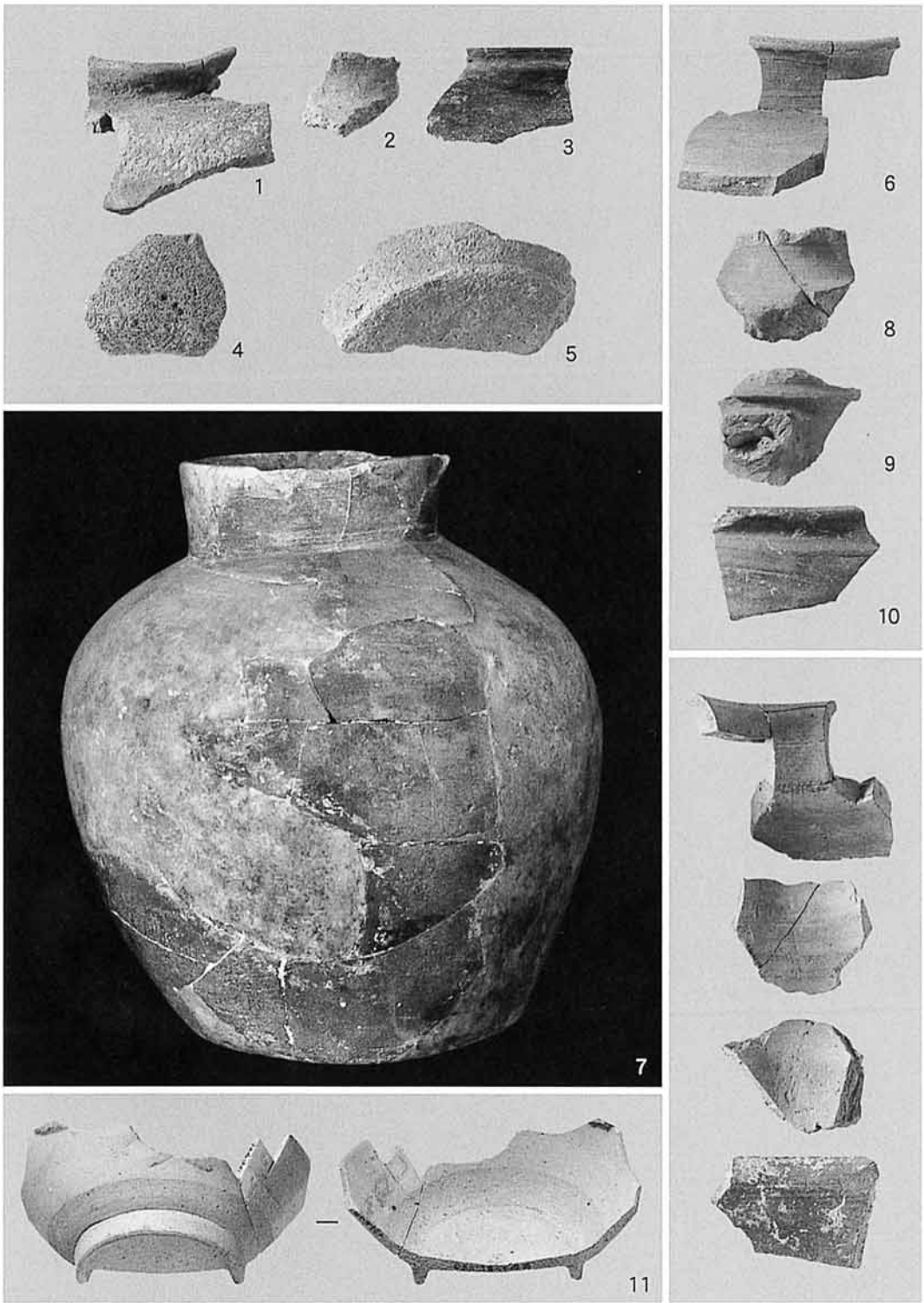
擂鉢－第 39 図-8・9 は備前擂鉢でいずれも 15 ～ 16 世紀頃の資料、前者が 8 本、後者が 7 本の櫛により擂目を施す。同図-9 は口縁から底部まで復元できた資料である。

挿図番号 図版番号 枝番号	分類	器種	部位	口径 器高 底径	色調	胎土	調整 備考	出土地点	
								地点	層
第 38 図 PL. 53 1	土器Ⅱ	壺 a	口縁部	12.8 － －	内にぶい赤褐 外褐灰	泥質。	内外面とも雑なナデ調整、怒り肩の肩部、口唇は断面舌状。	B-1	Ⅱ 40-50
第 38 図 PL. 53 2	土器Ⅱ	壺 b	口縁部	13.4 － －	内にぶい橙 外にぶい橙	泥質。	内外面ともナデ調整、口唇部断面は尖り気味の舌状を成す。	F-3	Ⅱ
第 38 図 PL. 53 3	土器Ⅱ	甕 b	口縁部	25.0 － －	内橙 外黒	泥質。	内外面とも磨き、外面は黒色で光沢を有する。均整の取れた器形。	B-2	Ⅰ
第 38 図 PL. 53 4	土器Ⅱ	不明	底部	－ － 13.4	内橙 外にぶい橙	泥質。	内外面とも器表面が剥落し調整不明。平滑な器面上はアバタ状を成す。	A-3	不明
第 38 図 PL. 53 5	土器Ⅱ	不明	底部	－ － 13.0	内灰 外明赤褐色	泥質。	低部立ち上がり部は幅 1cm 程のヘラ状工具により縦方向の調整が並ぶ。内面は剥落し一部煤が残。	C-1	Ⅳ 10-15
第 38 図 PL. 53 6	須恵器	壺	口縁部	17.8 － －	内暗灰 外暗灰	微粒子で白色粒をわずかに含む。焼成良好。	内外ともナデ、肩部内面にはタタキが残るとともに接合痕が表出。	D-3 D-3	Ⅰ Ⅱ 5-10
第 38 図 PL. 53 7	須恵器	壺 b	完形	13.4 26.8 19.4	内暗灰 外暗灰	微粒子で白色粒をわずかに含む。焼成良好。	内外ともナデ、内面は比較的雑であて具の痕跡を残す。	B-1 B-1 B-2	Ⅱ 0-5 Ⅱ 15-20 Ⅱ 15-20
第 38 図 PL. 53 8	須恵器	壺 c	口縁部	10.0 － －	内暗灰 外灰	微粒子で白色粒をわずかに含む。	内外ともナデ、内面に一部タタキが残る。肩部に厚みを持つ器形。	B-3	Ⅱ 5-10
第 38 図 PL. 53 9	須恵器	不明	胴部	－ － －	内灰 外灰	微粒子で白色粒と黒色粒をわずかに含む。焼成良好。	内外ともナデ、内面は比較的雑。取っ手状の張り出しと段部を表出する器形。	不明	不明
第 38 図 PL. 53 10	須恵器	鉢	口縁部	－ － －	内灰 外灰	微粒子で白色粒と黒色粒をわずかに含む。	内外ともナデ、内面は比較的雑。取っ手状の張り出しと段部を表出する器形。	不明	不明
第 38 図 PL. 53 11	陶器	灰釉碗	完形	14.6 5.2 7.6	内淡灰緑色 外淡灰緑色	粗粒子で小豆色粒を多く含む。	見込みは露胎するが、中央に釉垂れあり。重ね焼きの目跡が残る。画面は筆描きの文様あり。	D-3	東壁内 西壁内
第 39 図 PL. 54 1	瓦質土器	鉢	完形	32.6 22.0 22.2	内黄褐色 外橙褐色	微粒子で白色の鉱物粒を僅かに含む。	外面には口縁直下に 2 条一組、胴中央部に一条一組の突帯を施し、その間に花唐草を押印。	B-1 C-2 C-1	Ⅱ 5-10 Ⅱ 0-5 表土
第 39 図 PL. 54 2	瓦質土器	擂鉢	完形	24.0 12.0 14.2	内灰色 外灰色	微粒子で小豆色の混和材を僅かに含む。	外面はナデ調整により平滑に、内面は体部・見込みに等間隔で 10 本一組の擂り目を施す。	D-1 B-2 B-1	東壁内 Ⅰ Ⅰ
第 39 図 PL. 54 3	瓦質土器	鉢	口縁部	15.0 － －	内茶褐色 外茶褐色	微粒子で小豆色の混和材を僅かに含む。	内外面とも剥落が著しい。調整は不明。	B-3	西壁内
第 39 図 PL. 54 4	瓦質土器	不明	完形	14.2 14.7 14.0	内灰色 外灰色	微粒子で白色・小豆色の混和材を僅かに含む。	内面はナデ調整で平滑になり、外面は刷毛目様の調整が残る。	B-1 C-1 A-2	Ⅱ 10-20 Ⅳ Ⅴ
第 39 図 PL. 54 5	瓦器	鉢	完形	48.0 5.8 40.4	内橙褐色 外橙褐色	微粒子で、透明・褐・黒色の粒子を含む。	内外面ともナデ調整、口縁部外面に菊花文が押印される。口径の広い火鉢か？	A-1	Ⅰ
第 39 図 PL. 54 6	瓦器	鉢	口縁部	－ － －	内灰白色 外灰白色	やや粗粒子で、白色粒が多く含む。	内外面ともナデ調整、口縁部外面に菊花文が押印される。	D-3	Ⅱ 5-10
第 39 図 PL. 54 7	瓦器	鉢	口縁部	－ － －	内赤褐色 外灰赤褐色	やや粗粒子で、白色・褐色微粒を含む。	内外面ともナデ調整、口縁部外面に菊花文が押印される。	E-2	Ⅱ 0-5
第 39 図 PL. 54 8	備前	擂鉢	口縁部	29.6 － －	内灰褐色 外灰褐色	微粒子で堅緻、断面は暗赤褐色を呈す。	8 本を単位とする擂り目が施される。	E-1 E-1 E-1	Ⅱ－Ⅵ Ⅰ 東壁内
第 39 図 PL. 54 9	備前	擂鉢	完形	30.8 12.0 14.8	内赤褐色 外赤褐色	粗粒子で白色砂粒を比較的多く含む。	7 本を単位とする擂り目が施される。（今志第 5B Ⅱ 25-30・今志第 6A 表土・Ⅱ）	D-1 D-1	東壁内 5 号土坑

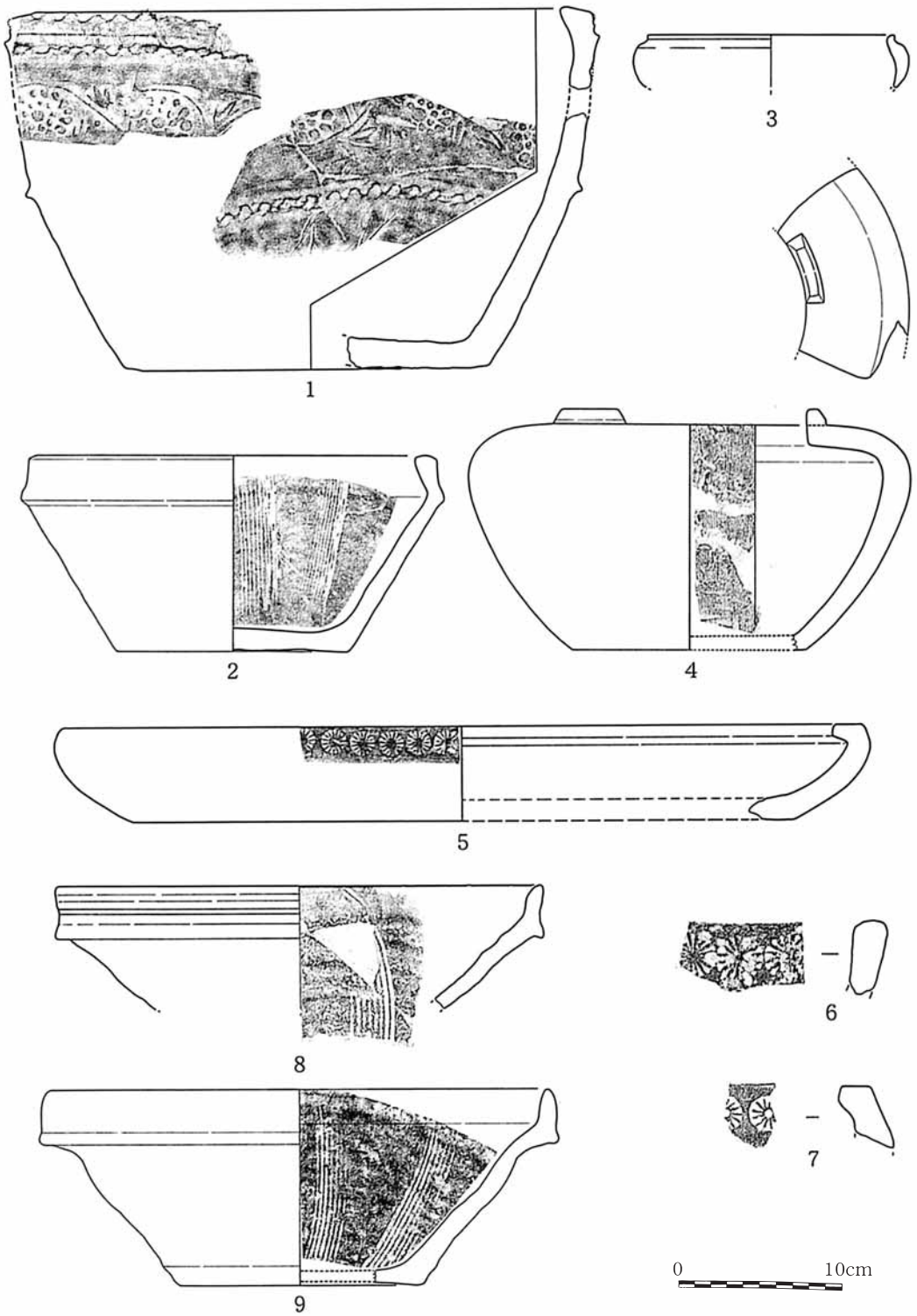
第 29 表　第Ⅰ～Ⅳ層　出土陶磁器観察表(1)



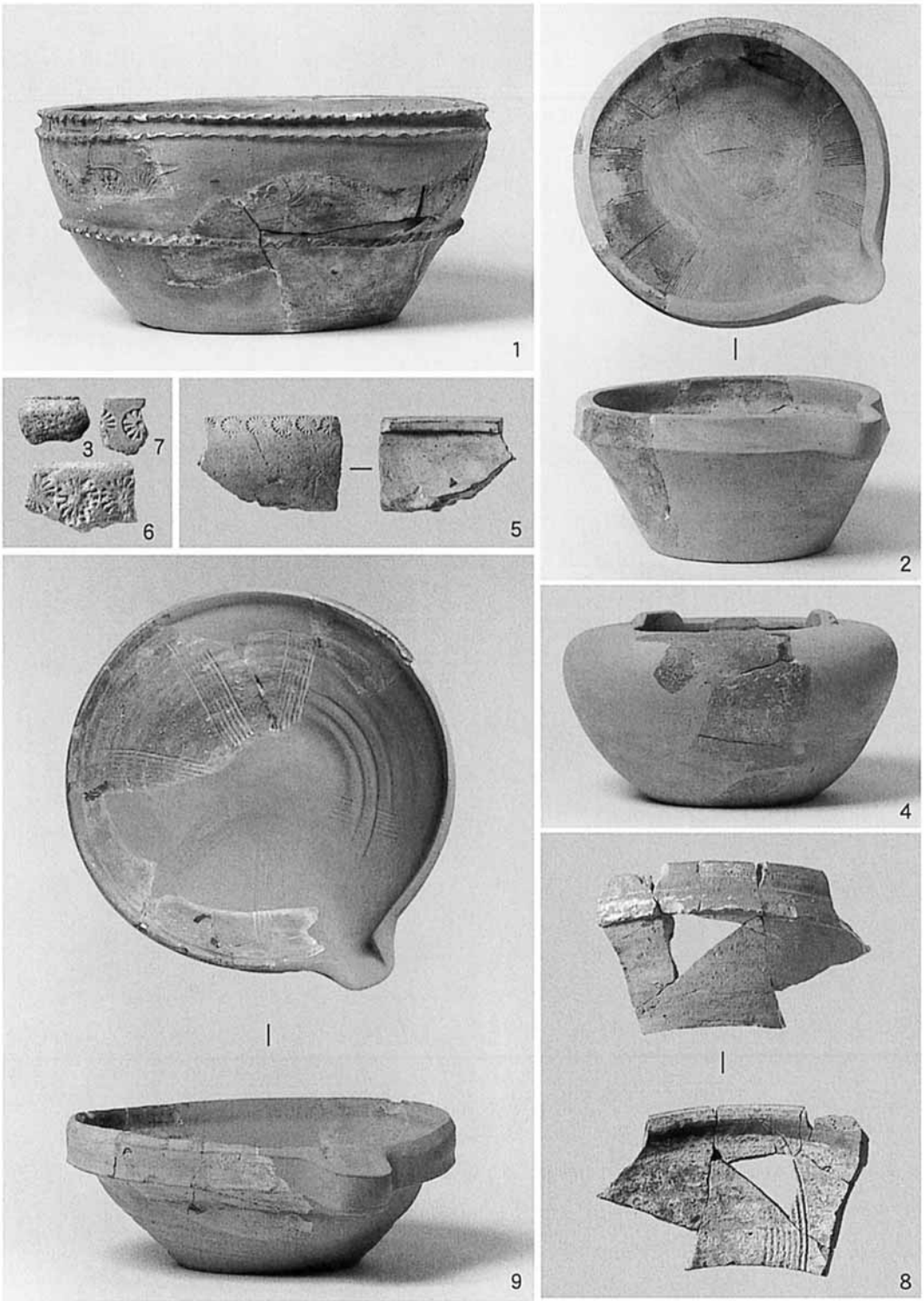
第 38 図 (PL.53)　第Ⅰ～Ⅳ層出土土器・カムィヤキ須恵器・灰釉碗　1・2. 土器壺　3. 同甕
4・5. 同底部　6～8. カムィヤキ須恵器壺　9. 同不明頸部　10. 同鉢　11. 灰釉碗



PL.53(第 38 図)　第Ⅰ～Ⅵ層出土土器・カムィヤキ須恵器・灰釉碗　1・2.土器壺　3.同甕
4・5.同底部　6～8.カムィヤキ須恵器壺　9.同不明頸部　10.同鉢　11.灰釉碗



第 39 図 (PL.54)　第Ⅰ～Ⅸ層出土瓦質土器・瓦器・備前焼　1. 瓦質土器鉢　2. 同擂鉢
3. 同鉢　4. 同器種不明　5 ～ 7. 瓦器火鉢　8・9. 備前焼擂鉢



PL.54（第 39 図）　第Ⅰ～Ⅸ層出土瓦質土器・瓦器・備前焼　1. 瓦質土器鉢　2. 同擂鉢
3. 同鉢　4. 同器種不明　5 ～ 7. 瓦器火鉢　8・9. 備前焼擂鉢

青磁（第 40 ～ 54 図）

第Ⅱ層下部の碗・皿・杯－第-40・41 図は第Ⅱ層下部出土の資料で第 40 図-1 は砧系蓮弁文碗、同図-2 無鎬蓮弁文ａの小碗、同図-3 は角高台で見込みの凹む無鎬蓮弁文碗ａ、同図-4 は口縁下部に一条の回線を廻らす、胴部には蓮弁文を廻す無鎬蓮弁文碗ｂ。同図-5・6 は二叉状の工具による蓮弁文を配する口縁部は直口で薄い釉が施釉される。同図-7 は無文の外反碗ａで比較的厚く施釉。第 41 図-1 は二叉状の工具による口折皿Ⅰ群ａ。同図２～４は口折皿Ⅱａの無鎬蓮弁文皿で比較的鎬の明瞭な同図-2 や、折縁の幅も狭く篦彫り蓮弁も粗雑になる同図-3・４などバリエーションが認められる。同図-5 は口折皿Ⅱ群ｂで器高は浅く弁先の尖らない幅広の蓮弁を廻らせる。同図-6 ～ 9 は腰折れの外反皿で外体面を無文とする。同図-10 は直行口縁の無文皿で見込に陽圏線を廻らせる。第 40 図-8 はべっ甲口杯、同図-9 は菊花杯である。

碗－第 42 図-1 ～４は鎬蓮弁文碗、同図-5 は無鎬蓮弁文碗ｂ口縁直下に圏線を廻らせる蓮弁文碗、同図-6・7 は無鎬蓮弁文碗ｃ。同図-8 は無鎬蓮弁文碗ｅ、二叉状の工具による蓮弁を描く小碗で、小さい厚みのある底部に直口の口縁が付く。同図-9 は直口口縁に剣先蓮弁を丁寧に描く剣先蓮弁文碗、内面は花文が描かれる。第 43 図は線刻蓮弁文碗で同図-1 ～３は線刻蓮弁文碗ａ、同図-1・3 は花文を見込み中央にスタンプ、同図-1・2 は刻花文を内面に施している、弁尻は腰部下半まで丁寧に篦描きされる。同図-4 ～６は線刻蓮弁文碗ｂ、同図-4 は見込み中央が露胎、同図５は高台内を蛇の目状に釉剥ぎ、ａ種に比して弁先は雑に描かれやや大振りとなる。同図-7 線刻蓮弁文碗ｃ、小碗で線刻が胴中央で止まりやや雑にな蓮弁が描かれる。第 44 図は口縁外面に雷文が描かれる雷文帯碗で同図-1 ～５は篦彫りの、同図-6 ～８は雷文がスタンプで施されている。前者を雷文帯碗ａ、後者が同ｂに分類される。同図-1・3 は口縁部外面に雷文、胴下半に篦彫りで刻文が施されるラマ式蓮弁文等の文様と考えられるが判然としない。同図-4・5 は丁寧な雷文が口縁外面に描かれ胴部には外面もしくは内外面には花文等が篦描きされる。同図-6 は内外面に丁寧な雷文帯を有し内外面に花文が描かれる。同図-7 はやや肥厚する直口口縁内外面に雷文帯を廻らせ、内面には牡丹唐草文が施される。同図-8 は大振りの碗（もしくは鉢）で内外面にスタンプによる雷文が、内体面にはスタンプによる菊花文が描かれる。いわゆる人形手と称される一群の資料に類する。第 45 図-1 は外反の弦文帯碗ａで外面腰部にラマ式蓮弁文が廻り内面にも文様が施される。同図-2 は直口の弦文帯碗ｂ。同図-3 は波濤文を口縁外面に描く波濤文碗。同図-4・5 は無文外反碗ｂ、同図-6 は肥厚口縁碗で釉剥ぎする見込みに花文を押印する。同図-7 は直口口縁で底部は厚みがあり、釉は高台脇まで施釉される。同図-8 は無文碗で青磁とも白磁とも判別し難い資料で白磁内底無釉碗ｄに該当するものと近似、底径の広い高台にやや外開きになる口縁、施釉は腰部までで施され、見込みの釉を輪状に掻き取る。

皿－第 46 図・第 47 図１～３は口折皿で比較的鎬の明瞭な第 46 図-1 がⅠ群ａとなる以外はすべてⅡ群となる。同図-2 ～６は無鎬蓮弁文を外体面に施す口折皿Ⅱ群ａ、同図-7 ～９は無鎬連弁文を外体面に施す口折皿Ⅱ群ｂ。蓮弁の描き方や見込み文様の有無及びその種類、器高の高いものと低いものなどバリエーションが多彩である。第 47 図-1・2 は口縁上

端面に雷文を廻し、同図-2・3は内面に刻花文を施す。同図-1はやや篦彫りが深い蓮弁を、同図-2・3は篦彫りの蓮弁が間隔をもって描かれる。同図-4～8は直口口縁蓮弁文皿で、同図-4・5は二叉状の工具による篦彫りの蓮弁が描かれる、内面は幅広の篦による蓮弁が彫られ弁先は二叉状の工具による。同図-6～8胴中央に隆線が廻り、上下に二本の篦彫りで蓮弁を表現するもの（同図6･8)、下部に二本の篦彫りで連弁を表現するもの（同図-7)、内面は同図-6は刻花文を、同図-7は篦彫りの蓮弁が密に配し弁先は二叉状の工具で描く、同図-8は篦彫りの蓮弁が施される。第48図・第49図は口縁部が外反、腰部で屈曲する外反皿で口縁部を稜花にするもととしないもの、無文と有文、素地などから細分可能である。第48図-1～5は刻花文を内外面に、同図-5は刻花文を内面に、同図-2～4は腰下部に雑な蓮弁文を間隔をもって篦彫りする。同図-6・7は口縁部を刻むいわゆる稜花皿で同図-6は内面を無文外面腰下部に蓮弁文を配する。同図-7を外面は無文、内面に刻花文を施す。第49図-1～8外面無文の皿で、見込みに文を施すもの（同図-1～4)、器高の低いもの（同図-1)、腰部屈曲の弱いもの（同図-3）などバリエーションがある。同図-9は内外面及び見込みに丸彫りで略化された蓮弁文を廻らす腰折れの外反皿。第50図-1～3は外面無文の直口口縁皿で、同図-1は見込みに印花文を、同図-2・3は見込みを露胎にする資料である。同図-4は直口する口縁部を刻み､内外面に丸彫りで略化された蓮弁文を廻らす小皿。同図-5・6は腰部から直線的に外開きになる口縁を刻み、内外面に略化された蓮弁文を廻らす。同図-6は高台内に「洪武年造」の字款を有す。同図-7は腰部を屈曲させ直線的に外に開く口縁を刻む。刻み部分から白色の釉垂れが見込みに向かい流れる薄手で均整の取れた資料である。

盤－盤は多数得られており中でも鍔縁の盤が多い。第51図-1は内面には牡丹唐草、腰部に篦彫りで蓮弁が丁寧に描かれる比較的深手の資料。同図-2・3は鍔縁口縁端部を刻み稜花に成形する資料である。同図-2は全形を窺うことができ、内面に幅広の篦彫りで蓮弁文が廻らされる。同図-3は内外面に篦彫りの蓮弁文が廻らされる。同図-4は鍔縁盤の見込みにねじ花文を、内面に刻花文施す。同図-5～9は鍔縁盤に篦（5・6)、櫛（7～9）による蓮弁文を廻らせる資料で、口縁形状には口縁端部をつまみあげるもの（6～8)、鍔縁を平坦にするもの（5)、鍔縁の狭いもの（9）などバリエーションに富む。同図-10は緩やかに張りのある腰部から直口する口縁部の付く資料で、見込みから内体面を三分し篦彫りの蓮弁が描かれる。同図-11は碁笥底になる底部から緩やかに外に開きながら直立する口縁端部を浅く刻み、外面を隆帯文で区画、内面は円形の幾何学文をスタンプする。

擂鉢－第52図-2は擂鉢、内面の口縁直下で施釉は止まり露胎する内面に擂目が見られる。

香炉－同図-3は三足香炉で緩やかに張る胴部に外側に折れる口縁部に取っ手が貼り付けられる、見込み・外底を露胎とする。第55図-4は無文直口の香炉で脚部は見られないが志慶真門郭で確認した三足香炉（志慶真門郭報告第17図-9）と同タイプと推測される。

合子－第52図-4は合子で外面上部に波濤文、下部に蓮弁文と見られる文様を描く。

花生－同図-5は花生で均整の取れた器形で古式の様相を呈す。

水注－同図-6は水注で腰部にラマ式蓮弁文を施す。

同図-7は器台で口縁部を欠損する、推定二個体のうち一個体を図化した。

壺－第53図は酒会壺で個体数は数十個体を推定する。同図-1は蓋上面に（菊？）花文を描く。同図-2はこれに伴う身で腰下部に蓮弁を廻らせ、主文様には窓枠に吉祥文字を配すると推測される。いずれも二次的な火を受けたと推定され内外面の釉、器表面に泡を吹く。同図-3は蓋で上面に充填される線刻間に草花文が描かれる。同図-4はこれに伴うと推定される身で腰下部に片切り彫りによる丁寧な蓮弁を廻らせ、主文様は不明だが細工の細かい文様を描く。同図-5は底部から胴中央まで残存する資料で、腰下部に蓮弁文を廻らせ、主文様に牡丹唐草と見られる文様を配す。同図-6は口径の小さな酒会壺で体部に蓮弁を廻らす。同図-7～10は蓋で蓮弁文を上面に描く。同図-7は立体的で弁先が尖る丁寧な連弁文を廻らせ、同図-10は中型の蓋に伴うと推測される小型の標品で、細い箆彫りによる幅の広い蓮弁文が描かれる。第55図-5は小壺で厚みのある釉を底部際まで施釉する。

瓶－第54図は瓶で同図-1は環耳瓶の玉壺春瓶で腰下部に蓮弁文、胴主文様に牡丹唐草文を描く。同図-2は玉壺春瓶の底部資料で腰下部の蓮弁は花弁内に細い箆彫りで線刻する。胴中央に描かれる牡丹唐草文は立体的で丁寧に描かれる。同図-3は玉壺春瓶の胴部資料で鏨蓮弁文を腰下部に胴主文様は鶴を配す。同図-4は双耳方瓶で一個体を復元した。口縁及び脚部外面には雷文を施し、胴部主文様は窓枠を設け中に文様を描く。

杯－第52図-1はべっ甲口縁の杯で外面には蓮弁を、内面には刻花文を描く。第55図-1は外体面中央に隆帯文を上下に線刻蓮弁文を、内体面には幅広の蓮弁文を廻らす。同図-2は無文の碁笥底の杯。同図-3は八角口縁の杯で脚部を欠くが高足杯と推測する。

蜀台－同図-6・7は人形で型造り成形される。同図-6は脚部で人の足が確認され足の部分は露胎。同図-7は人の肩から腰あたりの資料で、志慶真門郭の報告[註43]では仏像とした資料に該当するが人形蜀台の可能性もある。同図-8は象形蜀台で象の背中に蜀台を載せる、同様の蜀台は数個体出土一個体を図化した。

註文献

43. 今帰仁村教育委員会編1983年『今帰仁城跡発掘調査報告書Ⅰ』今帰仁村教育委員会書第9集

挿図番号 図版番号 枝番号	分類	器種	部位	口径 器高 高台	素地	施釉 （釉色） 貫入	文様 備考	出土地点	
								地点	層
第40図 PL.55 1	青磁	碗	口縁	14.2 － －	灰白色 微粒子	明緑灰色の釉を全面に厚く施釉（全面に荒い貫入）	外面にヘラ描きによるやや細い鏨蓮弁文が施される。蓮弁は弁間があく。	B-1	Ⅱ下
第40図 PL.55 2	青磁	碗	〃	12.2 － －	灰白色 微粒子	緑灰色の釉を全面に厚く施釉。（貫入なし）	外面口縁部から胴部中位に、ヘラ描きによる連弁文が施される。連弁は弁先が開く。	B-1	Ⅱ下
第40図 PL.55 3	青磁	碗	口縁～底部	14.8 6.8 5.1	灰色 やや粗粒子	明灰緑色の釉を内底から高台外面まで施釉。畳付から外底は露胎。（全面に細かい貫入）	外面にヘラ描きによる弁間の開いた雑な蓮弁文を腰部まで施す。蓮弁は弁先が開く。	A-3 今志 第5	Ⅱ下
第40図 PL.55 4	青磁	碗	〃	17 8 6.6	黄灰白色 やや粗粒子	明黄緑色の釉を内底から畳付まで厚く施釉、外底は露胎。（全面に細かい貫入）	外面胴部に圏線が一条廻り、その下にヘラ描きによる蓮弁文が施される。（B-1 Ⅰ層、B-1 Ⅱ上、B-1 Ⅱ下、C-1 Ⅳ）	B-1 C-1	Ⅱ下 Ⅳ
第40図 PL.55 5	青磁	碗	口縁	17 － －	浅黄色 やや粗粒子	明灰緑色の釉を全面に施釉。（貫入なし）	外面に片切り彫りによる幅広の鏨蓮弁文を施す。蓮弁は弁間が開き鏨は不明瞭（C-1 Ⅲ 10-15、Ⅳ 15-20石）	C-1	Ⅱ下 Ⅳ

第30表　第Ⅰ～Ⅳ層　出土陶磁器観察表(2)

挿図番号 図版番号 枝番号	分類	器種	部位	口径 器高 高台	素地	施釉 (釉色) 貫入	文様 備考	出土地点	
								地点	層
第40図 PL.55 6	青磁	碗	口縁	16.3 — —	灰白色 微粒子	明灰緑色の釉を全面に施釉。(全面に細かい貫入)	外面にヘラ描きによる鎬蓮弁文を施す。鎬は不明瞭。(B-1 Ⅱ下、A-2 Ⅱ上、C-1 Ⅴ 5-10 石)	A-2 B-1 C-1	Ⅱ下 Ⅴ
第40図 PL.55 7	青磁	碗	〃	17.9 — —	灰色 やや粗粒子	灰黄緑色の釉を全面に施釉。(全面に細かい貫入)	文様なし。(B-1 Ⅱ下、A-1 10 号土坑下)	B-1 A-1	Ⅱ下
第40図 PL.55 8	青磁	杯	口縁～底部	11.4 4.6 4.3	灰色 微粒子	灰緑色の釉を内底から高台外面まで施釉。(貫入なし)	外面にヘラ描きによる細蓮弁文が高台脇まで施され、弁先には圏線が一条廻る。内面は内底にヘラ描きによる刻花文を施す。	火の神下 D-3	Ⅱ下
第40図 PL.55 9	青磁	杯	〃	12.4 4.2 6.2	淡灰白色 微粒子	淡黄緑色の釉を全面に施釉後、外底の釉を輪状に掻き取る(貫入なし)	外面は線彫りによる蓮弁文、内面は胴部に丸彫りの連弁文。内底に陰圏線と印花文(菊花)が施される。	B-1	Ⅱ下
第41図 PL.56 1	青磁	皿	底部	— — 5.1	灰白色 微粒子	明緑灰色の釉を内底から高台外面まで施釉。畳付から外底は露胎(貫入なし)	外面はヘラ描きによる蓮弁文が高台脇まで施される。内面は内底に陽圏線と双魚文を貼付する。	B-1	Ⅱ下
第41図 PL.56 2	青磁	皿	口縁～底部	11.8 4.4 5.5	淡灰白色 微粒子	深緑色の釉を内底から高台内面途中まで厚く施釉。高台内面途中から外底は露胎。(部分的に荒い貫入)	外面はヘラ描きによるやや細い鎬蓮弁文を高台脇まで施す。内面は内底に陽圏線を廻らす。(火の神下Ⅱ下、B-3 Ⅱ上、大庭Ⅱ)	火の神下 B-3 大庭	Ⅱ下
第41図 PL.56 3	青磁	皿	〃	12.3 4.5 5.8	淡灰白色 微粒子	黄緑色の釉を内底から高台外面途中まで厚く施釉。高台外面途中から外底は露胎。(全面に細かい貫入)	外面はヘラ描きによる蓮弁文を高台脇まで施す。内面は内底に印花文を施す。(B-1 Ⅱ上、Ⅲ、C-1 Ⅱ、Ⅳ)	B-1 C-2	Ⅱ下 Ⅳ
第41図 PL.56 4	青磁	皿	〃	11.4 4.6 5.4	淡灰白色 微粒子	黄緑色の釉を内底から高台内面まで厚く施釉。(貫入なし)	外面はヘラ描きによる鎬蓮弁文が高台脇まで施されるが、鎬は不明瞭で弁間も開く。内面は内底に陽圏線を一条廻らす。(B-1 Ⅱ下、Ⅳ、C-1 Ⅱ下、Ⅳ)	B-1 C-1 C-3	Ⅱ下 Ⅳ
第41図 PL.56 5	青磁	皿	〃	12.0 3.9 5.2	灰色 やや粗粒子	明灰緑色の釉を内底から高台外面途中まで厚く施釉。高台外面途中から外底は露胎。(全面に非常に細かい貫入がみられる)	外面はヘラ描きによる幅広の蓮弁文を高台脇まで施す。内面は内底に陽圏線を廻らす。(B-1 Ⅱ上、Ⅱ下、B-2 表採)	B-1 B-2	Ⅱ下
第41図 PL.56 6	青磁	皿	〃	12.8 3.9 6.7	灰白色 微粒子	暗緑色の釉を全面に厚く施釉後、外底の釉を蛇の目状に掻き取る。(全面に荒い貫入)	内底に印花文を施す。(B-1 Ⅳ、Ⅴ、B-2 Ⅰ、C-1 Ⅱ下、Ⅳ)	B-1 B-2 C-1	Ⅱ下 Ⅳ Ⅴ
第41図 PL.56 7	青磁	皿	〃	13.0 4.2 6.4	淡灰白色 微粒子	暗緑色の釉を内底から高台内面まで厚く施釉。外底は露胎。(全面に非常に細かい貫入)	文様なし。	B-1	Ⅱ下
第41図 PL.56 8	青磁	皿	〃	12.6 3.5 7.0	淡黄白色 やや粗粒子	鈍黄色の釉を全面に施釉後、外底の釉を輪状に掻き取る。(全面に非常に細かい貫入がみられる)	内底に印花文を施すが、不明瞭。	B-1	Ⅱ上下

第31表　第Ⅰ～Ⅳ層　出土陶磁器観察表(3)

挿図番号 図版番号 枝番号	分類	器種	部位	口径 器高 高台	素地	施釉 (釉色) 貫入	文様 備考	出土地点	
								地点	層
第41図 PL.569	青磁	皿	口縁～底部	12.8 4.1 6.2	灰色 微粒子	黄緑灰色の釉を内底から高台外面途中まで施釉。高台外面途中から外底は露胎。(全面に細かい貫入)	文様なし。(C-1 Ⅳ)	C-1	Ⅳ下
第42図 PL.571	青磁	碗	口縁	14.9 — —	灰白色 微粒子	明灰緑色の釉を全面に施釉。(貫入なし)	外面はヘラ描きによる鎬蓮弁文が施される。間弁あり。(B-1 10号土坑、大庭黒色土層)	B-1 大庭	Ⅰ Ⅱ
第42図 PL.572	青磁	碗	〃	14.7 — —	灰白色 微粒子	淡緑色の釉を全面に施釉。(貫入なし)	外面はヘラ描きによる鎬蓮弁文が施される。(F-3 大庭側土留内)	F-3	Ⅰ Ⅱ
第42図 PL.573	青磁	碗	〃	15.7 — —	淡灰白色 微粒子	明黄緑色の釉を全面に施釉。(貫入なし)	外面はヘラ描きによるやや細い蓮弁が施される。(B-1 表土、Ⅱ上、Ⅱ下、C-1 Ⅱ上)	B-1 C-1	Ⅰ Ⅱ
第42図 PL.574	青磁	碗	〃	15.3 — —	灰色 やや粗粒子	淡緑灰色の釉を全面に施釉。(貫入なし)	外面はヘラ描きによる鎬蓮弁文が施されるが、鎬は不明瞭。蓮弁は弁間が開く。	A-2	Ⅰ Ⅱ
第42図 PL.575	青磁	碗	口縁～底部	13.2 5.8 6.5	白色 微粒子	明灰緑色の釉を全面に厚く施釉後、外底の釉を蛇の目状に掻き取る。(貫入なし)	外面は口縁部に陰圏線を一条廻らし、その下にヘラ描きによる蓮弁が施される。内面は内底に陰圏線と印花文を施す。(志第6B)	B-3 C-1 D-2	Ⅰ Ⅱ
第42図 PL.576	青磁	碗	〃	12.4 5.6 4.9	灰白色 やや粗粒子	明黄緑色の釉を内底から高台外面まで厚く施釉。畳付から外底は露胎。(全面に荒い貫入がみられる)	外面はヘラ描きによる弁間の開いた蓮弁が施される。内面は内底に陰圏線を廻らす。(東壁沿Ⅲ)	東壁	Ⅰ Ⅱ
第42図 PL.577	青磁	碗	〃	12.1 6.0 5.4	淡灰白色 微粒子	灰黄緑色の釉を全面に厚く施釉後、外底の釉を輪状に掻き取る。高台外面には釉垂れがみられる。(全面に荒い貫入がみられる)	外面はヘラ描きによる蓮弁が施される。内面は内底に印花文を施す。(A-2 Ⅱ上、A-3 Ⅱ上、Ⅰ、C-1 表、Ⅱ上、B-1 表、今志、志第6B)	A-2 A-3 B-1	Ⅰ Ⅱ
第42図 PL.578	青磁	碗	〃	11.0 5.6 4.2	灰白色 やや粗粒子	明灰緑色の釉を内底から高台外面まで施釉。畳付から外底は露胎。(貫入なし)	外面はヘラ描きによる弁先の丸い細蓮弁文が施される。内面は内底に陰圏線を廻らす。 E-3 Ⅵ、D-2 Ⅱ、E-3 西壁内	D-3 E-3	Ⅱ Ⅵ
第42図 PL.579	青磁	碗	口縁	14.0 — —	浅黄色 微粒子	灰黄緑色の釉を全面に施釉。(全面に細かい貫入がみられる)	外面はヘラ描きによるやや細い弁先の尖った蓮弁が施される。内面片切り彫りによる蓮花文が施される(A-2 南壁沿表土、A-3 Ⅱ上)	A-2 A-3	Ⅰ Ⅱ
第43図 PL.581	青磁	碗	口縁～底部	11.3 7.2 4.9	淡白色 微粒子	灰黄緑色の釉を全面に施釉後、外底の釉を蛇の目状に掻き取る。(全面に非常に細かい貫入がみられる)	外面はヘラ描きによる密な細蓮弁が腰部まで施される。内面は内底に線描きの捻花文(中央に牡丹とも宝文を組み合わせた印花文)を施す。(F-1 東壁沿Ⅰ)	F-1	Ⅰ Ⅱ

第32表　第Ⅰ～Ⅳ層　出土陶磁器観察表(4)

挿図番号 図版番号 枝番号	分類	器種	部位	口径 器高 高台	素地	施釉 (釉色) 貫入	文様 備考	出土地点	
								地点	層
第43図 PL.58 2	青磁	碗	口縁～底部	12 7.3 5.4	淡灰色 粗粒子	灰黄緑色の釉を全面に厚く施釉後、外底の釉を蛇の目状に掻き取る。(全面に細かい貫入がみられる)	外面はヘラ描きによる密な細連弁が腰部まで施される。内面は内底に線描きの捻花文を施す。	志第6	Ⅰ Ⅱ
第43図 PL.58 3	青磁	碗	〃	12.5 7.3 5.1	黄白色 やや粗粒子	明黄緑色の釉を内底から高台内面途中まで施釉。高台内面途中から外底は露胎(全面に非常に細かい貫入)	外面はヘラ描きによる密な細蓮弁が腰部まで施される。内面は内底に字款(顧氏)を施す。(A-2Ⅰ、A-3Ⅱ上、D-3 4号土坑、E-1 6号土坑、東壁沿Ⅰ)	A-2 A-3	Ⅰ Ⅱ
第43図 PL.58 4	青磁	碗	〃	14.3 7.9 5.5	灰白色 粗粒子	灰黄緑色の釉を内底から高台内面途中まで厚く施釉。高台内面途中から外底は露胎。(全面に非常に細かい貫入がみられる)	外面はヘラ描きによる細蓮弁が腰部まで施される。内面は内底に花文(牡丹か?)。花文中央の釉は輪状に掻き取る。	東斜	Ⅰ Ⅱ
第43図 PL.58 5	青磁	碗	〃	13.8 7.3 5.2	灰色 粗粒子	黄緑灰色の釉を内底から高台外面まで薄く施釉。畳付から外底は露胎。(貫入なし)	外面はヘラ描きによる細蓮弁が胴部中位まで施される。(C-1石囲、Ⅰ、Ⅱ、D-1Ⅰ、Ⅱ層)	C-1 D-1	Ⅰ Ⅱ
第43図 PL.58 6	青磁	碗	〃	13.4 7.8 5.0	灰色 やや粗粒子	灰黄緑色の釉を内底から高台内面途中まで厚く施釉。高台内面途中から外底は露胎。(全面に細かい貫入)	外面はヘラ描きによる細蓮弁が腰部まで施される。内面は内底に印花文を施すが不明瞭。内底及び外底に焼台(目跡?)が付着する。	A-1 大庭	Ⅰ Ⅱ
第43図 PL.58 7	青磁	碗	〃	10.9 6.2 4.6	淡黄色 粗粒子	灰黄色の釉を内底から高台内面途中まで施釉。高台内面途中から外底は露胎。(全面に非常に細かい貫入がみられる)	外面はヘラ描きによる細蓮弁が胴部中位まで施される。	C-2	Ⅱ上 Ⅲ
第44図 PL.59 1	青磁	碗	〃	13.7 6.9 5.7	浅黄橙色 粗粒子	灰黄緑色の釉を内底から高台内面途中まで施釉。高台内面から外底は露胎。(全面に荒い貫入がみられる)	外面はヘラ描きによる雷文帯と崩れたラマ式蓮弁が施される。	B-3	Ⅰ Ⅱ
第44図 PL.59 2	青磁	碗	口縁	15.5 — —	灰白色 微粒子	淡緑灰色の釉を全面に施釉。	外面はヘラ描きによる雷文帯が施される。	石段北 大庭	Ⅱ Ⅰ
第44図 PL.59 3	青磁	碗	〃	23.8 — —	灰白色 微粒子	明緑灰色の釉を全面に施釉。(全面に荒い貫入がみられる)	外面はヘラ描きによる雷文帯と崩れたラマ式蓮弁(?)が施される。内面は口縁部に圏線が二条廻る。	B-3 C-3	Ⅱ上 下
第44図 PL.59 4	青磁	碗	〃	16.8 — —	淡灰白色 微粒子	明黄緑色の釉を全面に施釉。(貫入なし)	外面は口縁部にヘラ描きによる雷文帯、胴部に刻花文が施される。	B-3 C-3	Ⅰ Ⅱ
第44図 PL.59 5	青磁	碗	〃	16.2 — —	灰白色 微粒子	灰黄緑色の釉を全面に施釉。(貫入なし)	外面は口縁部にスタンプによる雷文帯と圏線が二条、胴部に刻花文を施す。内面は刻花文を施す。(B-3Ⅱ上、C-3Ⅱ上)	B-3 C-3	Ⅱ 上

第33表　第Ⅰ～Ⅳ層　出土陶磁器観察表(5)

挿図番号 図版番号 枝番号	分類	器種	部位	口径 器高 高台	素地	施釉 (釉色) 貫入	文様 備考	出土地点	
								地点	層
第44図 PL.596	青磁	碗	口縁	16.6 — —	淡灰白色 微粒子	明黄緑色の釉を全面に厚く施釉。(貫入なし)	内、外面とも口縁部にスタンプによる雷文帯と圏線、胴部に牡丹唐草文を施す。(貫入なし)	D-2	I II
第44図 PL.597	青磁	碗	〃	15.1 — —	淡灰白色 微粒子	明黄緑色の釉を全面に厚く施釉。(貫入なし)	外面は口縁部にスタンプによる雷文帯と圏線、胴部は蓮弁が施されるが不明瞭。内面は口縁部に雷文帯、胴部に牡丹唐草文を施す。(D-3 西壁下)	D-3	I II
第44図 PL.598	青磁	碗	口縁～底部	16.7 9.4 8.1	灰白色 微粒子	淡緑色の釉を全面に厚く施釉後、外底の釉を蛇の目状に掻き取る。(全面に荒い貫入がみられる)	外面は口縁部にスタンプによる雷文帯と圏線。内面は口縁部にスタンプの雷文帯、胴部に菊花唐草文。内底に印花文(牡丹)を施す。(A-2 II上、D-3 西壁下、西壁基、E-3 IV－VI、II上、西壁内)	A-2 D-3 E-3	I II
第45図 PL.601	青磁	碗	〃	21.0 — —	灰白色 微粒子	明黄緑色の釉を全面に厚く施釉。(全面に細かい貫入がみられる)	外面は口縁部に三条の弦文帯を廻らし、その上に3本の斜状短線、胴部に圏線を二条とラマ式蓮弁文を施す。内面は胴部に圏線一条と飛鳳文を施す。	E-2	I II
第45図 PL.602	青磁	碗	口縁	16.6 — —	灰白色 微粒子	明黄緑色の釉を全面に厚く施釉。(貫入なし)	外面は口縁部に四条の弦文帯を廻らし、その上に3本の斜状短線を施す。	B-1	II 上
第45図 PL.603	青磁	碗	〃	14.4 — —	灰白色 やや粗粒子	灰白色の釉を全面に薄く施釉。(貫入なし)	外面は口縁部に3本櫛による波状文を施す。	C-1	I II
第45図 PL.604	青磁	碗	口縁～底部	14.7 6.8 5.3	白色 微粒子	明緑灰色の釉を内底から高台外面途中まで施釉。高台外面途中から外底は露胎。(貫入なし)	内底に陰圏線と印花文が施される。外面全体にロクロ跡が残り、胴部に目跡が付着する。(南門壁下、A-1 10号土坑)	南門壁下 A-1	I II
第45図 PL.605	青磁	碗	〃	17.8 7.7 6.8	灰色 粗粒子	明灰緑色の釉を内底から高台外面まで施釉。畳付から外底は露胎。(全面に細かい貫入がみられる)	内底に陰圏線と印花文を施す。(B-1 10号土坑、A-1 10号土坑上)	A-1 B-1	I II
第45図 PL.606	青磁	碗	〃	13.8 7.0 6.2	灰色 やや粗粒子	灰黄緑色の釉を全面に施釉後、内底及び外底の釉を輪状に掻き取る。(全面に非常に細かい貫入)	内底に印花文を施す。外底に焼台が付着する。(A-1表、II上、B-1 II上、B-2 I、C-1 II上)	A-1 B-1 B-2	I II
第45図 PL.607	青磁	碗	〃	13.2 5.9 5.4	浅黄橙色 粗粒子	灰緑色の釉を内底から高台外面まで施釉。(貫入なし)	外面全体にロクロ跡が残る。	B-1	I
第45図 PL.608	青磁	碗	〃	17.4 6.6 7.3	淡灰白色 微粒子	明緑灰色の釉を内底から高台外面まで施釉後、内底の釉を蛇の目状に掻き取る。(貫入なし)	外面全体にロクロ跡が残る。(B-1表、1号土坑、10号土坑)	B-1 10号 土坑	I II
第46図 PL.611	青磁	皿	〃	13.2 4.4 5.7	白色 微粒子	青緑色の釉を全面に厚く施釉後、畳付の釉を掻き取る。(貫入なし)	外面はヘラ描きによる鎬蓮弁が施される。内面は内底に陰圏線と双魚文を貼付する。(A-1 II上、B-1 II上、C-1 II上、2号土坑)	A-1 B-1 C-1	I II

第34表　第Ⅰ～Ⅳ層　出土陶磁器観察表(6)

挿図番号 図版番号 枝番号	分類	器種	部位	口径 器高 高台	素地	施釉 (釉色) 貫入	文様 備考	出土地点	
								地点	層
第46図 PL.61 2	青磁	皿	口縁～底部	12.1 3.9 5.5	白色 微粒子	淡緑灰色の釉を内底から高台内面途中まで施釉。(貫入なし)	外面はヘラ描きによる蓮弁が施される。内面は内底に陰圏線と印花文(牡丹?)が施される。(A-2Ⅱ上、B-1Ⅰ、C-1Ⅱ上、10号土坑)	A-2 B-1 C-1	Ⅰ Ⅱ
第46図 PL.61 3	青磁	皿	〃	11.9 4.3 5.9	灰白色 微粒子	灰黄緑色の釉を内底から高台外面途中まで施釉。高台外面途中から外底は露胎。(部分的に荒い貫入がみられる)	外面はヘラ描きによる蓮弁が施される。内面は内底に陰圏線が廻る。	A-1	Ⅱ上
第46図 PL.61 4	青磁	皿	〃	11.9 3.2 5.8	淡灰白色 微粒子	明緑灰色の釉を全面に施釉後、外底の釉を蛇の目状に掻き取る。(貫入なし)	外面はヘラ描きによる弁先の開いた幅広の蓮弁が施される。内面は内底に陽圏線と印花文(菊花?)が施されるが不明瞭。(C-3Ⅱ上、Ⅱ下、西壁内)	C-3 西壁	Ⅰ Ⅱ
第46図 PL.61 5	青磁	皿	〃	12.1 3.6 5.4	白色 微粒子	灰黄緑色の釉を内底から高台外面まで厚く施釉。畳付から外底は露胎。(部分的に荒い貫入がみられる)	外面はヘラ描きによる弁先の開いた蓮弁が施される。内面は内底に陽圏線と印花文が施されるが不明瞭。(B-1Ⅱ上、Ⅴ、B-2Ⅱ上、C-1Ⅲ)	B-1 B-2 C-1	Ⅰ Ⅱ
第46図 PL.61 6	青磁	皿	〃	13.2 3.7 6.1	淡灰白色 微粒子	明灰緑色の釉を内底から高台外面まで厚く施釉。畳付から外底は露胎。(貫入なし)	外面はヘラ描きによるやや細めの蓮弁が施される。内面は内底に陽圏線が廻る。(A-1Ⅱ上、A-2Ⅱ上、B-1Ⅱ上、C-1Ⅱ上、E-1Ⅲ～Ⅵ)	A-1 A-2 B-1	Ⅰ Ⅱ
第46図 PL.61 7	青磁	皿	〃	12.2 4.2 5.4	淡灰白色 微粒子	灰黄緑色の釉を内底から高台外面まで厚く施釉。畳付から外底は露胎。(全面に荒い貫入がみられる)	外面はヘラ描きによる蓮弁が施される。内面は内底に陽圏線と印花文牡丹が施される。	B-1	Ⅰ Ⅱ
第46図 PL.61 8	青磁	皿	〃	11.8 4.0 5.1	淡灰白色 微粒子	灰黄緑色の釉を内底から高台外面まで厚く施釉。畳付から外底は露胎。(全面に荒い貫入がみられる)	外面はヘラ描きによるやや細めの蓮弁が施される。内面は内底に陽圏線と印花文牡丹が施される。(A-2Ⅰ、A-3Ⅱ上、B-2表、不明)	A-2 A-3 B-2	Ⅰ Ⅱ上
第46図 PL.61 9	青磁	皿	〃	11.3 3.0 5.7	淡灰白色 微粒子	淡黄緑色の釉を内底から高台内面まで施釉。外底は露胎。(全面に荒い貫入がみられる)	外面はヘラ描きによる弁間の開いた幅広の蓮弁が施される。内面は内底に陽圏線と印花文が施されるが不明瞭。	不明	Ⅰ Ⅱ上
第47図 PL.62 1	青磁	皿	〃	12.4 3.6 6.2	灰白色 微粒子	淡灰緑色の釉を全面に厚く施釉後、外底の釉を掻き取る。(貫入なし)	外面はヘラ描きによる弁先の開いた蓮弁が施される。内面は鍔上面にヘラ描きの雷文帯が施される。	D-1	Ⅰ Ⅱ
第47図 PL.62 2	青磁	皿	口縁	10.9 － －	灰白色 微粒子	淡灰緑色の釉を全面に厚く施釉。(全面に荒い貫入がみられる)	外面はヘラ描きによる蓮弁を施す。内面は鍔上面にヘラ描きの雷文帯、胴部に牡丹唐草文を施す。	D-2	Ⅰ

第35表　第Ⅰ～Ⅳ層　出土陶磁器観察表(7)

挿図番号 図版番号 枝番号	分類	器種	部位	口径 器高 高台	素地	施釉 (釉色) 貫入	文様 備考	出土地点	
								地点	層
第47図 PL.623	青磁	皿	〃	12.0 — —	淡灰白色 やや粗粒子	明緑灰色の釉を全面に施釉。(全面に荒い貫入がみられる)	外面はヘラ描きによる弁間の開いた蓮弁が施される。内面は刻花文を施す。(C-1 Ⅳ)	C-1	Ⅳ
第47図 PL.624	青磁	皿	〃	10.7 3.2 6.4	淡灰白色 やや粗粒子	明黄緑色の釉を全面に施釉後、外底の釉を輪状に掻き取る。(全面に荒い貫入)	外面は口縁部に圏線、胴部に蓮弁を施す。内面は胴部に丸彫りと線彫りによる蓮弁、内底に陽圏線と如意頭窓絵文(中央に印花文あり)を施す。	B-3 C-3	Ⅰ Ⅱ
第47図 PL.625	青磁	皿	〃	10.9 4.0 6.3	淡黄色 やや粗粒子	灰黄緑色の釉を全面に施釉後、外底の釉を輪状に掻き取る。(全面に荒い貫入がみられる)	外面は口縁部に圏線、胴部に弁先の開いた蓮弁を施す。内面は胴部に丸彫りと線彫りによる蓮弁、内底に陽圏線と如意頭窓絵文(中央に印花文あり)を施す。外底に焼台が付着する。	B-3 C-3	Ⅰ Ⅱ
第47図 PL.626	青磁	皿	〃	11.9 — —	灰白色 微粒子	明黄緑色の釉を全面に厚く施釉。(貫入なし)	外面はヘラ描きによる簡略化した蓮弁と陽圏線が施される。内面は刻花文を施す。	C-2 西壁内	Ⅰ Ⅱ上
第47図 PL.627	青磁	皿	口縁～底部	10.2 3.5 5.4	灰白色 微粒子	灰黄緑色の釉を全面に厚く施釉後、外底の釉を蛇の目状に掻き取る。(全面に荒い貫入がみられる)	外面はヘラ描きによる簡略化した蓮弁と陽圏線が施される。内面は胴部に丸彫りと線彫りによる蓮弁、内底に陽圏線と如意頭窓絵文(中央に跳魚文?)が施される。外底に焼台が付着する。	C-1 C-3 D-2	Ⅰ Ⅱ
第47図 PL.628	青磁	皿	〃	10.3 3.7 5.2	淡灰白色 やや粗粒子	灰黄緑色の釉を全面に施釉後、外底の釉を輪状に掻き取る。(全面に荒い貫入がみられる)	外面はヘラ描きによる簡略化した蓮弁と陽圏線が施される。内底は胴部に丸彫りによる蓮弁、内底に陽圏線と印花文(菊花)を施す。	C-3 D-3	Ⅱ上
第48図 PL.631	青磁	皿	口縁	12.8 — —	灰白色 やや粗粒子	淡黄緑色の釉を全面に施釉。(貫入なし)	内、外面とも片切り彫りによる刻花文が施される。(B-2 Ⅱ上、C-1 Ⅱ上、C-2 Ⅱ上、C-3 Ⅱ上)	B-2 C-1 C-2	Ⅰ Ⅱ
第48図 PL.632	青磁	皿	〃	13.1 — —	灰白色 やや粗粒子	灰黄緑色の釉を全面に施釉。(全面に荒い貫入がみられる)	外面は口縁部から胴部に片切り彫りの刻花文、腰部に弁先の開いた幅広の蓮弁が施される。内面は胴部に刻花文が施される。	C-2 D-2	Ⅱ上 Ⅰ
第48図 PL.633	青磁	皿	口縁～底部	13.0 3.5 7.1	灰白色 やや粗粒子	明緑灰色の釉を全面に厚く施釉後、外底の釉を掻き取る。(全面に荒い貫入がみられる)	外面は口縁部から胴部に片切り彫りの刻花文、腰部に幅広の蓮弁が施される。内面は胴部に刻花文が施される。(B-2 Ⅱ上、C-2 Ⅱ上、C-3 Ⅱ上)	B-2 C-2 C-3	Ⅱ上
第48図 PL.634	青磁	皿	〃	13.0 3.6 6.4	淡黄色 粗粒子	淡灰緑色の釉を内底から高台内面まで厚く施釉。外底は露胎。(全面に荒い貫入がみられる)	外面は口縁部から胴部に片切り彫りの刻花文、腰部に幅広の蓮弁が施される。内面は胴部に刻花文が施される。	B-3 1号土坑 西壁	Ⅰ Ⅱ上
第48図 PL.635	青磁	皿	〃	12.4 3.2 6.3	白色 微粒子	淡緑灰色の釉を全面に施釉後、外底の釉を蛇の目状に掻き取る。(内面に荒い貫入)	内面は胴部に片切り彫りによる刻花文、内底に陰圏線と印花文(蓮花?)を施す。	C-2 D-3 大庭	Ⅱ
第48図 PL.636	青磁	皿	〃	13.6 3.7 7.0	灰白色 やや粗粒子	灰黄緑色の釉を全面に厚く施釉。(全面に細かい貫入がみられる)	外面は腰部にヘラ描きによる幅広の蓮弁が施される。	B-2	Ⅱ上

第36表　第Ⅰ～Ⅳ層　出土陶磁器観察表(8)

挿図番号 図版番号 枝番号	分類	器種	部位	口径 器高 高台	素地	施釉 (釉色) 貫入	文様 備考	出土地点	
								地点	層
第48図 PL.63 7	青磁	皿	口縁～底部	11.8 3.5 4.8	灰白色 やや粗粒子	明黄緑色の釉を内底から高台内面まで厚く施釉。外底は露胎。(全面に細かい貫入)	内、外面ともヘラ描きによるラマ式蓮弁が施される。	A-1 13号 土坑	I II
第49図 PL.64 1	青磁	皿	〃	11.4 3.1 6.1	灰色 微粒子	淡灰緑色の釉を全面に施釉後、外底の釉を蛇の目状に掻き取る。(全面に細かい貫入)	内底に陰圏線と印花文(牡丹?)が施される。外底に焼台が付着する。	C-1 F-1	I II 上
第49図 PL.64 2	青磁	皿	〃	11.8 3.9 6.0	灰色 微粒子	黄褐色の釉を全面に厚く施釉後外底の釉を輪状に掻き取る(貫入なし)	内底に陰圏線と印花文(牡丹)が施される。外底に焼台が付着する。(A-2表土、南壁沿表土、D-3撹乱)	A-2 D-3	I
第49図 PL.64 3	青磁	皿	〃	13.3 4.1 6.7	淡灰白色 微粒子	明黄緑色の釉を全面に厚く施釉後、外底の釉を掻き取る。(貫入なし)	内底に陰圏線と印花文(海石榴華?)が施される。(A-2 II上、C-1 IV)	A-2 C-1	II 上 IV
第49図 PL.64 4	青磁	皿	〃	11.4 3.6 5.3	灰白色 やや粗粒子	淡黄緑色の釉を全面に薄く施釉後、外底の釉を輪状に掻き取る。(部分的に荒い貫入)	内底に陰圏線と印花文(八宝花?)が施される。外底に焼台が付着する。(A-3南壁、A-1 10号土坑)	A-3 10号 土坑	I II
第49図 PL.64 5	青磁	皿	〃	13.6 4.0 7.4	淡灰白色 微粒子	明緑灰色の釉を全面に厚く施釉後、外底の釉を蛇の目状に掻き取る。(全面に細かい貫入がみられる)	文様なし。	A-2	I II 上
第49図 PL.64 6	青磁	皿	〃	13.4 3.1 6.7	淡灰色 微粒子	黄緑灰色の釉を全面に厚く施釉後、外底の釉を蛇の目状に掻き取る。(部分的に細かい貫入がみられる)	内底に印花文(牡丹?)が施される。	A-1	I
第49図 PL.64 7	青磁	皿	〃	11.8 3.5 5.0	淡灰色 粗粒子	黄緑灰色の釉を内底から高台内面まで厚く施釉。外底は露胎。(全面に細かい貫入)	内底に目跡(?)がみられる。(A-3西壁沿表土、D-3 II上)	A-3 D-3	I II 上
第49図 PL.64 8	青磁	皿	〃	12.5 3.9 6.7	淡灰白色 微粒子	明黄緑色の釉を全面に厚く施釉後、外底の釉を輪状に掻き取る。(貫入なし)	内底に陰圏線と印花文が施される。	B-1 B-2 C-1	IV II 上 IV
第49図 PL.64 9	青磁	皿	〃	10.9 3.6 4.9	淡灰白色 やや粗粒子	黄緑灰色の釉を内底から畳付まで施釉。高台内面から外底は露胎。(全面に荒い貫入)	内、外面とも丸彫りによる簡略化した蓮弁が施される。	C-2	II 上
第50図 PL.65 1	青磁	皿	〃	12.9 4.1 7.6	白色 微粒子	明黄緑色の釉を全面に厚く施釉後、外底の釉を掻き取る。(貫入なし)	内底に陽圏線と印花文(八宝花?)が施される。(B-1 II落、C-1 III)	B-1 C-1	II III

第37表　第I～IV層　出土陶磁器観察(9)

挿図番号 図版番号 枝番号	分類	器種	部位	口径 器高 高台	素地	施釉 (釉色) 貫入	文様 備考	出土地点	
								地点	層
第50図 PL.65 2	青磁	皿	口縁～底部	12.2 3.4 6.9	灰色 粗粒子	灰黄緑色の釉を内底から高台外面まで施釉後、内底の釉を輪状に掻き取る。(全面に細かい貫入)	内底に陽圏線と印花文(菊花?)が施されるが不明瞭。	C-1 5号 土坑	Ⅰ Ⅱ
第50図 PL.65 3	青磁	皿	〃	12.4 3.2 7.3	灰色 粗粒子	灰黄緑色の釉を全面に施釉後、内底と外底の釉を輪状に掻き取る。(全面に細かい貫入)	内底に陽圏線が廻る。外面全体にロクロ跡が残る。(A-3 Ⅰ、B-3 Ⅰ、C-3 Ⅱ上、Ⅱ下、D-2表、D-3 Ⅱ上)	A-3 B-3 C-3	Ⅰ Ⅱ
第50図 PL.65 4	青磁	皿	〃	10.5 2.6 5.5	灰白色 やや粗粒子	明黄緑色の釉を全面に施釉後、外底の釉を輪状に掻き取る。(全面に細かい貫入がみられる)	外面は線彫りによる蓮弁が施される。内面は胴部に丸彫りによる蓮弁、内底に陽圏線が施される。(B-1表、D-1東壁内)	B-1 D-1	Ⅰ Ⅱ
第50図 PL.65 5	青磁	皿	〃	12.1 2.7 5.7	灰白色 微粒子	明緑灰色の釉を内底から高台外面に、透明釉を高台内面から外底にそれぞれ薄く施釉。畳付は露胎。(貫入なし)	内、外面とも丸彫りによる蓮弁が施される。(A-2 Ⅰ、B-1表、Ⅱ上、C-2 Ⅱ上、D-3西壁下、志第3Ⅱ)	C-2 D-3 西壁	Ⅱ 上
第50図 PL.65 6	青磁	皿	〃	11.8 2.8 5.5	淡灰白色 微粒子	明緑灰色の釉を内底から高台外面に、透明釉を高台内面から外底にそれぞれ薄く施釉。畳付は露胎。(貫入なし)	外面は胴部に丸彫りによる蓮弁、外底に呉須で二重圏線と字款「洪武年造」を施す。内面は丸彫りによる蓮弁が施される。	A-2	Ⅱ 上
第50図 PL.65 7	青磁	皿	〃	12.7 2.7 6.7	灰白色 やや粗粒子	明緑灰色の釉を全面に施釉後、畳付の釉を掻き取る。(貫入なし)	文様なし。	B-2	Ⅰ Ⅱ
第51図 PL.66 1	青磁	盤	〃	25.6 6.4 16.8	灰白色 微粒子	淡緑灰色の釉を全面に施釉後、外底の釉を蛇の目状に掻き取る。(全面に荒い貫入)	外面は胴部に圏線とヘラ描きによる弁先の尖った蓮弁。内面は胴部に片切り彫りによる海石榴華唐草文、内底に陽圏線と印花文(牡丹?)を施す。	A-1 A-2 A-3	Ⅰ Ⅱ
第51図 PL.66 2	青磁	盤	〃	24.2 6.0 7.4	灰白色 微粒子	灰黄緑色の釉を全面に施釉後、外底の釉を輪状に掻き取る。(全面に細かい貫入がみられる)	内面は鍔上部にヘラ描きによるラマ式蓮弁の弁先、胴部に丸彫りによる幅広の蓮弁、内底に陰圏線と印花文が施される。外底に焼台が付着する。(B-3 Ⅱ上、火の神下、南階段上、大庭Ⅰ、Ⅱ)	B-3 火の神 下 南階段	Ⅱ 上
第51図 PL.66 3	青磁	盤	胴部	－ － －	淡灰白色 微粒子	黄緑灰色の釉を全面に厚く施釉。(貫入なし)	内、外面とも丸彫りによる幅広の蓮弁文が施される。	A-1 10号 土坑	Ⅰ Ⅱ
第51図 PL.66 4	青磁	盤	口縁～底部	23.9 5.4 9.5	灰白色 微粒子	淡黄緑色の釉を全面に厚く施釉後、外底の釉を蛇の目状に掻き取る。(貫入なし)	内面は胴部にヘラ描きによる刻花文、内底に捻花文が施される。部分的に火熱を受けて気泡が生じている。(B-1 Ⅱ下、B-3 Ⅰ、Ⅱ上、C-3 Ⅱ上)	B-1 B-3 C-3	Ⅰ Ⅱ
第51図 PL.66 5	青磁	盤	〃	26 5.5 11.4	淡灰白色 微粒子	暗黄緑色の釉を全面に厚く施釉後、外底の釉を蛇の目状に掻き取る。(貫入なし)	内面は胴部に3本櫛による丸彫りの蓮弁、内底に印花文(牡丹?)が施される。(D-3表、西壁基、西壁下)	D-3	Ⅰ Ⅱ

第38表　第Ⅰ～Ⅳ層　出土陶磁器観察表(10)

挿図番号 図版番号 枝番号	分類	器種	部位	口径 器高 高台	素地	施釉 (釉色) 貫入	文様 備考	出土地点	
								地点	層
第51図 PL.666	青磁	盤	口縁～底部	23.5 5.3 8.3	淡黄色 やや粗粒子	灰黄緑色の釉を内底から高台外面まで厚く施釉。高台内面から外底は露胎。(全面に非常に細かい貫入)	内面は胴部に丸彫りの蓮弁、内底に陰圏線と印花文(牡丹?)が施される。(A-1表、B-1Ⅱ下、B-3Ⅱ上)	A-1 B-1 B-3	Ⅱ下 Ⅱ上
第51図 PL.667	青磁	盤	〃	25.8 5.9 9.8	淡橙色 微粒子	黄褐色の釉を全面に施釉後、外底の釉を掻き取る。(全面に非常に細かい貫入がみられる)	内面は胴部に6本櫛による丸彫りの蓮弁、内底に陽圏線と印花文(菊花)が施される。外底に焼台が付着。(B-1Ⅱ下、Ⅳ、C-1Ⅱ上、Ⅴ)	B-1 C-1	Ⅳ Ⅴ
第51図 PL.668	青磁	盤	〃	23.9 5.7 8.6	灰白色 やや粗粒子	明黄緑色の釉を施釉後外底の釉を輪状に掻き取る(全面細かい貫入)	内面は胴部に8本櫛による丸彫りの蓮弁、内底に陽圏線が施される。	不明	盛土
第51図 PL.669	青磁	盤	〃	22.1 5.4 8.7	浅黄色 やや粗粒子	暗黄緑色の釉を全面に施釉後、外底の釉を蛇の目状に掻き取る。(全面に荒い貫入がみられる)	内面は胴部に5本櫛による丸彫りの蓮弁が施される。外底に焼台が付着。(D-3西壁内、西壁下)	D-3	Ⅱ
第51図 PL.6610	青磁	盤	〃	20.0 5.5 13.4	淡灰白色 微粒子	明緑色の釉を全面に厚く施釉後、外底の釉を蛇の目状に掻き取る。(貫入なし)	外面は丸彫りによる蓮弁と陽圏線。内面は胴部に丸彫りによる蓮弁、内底に陽圏線と丸彫りの蓮弁が施される。(B-3Ⅱ上、C-3Ⅱ上、D-2Ⅱ下、D-3Ⅰ、南階段、大庭)	B-3 C-3 D-2	Ⅱ上 Ⅱ上 Ⅱ下
第51図 PL.6611	青磁	盤?	〃	24.0 7.3 17.4	灰白色 微粒子	淡灰緑色の釉を全面に厚く施釉。(貫入なし)	外面は丸彫りによる蓮弁と陽圏線、内面は胴部に窓絵文(枠中は七宝文)。(B-1Ⅱ上)	B-1	Ⅱ上
第52図 PL.671	青磁	鉢	口縁	15.5 — —	灰白色 微粒子	黄緑灰色の釉を全面に厚く施釉。(全面に荒い貫入がみられる)	外面は胴部に圏線とヘラ描きによる鎬蓮弁文が施される。内面は胴部に片切り彫りによる刻花文が施される。(D-1Ⅱ下、D-2Ⅱ上、E-2基壇内Ⅱ上)	D-1 D-2 E-2	Ⅱ
第52図 PL.672	青磁	擂鉢	口縁～底部	18.6 12.0 8.0	灰白色 微粒子	青緑灰色の釉を全面に厚く施釉。	口縁は肥厚し、外面は無文、内面は口縁下より細かい擂目が施される。	C-1 C-2	Ⅱ上
第52図 PL.673	青磁	香炉	〃	15.8 9.3 5.8	淡灰白色 粗粒子	淡緑色の釉を内底際から腰部下位まで施釉。内、外底は露胎。(全面に細かい貫入)	外面は頸部に陽圏線と丸文を貼付、腰部に陽圏線と丸文を貼付する。脚部は獣足形を呈する。	A-2 B-2 B-3	Ⅰ Ⅱ
第52図 PL.674	青磁	鉢	口縁	16.4 — —	灰白色 やや粗粒子	薄黄緑色の釉を口唇部を除く全面に施釉。(貫入なし)	外面は口縁部に二条の圏線と波濤文、胴部に二条の圏線と縦位の沈線(蓮弁を表現?)が施される。(B-2Ⅱ上)	B-2	Ⅱ上
第52図 PL.675	青磁	花瓶	底部	— — 11.6	灰白色 微粒子	黄緑灰色の釉を全面に厚く施釉後、高台外面途中から畳付の釉を掻き取る。(貫入なし)	文様なし。	E-15号土坑	Ⅰ Ⅱ
第52図 PL.676	青磁	水注	胴部	— — —	灰白色 微粒子	淡緑灰色の釉を全面に厚く施釉。(部分的に荒い貫入がみられる)	外面は胴部にヘラ描きによる竹葉文、腰部にラマ式蓮弁、注口部に花弁文(?)が施される。(B-1Ⅱ上、F-19号土坑)	B-1 F-19号土坑	Ⅱ上

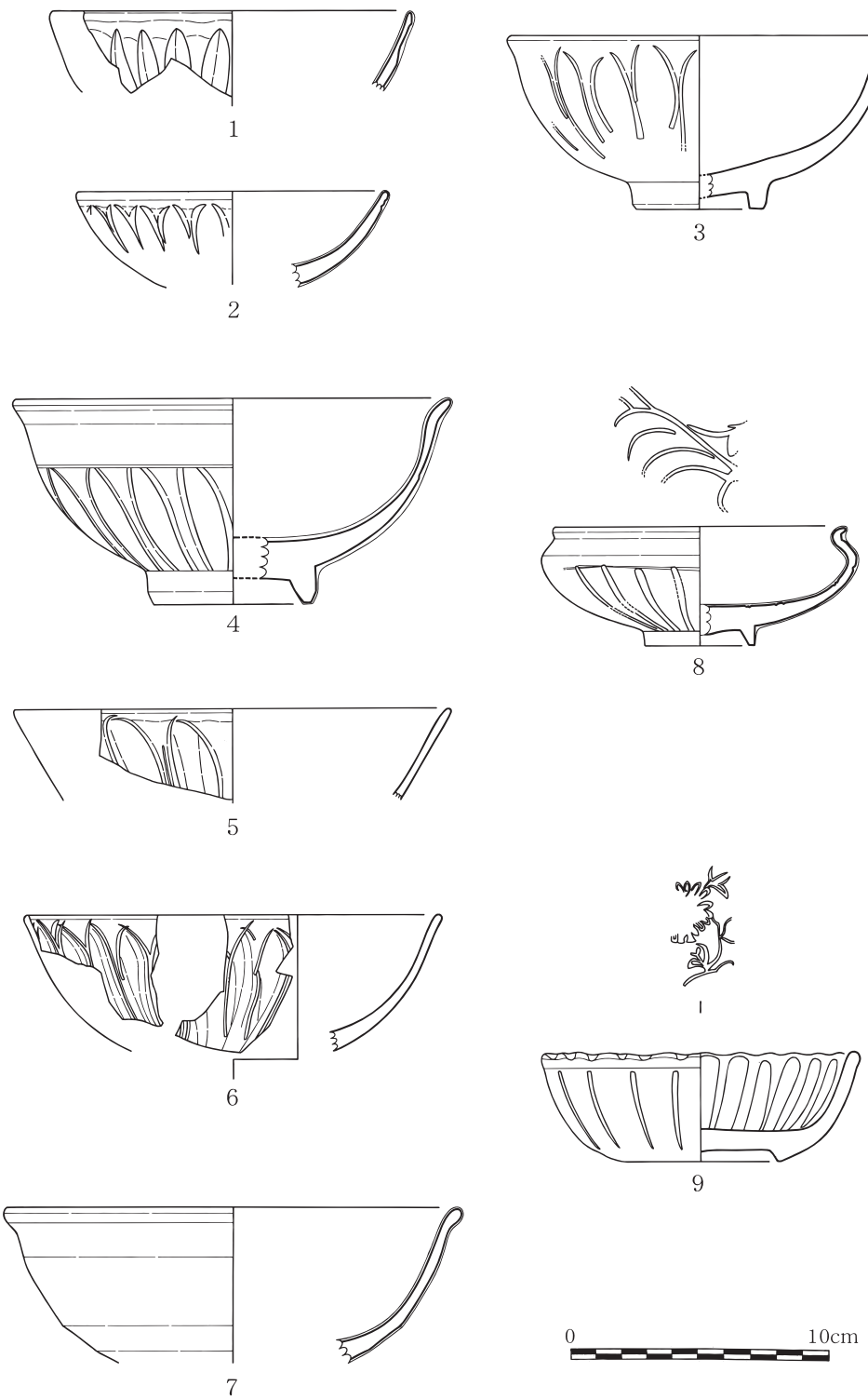
第39表　第Ⅰ～Ⅳ層　出土陶磁器観察(11)

挿図番号 図版番号 枝番号	分類	器種	部位	口径 器高 高台	素地	施釉 (釉色) 貫入	文様 備考	出土地点 地点	出土地点 層
第52図 PL.67 7	青磁	器台	口縁～底部	28.3 17.9 19.0	白色 やや粗粒子	淡緑色の釉を全面に厚く施釉後、外底の釉を掻き取る。(全面に細かい貫入がみられる)	外面は胴部に圏線と五葉文(?)、腰部にラマ式蓮弁を施す。(西壁、火の神下Ⅱ下、大庭、不明)	西壁 火の神 大庭	Ⅰ Ⅱ
第53図 PL.68 1	青磁	酒会壺	蓋	外 － 内21.9 高 －	灰白色 微粒子	黄緑灰色の釉を蓋甲に厚く施釉。(全面に細かい貫入がみられる)	蓋甲中位から鍔端部にヘラ描きによる菊花唐草文(?)が施される。蓋甲全体に火熱による気泡が生じる。大型2の蓋と目される。蓋甲に黒斑(鉄斑?)がみられる。(B-3 Ⅱ上、西壁内)	不明 B-3 西壁	Ⅰ Ⅱ上
第53図 PL.68 2	青磁	酒会壺	身	24.6 25.0 21.5	淡灰白色 微粒子	黄緑灰色の釉を全面に施釉。	外面は頸部に三条の界線、胴部に窓枠に吉祥文、腰下部に蓮弁。	C-3 D-2 D-3	Ⅰ Ⅱ
第53図 PL.68 3	青磁	酒会壺	蓋	外30.4 内18.7 高 －	灰白色 微粒子	灰黄緑色の釉を蓋甲から裏側の鍔端部まで施釉。端部から裏面全体は露胎。(貫入なし)	外面は蓋甲中位から鍔端部に牡丹唐草文(?)と波濤文が施される。大型4の蓋と目される。(B-3 Ⅱ上、C,D-3 Ⅱ上、D-3表土)	B-3 C,D-3 D-3	Ⅱ上 Ⅰ
第53図 PL.68 4	青磁	酒会壺	身	27.5 22.2 19.1	灰白色 微粒子	灰黄緑色の釉を口唇部除く全面に施釉(荒い貫入)	外面は口縁部に界線、胴部に牡丹唐草文(?)と波濤文、腰部に界線と鎬蓮弁が施される。 主郭の北側斜面(F-1の城壁)と志慶真郭第6テラス出土品が接合	F-1 城壁 志慶真郭	Ⅰ Ⅱ
第53図 PL.68 5	青磁	酒会壺	身	－ － 24.2	灰白色 微粒子	灰黄緑色の釉を畳付除く全面に厚く施釉(貫入なし)	外面は胴部に片切り彫りによる牡丹唐草文(?)、腰部に二条の界線とやや細めの蓮弁文が施される。	B-1 B-2 B-3	Ⅰ Ⅱ
第53図 PL.68 6	青磁	小型酒会壺	身	12.2 － －	灰白色 微粒子	明緑灰色の釉を口唇部を除く全面に厚く施釉。(貫入なし)	外面は頸部に界線、胴部に鎬蓮弁が施される。(B-1表土、西壁内)	B-1 西壁内	Ⅰ Ⅱ
第53図 PL.68 7	青磁	小型酒会壺	蓋	外22.5 内12.6 高 －	灰白色 微粒子	灰黄緑色の釉を蓋甲から鍔端部内面と蓋甲内面に厚く施釉。鍔内面から身受け部分の端部は露胎。(全面に非常に細かい貫入がみられる)	蓋甲頂部に二条の界線、蓋甲中位から鍔基部に幅広の鎬蓮弁と界線、鍔端部に界線が施される。(E-3石垣上、石垣下、西壁内)	E-3	Ⅰ Ⅱ
第53図 PL.68 8	青磁	小形酒会壺	蓋	外25.2 内16.2 高 －	灰白色 やや粗粒子	淡緑色の釉を蓋甲から鍔端部内面と蓋甲内面に厚く施釉。鍔内面から身受け部分端部は露胎。(貫入なし)	蓋甲に丸彫りによる蓮弁、鍔基部に界線が施される。	C-3	Ⅱ上
第53図 PL.68 9	青磁	酒会壺	蓋	外31.5 内20.2	灰白色 やや粗粒子	淡黄緑色の釉を蓋甲から鍔端部内面と蓋甲内面に施釉。鍔内面から身受け部分は露胎。(全面に非常に細かい貫入る)	蓋全体にやや細めの鎬蓮弁、鍔基部に陰刻の界線が施される。(D-2表土、E-1東壁内、東斜面、志第5B Ⅱ)	D-2 E-1 東斜面	Ⅰ Ⅱ

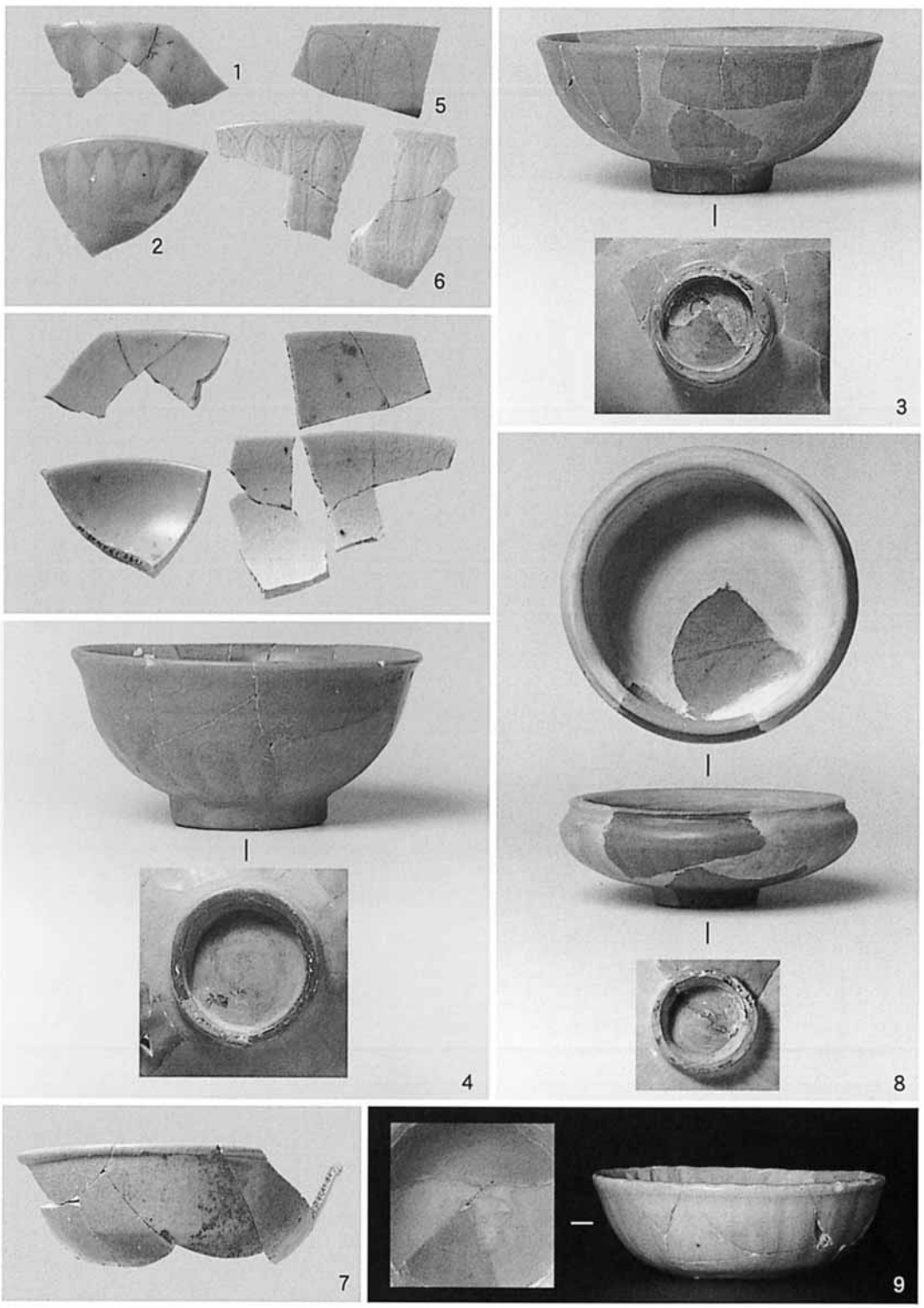
第40表　第Ⅰ～Ⅳ層　出土陶磁器観察(12)

挿図番号 図版番号 枝番号	分類	器種	部位	口径 器高 高台	素地	施釉 (釉色) 貫入	文様 備考	出土地点	
								地点	層
第53図 PL.68 10	青磁	小型酒会壺	蓋	外13.1 内10.2 高 －	灰黄色 やや粗粒子	灰黄緑色の釉を蓋甲から鍔端部内面と蓋甲内面に厚く施釉。鍔内面から身受け部分の端部は露胎（全面に非常に細かい貫入）	蓋甲に荷葉文（？）、鍔基部に陰刻の界線が施される。(C,D-3期最上層ピット内)	C,D	II
第54図 PL.69 1	青磁	双耳瓶	口縁～底部	8.5 24.1 8.0	灰白色 微粒子	淡緑色の釉を厚く施釉。（貫入なし）	外面は頸部に蕉葉文、胴部に片切り彫りの刻花文と陽圏線、腰部にヘラ描きで弁先の開いた蓮弁を施す。耳は龍を形取る。	不明	I II
第54図 PL.69 2	青磁	瓶	底部	－ － 8.0	淡灰白色 微粒子	淡黄緑色の釉を畳付を除く全面に厚く施釉。（貫入なし）	外面は肩部に界線、胴部に牡丹唐草文、腰部に界線と鎬蓮弁文がすべて浮文で施される。内面には成形時の指頭痕が明瞭に残る。	D-2 D-3	I II
第54図 PL.69 3	青磁	瓶	胴部	－ － －	淡灰白色 微粒子	淡緑色の釉を全面に厚く施釉。（貫入なし）	外面は胴部に松樹文（？）と鶴文、腰部に界線とやや細めの鎬蓮弁文がすべて浮文で施される。外面腰部に黒斑（鉄斑？）がみられる。	A-3 C-1 A-1 10号 土坑	I II
第54図 PL.69 4	青磁	方瓶	口縁～底部	5.2 23.2 7.6	淡黄色 微粒子	淡緑色の釉を全面に厚く施釉後、畳付の釉を掻き取る。（全面に細かい貫入がみられる）	外面は口縁部に界線と雷文帯、胴部に花唐草文と花弁状の窓絵（枠中は吉祥字判読不可）、高台外面は雷文帯が施される。(D-2 II、D-3 II、東斜面、志第6)	D-2 D-3	I II
第55図 PL.70 1	青磁	杯	底部	9.0 3.5 4.3	浅黄色 微粒子	灰黄緑色の釉を内底から高台外面まで施釉。（全面に細かい貫入）	外体面中央に隆帯文、その上下に線刻蓮弁文。内体面に幅広の蓮弁文。	B-1	II 下
第55図 PL.70 2	青磁	杯	口縁～底部	6.3 3.3 3.2	淡灰白色 微粒子	明黄緑色の釉を内底から外底際まで厚く施釉。外底は露胎。（部分的に荒い貫入）	内底に陽圏線が廻る。外面にロクロ跡が残る。	E-1	I II
第55図 PL.70 3	青磁	杯	口縁	7.2 － －	淡灰白色 微粒子	淡緑色の釉を全面に施釉。（貫入なし）	文様なし。 八角杯	A-1 B-1 11号 土坑	I II
第55図 PL.70 4	青磁	杯	口縁～底部	6.6 4.4 4.1	灰黄色 やや粗粒子	淡黄緑色の釉を内面口縁部から高台外面まで施釉。内面胴部から内底と畳付から外底は露胎。（貫入なし）	文様なし。	B-1	II 上 下
第55図 PL.70 5	青磁	小壺	〃	3.2 5.2 3.0	白色 微粒子	明緑色の釉を内底から腰部下位まで厚く施釉。（貫入なし）	外底にロクロ跡が残る。(B-2 II上、C-1 IV、東側斜面)	B-2 C-1 東斜面	II 上 IV
第55図 PL.70 6	青磁	置物	胴部	－ － －	灰白色 微粒子	灰黄緑色の釉を畳付と手の部分を除く全面に厚く施釉。(貫入なし)	仏像形の置物（？）の底部、蓮華座を組んで座る仏像の左手部分、または左足部分か？	D-3	II 上
第55図 PL.70 7	青磁	燭台	人形	－ － －	灰白色 微粒子	灰黄緑色の釉を内面途中から外面に厚く施釉。（貫入なし）	人形（仏像形）燭台の胴部左半身部分、半面ずつ型成形した後に釉で接合されたもので、内面に布目痕、側面に継ぎ目がみられる。(A-2 II上、D-2 II上)	A-2 D-2	II 上
第55図 PL.70 8	青磁	燭台	象形	－ － －	灰白色 微粒子	淡緑色の釉を全面に厚く施釉。（全面に荒い貫入がみられる）	動物形（象形）燭台の胴部右半身部分、象の胴体部分と台座部分は釉により接合されている。内面は成形時の指頭痕が明瞭に残る。(A-1 II上、A-2 II上、A-3 II上、D-3 撹乱)	A-1 A-2 A-3	II 上

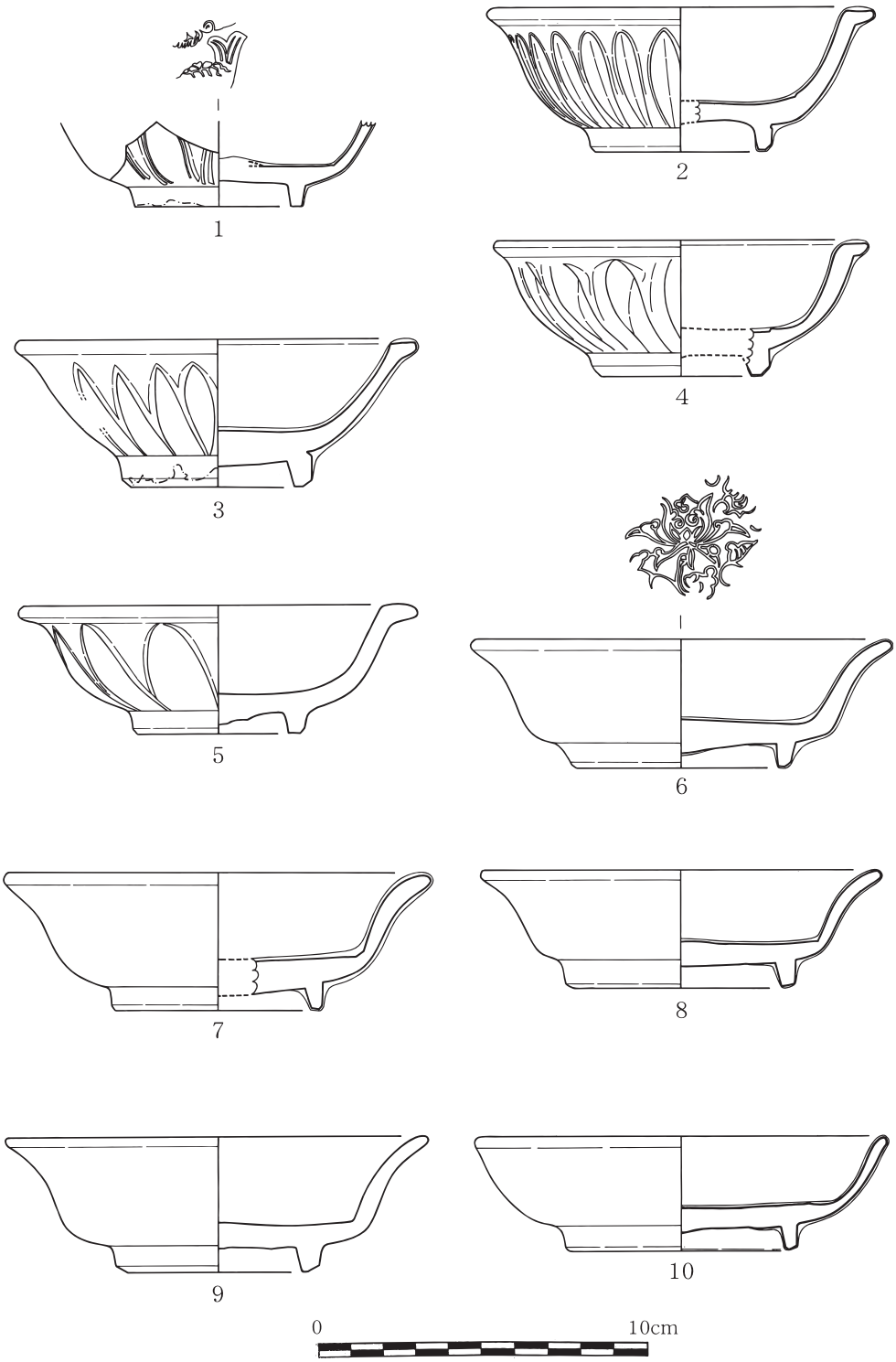
第41表　第Ⅰ～Ⅳ層　出土陶磁器観察(13)



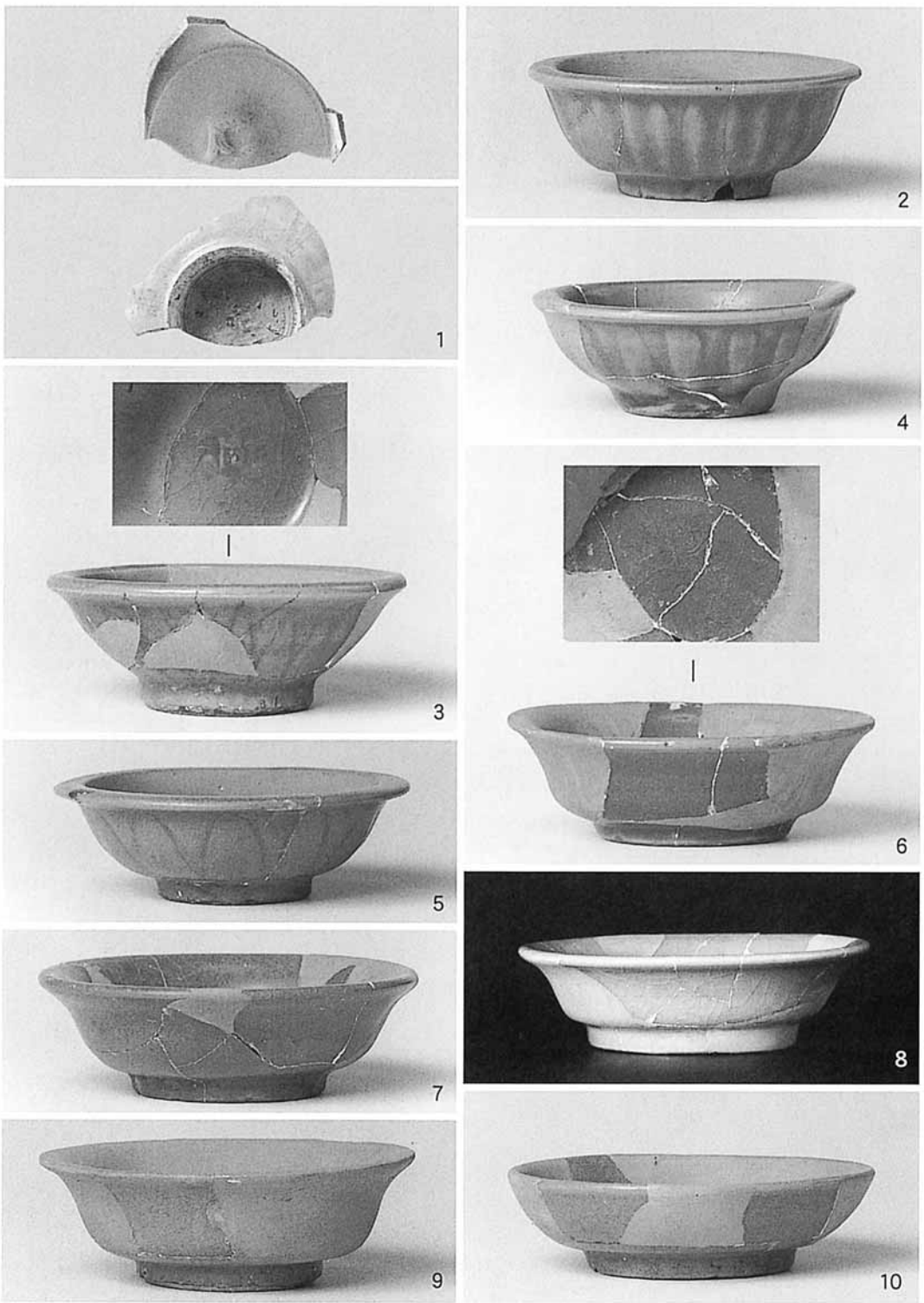
第 40 図 (PL.55)　第Ⅰ～Ⅳ層（Ⅱ層下部）出土青磁
1 ～ 7. 碗　8・9 杯



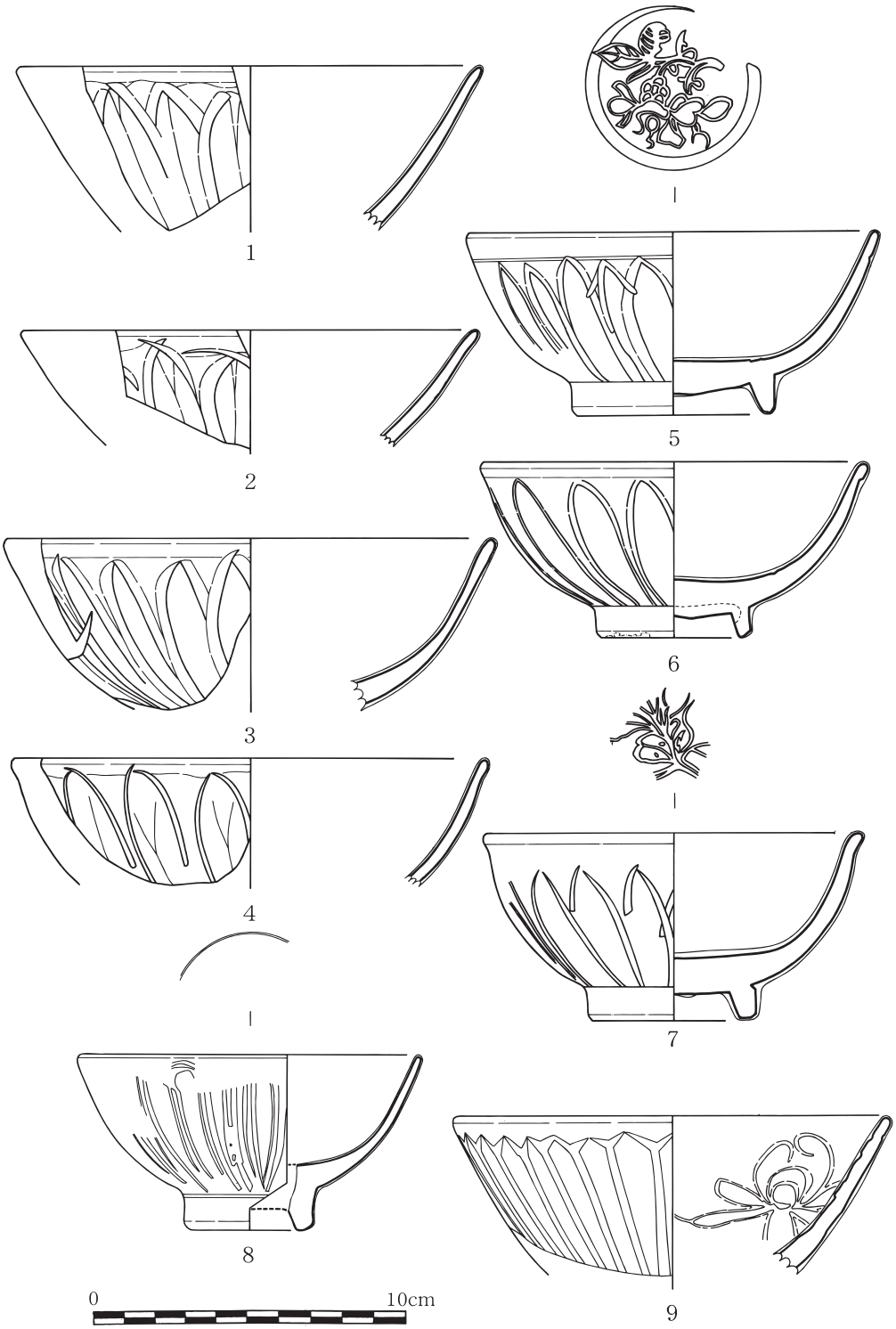
PL.55（第 40 図）　第Ⅰ～Ⅳ層（Ⅱ層下部）出土青磁
1 ～ 7. 碗　8・9. 杯



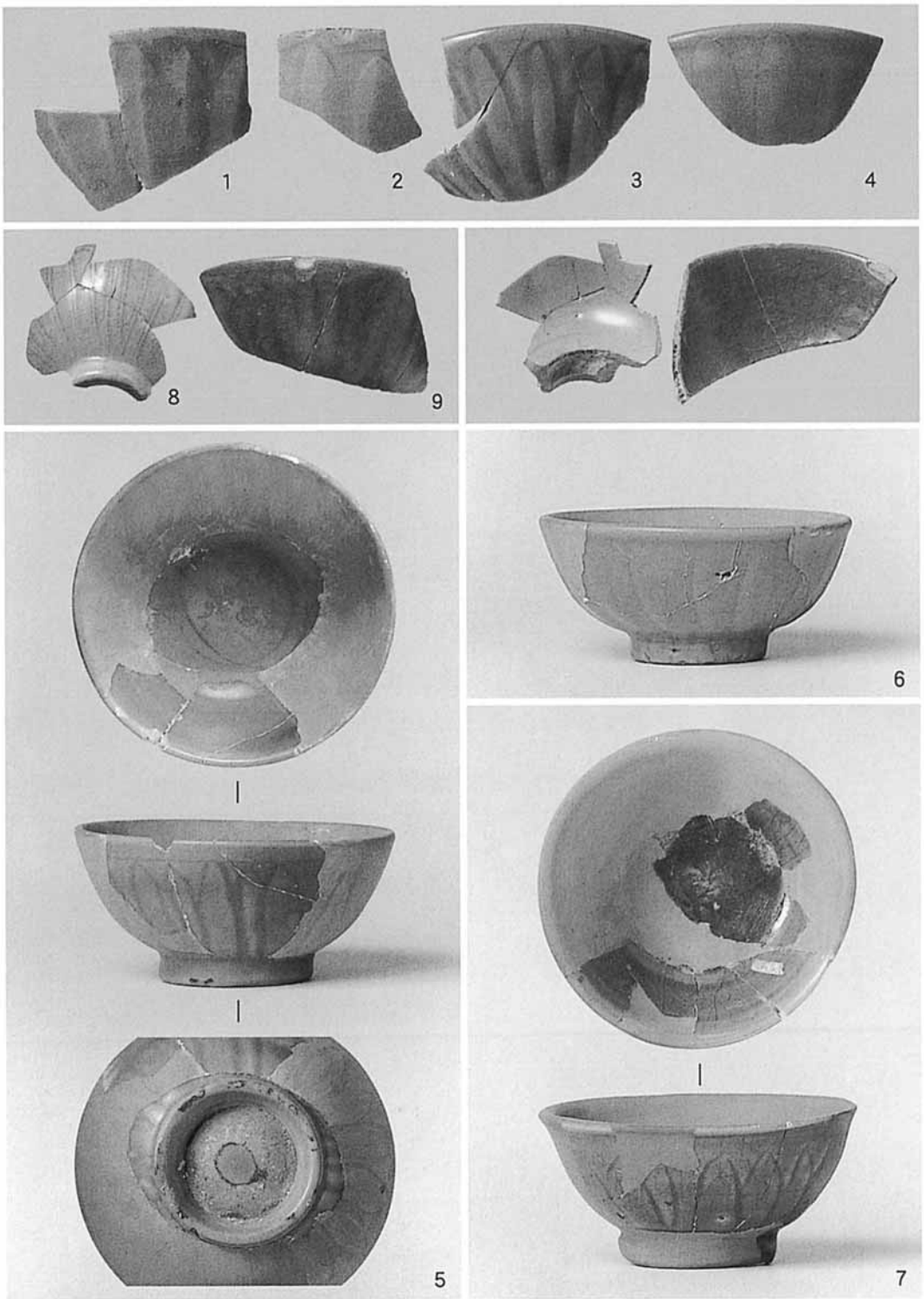
第 41 図 (PL.56)　第Ⅰ～Ⅳ層（Ⅱ層下部）出土青磁皿



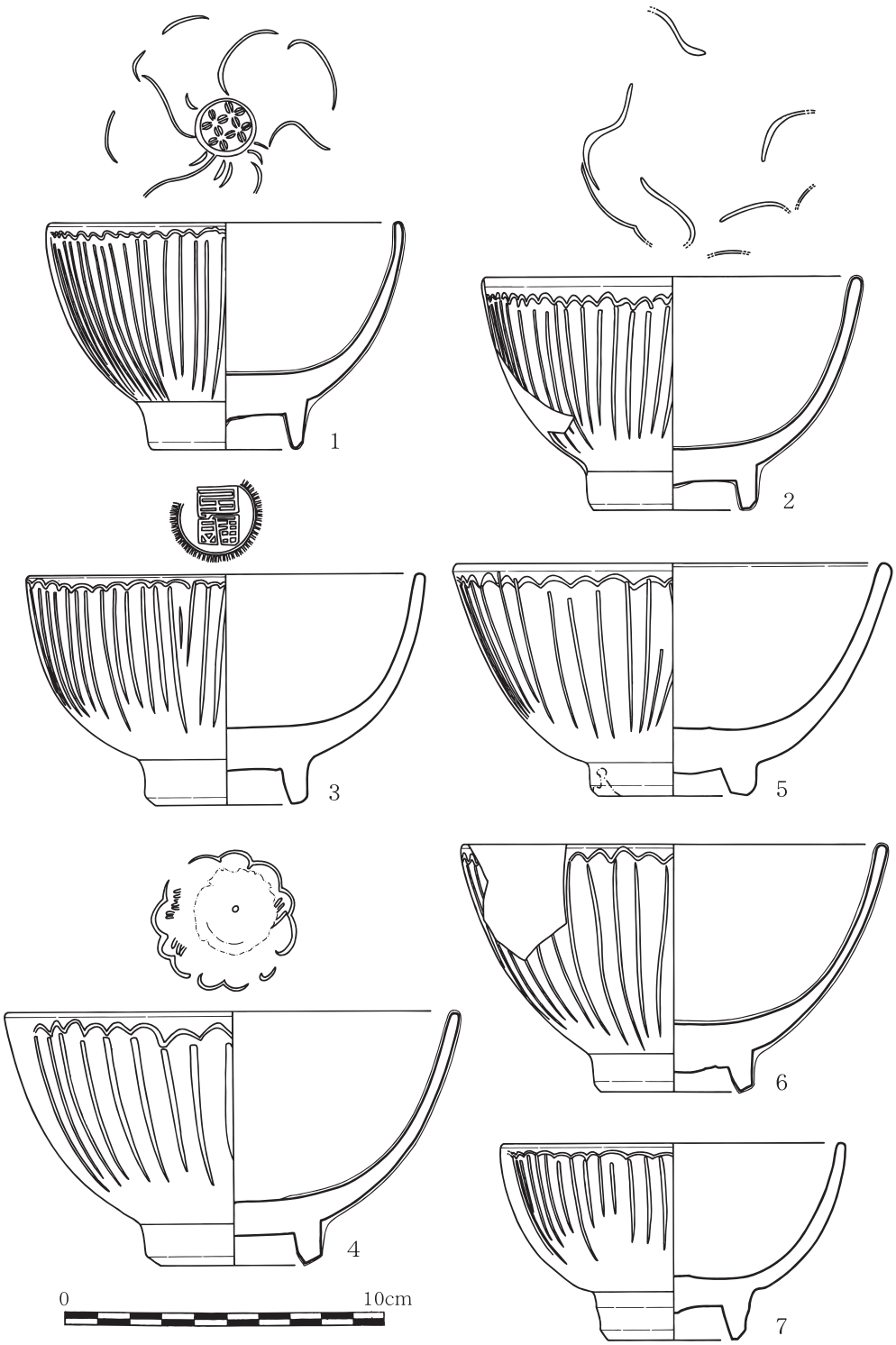
PL.56（第 41 図）　第Ⅰ～Ⅳ層（Ⅱ層下部）出土青磁皿



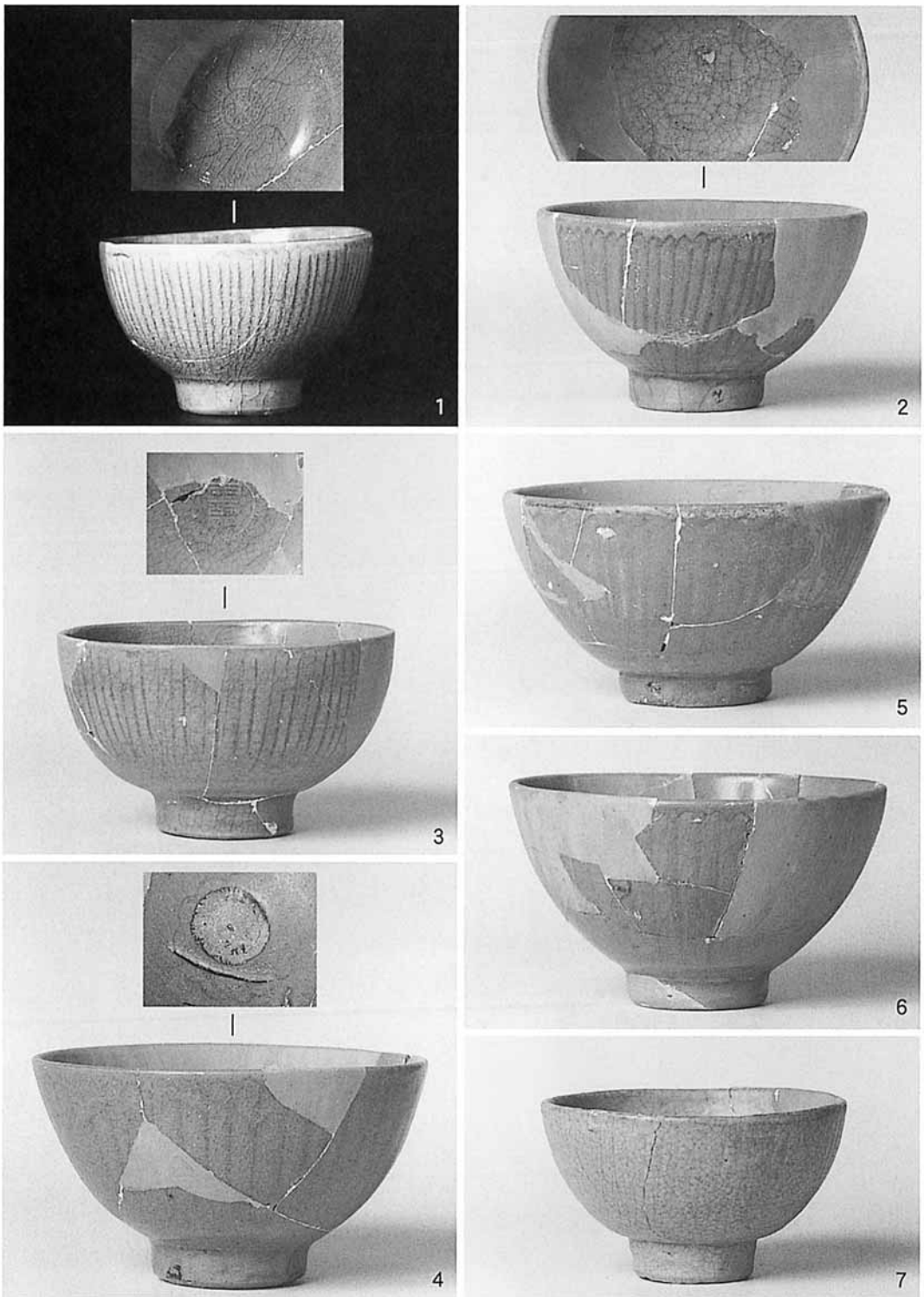
第 42 図 (PL.57)　第Ⅰ～Ⅳ層出土青磁碗



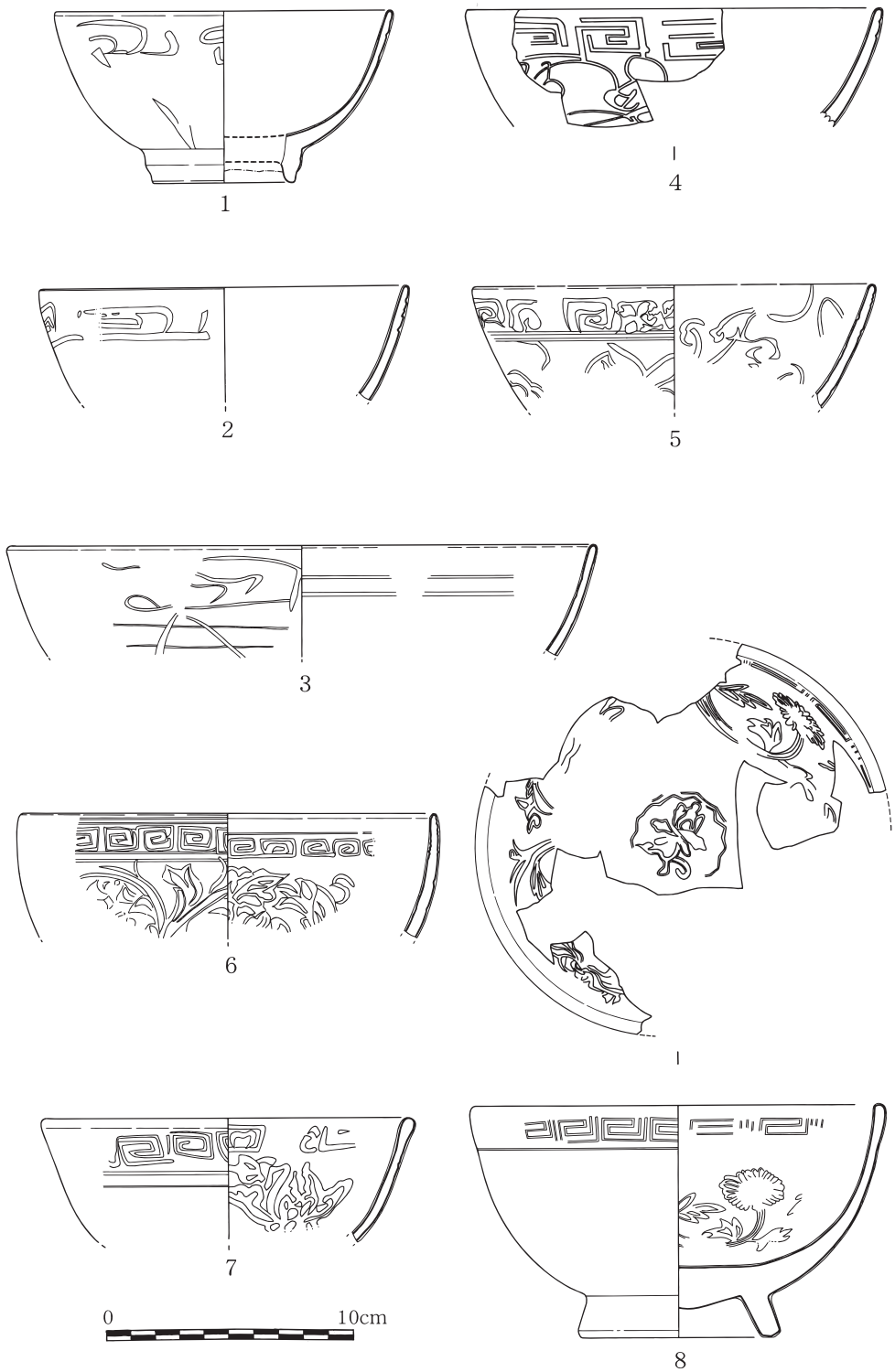
PL.57(第 42 図)　第Ⅰ～Ⅳ層出土青磁碗



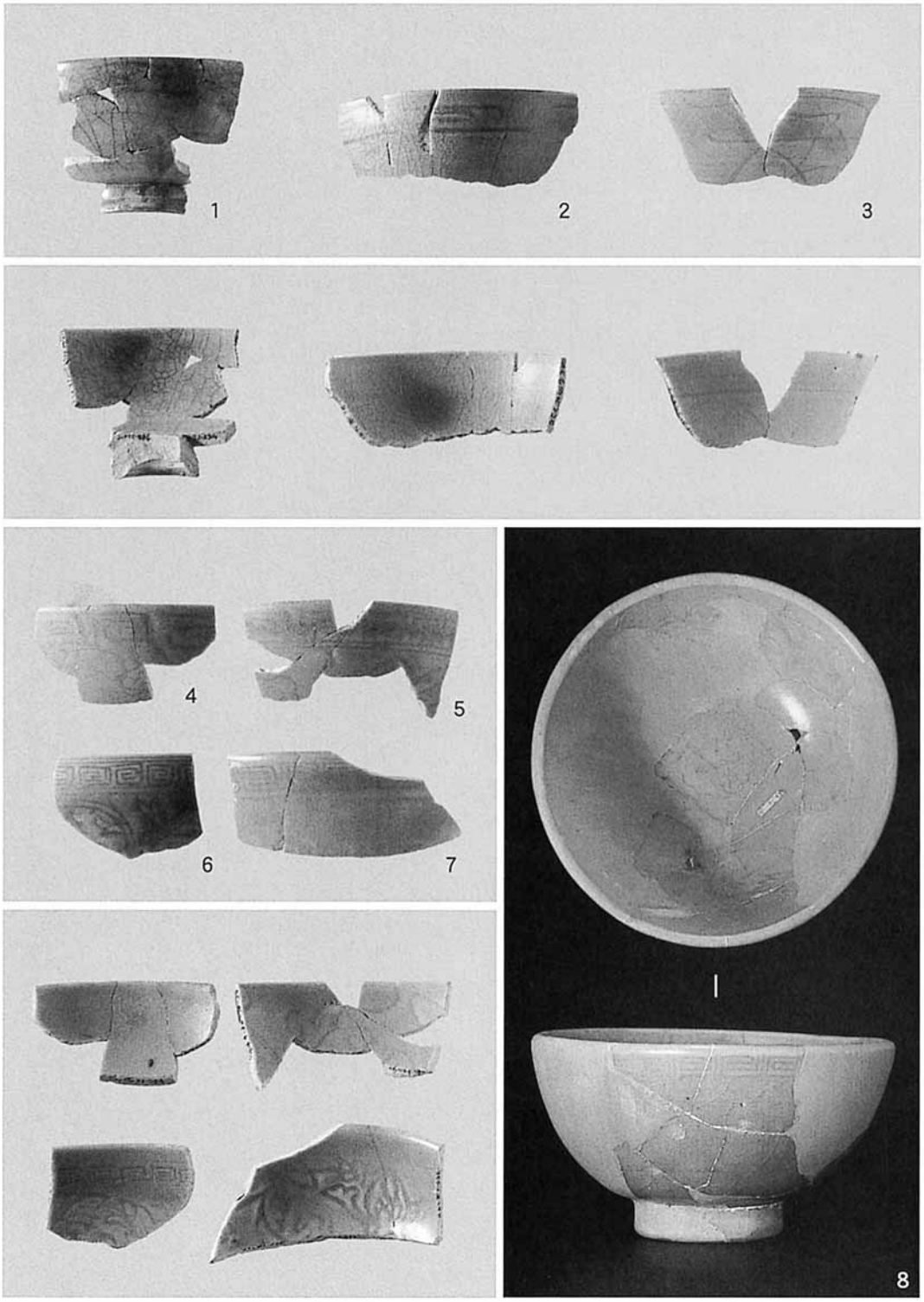
第 43 図 (PL.58)　第Ⅰ～Ⅳ層出土青磁碗



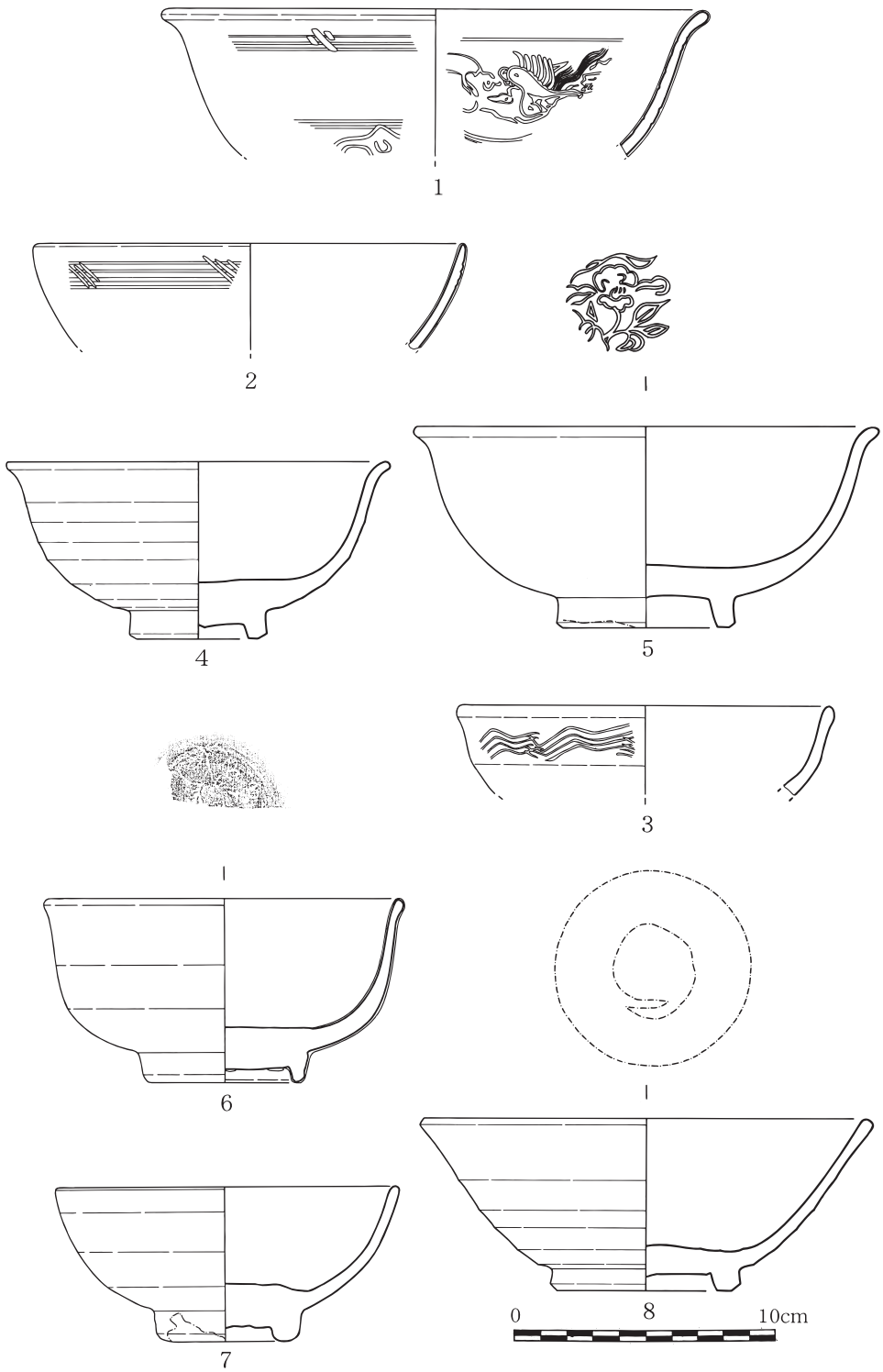
PL.58(第 43 図)　第Ⅰ～Ⅳ層出土青磁碗



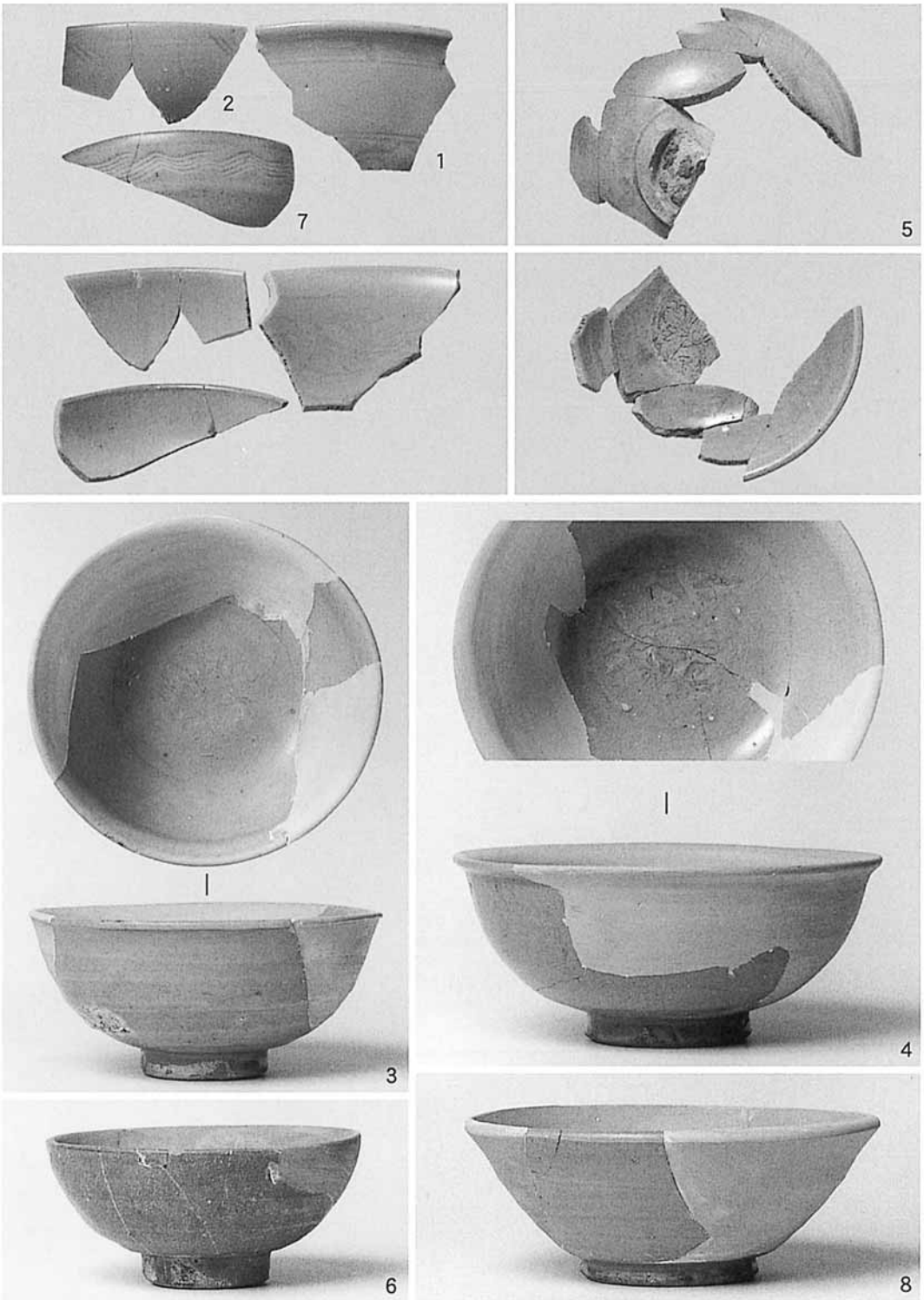
第 44 図 (PL.59)　第Ⅰ～Ⅳ層出土青磁碗



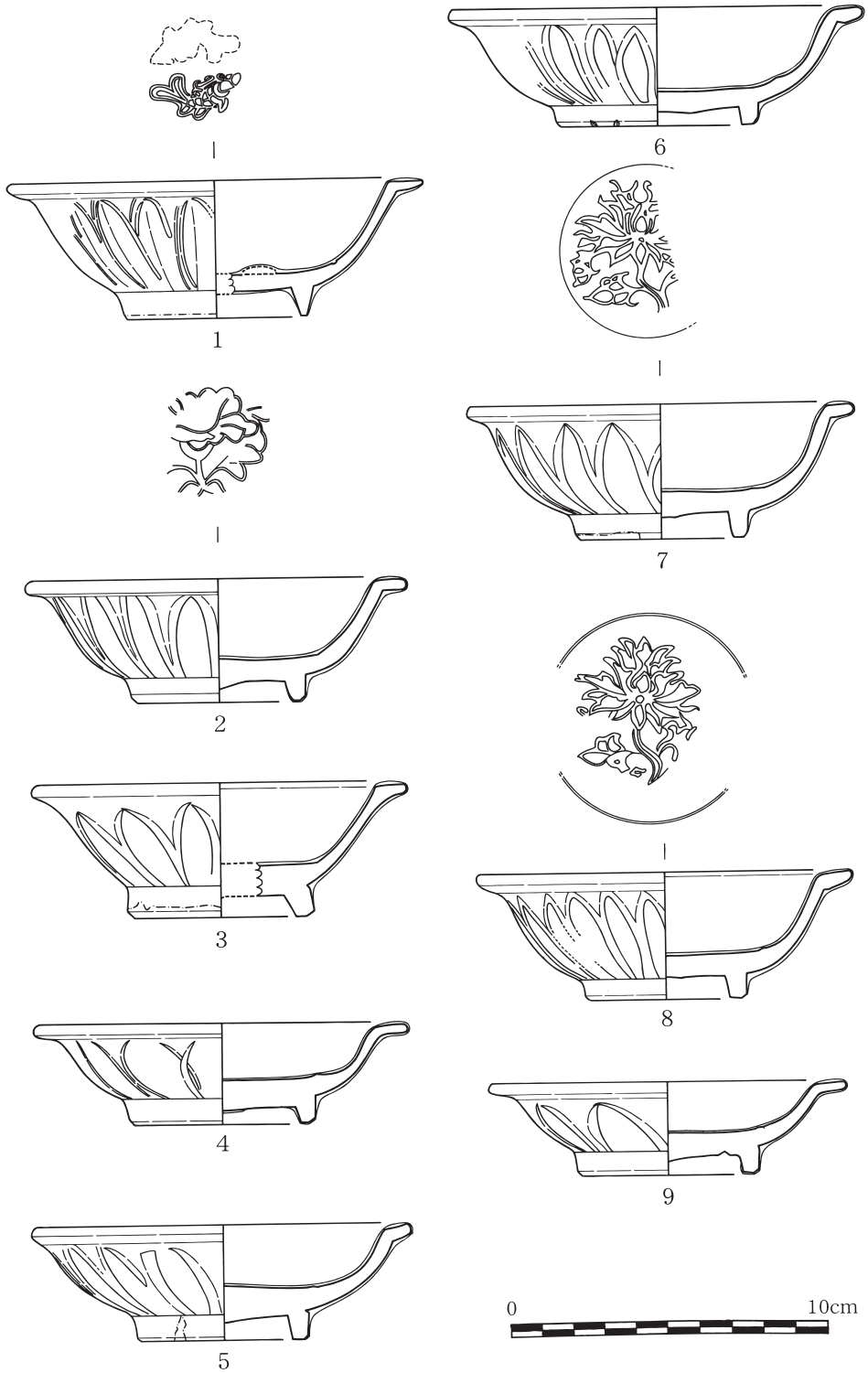
PL.59（第 44 図）　第Ⅰ～Ⅳ層出土青磁碗



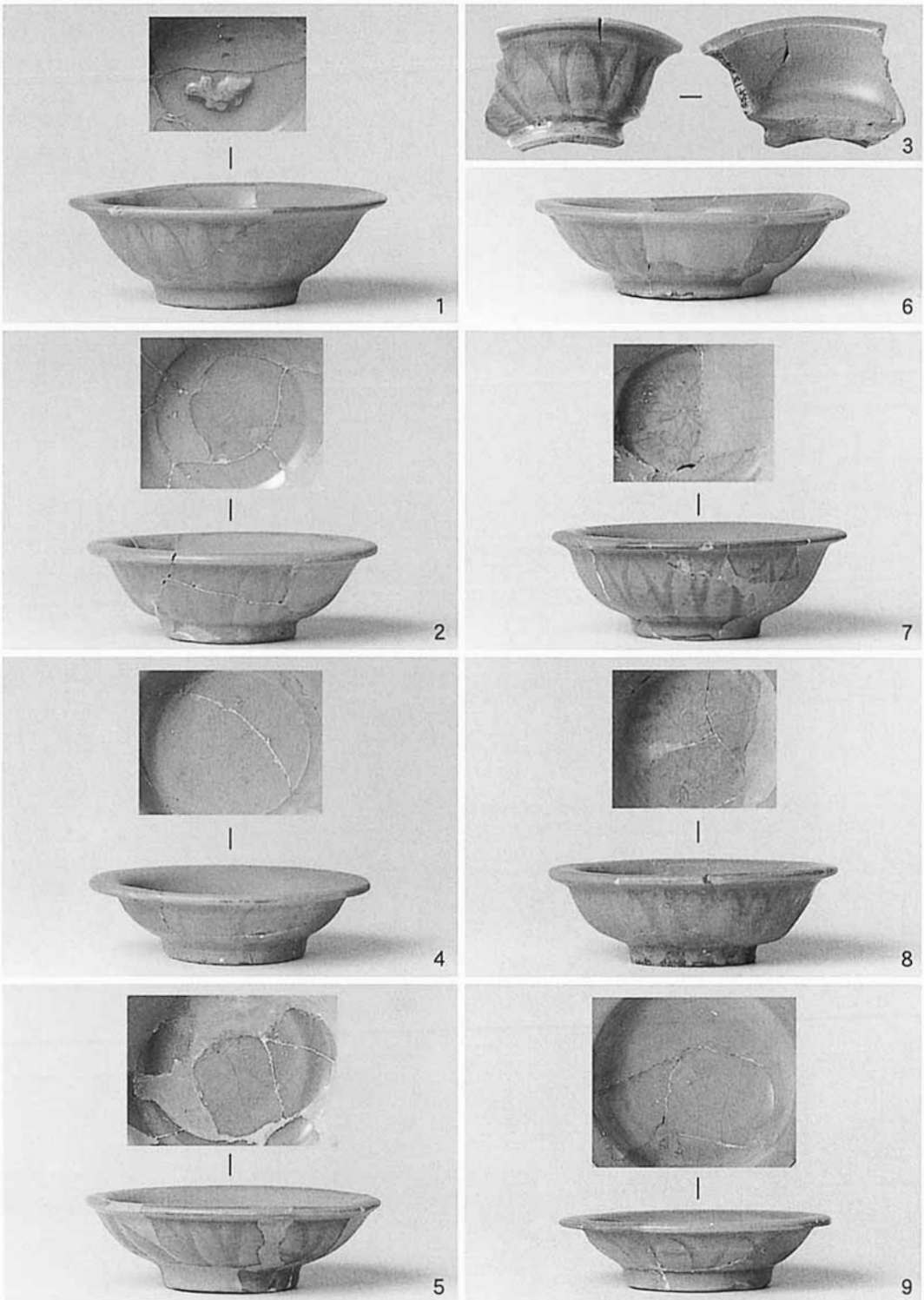
第 45 図 (PL.60)　第Ⅰ～Ⅳ層出土青磁碗



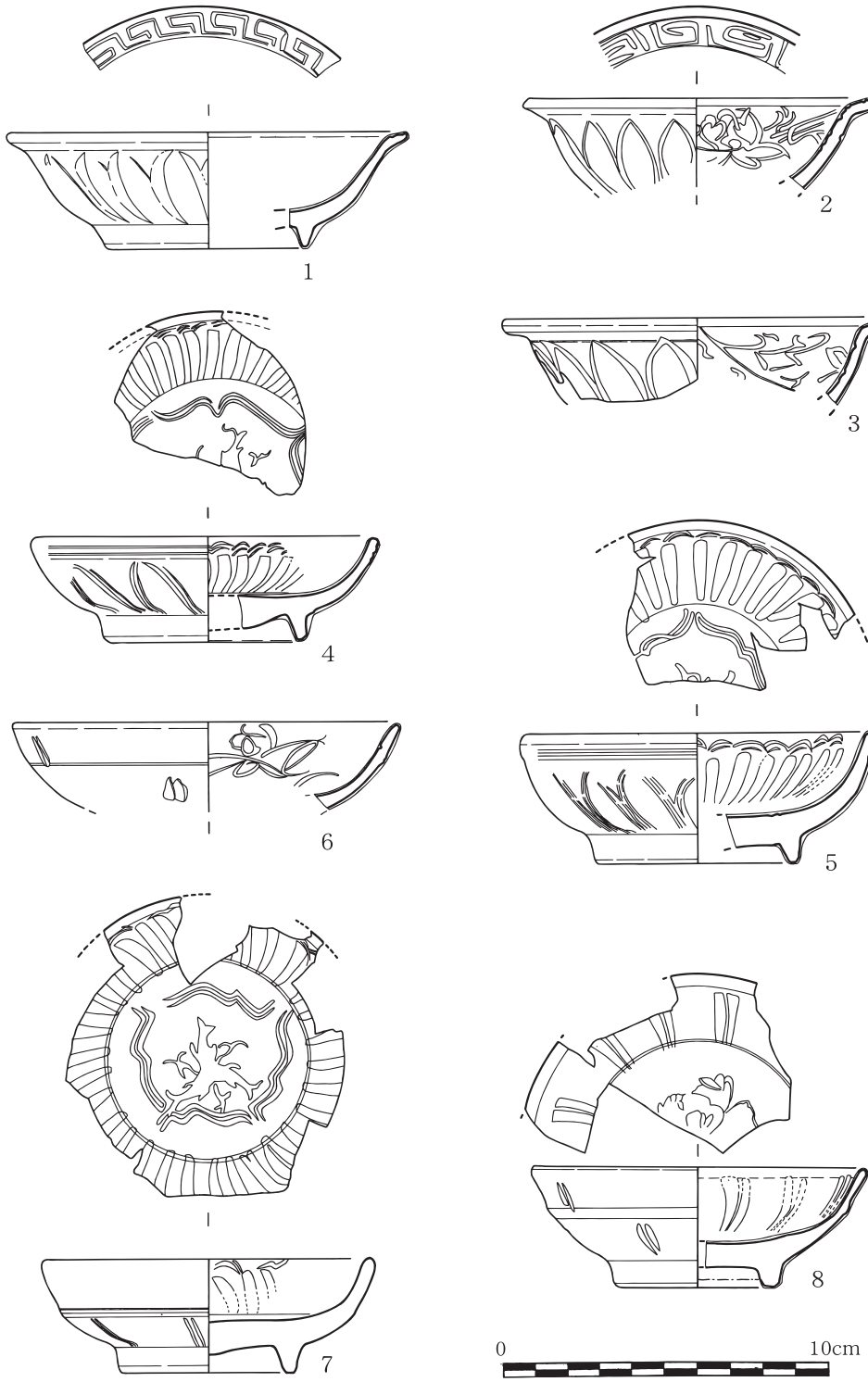
PL.60(第 45 図)　第Ⅰ～Ⅳ層出土青磁碗



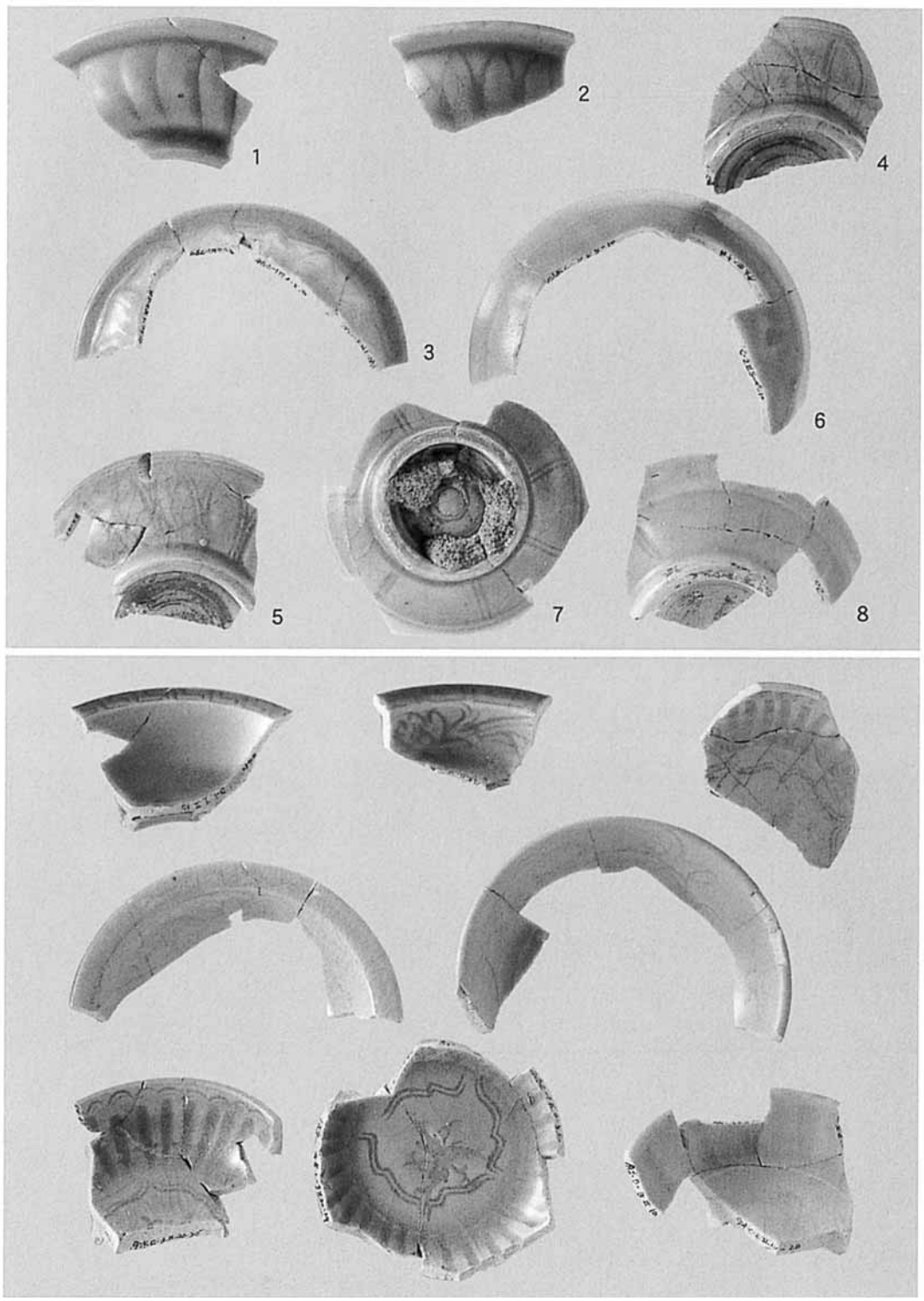
第 46 図 (PL.61)　第Ⅰ～Ⅳ層出土青磁皿



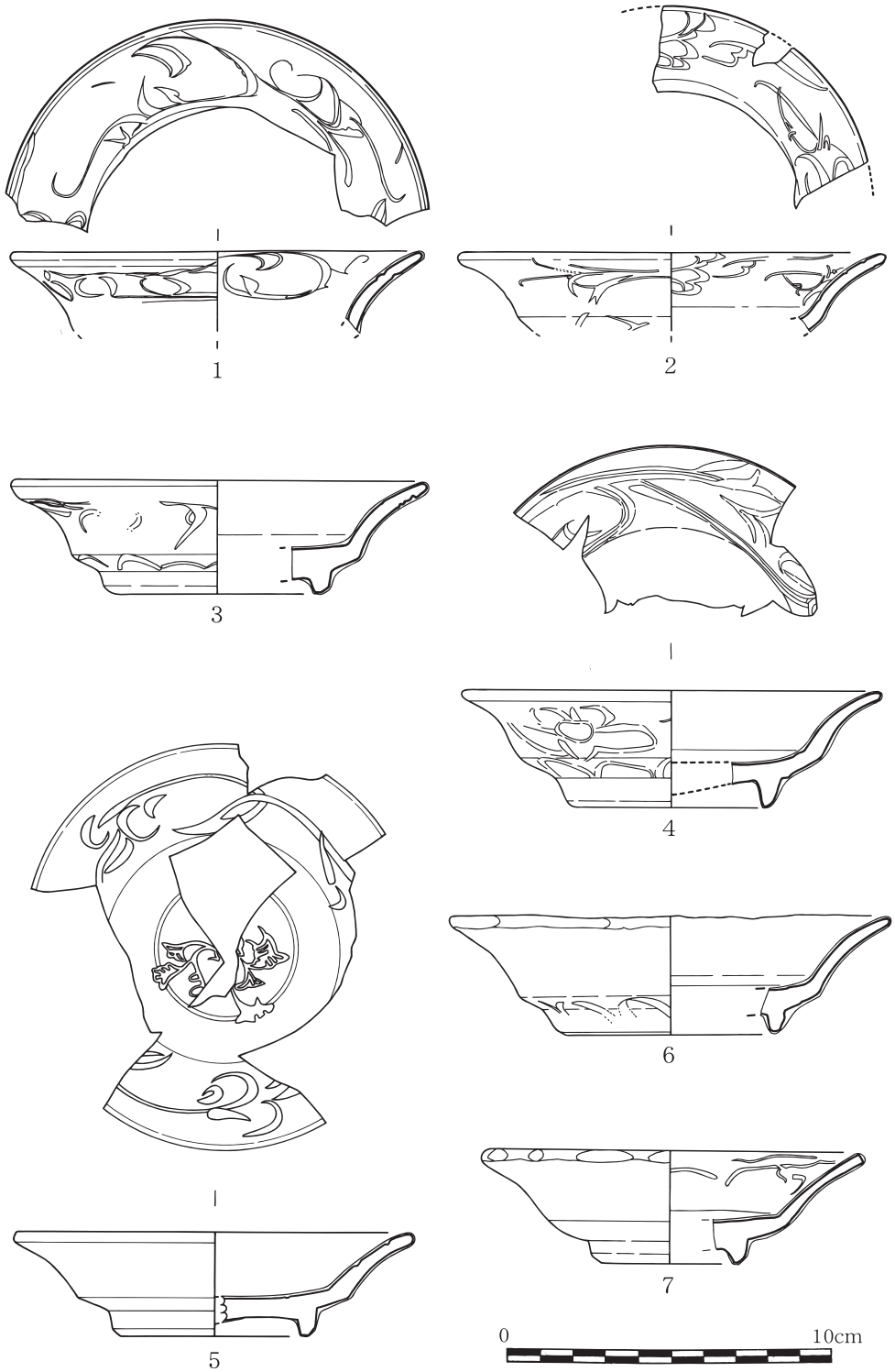
PL.61(第 46 図)　第Ⅰ～Ⅳ層出土青磁皿



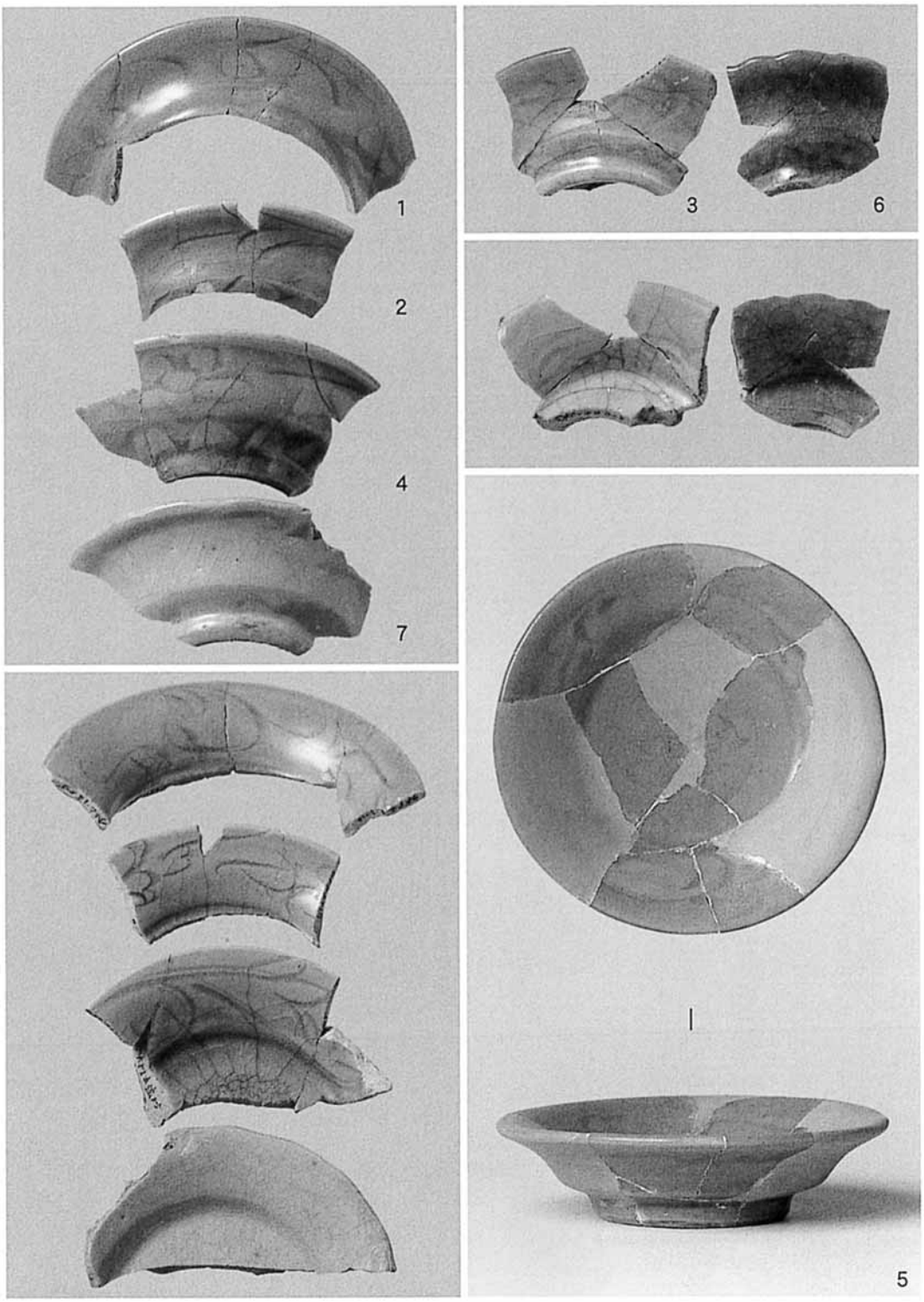
第 47 図 (PL.62)　第Ⅰ～Ⅳ層出土青磁皿



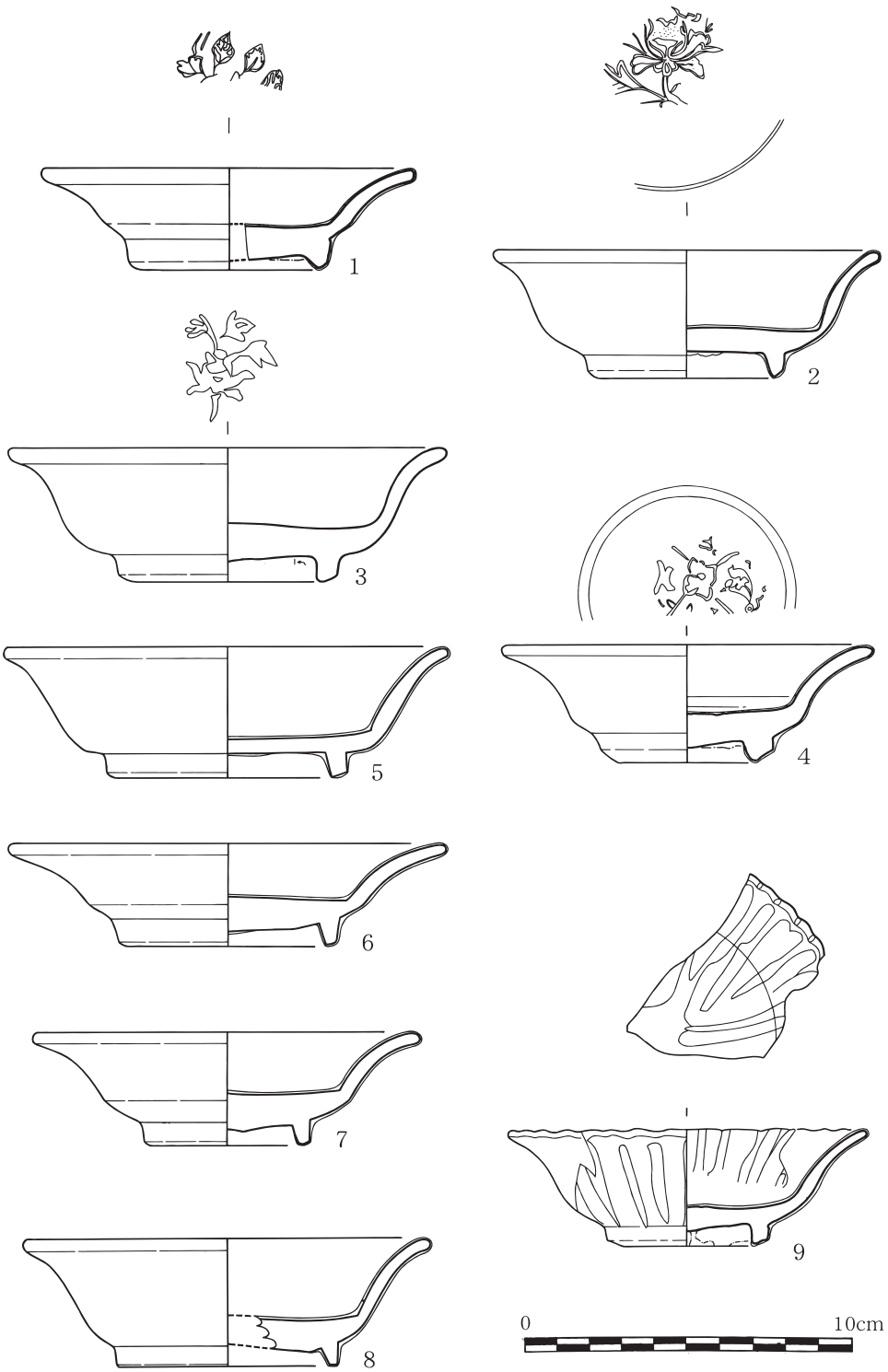
PL.62(第 47 図)　第Ⅰ～Ⅳ層出土青磁皿



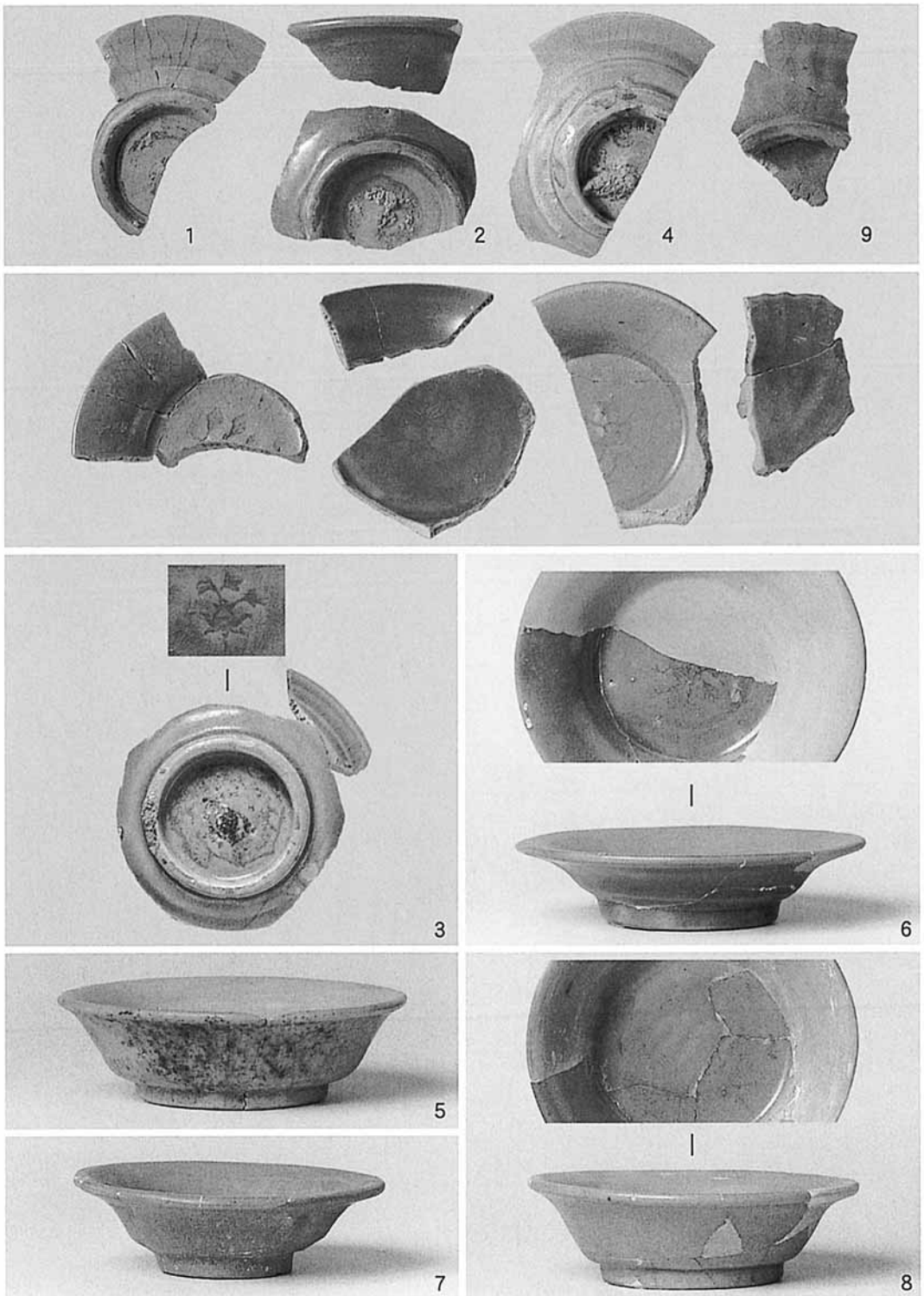
第 48 図 (PL.63)　第Ⅰ～Ⅳ層出土青磁皿



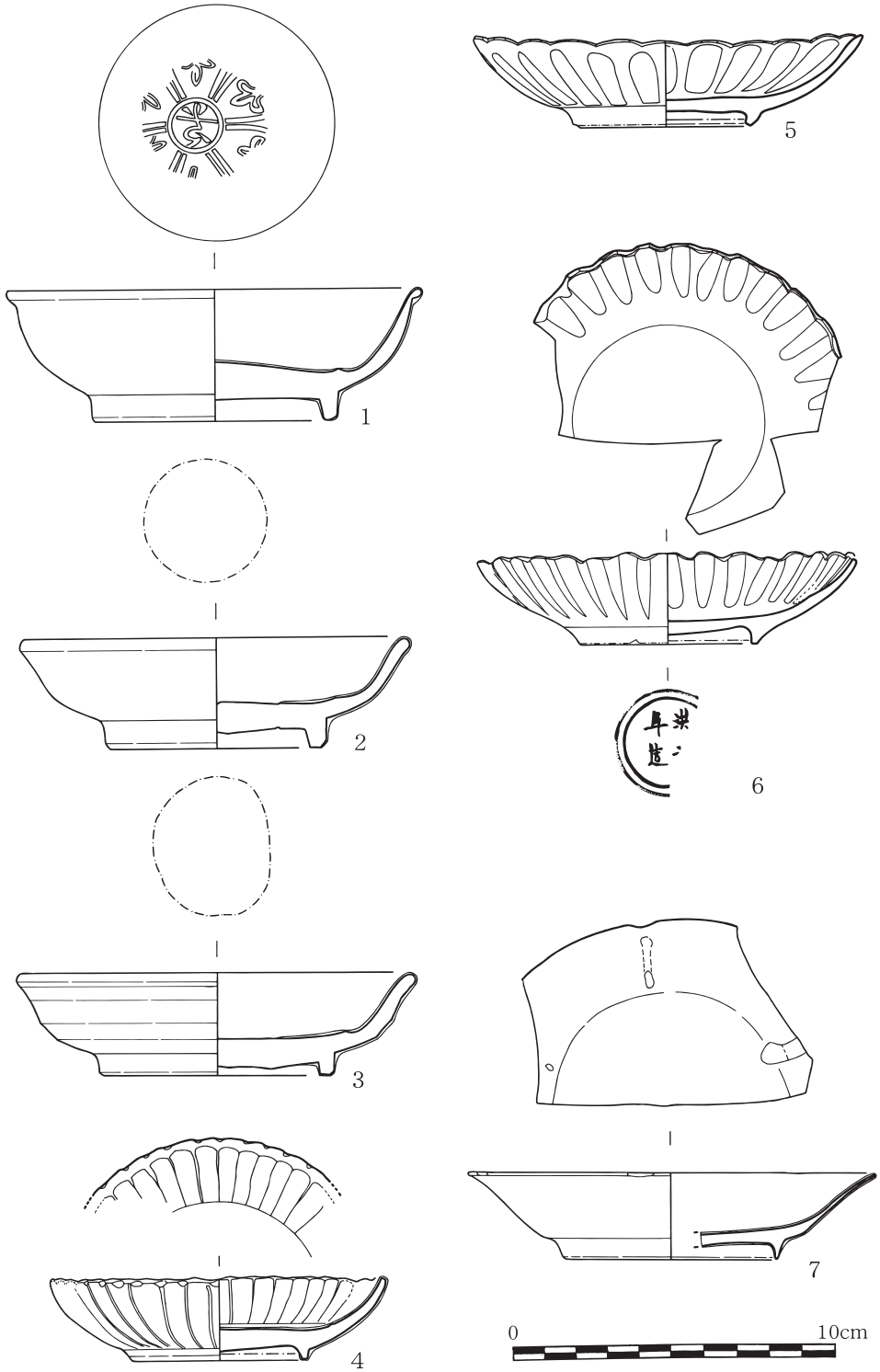
PL.63(第 48 図)　第Ⅰ～Ⅳ層出土青磁皿



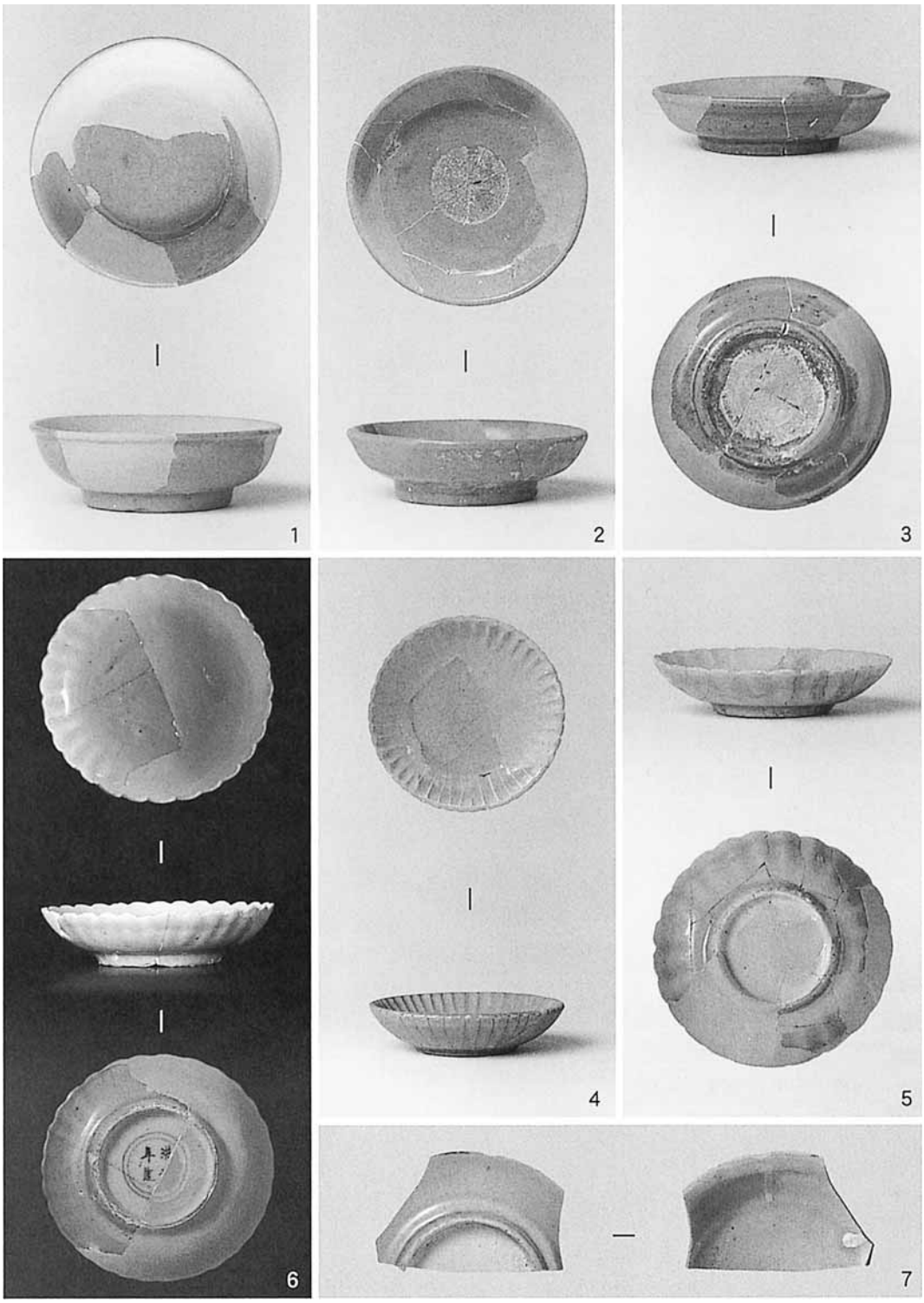
第 49 図 (PL.64)　第Ⅰ～Ⅳ層出土青磁皿



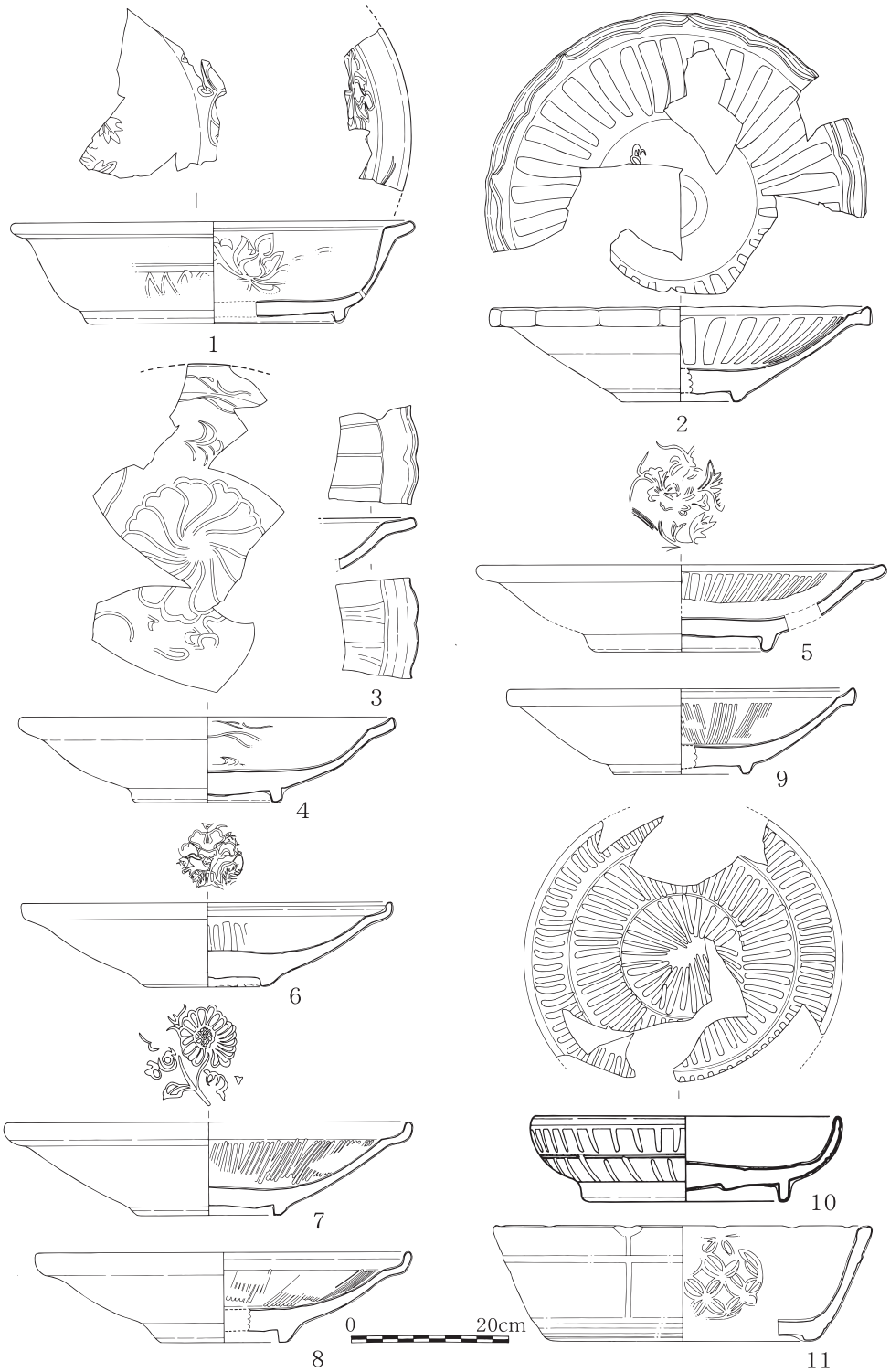
PL.64(第 49 図)　第Ⅰ～Ⅳ層出土青磁皿



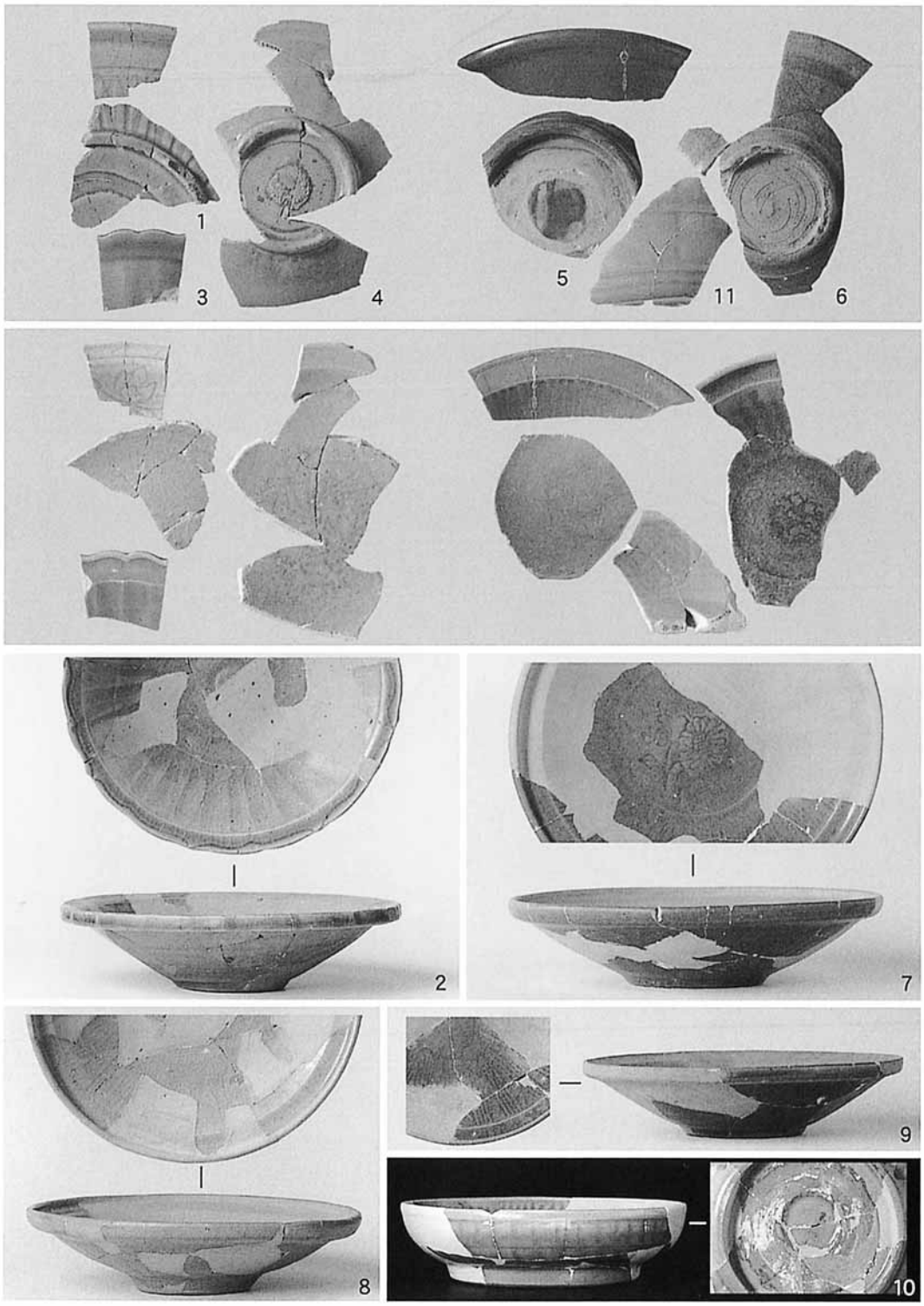
第 50 図 (PL.65)　第Ⅰ～Ⅳ層出土青磁皿



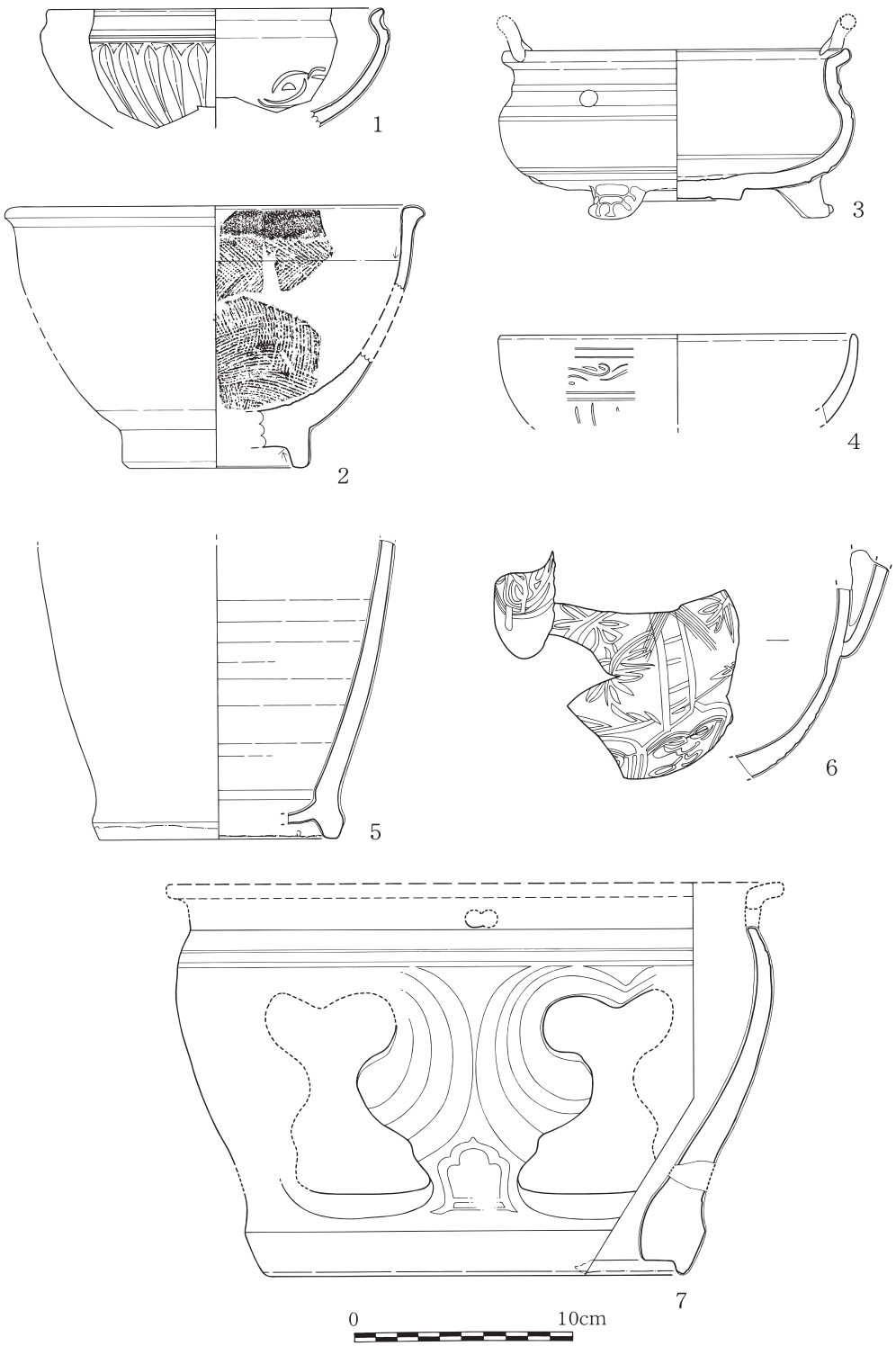
PL.65(第 50 図)　第Ⅰ～Ⅳ層出土青磁皿



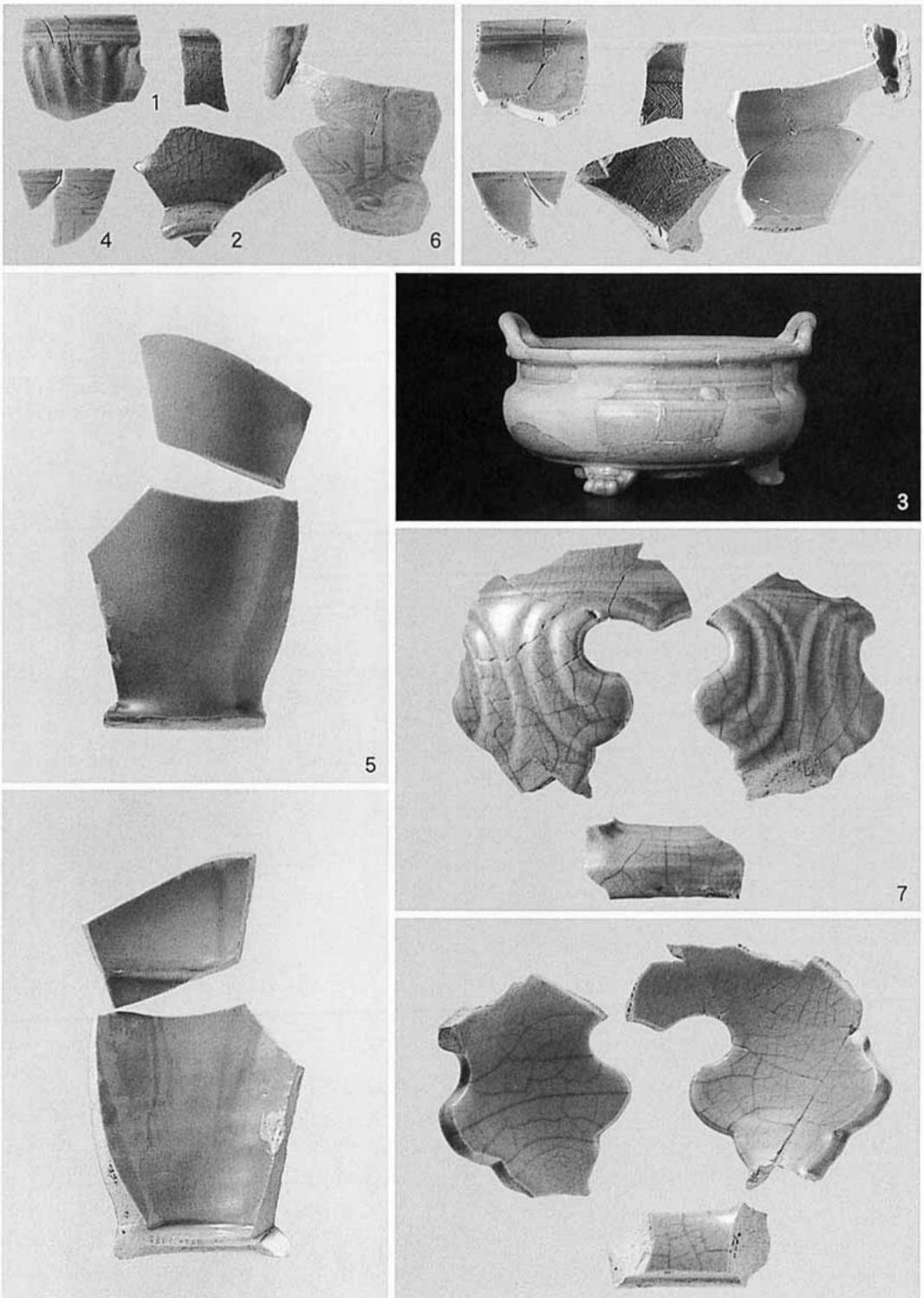
第 51 図 (PL.66)　第Ⅰ～Ⅳ層出土青磁盤



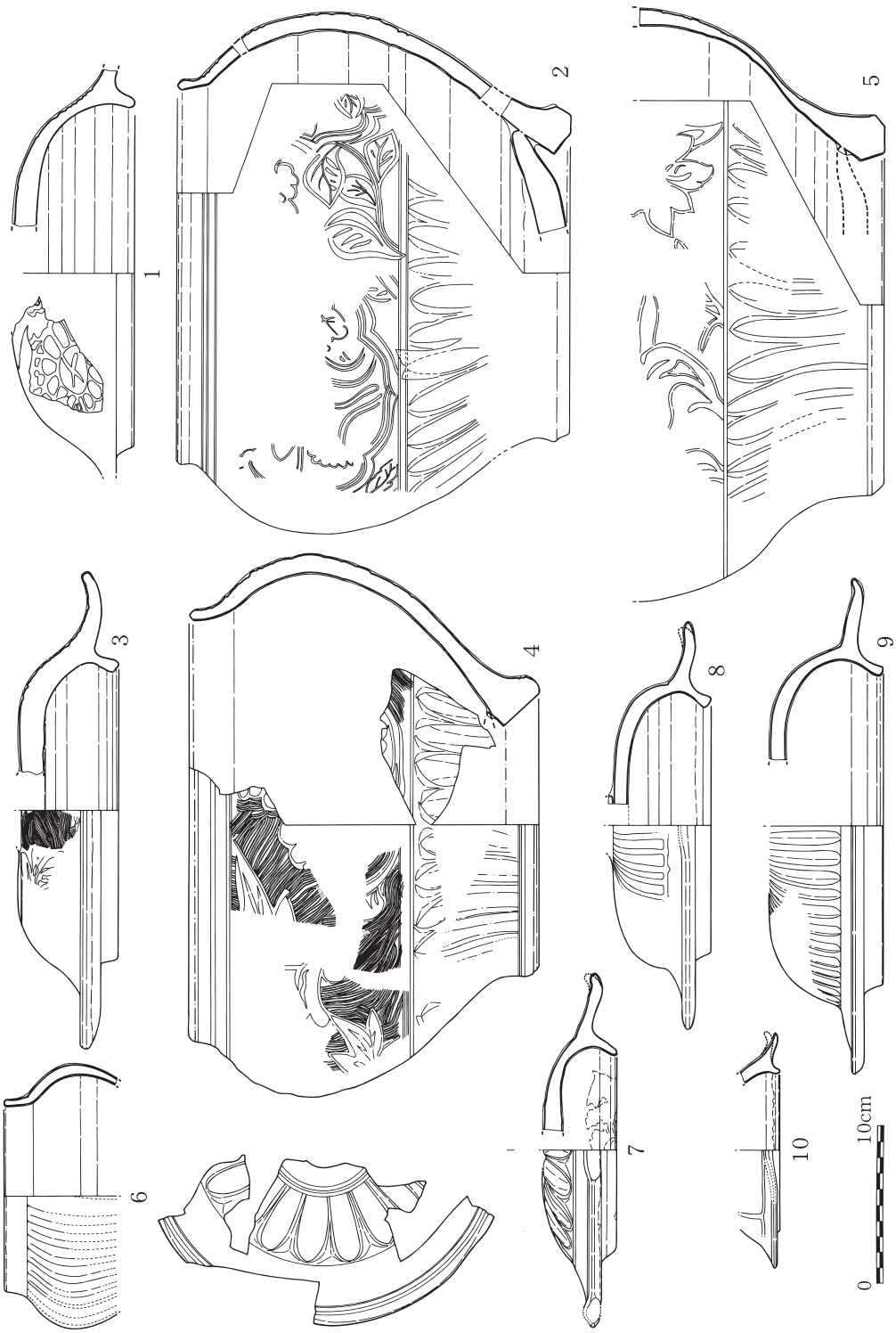
PL.66(第 51 図)　第Ⅰ～Ⅳ層出土青磁盤



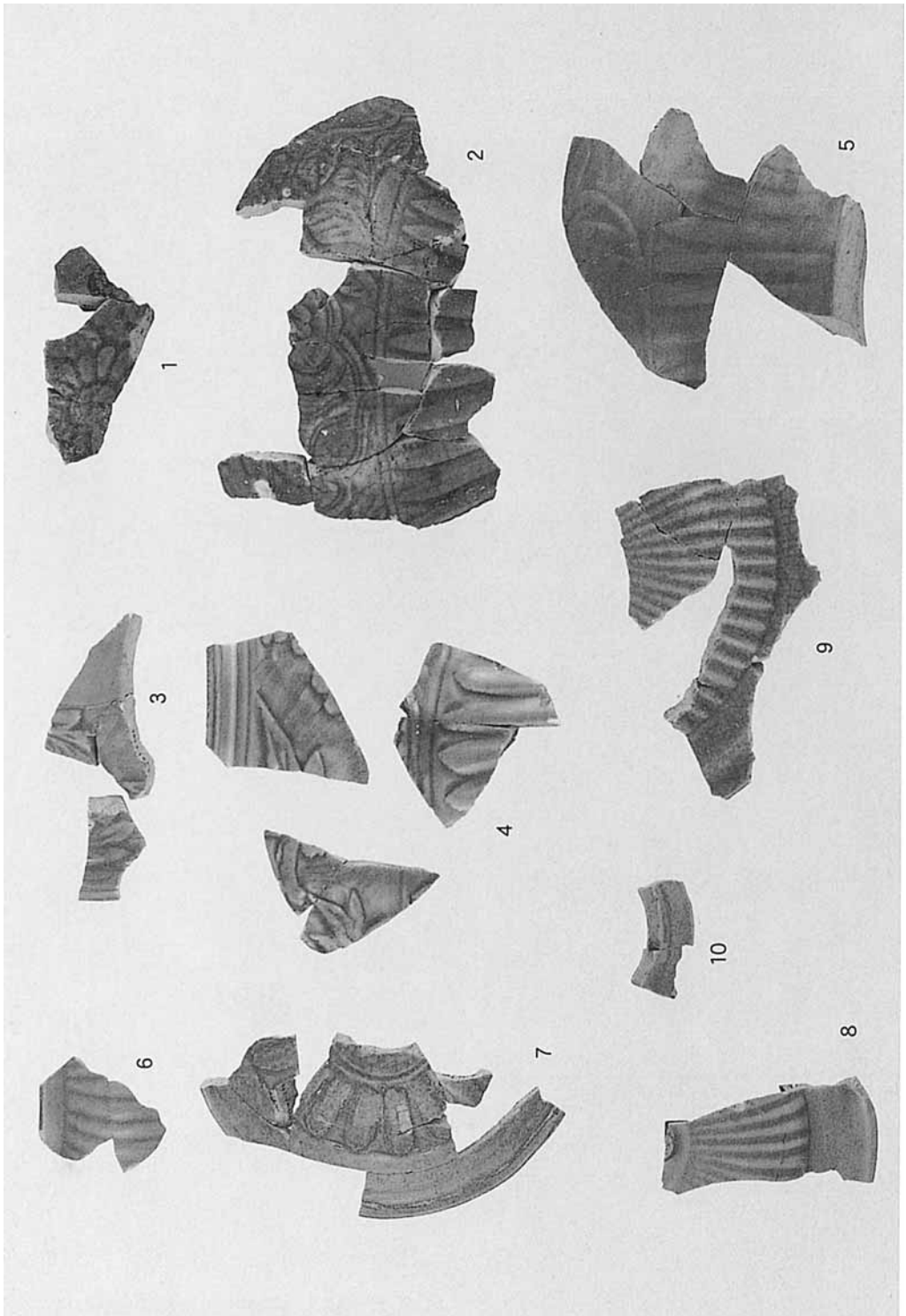
第 52 図 (PL.67)　第Ⅰ～Ⅳ層出土青磁
1. 鉢　2. 擂鉢　3. 香炉　4. 合子　5. 瓶　6. 水注　7. 器台



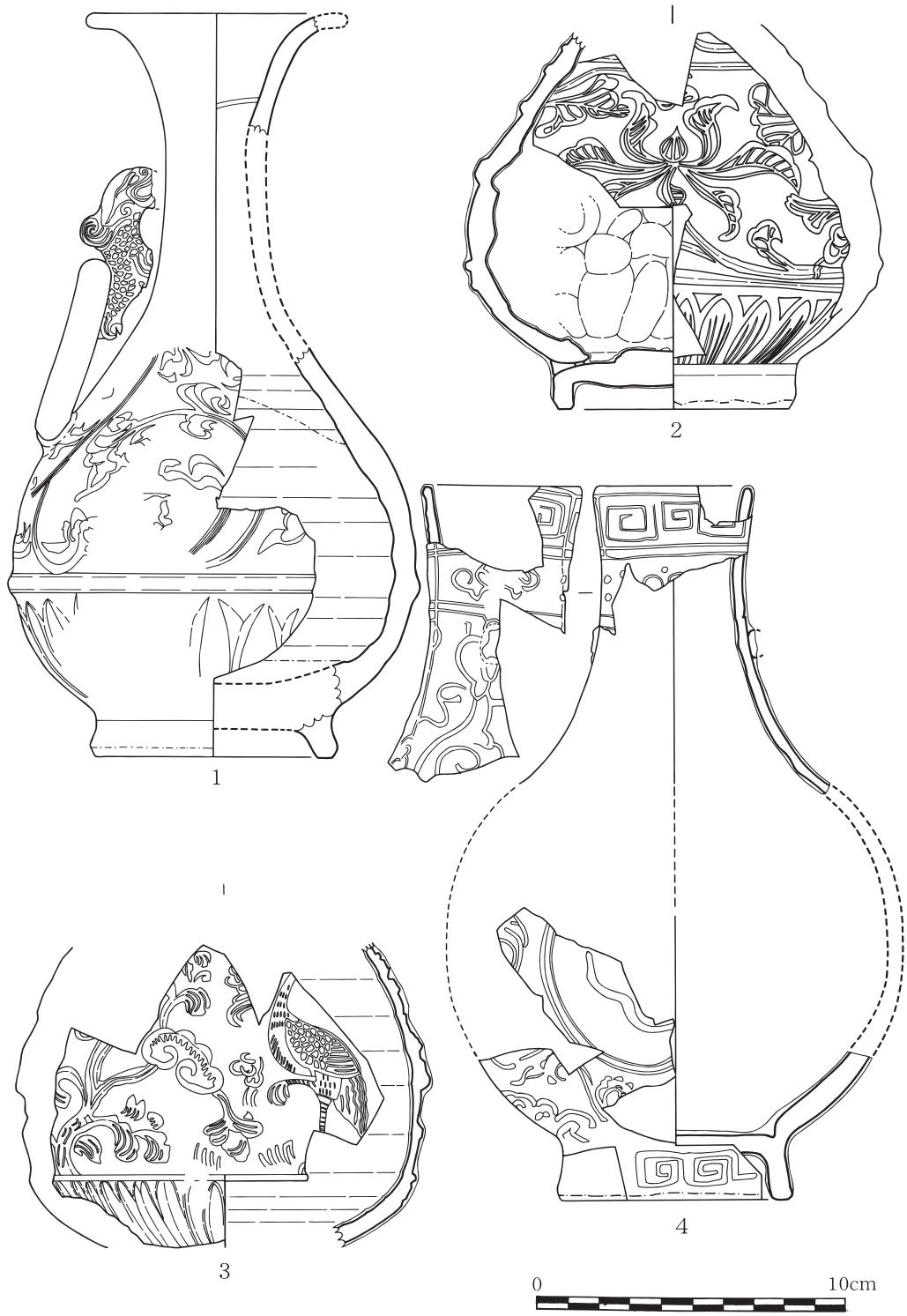
PL.67(第 52 図)　第Ⅰ～Ⅳ層出土青磁
1. 鉢　2. 擂鉢　3. 香炉　4. 合子　5. 瓶　6. 水注　7. 器台



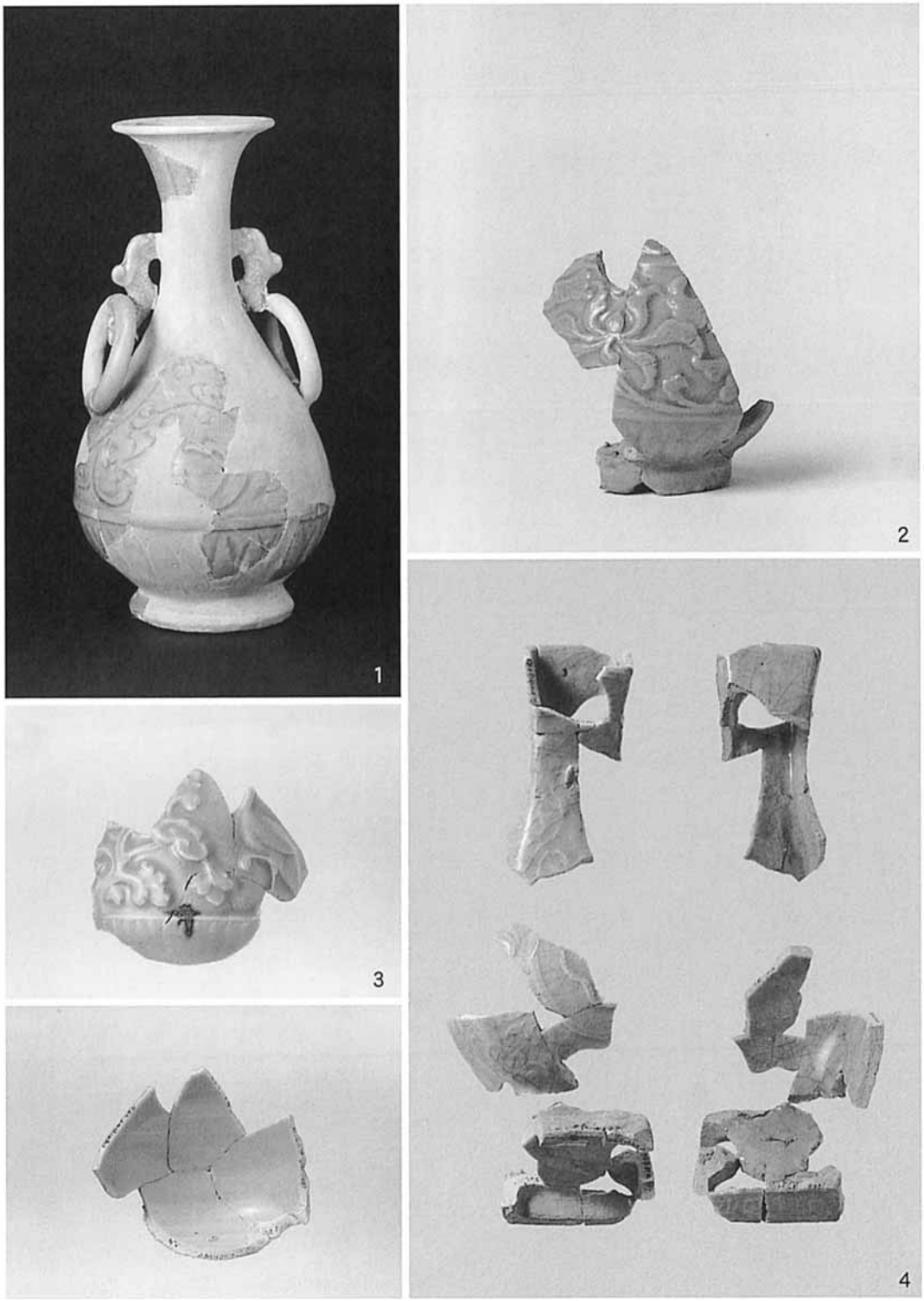
第 53 図 (PL.68)　第Ⅰ～Ⅳ層出土青磁酒会壺



PL.68（第53図） 第Ⅰ～Ⅳ層出土青磁酒会壺



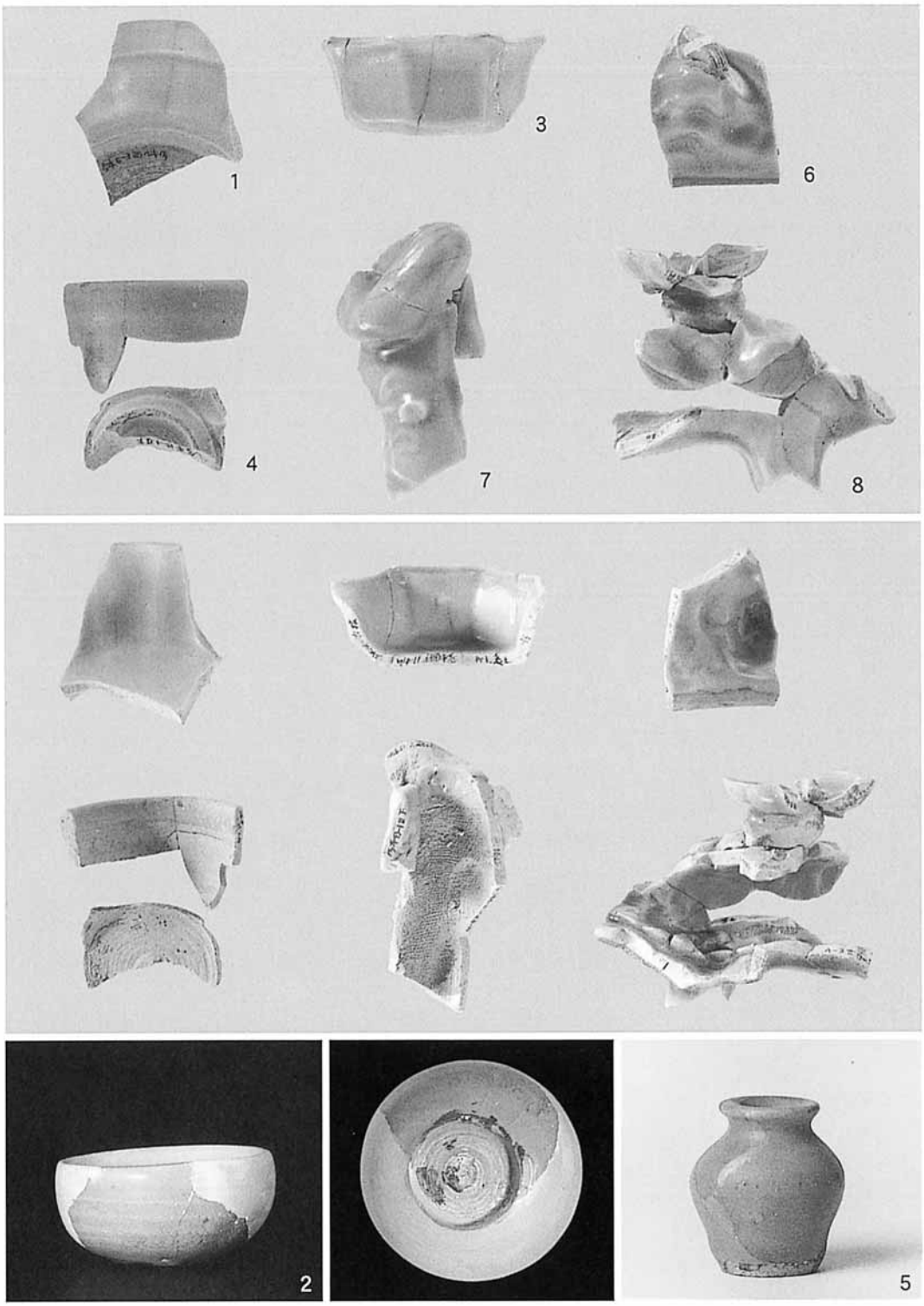
第 54 図 (PL.69)　第Ⅰ～Ⅳ層出土青磁瓶
1. 環耳瓶　2・3. 玉壺春瓶　4. 双耳方瓶



PL.69(第 54 図)　第Ⅰ～Ⅳ層出土青磁瓶
1. 環耳瓶　2・3. 玉壺春瓶　4. 双耳方瓶



第 55 図 (PL.70)　第Ⅰ～Ⅳ層出土青磁
1 ～ 4. 杯　5. 小壺　6 ～ 8. 蜀台



PL.70(第 55 図)　第Ⅰ～Ⅳ層出土青磁
1 ～ 4. 杯　5. 小壺　6 ～ 8. 蜀台

白磁（第 56 ～ 61 図）

碗－第 56 図 1 ～ 6 に白磁碗のⅡ層下部資料をまとめた。第 56 図-1 は今帰仁タイプ、直口する口縁上端を平坦とする。同図-2 はビロースクタイプｂ、見込みに印花文を配し内体面に細い単篦描文が施される。同図-3 ～ 5 は外反碗、いずれとも張りのあるゆったりとした腰部で、見込みは平坦となる。同図-6 はビロースクタイプｂで見込みは凹み内刳りの浅い高台から直線的に外に開きする体部に内湾する口縁の厚手碗である。同図-7・8 は外反碗で見込みに印花文を配す。第 57 図-1 ～ 5 は器肉が薄く、見込みと腰下部を露胎とする浅手の碗で、見込みに印花のあるもの（同図-1・2・3・5）とないもの（同図-4）がある。同図-6 は深めのやや大振りの碗で、高台が低く畳付外端は小さく面取りをもつ。外面は高台脇まで施釉される。同図-7 は見込みは凹み、小さな底部から緩やな張りのある体部から外反する口縁をなす深手の碗で高台端を露胎とする。後述する青花Ⅲ類と器形的に近似する。同図-8・9 はやや深みのある碗で、腰部は若干丸みをもち口縁部は外反し、内面には稜をつくる。外面は腰下部まで施釉され、内面は見込みが露胎となる。同図-10 は腰部が張り直線的な体部から外反口縁の深手の碗になる。

皿－第 58 図-1・2 はやや腰折れをなす外反口縁皿で、見込みを蛇の目状に掻き取り、外面は腰部まで施釉される。同図-3 は幅広の高台から直線的に開く口縁で、底部が厚いのに比して体部は薄手になり、口唇端部は平坦に作る。同図-4 は腰折れをなす外反口縁皿で、見込みは掻き取らず、薄い透明釉が外面腰部まで施釉される。同図-5 幅広の厚い高台に張りのある腰部から直行する口縁をなし、口唇は舌状、見込みは隆線が廻る。同図-6 は小振りの直口口縁皿で、腰下部見込みは露胎する。同図 7 ～ 9 は抉り入り高台皿で、直口口縁の浅い皿である。全面施釉のものも見られるが多くは腰下部露胎、見込みに目跡を残す。同図-10 は蓮弁文小皿で内面には幅広の篦彫り、外面には浅く細い篦彫りの蓮弁が施され口唇を刻み波状につくる。同図-11 は口唇の肥厚し端部を輪花にする薄手の皿で畳付と見込みを露胎する。同図-12 は碁笥底の薄手の皿で内体部に短い蓮弁文を廻らす。第 59 図-1 ～ 4 は薄手の外反皿で、同図-1 ～ 3 は畳付が細く高台は逆三角形状で、全面施釉後釉を掻き取る。同図-4 はやや碁笥底状となる。同様の器形は青花皿Ⅰ、五彩などにもみられる。同図-5 ～ 7 は釉調がやや濁った灰白色で幅広の底部で高台内に字款が書かれ、畳付部分に砂が付着する。この外反口縁皿は中国産の白磁の項に含んだが類品を知らないため産地は不明である。同図-8 ～ 10 は灯明皿で平底でやや厚手の器肉、内面は施釉されるが口唇の釉を掻き取り外面は露胎とし、口唇部には煤が付着している。

杯－第 60 図-1 ～ 3 は腰折れの杯で、直線的な体部に口縁部は外反、底部の形態から抉りはなく均整の取れた器形、施釉は高台脇まで及ぶもの（同図-1）、抉り入り高台で見込みに目跡を残さないもの（同図-2）と残すもの（同図-3）で、いずれとも施釉は腰部までとなる。同図-4 ～ 7 は抉り入り高台で腰折れ、口縁部は僅かに外反させ、上面観は八角形を成す。見込みには目跡を残す（同図-3･4）。同図-8 ～ 10 腰部は丸みをもち、口縁部は外反する。高台は抉り入り（同図-8・9）と入らないもの（同図-9）がある。

瓶－第 60 図-11・12 は瓶の口縁部・頸部と推定される。第 61 図-7 は梅瓶口縁部、同図 11 は瓶底部と推測される。

注口－第60図-13～15は注口部分の破片資料で大小ある。

壺－第61図-1は比較的大振りの壺で肩部は緩やかで轆轤痕が内外明瞭に残る。同図-2は酒会壺の小壺で口唇は外側にやや折れ肥厚、肩部は屈曲が明瞭で張りがある。同図-3は小壺。同図-4は蓮弁文の小壺口縁部を欠く酒会壺かと推測する。同図-5は底部資料で同図-4と同一個体か。同図-6は壺の蓋。同図-10は水注、壺、瓶等袋物の底部。同図-8・9は壺の底部資料と推測する。

鉢－同図-12は鉢で見込みは蛇の目状に掻き取り全体的に青磁とも白磁とも判断しかねるが本分類とした。同標品の近似例は志慶真門郭で白磁碗Ⅴ類として報告、前項青磁（第45図-8）に分類した当該資料群はいずれかに包括分類整理を要すると考える。同図-13はべっ甲口縁の鉢で口縁部内面で肥厚有段となり、体部は張りがある。同図-14は受け皿状となる鉢で素地、釉などの特徴がビロースクタイプ・無文外反碗ａ（森田分類Ｃ類）に近似する。同図-15は片口口縁の鉢で器壁は薄く均整の取れた器形となる。同図-16は鉢の底部と推定する資料で高台は高く畳付は露胎となる。

挿図番号 図版番号 枝番号	分類	器種	型式	口径 器高 底径	素地	釉色 施釉 （貫入）	文様 備考	出土地点	
								地点	層
第56図 PL.71 1	白磁	碗	今帰仁	16.8 5.5 6.6	灰色 堅くやや微粒	淡灰緑色の釉を施釉 内外面とも体部中位から下を露胎とする（なし）	無釉部と施釉部の境は茶色に発色	志6	Ⅰ
第56図 PL.71 2	白磁	碗	ビロースクb	16.8 6.3 5.0	淡灰白色 堅くやや微粒気泡多し	淡緑灰色の釉を内底から外面胴部中位まで施釉（全体に細かい貫入が見られる）	内底に蓮花のスタンプを施し、内面体部に細い単篦描文を施す（A-3 Ⅱ上、B-1 Ⅱ下、C-1 Ⅱ上、C-3 Ⅲ、C-3 Ⅱ下）	A-3 B-1 C-1	Ⅱ～Ⅲ
第56図 PL.71 3	白磁	碗	外反碗	18.4 6.4 6.4	灰白色 堅くやや粗粒	灰白色の釉を内底から外面胴部中位まで施釉（全体に貫入がみられる）	内底に陰圏線を一条廻らし、その中に印花文を施す。	B-1 E-1	Ⅱ下
第56図 PL.71 4	白磁	碗	外反碗	17.6 6.3 5.2	淡灰色 堅くやや粗粒気泡多し	灰白色の釉を内底から外面胴部中位まで施釉（全体に細かい貫入がみられる）	内底に陰圏線を一条廻らす。	B-1	Ⅱ下
第56図 PL.71 5	白磁	碗	外反碗	18.2 7.0 6.0	灰白色 堅くやや粗粒	灰白色の釉を内底から外面胴部中位まで施釉（全体に細かい貫入が見られる）	内底に陰圏線を一条廻らし、その中に印花文を施す	B-1 B-2 C-1	Ⅱ下～Ⅳ
第56図 PL.71 6	白磁	碗	ビロースクb	14.7 6.3 5.4	灰白色 堅くやや粗粒子気泡多し	灰白色の釉を内底から外面胴部下位まで施釉（なし）	なし	A-2 A-3 大庭	Ⅱ下
第56図 PL.71 7	白磁	碗	外反碗	17.2 6.9 5.2	灰白色 堅くやや微粒気泡多し	灰白色の釉を内底から外面胴部下位まで施釉（なし）	内底に陰圏線を一条廻らし、その中に印花文を施す	B-1 10号 土坑	Ⅰ
第56図 PL.71 8	白磁	碗	外反碗	17.6 7.0 6.5	灰白色 堅くやや微粒気泡有り	灰白色の釉を内底から外面胴部下位まで施釉（全体に貫入がみられる）	内底に陰圏線を一条廻らし、その中に印花文を施す	A-3	Ⅱ

第42表　第Ⅰ～Ⅸ層　出土陶磁器観察表(14)

挿図番号 図版番号 枝番号	分類	器種	型式	口径 器高 底径	素地	釉色 施釉 (貫入)	文様 備考	出土地点	
								地点	層
第57図 PL.72 1	白磁	碗	厚手直口	14.3 4.9 5.5	鈍橙色 軟質でやや粗粒	灰白色の釉を施釉内・外面とも体部中位から下を露胎とする（なし）	内底にスタンプにより「得」の字を施す。素地は磁化しておらず陶胎に近い	B-1 E-1 東壁内	
第57図 PL.72 2	白磁	碗	厚手直口	14.1 4.9 5.7	浅黄橙色 堅くやや微粒	〃	内底にスタンプにより「堂」の字を施す（A-1 I・II、A-2 II上、B-1 II上、D-3 II上）	A-1 A-2 B-1	I II
第57図 PL.72 3	白磁	碗	厚手直口	13.7 4.3 4.9	灰白色 堅くやや粗粒	浅黄色の釉を内底から外面腰部まで施釉、内底の釉は輪状に掻き取る（なし）	内底にスタンプにより字款を施す。外面上部には目跡が見られる	B-1	I II
第57図 PL.72 4	白磁	碗	厚手直口	13.3 4.3 6.1	黄白濁色 軟質でやや微粒	淡黄色の釉を施釉内・外面とも体部中位から下を露胎とする（全体細かい貫入がみられる）	内底には目跡がみられる素地は磁化しておらず陶胎に近い	A-2 南壁沿 B-1	
第57図 PL.72 5	白磁	碗	厚手直口	14.5 4.9 6.7	淡黄白色 堅くやや粗粒気泡多し	灰黄色の釉を内底から高台脇まで施釉内底の釉は輪状に掻き取る（全体い細かい貫入が見られる）	内底に陰圏線を一条廻らしその中にスタンプにより「活」（?）の字を施す。素地は磁化しておらず陶胎に近い	B-1 C-1	I II
第57図 PL.72 6	白磁	碗	外反碗	15.2 5.1 5.2	黄白色 軟質でやや粗粒	灰黄色の釉を内底から高台外面まで施釉、内底の釉は輪状に掻き取る（全体に細かい貫入が見られる）	内底に印花文を施すが不明瞭素地は磁化しておらず陶胎に近い		II
第57図 PL.72 7	白磁	碗	薄手外反	13.6 5.5 4.6	灰白色 堅くやや微粒	明緑灰色の釉を全面に施釉　畳付の釉を掻き取る（なし）	内面に藍色（?）の斑点が見られる。内面に砂が付着	B-2 D-1 10号土坑	II
第57図 PL.72 8	白磁	碗	〃	13.5 4.6 5.4	灰白色 堅くやや微粒気泡有り	灰白色の釉を内底から外面腰部まで施釉、内底の釉は輪状に掻き取る（なし）	なし	A-2 E-2 14号土坑	II
第57図 PL.72 9	白磁	碗	〃	12.8 5.0 5.2	灰白色 堅緻	灰白色の釉を内底から外面腰部まで施釉、内底の釉は輪状に掻き取る（全面に細かい貫入が見られる）	なし		I
第57図 PL.72 10	白磁	碗	厚手外反	12.8 5.6 4.6	灰白色 堅くやや微粒	灰白色の釉を内底から高台外面まで施釉（全面に細かい貫入が見られる）	なし	A-3 B-1	II
第58図 PL.73 1	白磁	皿	外反皿	13.4 3.1 6.4	灰白色 堅緻	灰白色の釉を内底から外面中位まで施釉　内底の釉は蛇の目状に掻き取る（全面に細かい貫入が見られる）	なし	A-1	I
第58図 PL.73 2	白磁	皿	腰折皿	11.8 3.1 5.6	灰白色 堅緻	灰白色の釉を内底から外面中位まで施釉　内底の釉は蛇の目状に掻き取る（なし）	外面上部に砂が付着	C-1	II
第58図 PL.73 3	白磁	皿	直口	12.8 3.5 5.3	浅黄橙色 堅くやや微粒	灰白色の釉を内底から外面胴部下位まで施釉（全面に細かい貫入が見られる）	なし	B-1	II
第58図 PL.73 4	白磁	皿	外反皿	11.3 3.4 5.2	灰白色 堅緻	灰白色の釉を内底から外面腰部下位まで施釉（全面に細かい貫入が見られる）	なし		

第43表　第Ⅰ～Ⅳ層　出土陶磁器観察表(15)

挿図番号 図版番号 枝番号	分類	器種	型式	口径 器高 底径	素地	釉色 施釉 (貫入)	文様 備考	出土地点	
								地点	層
第58図 PL.73 5	白磁	皿	直口	13.9 3.6 7.4	灰白色 堅くやや微粒気泡有り	明黄緑灰色の釉を内底から高台外面まで施釉（全面に貫入が見られる）	内底に陽圏線を一条廻らす	B-3 D-1	Ⅱ
第58図 PL.73 6	白磁	皿	直口	9.5 2.5 3.6	灰白色 堅緻	灰白色の釉を内底から外面胴部下位まで施釉内底の釉は輪状に掻き取る（なし）	内底に目跡が残る	B-1	Ⅰ
第58図 PL.73 7	白磁	皿	抉入高台		灰白色 堅くやや微粒	灰白色の釉を内底から高台脇まで施釉（部分的に細かい貫入）	内底に目跡が残る		
第58図 PL.73 8	白磁	皿	抉入高台	8.5 2.1 3.8	灰白色 堅緻	灰白色の釉を全面に施釉（なし）	内底に目跡が残る	大庭側土留内	
第58図 PL.73 9	白磁	皿	抉入高台	8.8 2.6 4.5	灰白色 堅くやや微粒	灰白色の釉を内底から外面胴部中位まで施釉（全面に細かい貫入が見られる）	内底に目跡が残る	D-2	Ⅱ
第58図 PL.73 10	白磁	皿	菊花皿	6.9 － －	灰黄色 堅くやや微粒	灰白色の釉を施釉（なし）	内・外面に蓮弁文 口唇部は輪花	A-1	Ⅰ
第58図 PL.73 11	白磁	皿	菊花皿	7.9 2.3 3.1	灰白色 堅緻	灰白色の釉を内底から高台外面まで施釉　内底の釉は蛇の目状に掻き取る（なし）	口唇部は輪花	10号土坑	Ⅰ
第58図 PL.73 12	白磁	皿	碁笥底	9.0 2.0 5.2	灰白色 堅緻	灰白色の釉を高台外面を除く全面に施釉　（なし）	内面下部に型による菊花文を施すが不明瞭外面下部に砂が付着	D-2	Ⅱ
第59図 PL.74 1	白磁	皿	薄手外反	11.0 2.5 6.5	灰白色で軟質でやや微粒	灰白色の釉を全面に施釉　畳付とその周辺の釉を掻き取る（なし）	なし	B-1 B-2	Ⅰ Ⅱ
第59図 PL.74 2	白磁	皿	〃	12.0 3.0 6.8	〃	〃	なし	D-2 B-2	Ⅱ
第59図 PL.74 3	白磁	皿	〃	10.8 2.5 6.1	〃	灰白色の釉を全面に施釉　畳付とその周辺の釉を掻き取る（なし）	高台両面に砂粒が付着	B-1	Ⅰ
第59図 PL.74 4	白磁	皿	〃	8.8 2.1 4.1	〃	灰白色の釉を全面に施釉　外底の釉は輪状に掻き取る（なし）	外面に砂粒が付着	西壁内	
第59図 PL.74 5	白磁	皿	〃	17.2 － －	灰白色 軟質でやや微粒	黄灰白色の釉を施釉（内底に貫入がみられる）	なし	B-1	Ⅰ Ⅱ
第59図 PL.74 6	白磁	皿	〃	16.9 3.7 9.1	灰白色 軟質でやや微粒	黄灰白色の釉を施釉　畳付とその周辺の釉を掻き取る（なし）	外面に字款を施す、高台両面に砂粒が付着内底に砂粒が付着	東斜面	
第59図 PL.74 7	白磁	皿	〃	－ － 8.6	灰白色 軟質でやや微粒	黄灰白色の釉を施釉　畳付とその周辺の釉を掻き取る（部分的に貫入がみられる）	外面に字款を施す高台両面に砂粒が付着	B-1 10号土坑	Ⅰ
第59図 PL.74 8	白磁	皿	灯明皿	8.4 2.2 3.3	灰白色 堅緻	灰白色の釉を内面のみ施釉口唇部から外底は露胎	なし	B-1	Ⅱ

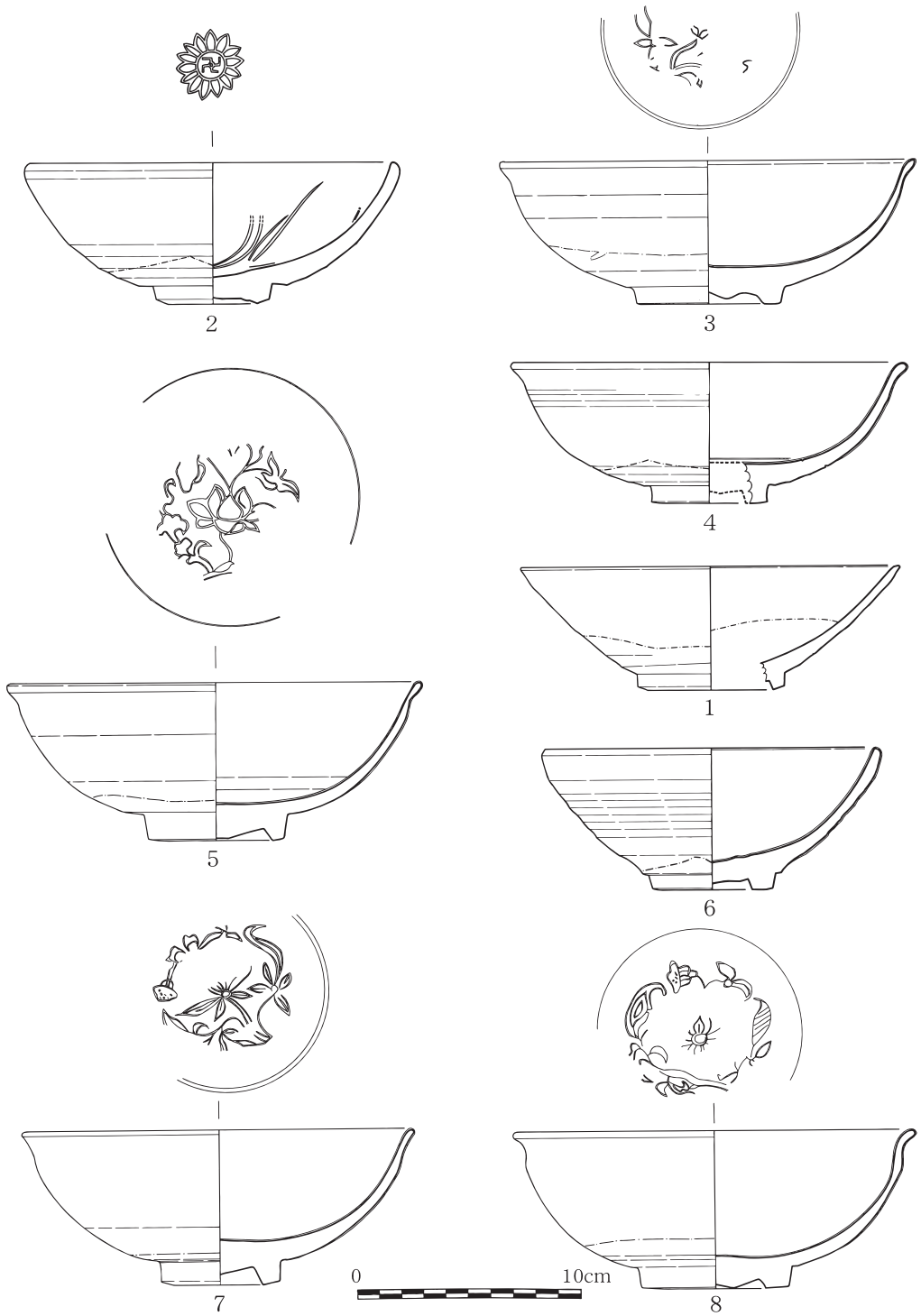
第44表　第Ⅰ～Ⅳ層　出土陶磁器観察表(16)

挿図番号 図版番号 枝番号	分類	器種	型式	口径 器高 底径	素地	釉色 施釉 (貫入)	文様 備考	出土地点	
								地点	層
第59図 PL.74 9	白磁	皿	灯明皿	8.6 2.8 3.5	浅黄橙色 堅く粗粒	浅黄橙色の釉を内面のみ施釉 口唇部から外底は露胎 (なし)	口唇部に煤が付着	A-2	II
第59図 PL.74 10	白磁	皿	灯明皿	7.8 2.3 3.2	灰白色 堅くやや 微粒	灰白色の釉を内面のみ施釉 口唇から外底は露胎 (内面に細かい貫入が見られる)	口唇部に煤が付着	不明	
第60図 PL.75 1	白磁	杯	腰折	9.3 3.1 3.6	灰白色 堅緻	灰白色の釉を内底から高台外面まで施釉一部畳付まで流れる (なし)	内底に陰圏線が一条廻る	不明	
第60図 PL.75 2	白磁	杯	腰折	9.9 3.1 4.5	灰白色 堅くやや 微粒	淡黄色の釉を内底から外面腰部まで施釉	外面中位に陰圏線が一条内底に陽圏線が一条廻る内底には目跡が残る	D-3	
第60図 PL.75 3	白磁	杯	腰折	9.0 2.9 4.6	淡黄色 堅くやや 粗粒	淡黄色の釉を内底から外面腰部まで施釉 (全面に細かい貫入がみられる)	内底に陽圏線が一条廻る内底のは目跡が残る	C-1 D-2	II
第60図 PL.75 4	白磁	杯	八角	8.2 3.0 4.2	灰白色 堅くやや 微粒	黄灰白色の釉を内底から外面腰部まで施釉 一部高台外面まで流れる (全面に細かい貫入がみられる)	内底には目跡が残る	A-1 C-1	I II
第60図 PL.75 5	白磁	杯	八角	7.1 2.4 3.3	灰白色 堅緻	灰白色の釉を内底から外面胴部中位まで施釉 (なし)	なし	C-1 D-3	II
第60図 PL.75 6	白磁	杯	八角	7.6 2.8 3.8	灰白色 堅くやや 微粒	灰白色の釉を内底から外面胴部中位まで施釉 (なし)	外面胴部の釉下に目跡が (?) 付着	B-1 C-1	I II
第60図 PL.75 7	白磁	杯	八角	7.3 2.7 3.8	灰白色 堅緻	〃 (細かい貫入が全面)	外面に面取り	C-3 B-3	II II II
第60図 PL.75 8	白磁	杯	抉入高台	8.8 3.5 4.0	灰白色 堅くやや 微粒	黄灰白色の釉を内底から外面腰部まで施釉 一部高台外面までなが流れる (全面に細かい貫入がみられる)	内底には目跡が残る	B-3 西壁内	II
第60図 PL.75 9	白磁	杯	〃	7.7 3.1 3.3	灰白色 堅緻	灰白色の釉を内底から外面腰部まで施釉 (部分的に貫入が見られる)	内底に目跡残る	C-3	II
第60図 PL.75 10	白磁	杯	〃	8.4 3.3 2.9	灰白色 堅くやや 微粒	灰白色の釉を内底から外面腰部まで施釉 (前面に細かい貫入が見られる)	なし	B-1	II
第60図 PL.75 11	白磁	瓶	玉壺春	6.4 − −	灰白色 堅くやや 微粒	明緑灰色の釉を施釉 (なし)	なし	A-2 B-2	II
第60図 PL.75 12	白磁	瓶	〃	− − −	灰白色 堅くやや微粒	明緑灰色の釉を施釉 (なし)	なし	A-3	II
第60図 PL.75 13	白磁	水注	注口	− − −	淡黄白色 堅くやや微粒気泡あり	明緑灰色の釉を施釉	なし	C-3	II
第60図 PL.75 14	白磁	水注	耳	− − −	灰白色 堅くやや微粒気泡あり	明緑灰色の釉を外面に施釉 内面は露胎 (なし)	なし	A-2	II

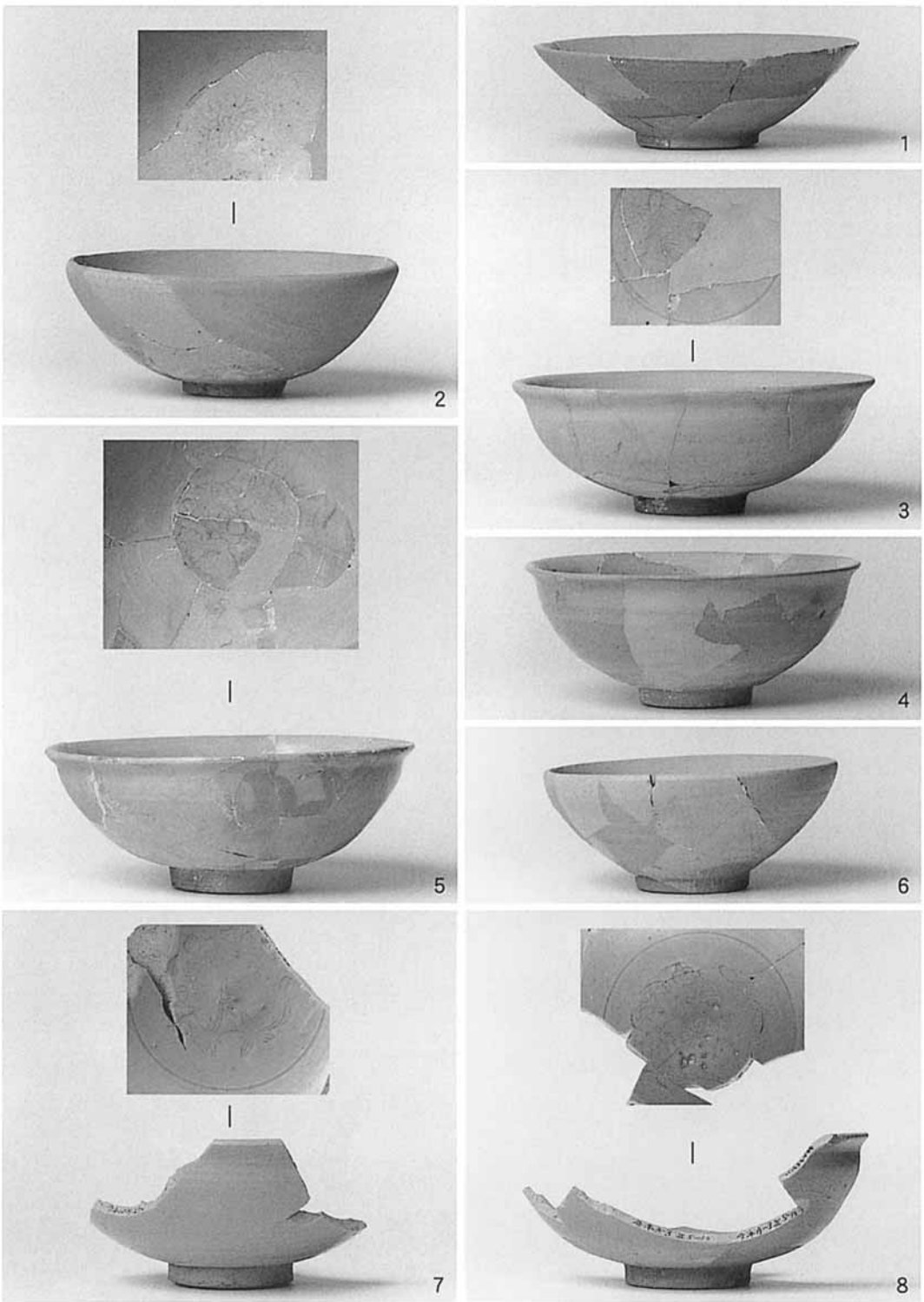
第45表　第Ⅰ～Ⅳ層　出土陶磁器観察表(17)

挿図番号 図版番号 枝番号	分類	器種		口径 器高 底径	素地	釉色 施釉 （貫入）	文様 備考	出土地点	
								地点	層
第60図 PL.75 15	白磁	水注	注口	－ － －	淡黄色 堅くやや微粒	明緑灰色の釉を外面から内面中位まで施釉（なし）	なし	A-3	Ⅱ
第61図 PL.76 1	白磁	中型壺	外反口縁	10.8 － －	浅黄橙色 堅くやや微粒	黄灰白色の釉を施釉口唇は露胎（なし）	なし	A-2	Ⅰ Ⅱ
第61図 PL.76 2	白磁	中型壺	肥厚口縁	－ －	浅黄橙色 堅くやや微粒	白色の釉を施釉。 （全面に細かい貫入がみられる）	なし	C-2	Ⅱ 上
第61図 PL.76 3	白磁	小壺	外反口縁	6.7 － －	灰白色 堅緻	灰白色の釉を施釉口唇は露胎（なし）	なし（A-2Ⅱ上、B-1表土、B-2Ⅱ上、C-1Ⅱ上）	A-2 B-1 B-2	Ⅰ・Ⅱ
第61図 PL.76 4	白磁	小壺	蓮弁文	－ － －	灰白色 堅緻	灰白色の釉を施釉（なし）	外面に蓮弁文を施す	A-3 B-3	Ⅱ 上
第61図 PL.76 5	白磁	小壺	蓮弁文	－ － 5.1	灰白色 堅くやや粗粒気泡あり	灰白色の釉を施釉畳付から外底にかけて露胎（全面に細かい貫入がみられる）	外面に片切彫りで文様を施す	B-2 C-2 E-2	Ⅰ Ⅱ
第61図 PL.76 6	白磁	中型壺	蓋	11.8 － －	灰白色 堅緻	灰白色の釉を蓋甲全体に施釉内面は露胎（なし）	内径＝7.3	A-3	Ⅰ
第61図 PL.76 7	白磁	梅瓶	外反口縁	5.0 － －	灰白色 堅くやや微粒気泡多し	明灰緑色の釉を施釉（全面に細かい貫入が見られる）	なし	B-1 C-3 西壁	Ⅰ Ⅱ
第61図 PL.76 8	白磁	四耳壺	高台底	－ － 6.2	灰白色 堅緻	灰白色の釉を施釉外面腰部から高台・高台内は露胎（全面に若干貫入が見られる）	なし	B-1	Ⅰ Ⅱ
第61図 PL.76 9	白磁	四耳壺	高台底	－ － －	灰白色 堅くやや微粒気泡あり	灰白色の釉を施釉高台脇から高台・高台内は露胎（なし）	なし	A-2	Ⅱ
第61図 PL.76 10	白磁	袋物	高台底	－ － 8.1	灰白色 堅くやや微粒気泡あり	明緑灰色の釉を施釉、畳付とその周辺の釉をかき取る（なし）	なし	B-1 C-2	Ⅰ Ⅱ
第61図 PL.76 11	白磁	瓶	ベタ底	－ － 8.4	灰白色。堅くやや微粒気泡あり	灰白色の釉を施釉、外底の釉は輪状に掻き取る（なし）	なし	D-1 壁内 東斜面	
第61図 PL.76 12	白磁	碗	直口口縁	17.5 7.3 8.8	浅黄橙色 堅くやや微粒	浅黄色の釉を内底から外面胴部中位まで施釉内底の釉は蛇の目状に掻き取る（全面に細かい貫入がみられる）	なし	C-1	Ⅱ 下
第61図 PL.76 13	白磁	鉢	外反口縁	17.4 － －	灰白色 堅くやや微粒気泡あり	灰白色の釉を施釉（全面に貫入が見られる）	なし	A-1 A-2	Ⅱ
第61図 PL.76 14	白磁	鉢	段付鉢	21.3 － －	灰色 堅緻	淡灰緑色の釉を施釉（全面に細かい貫入が見られる）	内面上部には蓋受け状の段がある	C-2 E-1 東壁沿	Ⅱ 上
第61図 PL.76 15	白磁	水注	片口	14.5 － －	灰白色 堅緻	灰白色の釉を全面に施釉、口唇は露胎（なし）	なし	A-1 B-2 B-3	Ⅰ・Ⅱ

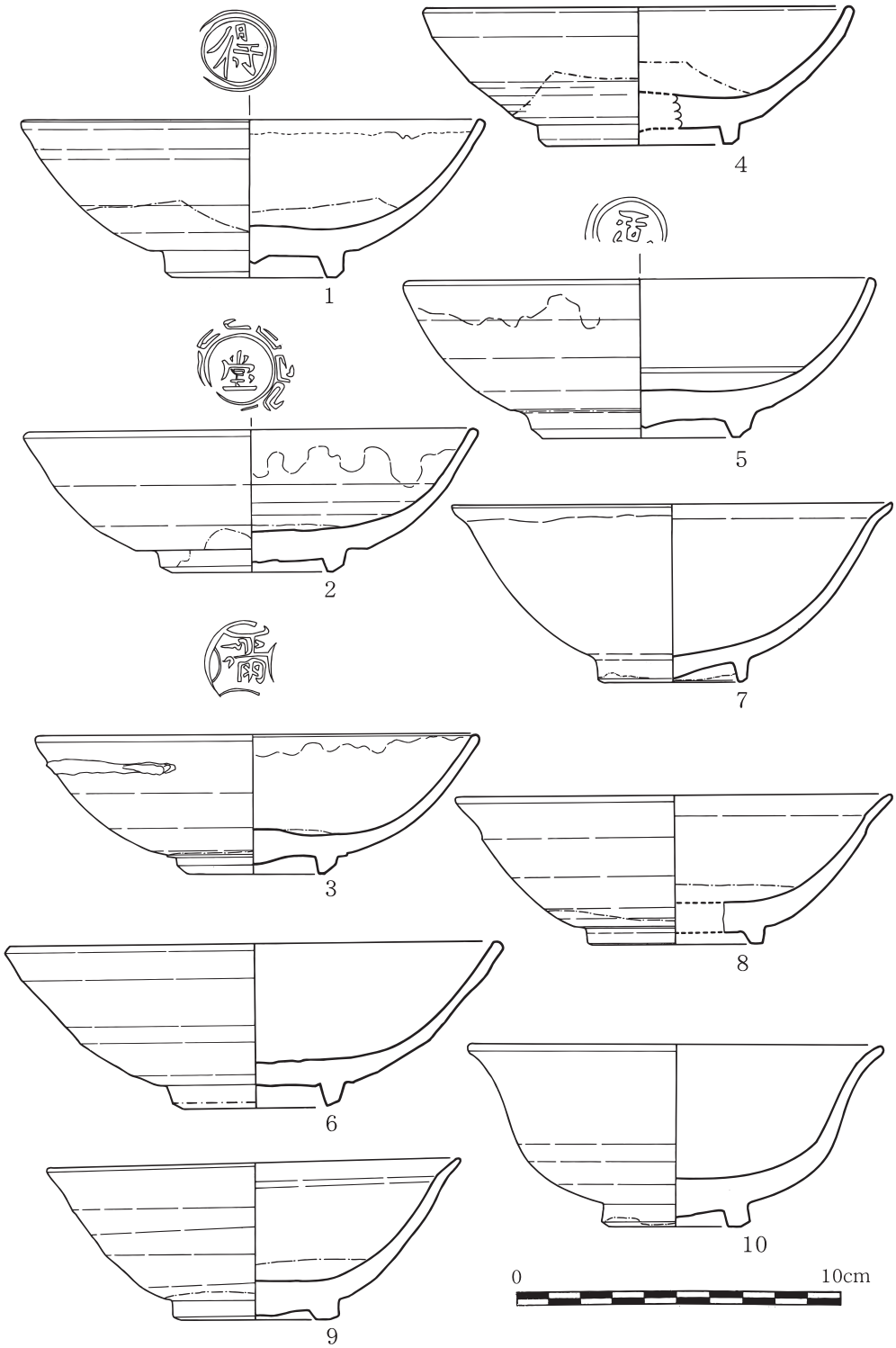
第46表　第Ⅰ～Ⅳ層　出土陶磁器観察表(18)



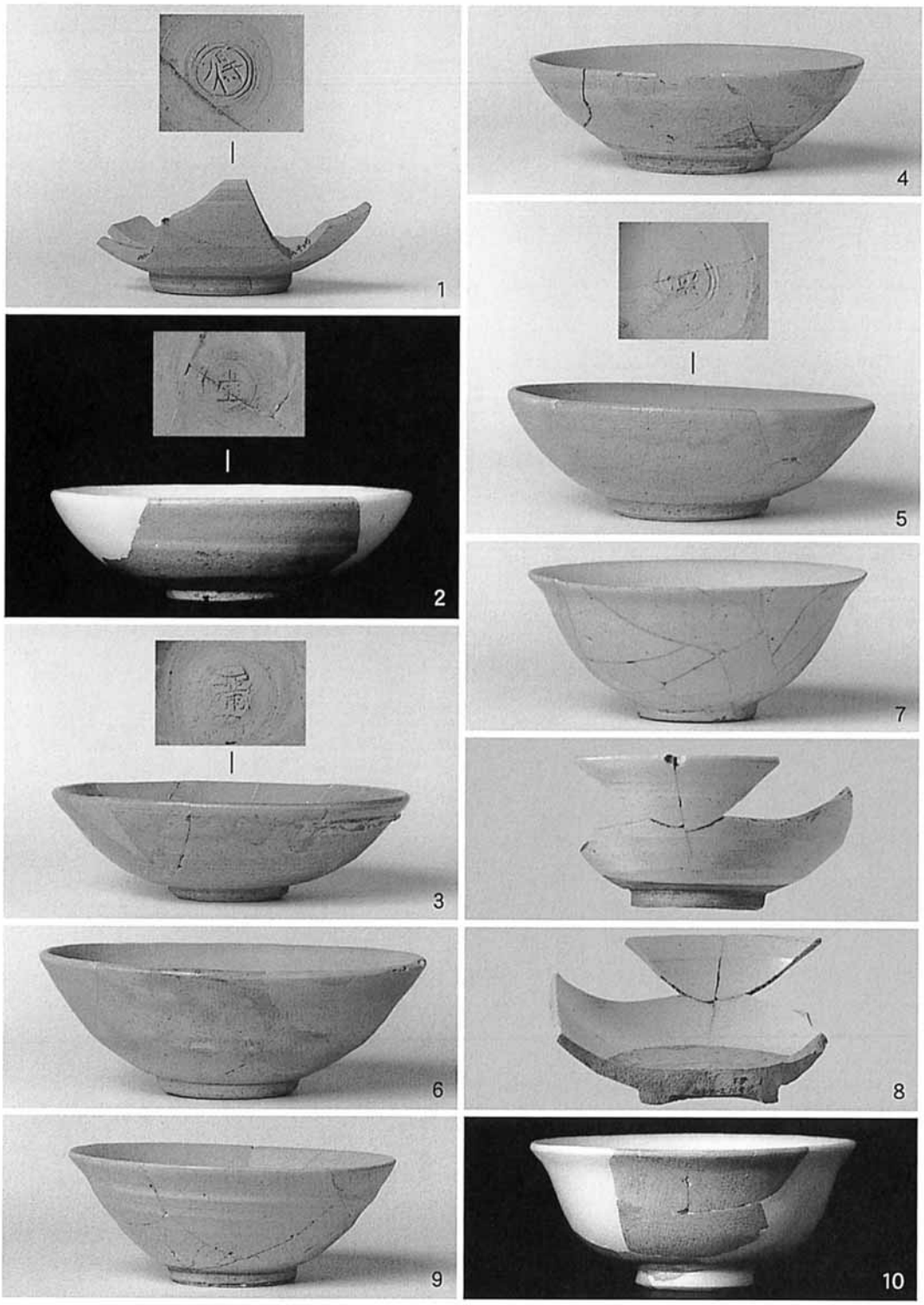
第 56 図 (PL.71)　第Ⅰ～Ⅳ層出土白磁碗
1 ～ 6. Ⅱ層下部



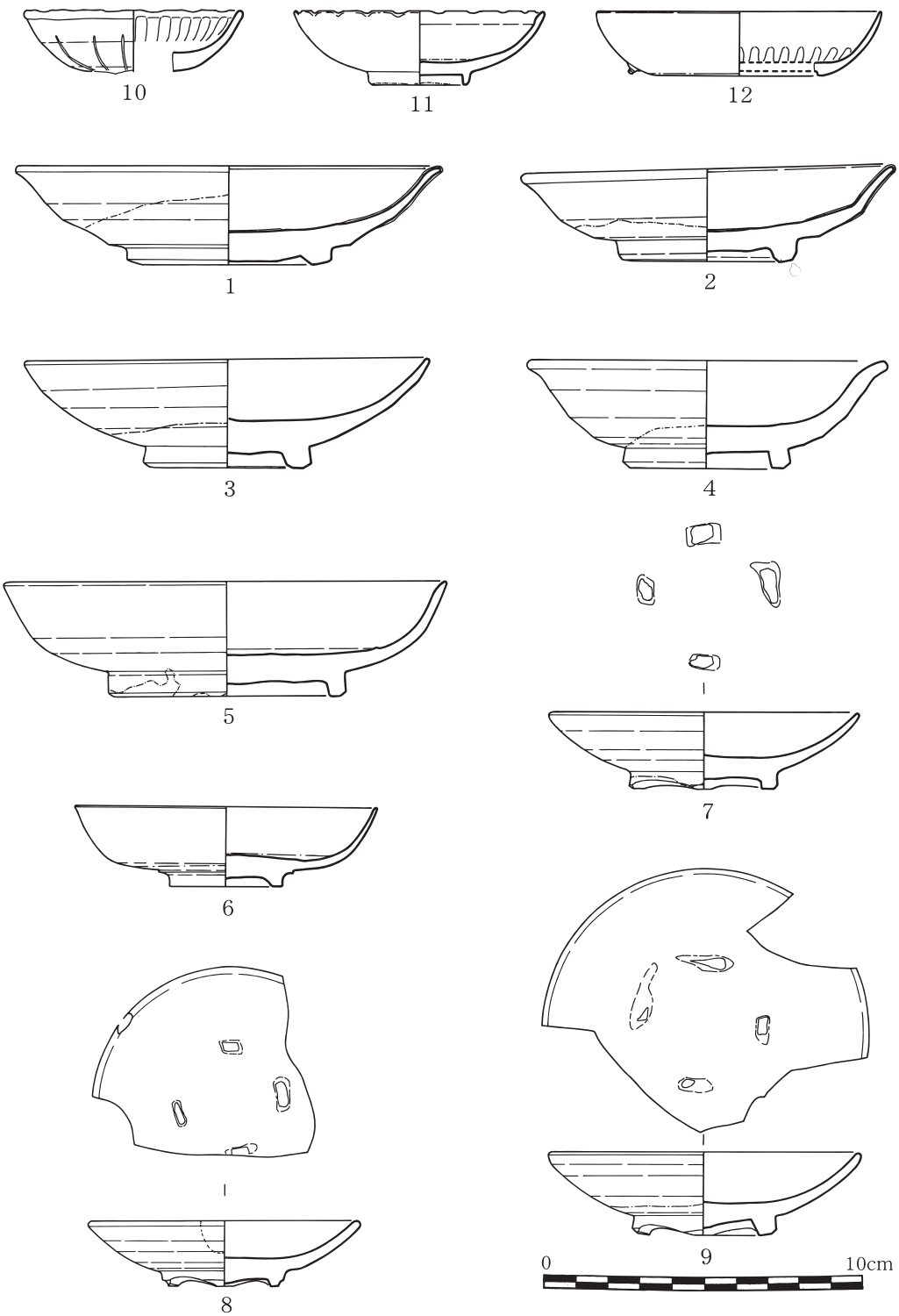
PL.71(第 56 図)　第Ⅰ～Ⅳ層出土白磁碗
1 ～ 6. Ⅱ層下部



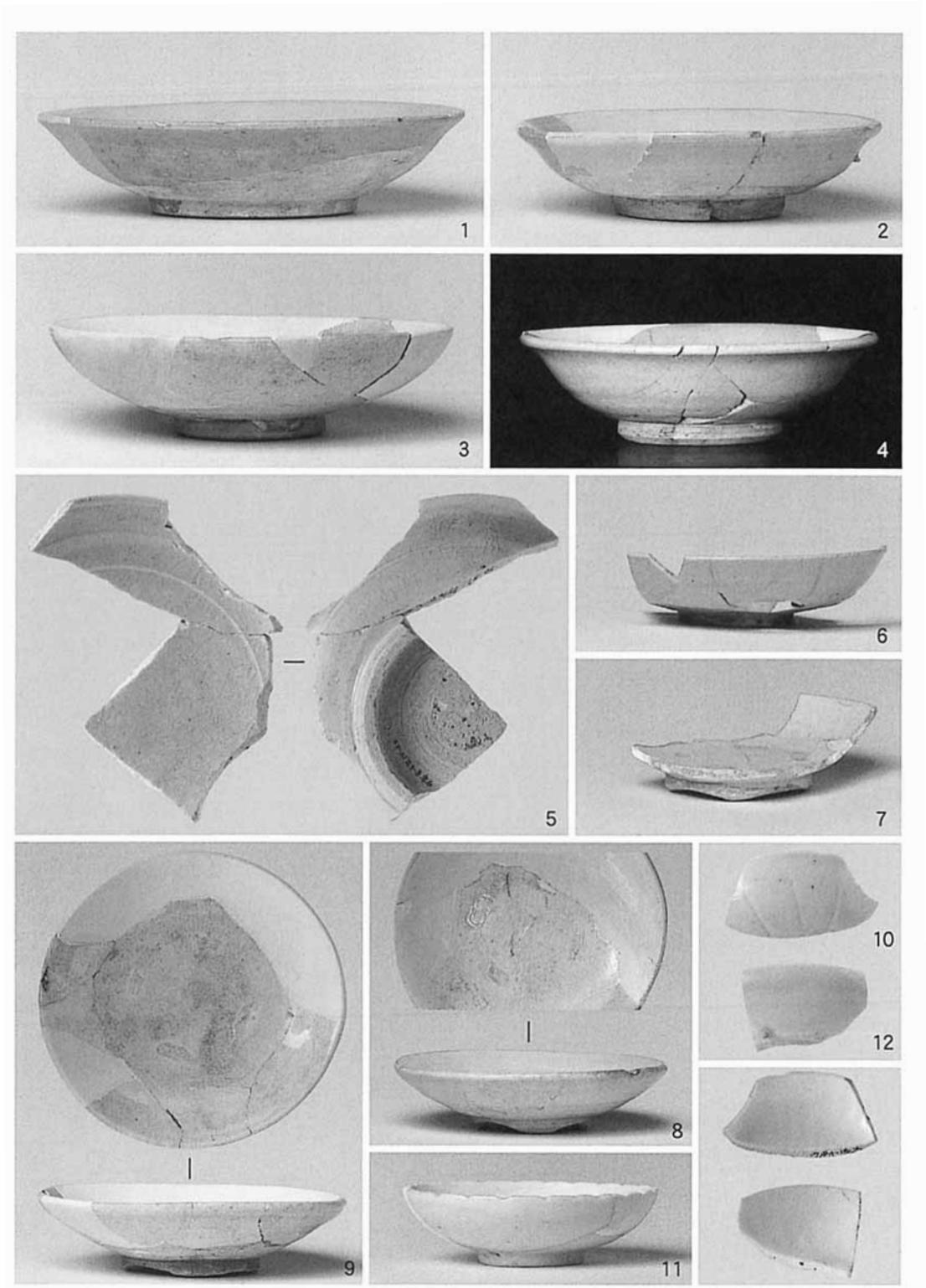
第 57 図 (PL.72)　第Ⅰ～Ⅳ層出土白磁碗



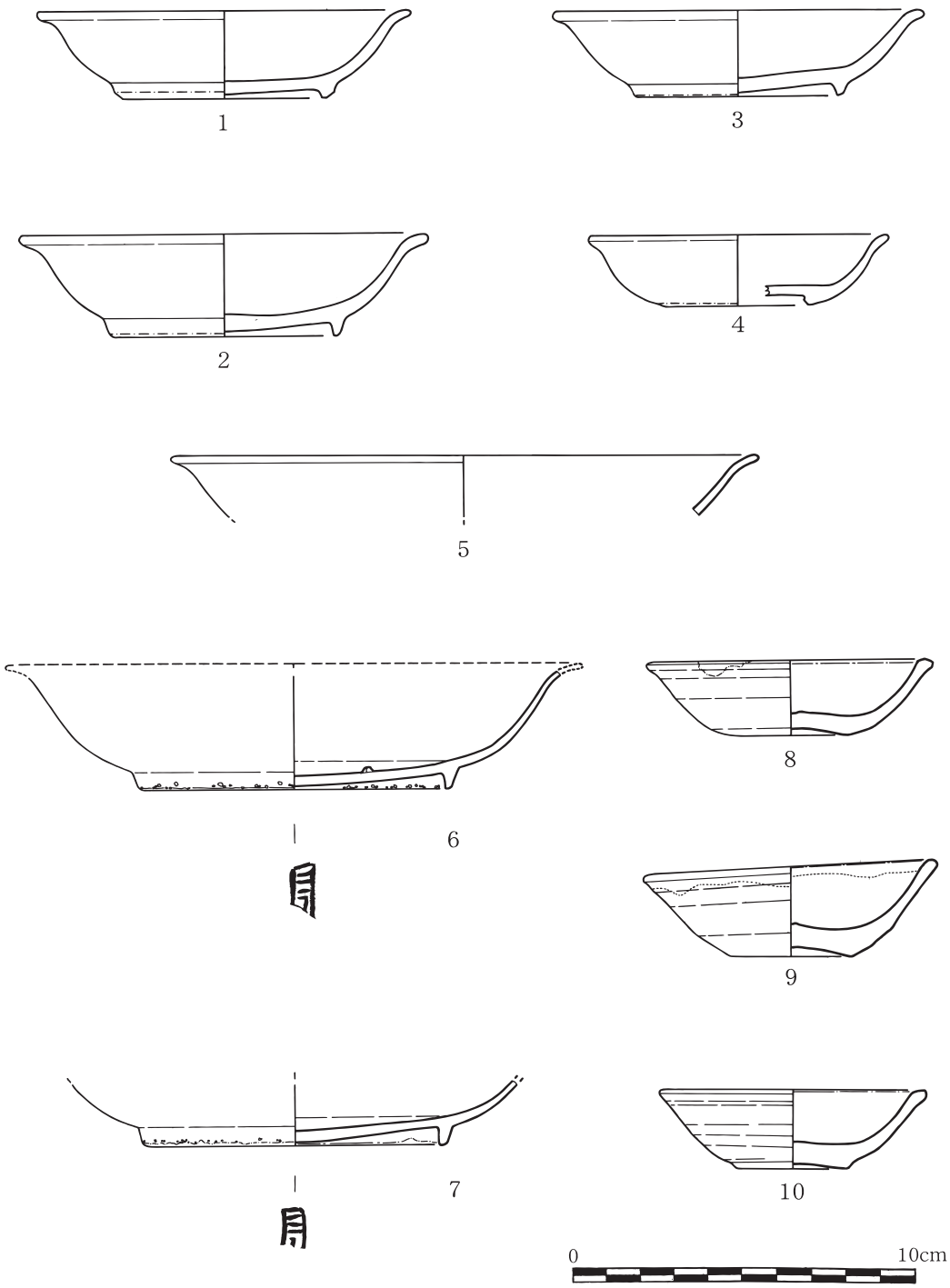
PL.72(第 57 図)　第Ⅰ～Ⅳ層出土白磁碗



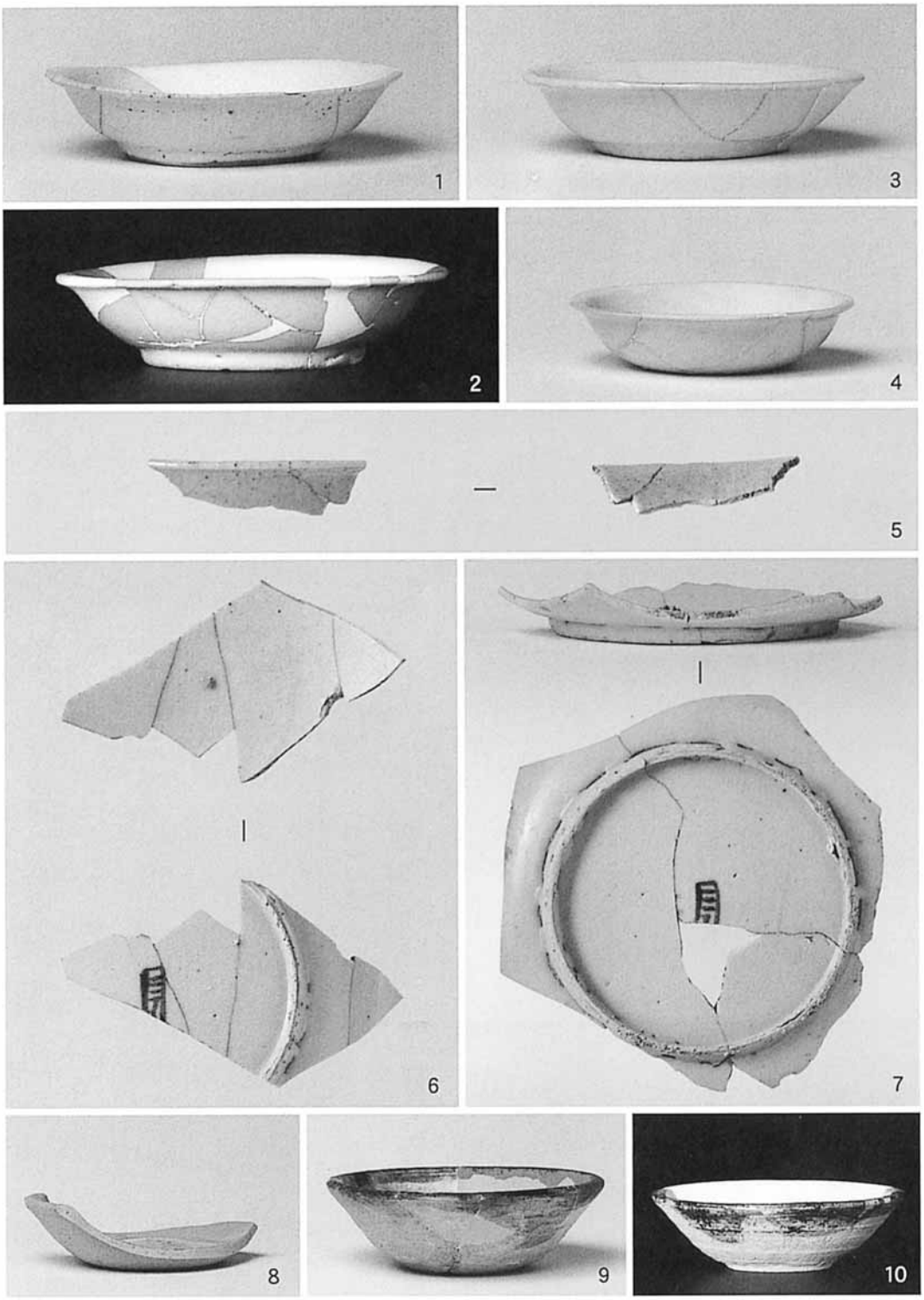
第 58 図 (PL.73)　第Ⅰ～Ⅳ層出土白磁皿



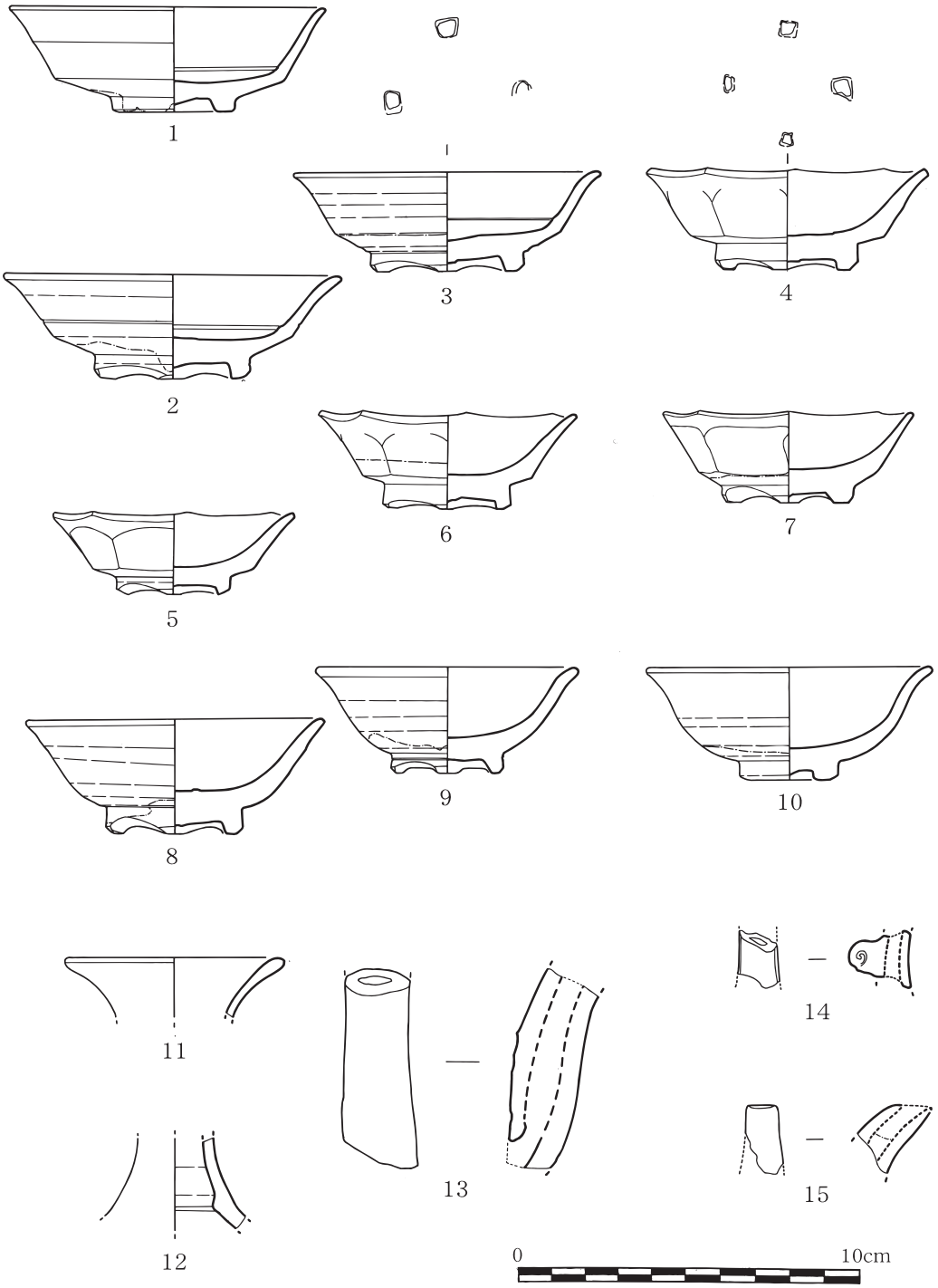
PL.73(第 58 図)　第Ⅰ～Ⅳ層出土白磁皿



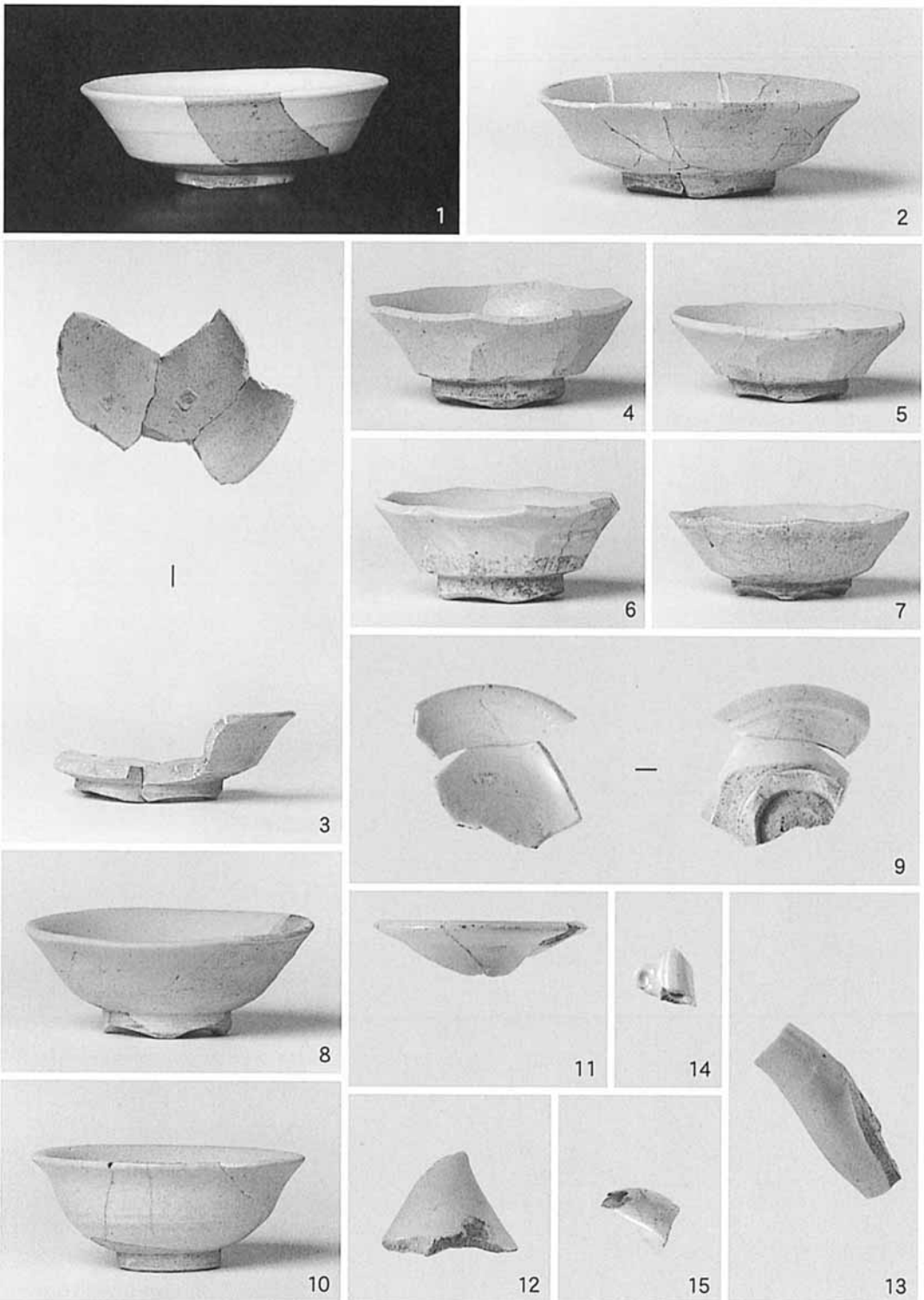
第 59 図 (PL.74)　第Ⅰ～Ⅳ層出土白磁皿



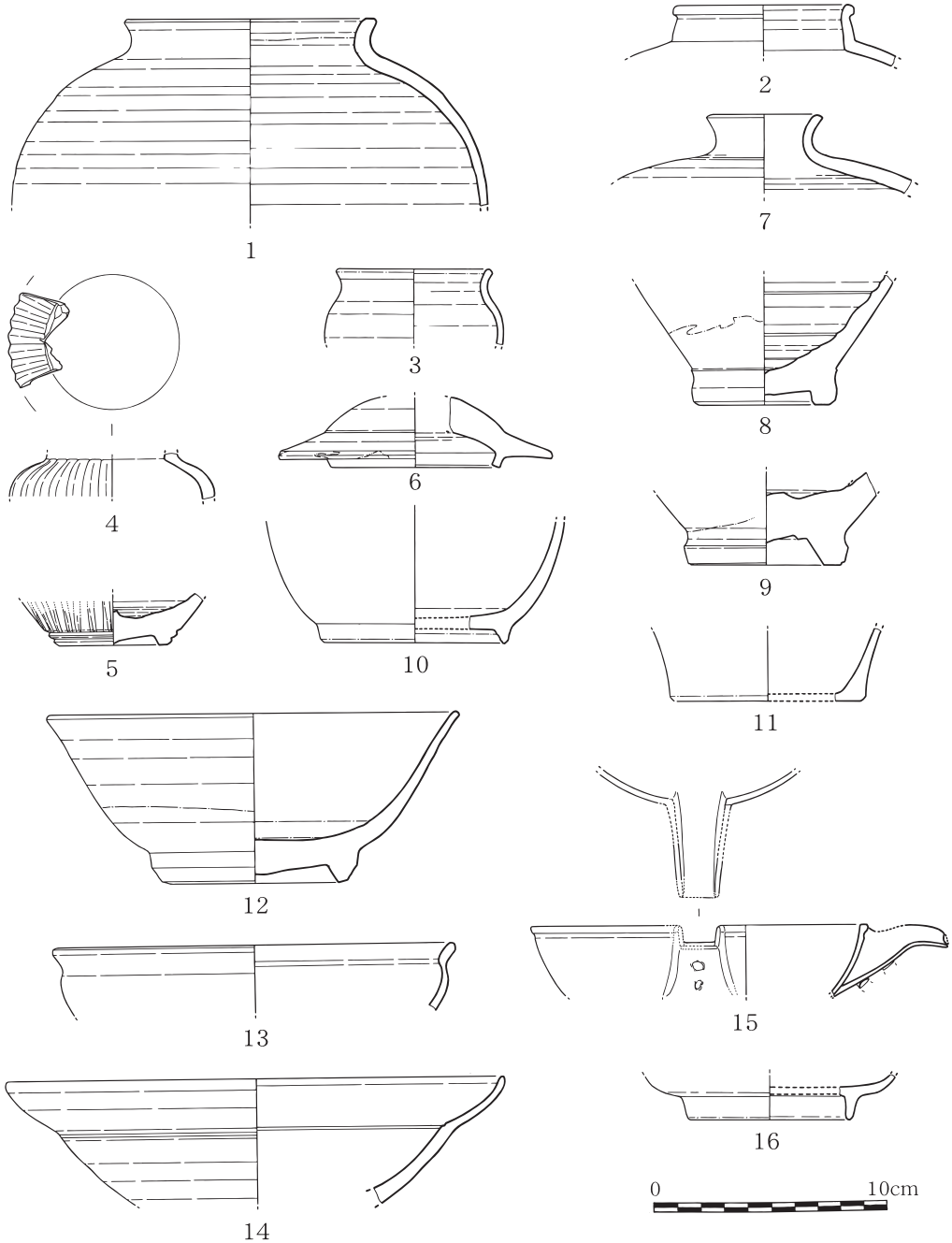
PL.74(第 59 図)　第Ⅰ～Ⅳ層出土白磁皿



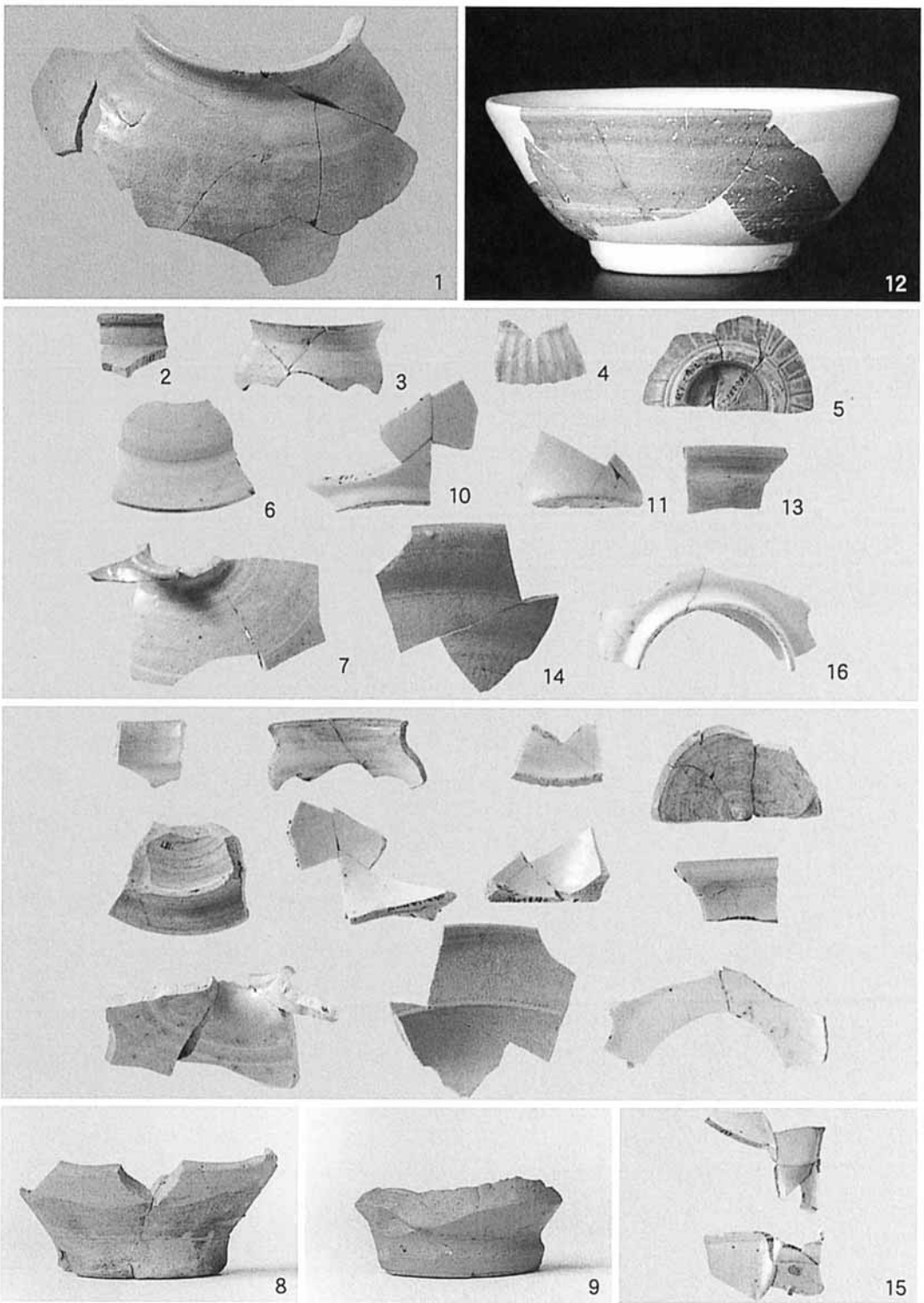
第 60 図 (PL.75)　第Ⅰ～Ⅳ層出土白磁
1 ～ 10. 杯　11・12. 瓶　13 ～ 15. 注口



PL.75(第 60 図)　第Ⅰ～Ⅳ層出土白磁
1 ～ 10.杯　11・12.瓶　13 ～ 15.注口



第 61 図 (PL.76)　第Ⅰ～Ⅳ層出土白磁
1 ～ 5. 壺　6. 蓋　7 ～ 11. 瓶　12 ～ 16. 鉢



PL.76(第 61 図)　第Ⅰ～Ⅳ層出土白磁
1 ～ 5. 壺　6. 蓋　7 ～ 11. 瓶　12 ～ 16. 鉢

青花

青花は大別して「元代の青花」と「明代の青花」が確認される。一部、福建・広東系の青花碗、後述するベトナム産の染付けを除けば概ね景徳鎮窯（系）のものと判断される。器種は腕・皿・盤・鉢・杯（馬上杯・杯・小杯）・瓶・水注・壺（玉壺春瓶・扁壺・酒会壺）・合子が確認できる。

元（様）式青花（第 62 図・第 63 図 1・2・第 71 図-1）

元様式の青花は素地は白色の微粒子で、青みのある白色釉が施され、文様は濃青色のコバルト顔料で描かれている。志慶真門郭の調査と同様小破片で出土する傾向にあり、器形の判然としないものが多いが 4 個体を図上復元した。

壺－第 62 図-1 は白抜きの龍が主文様になる酒会壺の優品で口径 19.3cm、器高 29.1cm、底径 18cm を推算する。口縁部から底部まで概ね接合することができたが、出土状況はいずれも 5cm 四辺ほどの小破片で出土した。同図-2 は龍と牡丹唐草を主文様とする。類品と推測する青花龍牡丹唐草文双耳壺[註44]は、獣面の耳が付くが本品もこれと同様になると推測する。推算口径 25cm、底径 25.4 で器高については復元不可能だが 38cm 前後と考え図上復元を試みた。文様は 7 層に分かれ上から雷文・菊唐草文・宝相華唐草文・雲を伴う龍文・牡丹唐草文・蔓唐草文・ラマ式蓮弁文が描かれている。龍文の爪は 3 つ爪で復元したが、図化した中央の資料からは 4 つ爪とも判断され、詳細は破片のため言及し得ない。同図 4 は蓋である。

盤－同図-3 は盤の口縁部資料で、志慶真門郭で出土した底部資料[註45]を参考に破線で復元した。内外面とも宝相華唐草文を充填する優品である。口径 42.4cm、器高 7cm、底径 26.8cm を推算する。

杯－第 71 図-1 は馬上杯の足と推測される資料で杯部を失うため全形はうかがえない。高台部は波濤文、杯部にも文様がめぐらされるようであるがモチーフは分かりにくい。

明青花（第 63 図 3 ～ 13・64 図～ 70 図・71 図-2 ～ 12）

碗－第 63 図-1・2 は **I 類**のいわゆる元様式の碗である前項分類に含めるものであるが、便宜上本項に含めた。同図-1 は図上復元を試みた。腰部にラマ式蓮弁文、胴部には判然としないが波濤文と雲文及び主文の獣等の文様、見込みは鹿が描かれる。同図-2 は底部資料で見込みは捻じ花文、腰部はラマ式蓮弁文を配する。**II 類**　同図-3 は外体面全面に牡丹唐草文を配し、内面は口縁直下に四方襷文を配する。同図-4 は外体面及び内体面全面に唐草文を配する。後者は前者に比べ高台がややハの字になるが、概ね器形的には近似する資料である。同図-5 は外体面胴部に牡丹唐草を口縁端部に波濤文、内体面には口縁直下に波濤文を配する。見込みには十字文を描く。前 2 者に比して大振りで、高台が高くなるのが特徴である。同図-6 は外体面は渦状唐草文、見込みに「寿」字を書くやや小振りになる碗で、呉須の発色は他のに比して悪い。類品は新巻本村[註46]などで見られる。**III 類**　第 63 図-7 ～ 13・第 64 図-1 ～ 4 は体部は内湾しながら大きく開き、そのまま外開きの口縁部となる。底部は高台内が凹む形のいわゆる「蓮子型」となる。口縁部のつくりや文様などから内体

面は口縁下端のみの施文で。口径と器高の関係から底径がやや小さく深いもの（第63図-７～13）と口径が広く浅いもの（第64図-1～4）に大別可能である。第63図-7・8は口唇部をやや肥厚させ、外体面には唐草文を施す、前者は比較的小振り、後者はやや大振りになる。同図-9は芭蕉文、同図10は馬をモチーフに、11・12は外体面をアラベスク文、いずれも口縁直下を波濤文を、見込みに文様を施す。同図-13は外体面に唐草文を施す小振りの碗で、外体面と見込みに唐草文を施す。第64図-1・2は豹皮状の文様を、同図-4は三つ葉状の小文様を連続的に配す。いずれも口径は広く、浅手になる。同図-3は同類の中でも唯一端反の碗で腰部に如意頭文、口縁直下の界線で区画し、胴部主文様に唐草文を描く。口縁部は外に広がり端反りの碗となる。**Ⅳ類**　同図5･6はゆるく内湾する体部で口縁部は強く外側に折れる。底部は蓮子型でⅢ類に近似するが、外反する口縁部と高台はハの字形となる点で異なる。いずれも外体面は馬士文、見込みは観月図を描く。**Ⅴ類**（志慶真－Ⅳ）第64図-7～9・第65図-1・2は腰部を屈曲させ胴は折れ腰から少し開きながら直線的に延び口縁部は直口、底部は広く平坦に作る。第64図７～９・第65図-1は外体面はアラベスク文を描き、口縁直下に比較的崩れた波濤文を施す、第65図-2は外体面に樹鳥図を描く。**Ⅵ類**　第65図-3～9はいわゆる饅頭心型の底部で、やや張り出した腰折れの腰部から直口の口縁部を作る。文様はダミ技法を用いる。同図-3は大振りの碗で比較的外開きになる口縁部をなし、外体面に龍文？を施す。同図-4は見込みに寿字、円形の窓枠内に唐草文を配する。同図-5は団花文を体部及び見込みに描く。同図-6・7は山水図を前者は見込みに花文、後者は人物図を配す。同図-8・9は唐草文を外体面に施す、後者は器高が浅く小振りの碗になる。**Ⅶ類**　第65図-10～12・第66図-1～6は中間型の底部が若干凹む、腰部から口縁部は外開きになり、口縁内側に凹みをもつ。口唇は尖り外側は弱く肥厚する。文様のバリエーションはが認められ、内面は口縁下に四方襷文又は界線、外面は界線で区画し胴部主文様に鳳凰（第65図-10・11）・山水図（同図-12）・樹鳥図（第66図-1）・花文（同図-2）・双龍（同図-3）・人物図（同図-4）・漢詩文（同図-5）・唐草（同図-6）等の文様を施す。外底面には「大明萬暦年製」「宣徳年製」等の銘、吉祥文字を配す。**その他**　上記分類に該当しないもので小破片のため割愛した資料にはいわゆる福建・広東系の青花も散見される。

皿－碗に次いで多く出土する器種で、サイズには大小あり概ね14cmを超えるもの、12cm前後のもの、9cm前後のものに大別することができ、便宜上順に盤（大皿）・中皿・小皿と仮称した。**中皿・小皿**　**Ⅰ類**　第68図-1・第69図-1～3は外反する口縁部に高台のつく皿で、大小認められる。文様から外面に牡丹唐草を配し、見込みに十字文を描く小皿（第69図-2）、外面に牡丹唐草を配し、内面に玉取り獅子を描く中皿（第69図-1）と小皿（第69図-2）があり、第69図-3に図示した小皿は、高台のつくりが小さく碁笥底に近い形となるもので、内面には十字文を描く。**Ⅱ類**　第69図-4～7は高台が「碁笥底」になる皿で、口縁は直口する。同図-4は外面・見込みに梵字文を描く。同図-5・6は外面に蕉葉文を見込みに花文を描く。同図-7は外体面無文で見込みに花文を描く。**Ⅲ類**　第70図は低い高台がつき、ゆるやかな体部に口縁が直口する皿で、ダミ技法を用いる。外面の文様は唐草文を配するもの（同図-1・2・3・5）と配しないもの、内面口縁下に四方襷文を配

するもの（同図-5～7）と配しないものがある。同図-1は見込みに玉取り獅子、同図-2・3・5・8は人物図、同図-4・7は樹鳥図・同図-6は花文を描く。同図-2・3の高台内には「富貴届器」の字款が書かれる。**大皿**　口径が15cm以上の大きな皿をここで取り扱う。口縁形態から内湾するものと（第68図2・3）と縁折れのもの（同図-4）があり、前者をⅠ類・後者をⅡ類とする。同図-2は内外面に花唐草文を描き、見込みには孔雀もしくは花文を配する。同図-3は見込みが花文の資料で口縁を欠くがⅠ類に属するものと判断される。Ⅰ類はいわゆる呉須手の皿。同図-4は縁折れの大皿（盤）で見込みに麒麟が描かれ、胴部内外面には丁寧に箆彫りの蓮弁文が廻る。口縁部は稜花、内面は字款が、外面には渦巻き文が廻る。

杯－Ⅰ類　第71図-7は短い筒型の器形で腰折れ、外体部中央に一条の隆圏線がめぐる。

Ⅱ類　同図-8はⅠ類同様短い筒型腰折れの器形で外に開く、Ⅰ類の隆圏線は見られない。

Ⅲ類　同図-9は見込みが若干凹み、腰折れ端反りの口縁部を持つ。

小杯－第71図-4～6は高台がつき、張りをもつ腰部から、端反りの口縁部の器形。いずれも外体面に双龍を配し、見込みには人物図（同図-4）、花文（同図-5・6）を描く。いずれも口径約5～6cmの杯である。同図-2・3は端反りにならず直口する口縁部をもつ、体部は総じて薄手となる。外面の文様は同図-2は団花文、同図-3は唐草文を描く。

合子－71図-10・11はいずれとも合子の蓋で外面と上面に牡丹唐草を描くもの（同図-11）と、外面に山水図を描くもの（同図-10）がある。

水注－第67図-6の1個体を復元した。同図5の蓋はこれに伴うものと推定される資料で径約8cmを計る。水注は窓枠に山水画を描き牡丹唐草を充填する優品で、いわゆる雲堂手といわれる絵図を配する。

鉢－第66図-7・8は2個体確認され、いずれも外反する口縁部資料である。同図-7はいわゆる雲堂手で天女文を描く。同図-8は七宝繋文を描き、釉垂れが目立つ。

玉壺春瓶－第67図-1～3は玉壺春瓶でここでは3個体を図示した。同図-1は胴部に龍文を描く資料で、同図-2・3は牡丹唐草を主文様とする。第71図-12はいずれの器種に伴うものかは判然としない資料だが、上面には花文を描き、上部中央に孔を穿つ小型の蓋である。

註文献

44. 矢部良明　1974年『陶磁大系』第41巻　平凡社
青花　双龍牡丹唐草文獣耳壺　安宅コレクション（東洋陶磁美術館蔵）
45. 今帰仁村教育委員会編　1983年　『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅰ』今帰仁村文化財調査報告書第9集　P 72（第25図-15）
46. 小野正敏1981年「山梨県東八代郡一宮町新巻本村出土の陶磁器」『貿易陶磁研究』NO.1　日本貿易陶磁研究会

挿図番号 図版番号 枝番号	分類	器種	型式	口径 器高 底径	釉色 施釉 (貫入)	文様 備考	出土地点	
							地点	層
第62図 PL.77 1	元青花	壺	酒会壺型	19.6 29.1 19.0	灰白色。鮮明、一部呉須が黒ずむ	外面は口縁部に菊唐草文と界線3本、肩部に蔓唐草文と界線、胴上部に如意頭文（枠の中は海馬と青海波文）と菊唐草文と界線を2本、胴下部に白抜きの龍文と青海波文と界線を2本、腰部にラマ式蓮弁文と界線を施す。内面は無文。龍は3本爪。	B-1 B-3 C-1 D-3 E-1 ほか	Ⅰ Ⅱ
第62図 PL.77 2	元青花	壺	〃	25.1 38.0 26.2	淡青白色。やや鮮明、部分的に呉須が黒ずみ、釉上に浮遊	外面は口縁部に雷文と界線3本、頸部に霊芝唐草文（？）と界線3本、肩部に石榴唐草文と界線3本、胴上部に三爪（四爪か？）の雲龍文と界線2本、胴下部に牡丹唐草文と七宝繋文と界線3本、腰部にラマ式蓮弁文と界線を2本施す。内面は無文。	B-1 C-1 B-2 志慶真第6テラスⅡ	Ⅰ Ⅱ Ⅳ
第62図 PL.77 3	元青花	盤	鍔縁	21.1 3.5 12.0	明緑灰色。 やや鮮明	鍔縁に蔓唐草文。胴部内面に宝相華唐草文。胴部外面にラマ式蓮弁文。	B-2 E-2	Ⅱ下 北壁
第62図 PL.77 4	元青花	壺	蓋	蓋径約 23.8	淡青白色。やや鮮明 内面は無釉	蓋甲に網目文。鈕の頭部に点文	B-1 C-2	ⅡⅡ
第63図 PL.78 1	青花	碗	Ⅰ	15.0 (7.1) 6.1	灰白色。 やや鮮明一部呉須が黒ずむ	外面は口縁部に界線。胴部に波濤文。腰部にラマ式蓮弁文。高台脇から高台外面に界線を3本残す。内面は口縁部に四方襷と界線。内底に海馬文（？）と圏線を施す。	B-3 志6B	Ⅱ上
第63図 PL.78 2	青花	碗	Ⅰ	－ － 7.2	灰白色。 やや鮮明	外面は腰部にラマ式蓮弁文。高台脇から高台に界線を3本施す。内面は内底に捻花文を施す。	B-2 C-2	Ⅱ Ⅱ
第63図 PL.78 3	青花	碗	Ⅱ	15.1 6.4 6.0	灰白色鮮明。 一部呉須が黒ずむ。	外面は口縁部に界線を2本。胴部に密な牡丹唐草文と界線を2本。腰部に界線を2本施す。内面は口縁部に界線を2本。胴部に密な牡丹唐草文と界線。内底に蓮池文（？）と圏線を2本施す。	5号 土坑	
第63図 PL.78 4	青花	碗	Ⅱ	15.0 6.6 6.4	灰白色 鮮明。一部呉須が黒ずみ釉上に浮遊	外面は口縁部に界線を2本。胴部に牧丹唐草文と界線を2本。腰部に界線。高台外面に界線2本を施す。内面は口縁部に四方襷文と界線。内底に花卉文（？）と圏線を2本施す。	D-1	Ⅱ上
第63図 PL.78 5	青花	碗	Ⅱ	15.1 7.0 5.8	淡灰白色。 やや鮮明	外面は口縁部に波濤文と界線。胴部に牡丹唐草文。腰部に界線。高台に界線を2本施す。内面は口縁部に波濤文（？）と界線。内底に十字花文と圏線を2本施す。	志慶真 第6	Ⅰ Ⅱ
第63図 PL.78 6	青花	碗	Ⅱ	12.1 5.6 5.6	明緑灰色。やや不鮮明、部分的に呉須が黒ずみ釉上に浮遊	外面は口縁部に界線胴部に渦状唐草文、腰部に界線を2本、高台脇に界線を施す。内面は口縁部に界線、内底に「寿」字款と圏線を2本施す。	A-1 13号 土坑	90- 100
第63図 PL.78 7	青花	碗	Ⅲ	15.0 7.0 6.0	灰白色。鮮明、一部呉須が黒ずむ	外面は口縁部に界線を2本、胴部に宝草唐草文、胴部に界線を2本、高台脇に界線を施す。内面は口縁部に四方襷文と界線、内底に草花文と圏線を2本施す。	B-1 C-1 C-2 志23	Ⅱ
第63図 PL.78 8	青花	碗	Ⅲ	12.4 5.8 4.7	淡灰白色。 やや鮮明	外面は口縁に界線を2本、胴部に宝草華唐草文、腰部に界線を2本施す。内面は口縁部に界線を2本、内底に字款（？）と圏線を2本施す。	A-3 C-1 D-2 E-2	Ⅱ
第63図 PL.78 9	青花	碗	Ⅲ	12.8 5.6 4.8	灰白色。 やや不鮮明、一部呉須が黒ずむ	外面は口縁部に波濤文と界線、胴部に芭蕉葉文、高台脇から高台に界線を2本施す。内面は内底に蓮花文と圏線を施す。	A-2 A-3 B-3 C-1 C-3	Ⅰ Ⅱ
第63図 PL.78 10	青花	碗	Ⅲ	13.7 5.8 5.6	灰白色。 やや不鮮明	外面口縁部に波濤文。胴部にアラベスク文。 内底に蓮花文。		Ⅰ Ⅱ
第63図 PL.78 11	青花	碗	Ⅲ	14.9 6.8 5.3	明緑灰色。 やや不鮮明	外面は口縁部に波濤文と界線、胴部にアラベスク文、腰部に界線、高台脇から高台に界線を2本施す、内面は口縁部に界線、内底に蓮花文と圏線施す。		Ⅰ Ⅱ
第63図 PL.78 12	青花	碗	Ⅲ	12.6 6.1 5.1	灰白色。 不鮮明	外面は口縁部に波濤文と界線、胴部にアラベスク文、腰部に界線、高台脇から高台に界線を2本施す、内面は口縁部に界線、内底に捻花文（？）と圏線を施す。	志盛土 志 3456	Ⅰ Ⅱ
第63図 PL.78 13	青花	碗	Ⅲ	14.9 6.8 5.3	灰白色。 やや鮮明	外面は口縁部に界線、胴部に唐草文、腰部に如意頭文と界線、高台脇から高代に界線を3本施す。内面は口縁部に四方襷文と界線,内底に唐草文(?)と圏線を3本施す。	A-3 今志 356	Ⅰ

第47表　第Ⅰ～Ⅳ層　出土陶磁器観察表(19)

挿図番号 図版番号 枝番号	分類	器種	型式	口径 器高 底径	釉色 施釉 (貫入)	文様 備考	出土地点	
							地点	層
第64図 PL.791	青花	碗	Ⅲ	17 4.7 6.9	灰白色。 やや不鮮明一部呉須が黒ずむ	外面は口縁部に界線を2本、胴部に豹皮文と十字文、高台脇から高台に界線を2本施す、内底に豹皮文と十字文及び圏線を2本施す。	A-1～3 B-1～3 志2	Ⅰ Ⅱ
第64図 PL.792	青花	碗	Ⅲ	15.8 5.2 6.2	灰白色 やや不鮮明	外面は口縁部に界線を2本、胴部に豹皮文と十字文、高台脇から高台に界線を2本施す、内面は口縁部に界線を2本、内底に豹皮文と十字文、圏線を2本施す。	A-1 B-1 B-2 C-1 B-3 西壁 4号 土坑	Ⅰ Ⅱ
第64図 PL.793	青花	碗	Ⅲ	14.5 6.1 5.2	明緑灰色。 やや鮮明	外面は口縁部に界線を2本、胴部に花から草文、腰部に如意頭文、高台脇から高台に界線を2本施す、内底に草花文と圏線を2本施す。	B-1 B-3 西石垣	Ⅱ
第64図 PL.794	青花	碗	Ⅲ	13.3 5.3 4.1	灰白色。 やや鮮明一部呉須が黒ずむ	外面は口縁部に界線を2本、胴部に三つ葉様の小文様を、高台脇から高台に界線を4本施す、内底は口縁部に界線を2本、内底に三つ葉様の小文様と圏線を2本施す。	B-1 B-3 C-1 D-1	Ⅱ
第64図 PL.795	青花	碗	Ⅳ	15.9 6.5 6.6	灰白色。 やや鮮明	外面は口縁部に界線を2本、胴部に馬士文と如意雲樹状の小文様、腰部に界線を2本、高台脇に界線を施す、内面は口縁部に界線を2本、内底に観月図と圏線を2本施す。	A-1 B-1 B-2 D-3	Ⅰ Ⅱ
第64図 PL.796	青花	碗	Ⅳ	14.4 6.8 6.0	灰白色。 やや鮮明部分的に呉須が黒ずみ釉上に浮遊	外面は口縁部に界線を2本、胴部に馬士文と如意雲状の小文様、腰部に界線を2本、高台脇に界線を施す、内面は口縁部に界線を2本、内底に観月図（?）と圏線を2本施す。	A-3 C-1 D-1 E-1 E-2	Ⅱ
第64図 PL.797	青花	碗	Ⅴ	12.1 6.5 5.7	明緑灰色。 やや不鮮明、一部呉須が黒ずむ	外面は口縁部に波濤文と界線を2本、胴部にアラベスク文、腰部に界線を2本、高台脇から高台に界線を2本施す。内面は口縁部に界線を2本、内底に十字文と圏線を2本施す。	B-1 E-1 東壁	Ⅰ Ⅱ
第64図 PL.798	青花	碗	Ⅴ	11.6 5.9 4.9	明緑灰色。 やや鮮明、一部呉須が黒ずむ	外面は口縁部に波濤文（?）と界線、胴部にアラベスク文、腰部に界線を2本、高台脇から高台に界線を2本施す。内面は口縁部に界線、内底に蓮花文と圏線を2本施す。	A-1 B-1 C-1 志6A	Ⅰ Ⅱ
第64図 PL.799	青花	碗	Ⅴ	12.6 6.5 5.3	灰白色。 やや鮮明、一部呉須が黒ずみ釉上に浮遊	外面は口縁部に波濤文と界線を2本、胴部にアラベスク文、腰部に界線を、高台脇から高台に界線を2本施す。内面は口縁部に界線を2本、内底に十字花文（?）と圏線を2本施す。	1号 土坑	
第65図 PL.801	青花	碗	Ⅴ	12.0 5.9 5.9	黄灰白色。 鈍い	外面は口縁部に波濤文、胴部にアラベスク文を施す。内面は見込みに草花文を施す。全体的に文様は崩れた印象を受ける。	不明	
第65図 PL.802	青花	碗	Ⅴ	11.6 7.0 6.0	淡灰白色。 鮮明、一部呉須が黒ずみ釉上に浮遊	外面は口縁部に波濤文と界線を2本、胴部に桃樹宿禽図、腰部に界線を2本、高台脇から高台に界線を2本施す。内面は口縁部に界線、内底に桃樹文と圏線を2本施す。外底は字款（判読不可）。	A-2 A-3 西壁	Ⅰ Ⅱ
第65図 PL.803	青花	碗	Ⅵ	14.8 6.9 5.8	明緑灰色。 やや鮮明	外面は口縁部に界線を2本、胴部に崩れた双龍文、腰部に界線、高台脇に界線を施す。内面は口縁部に界線、内底に崩れた双龍文と圏線を施す。	B-1 D-3 E-2	Ⅰ Ⅱ
第65図 PL.804	青花	碗	Ⅵ	12.2 6.4 5.1	淡灰白色。 鮮明、部分的に呉須が黒ずみ釉上に浮遊	外面は口縁部に界線を2本、胴部に団雲芝文、腰部に如意頭文と界線を2本、外底に字款を施す。内面は口縁部に界線を2本、内底に「寿」字文と圏線を2本施す。	A-2 B-1 B-3 C-1 D-3	Ⅰ Ⅱ
第65図 PL.805	青花	碗	Ⅵ	12.4 6.2 4.6	淡灰白色。鮮明部分的に呉須が黒ずみ釉上に浮遊	外面は口縁部に界線を2本、胴部に如意雲文と窓枠の中に梅花文（?）、腰部に界線、高台脇から高台に圏線を3本、外底に字款を施す。内面は口縁部に界線を2本、内底に梅花文と圏線を2本施す。	B-1 B-2	Ⅱ
第65図 PL.806	青花	碗	Ⅵ	11.7 5.9 5.1	淡灰白色。 やや不鮮明	外面は口縁部に界線、胴部に花鳥文（?）、腰部に界線、高台脇から高台に圏線を2本、外底に字款を施す。内面は口縁部に界線、内底に花卉文と圏線を2本施す。	不明	不明
第65図 PL.807	青花	碗	Ⅵ	11.9 6.1 4.9	灰白色。 鮮明一部呉須が黒ずむ	外面は口縁部に界線を2本胴部に山水文、腰部に界線、高台脇から高台に界線を2本、外底に字款を施す。内面は口縁部に界線、内底に人物図(?)と圏線を2本施す。	B-1 B-2	Ⅰ Ⅱ

第48表　第Ⅰ～Ⅳ層　出土陶磁器観察表⑳

挿図番号 図版番号 枝番号	分類	器種	型式	口径 器高 底径	釉色 施釉 (貫入)	文様 備考	出土地点	
							地点	層
第65図 PL.80 8	青花	碗	Ⅵ	11.1 5.6 4.2	灰白色。 やや不鮮明、一部呉須が黒ずむ	外面は口縁部に界線を2本、胴部に花卉唐草文、腰部に界線、高台に圏線を2本施す。内面は口縁部に界線を2本、内底に花文と圏線を施す。	A-2 B-1 B-2 C-2 D-2	Ⅰ Ⅱ
第65図 PL.80 9	青花	碗	Ⅵ	11.8 4.3 4.6	淡灰白色。やや不鮮明、一部呉須が黒ずむ	外面は口縁部に界線を2本、胴部に花卉唐草文、腰部に界線を施す。内面は口縁部に界線を2本、内底に圏線を施す。	D-2 D-3	Ⅱ
第65図 PL.80 10	青花	碗	Ⅶ	14.4 6.1 5.1	淡灰白色。鮮明一部呉須が黒ずむ	外面は口縁部に界線を2本、胴部に鳳凰唐草文、腰部に界線、高台から高台脇に界線を2本、外底に字款を施す。内底は口縁部に四方襷文と界線、内底に花文と圏線を2本施す。	A-2 C-2 D-1 D-2 E-1	Ⅱ
第65図 PL.80 11	青花	碗	Ⅶ	14.8 5.9 4.6	灰白色。 鮮明、一部呉須が黒ずみ釉上に浮遊	外面は口縁部に界線、同部に鳳凰唐草文、腰部に界線、高台から高台脇に界線を2本、外底に字款「宣徳年製」を施す。内底は口縁部に四方襷文と界線、内底に花文と圏線を2本施す。	A-1 B-2 10号土坑最下	Ⅱ
第65図 PL.80 12	青花	碗	Ⅶ	13.7 6.2 4.6	灰白色。 鮮明、全体的に呉須が黒ずみ釉上に浮遊	外面は口縁部に界線を2本、胴部に蓮池文（?）、腰部Ⅱ界線、高台脇から高台に界線を2本、外底に字款「萬福攸同」と圏線を2本を施す。内面は口縁部に四方襷文と界線、内底に蓮花文（?）と圏線を2本施す。	B-2 C-2 盛土	Ⅰ Ⅱ
第66図 PL.81 1	青花	碗	Ⅶ	11.6 6.0 4.5	明緑灰色。 鮮明部分的に呉須が黒ずみ釉上に浮遊	外面は口縁部に界線を2本、胴部に花鳥文、腰部に界線、高台から高台脇に界線を2本、外底に字款を施す。内底は口縁部に四方襷文と界線、内底に蓮花文（?）と圏線を2本施す。	A-1	Ⅰ
第66図 PL.81 2	青花	碗	Ⅶ	12.1 6.0 5.0	灰白色。 鮮明、全体的に呉須が黒ずみ釉上に浮遊	外面は口縁部に界線、胴部に三友文（松竹梅図）、高台脇から高台に界線を3本、外底に字款（判読不可）を施す。内面は口縁部に四方襷文と界線、内底に蓮花文（?）と圏線を施す。	盛土 B-3 D-3 4号土坑 大庭	Ⅰ Ⅱ Ⅱ
第66図 PL.81 3	青花	碗	Ⅶ	12.3 6.3 4.6	明緑灰色。 やや鮮明	外面は口縁部に界線、胴部に崩れた双龍文と花文、腰部に界線、高台脇から高台に界線を2本、外底に字款「萬福攸同」を施す。内面は口縁部に界線、内底に崩れた龍文（団龍文か?）と圏線を施す。	B-1 C-1 E-2 14坑	Ⅱ
第66図 PL.81 4	青花	碗	Ⅶ	11.6 6.3 4.8	淡灰白色。 鮮明、部分的に呉須が黒ずみ、釉上に浮遊	外面は口縁部に界線、胴部に人物図、高台脇から高台に界線を3本、外底に字款「大明年造」（?）を施す。内面は口縁部に界線、内底に官人図と圏線を施す。	B-1 C-2 D-1	Ⅱ
第66図 PL.81 5	青花	碗	Ⅶ	12.4 6.2 4.2	淡灰白色。鮮明、一部呉須が黒ずみ、釉上に浮遊	外面は口縁部に界線を2本、胴部に詩句文と桃樹文（?）、腰部に界線、高台脇から高台に界線を3本、外底に字款「大明萬曆年製」を施す。内面は口縁部に界線、内底に麒麟文と圏線を施す。	B-1 C-2 C-1	Ⅱ 上
第66図 PL.81 6	青花	碗	Ⅶ	12.1 6.1 4.8	淡灰白色。やや鮮明	外面は口縁部に界線、胴部に唐草文（?）、腰部に界線、高台脇から高台に界線を3本施す。内面は口縁部に界線を2本、内底に花卉文（?）と圏線を2本施す。	A-2 B-2 B-3 C-2 D-1 E-1	Ⅰ Ⅱ
第66図 PL.81 7	青花	鉢		22.3 10.4 7.8	灰白色。 やや鮮明	外面は口縁部に界線を2本、胴部に山水人物図（天女）、高台脇から高台に界線を3本施す。内面は口縁部に四方襷文と界線、内底に楼閣文（?）と圏線を2本施す。	A-1 B-1	Ⅰ 表
第66図 PL.81 8	青花	鉢		26.9 — —	灰白色。やや鮮明、全体的に呉須の黒ずみ、浮遊が著しい	外面は口縁部に波濤文と界線2本、胴部に七宝文と窓絵文（枠の中は樹鳥図）を施す。内面は口縁部に四方襷文（?）と界線、胴部に牡丹唐草文（?）、底部に唐草文と圏線2本を施す。	A-2 B-3 C-1 D-1	Ⅱ上
第67図 PL.82 1	青花	瓶		— — 8.3	淡灰白色。やや鮮明	外面は胴部に雲龍文、腰部に波濤文と界線、高台脇に界線を施す。内面は無文。	A-2 B-3 西壁内第1号土坑	Ⅰ
第67図 PL.82 2	青花	瓶		— — —	灰白色。 鈍い、部分的に呉須が黒ずみ、釉上に浮遊	外面は頸部に宝相華唐草文と界線を2本、胴部に牡丹唐草文（?）を施す。内面は無文。	B-2 B-3 第1号土坑	Ⅱ

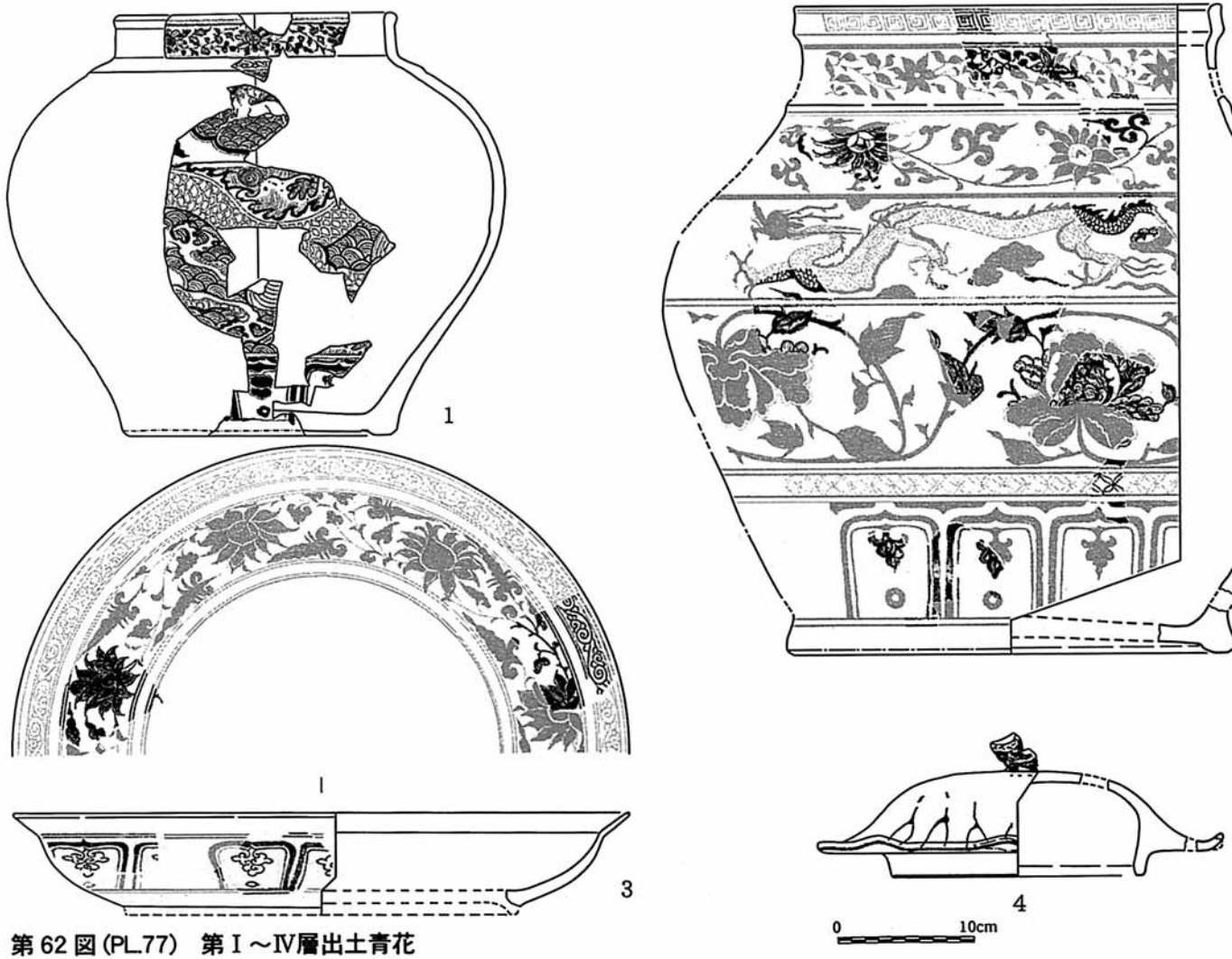
第49表　第Ⅰ～Ⅳ層　出土陶磁器観察表(21)

挿図番号 図版番号 枝番号	分類	器種	型式	口径 器高 底径	釉色 施釉 (貫入)	文様 備考	出土地点	
							地点	層
第67図 PL.82 3	青花	瓶		－ － 5.3	灰白色。 やや不鮮明、全体的に呉須が黒ずみ、釉上に浮遊	外面は胴部に宝相華唐草文と界線を2本施す。裾部にくずれたラマ式蓮弁文。内面は無文。	B-1 C-1 志第6A Ⅲ	Ⅱ上 Ⅱ下
第67図 PL.82 4	青花	瓶		－ － 6.8	灰白色。 鈍い	外面は頸部に芭蕉葉文と界線2本、肩部に界線4本と霊芝文、胴部に界線3本と宝相華唐草文、腰部に如意頭文と界線、高台に界線を施す。内面は無文。(C-1・C-2・C-3・大庭ほか)	A-1 A-2 A-3	Ⅰ Ⅱ
第67図 PL.82 5	青花	蓋		内7.2 － －	明緑灰色。 やや不鮮明	外面は蓋甲上部に唐草文（？）と界線を2本、蓋甲下部に牡丹文と界線、蓋甲端部に界線を2本施す。内面は無文。合子の蓋と考えられる。	B-3 C-2	Ⅱ
第67図 PL.82 6	青花	水注		長8.6 短8.5	灰白色。 やや鮮明、一部呉須が黒ずむ	外面は胴部に牡丹文と如意頭状窓絵文（枠の中は山水人物図）、注口基部に垂花文、腰部に界線、高台脇から高台に界線を3本施す。内面は無文。水注の身と考えられる。	B-2 B-3 志第3	Ⅱ Ⅱ
第68図 PL.83 1	青花	中皿	Ⅰ	17.2 3.4 9.7	明緑灰色。やや鮮明、一部呉須が黒ずみ、釉上に浮遊	外面は口縁部に界線を2本、胴部に宝相華唐草文、高台脇から高台に界線を2本施す。内面は口縁部に界線を2本、内底に玉取獅子文と圏線を2本施す。	B-1	Ⅱ
第68図 PL.83 2	青花	大皿	Ⅰ	23.3 4.7 14	灰白色。 やや鮮明、部分的に呉須が黒ずみ、釉上に浮遊	外面は口縁部に界線を2本、胴部に牡丹唐草文、腰部に界線、高台脇から高台に界線を2本施す。内面は口縁部に界線を2本、胴部に牡丹唐草文、内底に孔雀文（？）と圏線を2本施す。	B-1 表 B-1 Ⅱ B-2 Ⅱ C-2 Ⅱ	Ⅰ Ⅱ
第68図 PL.83 3	青花	大皿	Ⅰ	－ － 9.8	淡灰白色。鮮明、一部呉須が黒ずむ	外面は無文。内面は内底に菊竹文（？）と圏線を2本施す。	B-3 南壁 D-1 表 D-1 Ⅱ 西壁	Ⅰ Ⅱ
第68図 PL.83 4	青花	大皿	Ⅱ	21.1 3.5 12.0	淡灰白色。 やや不鮮明。 呉須黒ずむ。	鍔縁に菱形文と字款。内底に麒麟文。外面に渦巻文。	B-1 A-1 A-2	Ⅰ Ⅱ
第69図 PL.84 1	青花	皿	Ⅰ	13.0 3.0 7.9	灰白色。 鈍い、部分的に呉須が黒ずみ、釉上に浮遊	外面は口縁部に界線、胴部に宝相華唐草文、腰部に界線、高台脇から高台に界線を2本施す。内面は口縁部に界線を2本、内底に玉取獅子文と圏線を2本施す。	志第6B Ⅰ	Ⅰ
第69図 PL.84 2	青花	皿	Ⅰ	14.7 2.9 8.8	淡灰白色。鮮明	外面は口縁部に界線、胴部に密な牡丹唐草文、腰部に界線を2本、高台脇から高台に界線を2本施す。内面は口縁部に界線、胴部に如意頭文、内底に十字花文と圏線を4本施す	A-2 E-1 第5号土坑	Ⅱ
第69図 PL.84 3	青花	皿	Ⅰ	7.6 2.1 4.1	淡青白色。やや鮮明、一部呉須が黒ずみ、釉上に浮遊	外面は口縁部に界線を2本、胴部に花卉文（？）、腰部に界線を2本施す。内面は口縁部に界線を2本、胴部に崩れた如意頭文、内底に十字花文と圏線を2本施す。	C-1	Ⅰ Ⅱ
第69図 PL.84 4	青花	皿	Ⅱ	10.3 2.6 3.9	明緑灰色。やや鮮明	外面は口縁部に界線、胴部に梵字文、腰部に界線を2本施す。内面は口縁部に界線、内底に梵字文と圏線を2本施す。	A-2 B-1 D-1 D-1	Ⅱ Ⅱ 表 Ⅰ
第69図 PL.84 5	青花	皿	Ⅱ	9.7 2.6 2.9	明緑灰色。不鮮明、一部呉須が黒ずむ	外面は口縁部に波濤文と界線、胴部に芭蕉葉文、腰部に界線を2本施す。内面は口縁部に界線、胴部に花文（？）、内底に捻花文と圏線を2本施す。	表土 A-1 A-2 A-3 B-2 C-2	Ⅰ Ⅱ
第69図 PL.84 6	青花	皿	Ⅱ	10.0 2.8 2.7	灰白色。 やや鮮明、一部呉須が黒ずむ	外面は口縁部に波濤文と界線、胴部に芭蕉葉文、腰部に界線を2本施す。内面は口縁部に界線を2本、内底に花鳥文（？）と圏線を2本施す。	C-2 南壁 表土	Ⅱ
第69図 PL.84 7	青花	皿	Ⅱ	11.3 3.4 3.0	青白色。 鮮明、一部呉須が黒ずみ、釉上に浮遊	外面は無文、内面は口縁部に界線、内底に草花文（？）と圏線を2本施す。	B-1 B-1	表 Ⅱ

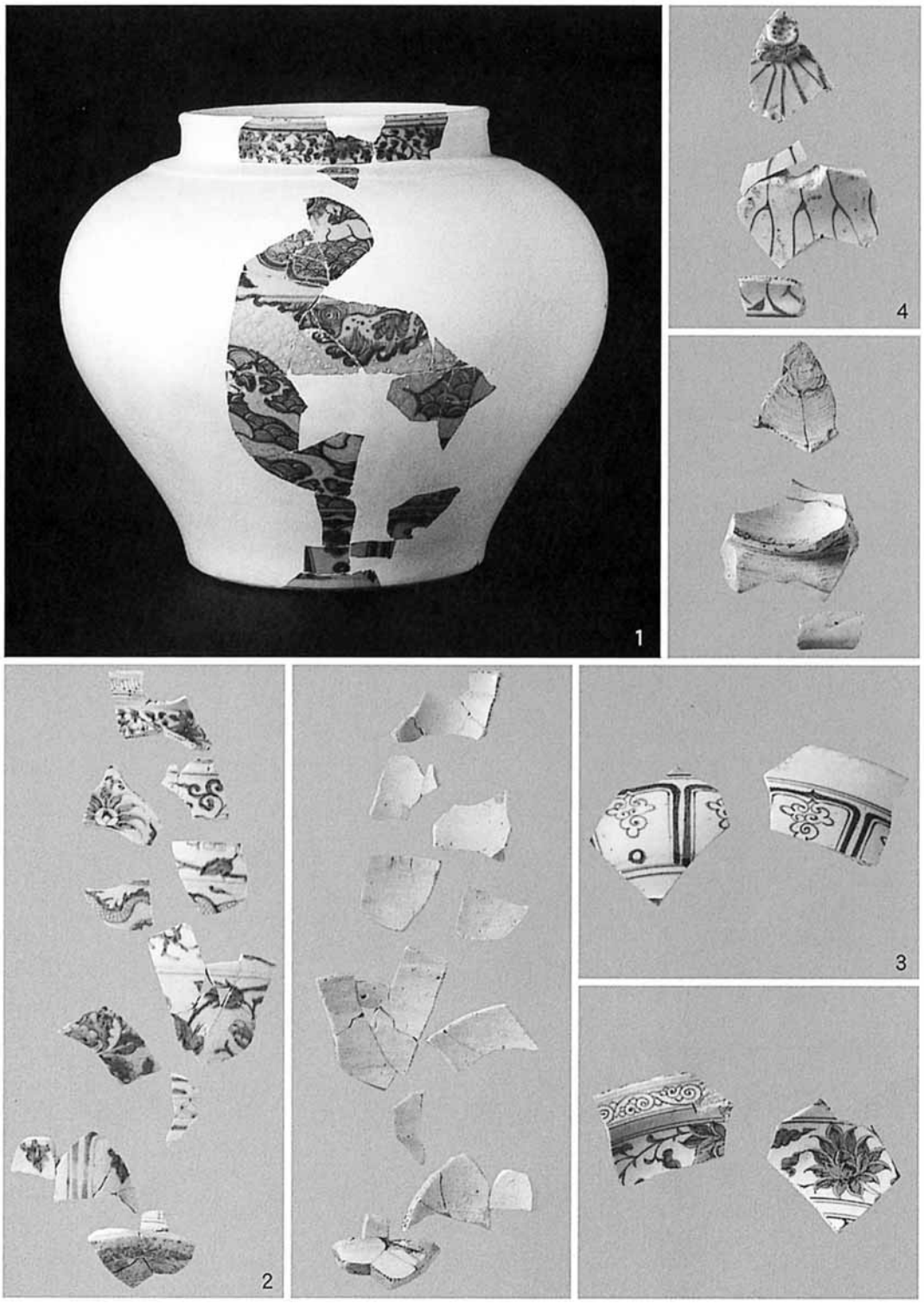
第50表　第Ⅰ～Ⅳ層　出土陶磁器観察表(22)

挿図番号 図版番号 枝番号	分類	器種	型式	口径 器高 底径	釉色 施釉 （貫入）	文様 備考	出土地点	
							地点	層
第70図 PL.85 1	青花	皿	Ⅲ	10.1 2.3 5.6	淡青白色。やや鮮明、一部呉須が黒ずむ	外面は口縁部に界線を2本、胴部に牡丹唐草文、高台脇から高台に界線を2本、外底に字款（判読不可）を施す。内面は口縁部に界線、胴部から内底に玉取獅子文を施す。	不明	
第70図 PL.85 2	青花	皿	Ⅲ	10.0 2.0 5.2	淡灰白色。鮮明、一部呉須が黒ずみ、釉上に浮遊	外面は口縁部に界線、胴部に唐草文、高台脇に界線、外底に字款「冨貴届（佳の変化か？）器」を施す。内面は口縁部に界線、内底に官人図と圏線を2本施す。	B-1 B-1	表 Ⅱ
第70図 PL.85 3	青花	皿	Ⅲ	8.4 2.0 4.2	淡灰白色。鮮明、一部呉須が黒ずむ	外面は口縁部に界線、胴部に唐草文、高台脇に界線、外底に字款「冨貴届（佳の変化か？）器」を施す。内面は口縁部に界線、内底に官人図と圏線を2本施す。	B-1 B-1 C-1	表 Ⅱ Ⅱ
第70図 PL.85 4	青花	皿	Ⅲ	10.2 2.1 6.1	青白色。 鮮明、一部呉須が黒ずみ、釉上に浮遊	外面は口縁部に界線、高台脇に界線、外底に字款（判読不可）を施す。内面は口縁部に界線、内底に桃樹宿禽図と圏線を2本施す。	B-1 B-1 D-2	表 Ⅱ
第70図 PL.85 5	青花	皿	Ⅲ	10.2 2.7 5.6	明緑灰色。鮮明、一部呉須が黒ずみ、釉上に浮遊	外面は口縁部に界線を2本、胴部に牡丹唐草文高台脇から高台に界線を2本施す。内面は、口縁部に四方襷文と界線、内底に官人図（？）と圏線を2本施す。	B-3 南壁 B-3 1坑	Ⅱ
第70図 PL.85 6	青花	皿	Ⅲ	11.0 2.7 6.4	淡青白色。鮮明。 発色良好。	外面口縁と高台際に界線。内面上部に四方襷文。内底に花文。	D-3 4号土坑	Ⅱ
第70図 PL.85 7	青花	皿	Ⅲ	11.4 2.3 6.4	〃	外面口縁と高台際に界線。内面上部に四方襷文。内底に花鳥折枝文。	A-1.2.3 B-2 C-2	Ⅰ Ⅱ上
第70図 PL.85 8	青花	皿	Ⅲ	9.9 2.5 5.6	〃	外面口縁と高台際に界線。内面上部に界線。内底に釣人図。	1号土坑	Ⅱ
第71図 PL.86 1	元青花	馬上杯		－ － 4.1	〃	高杯の下部に上、下3本の界線の中に花唐草文。上部の文様は不明。	B-3 東斜面	Ⅱ上
第71図 PL.86 2	青花	小杯	Ⅰ	4.1 3.0 2.4	淡灰白色。やや鮮明	外面は口縁部に界線、胴部に団花文、高台脇に界線を施す。内面は口縁部に界線、内底に圏線を施す。	A-2 南壁 沿表土	Ⅰ
第71図 PL.86 3	青花	小杯	Ⅰ	4.4 3.6 2.4	灰白色。 鮮明、一部呉須が黒ずむ	外面のみに施文。口縁部と高台に界線。 花文（？）を主文様とする。	A-3 Ⅰ CD-1 東壁	Ⅰ
第71図 PL.86 4	青花	小杯	Ⅱ	6.3 4.2 3.0	淡灰白色。やや鮮明	外面は口縁部に波濤文（？）と界線、胴部に応龍文（？）、腰部に界線、高台脇に界線、外底に字款「禄（？）」を施す。内面は口縁部に界線、内底に観月図と圏線を施す。	B-2 Ⅰ B-2 Ⅱ B-3 Ⅱ	Ⅰ Ⅱ Ⅲ
第71図 PL.86 5	青花	小杯	Ⅱ	6.5 3.6 2.7	明緑灰色。鮮明、一部呉須が黒ずみ、釉上に浮遊	外面は口縁部に界線、胴部に崩れた双龍文、腰部に界線を施す。内面は口縁部に界線、内底に花卉文と圏線を施す。	B-2 Ⅰ B-2 Ⅱ	Ⅰ Ⅱ
第71図 PL.86 6	青花	小杯	Ⅱ	5.4 3.7 2.2	淡灰白色。鮮明	外面は口縁部に界線、胴部に崩れた双龍文（？）、高台脇に界線を施す。内面は口縁部に界線、内底に花卉文（？）と圏線を施す。	A-3 Ⅰ B-1 Ⅱ B-1 Ⅱ下	Ⅰ Ⅱ
第71図 PL.86 7	青花	杯	Ⅰ	9.1 4.9 4.2	淡灰白色。やや鮮明	外面は口縁部に界線、胴部に花鳥折枝文と界線、胴部に如意頭文と界線、高台脇から高台に界線を2本施す。内面は口縁部に界線、内底に梅花文（？）と圏線を2本施す。（B-1 Ⅰ・E-2 土坑）	A-1 Ⅰ A-1 Ⅱ A-2 B-1 表	Ⅰ Ⅱ
第71図 PL.86 8	青花	杯	Ⅱ	10.0 4.1 4.4	明緑灰色。やや鮮明	外面は口縁部に花鳥折枝文と界線、胴部に崩れた如意頭文と界線を2本、腰部に界線、高台脇に界線を施す。内面は口縁部に界線、内底に十字花文（？）と圏線を2本施す。	B-1 表 B-1 Ⅱ	Ⅰ Ⅱ
第71図 PL.86 9	青花	杯	Ⅲ	11.4 5.7 4.4	灰白色。やや鮮明、一部呉須が黒ずみ、釉上に浮遊	外面は口縁部に界線、胴部に崩れた双龍文、腰部に界線、高台脇に界線を施す。内面は口縁部に界線を2本、内底に崩れた双龍文（団龍文か？）と圏線を2本施す。（D-3 攪乱・大庭Ⅰ，Ⅱ）	B-2 Ⅱ B-3 Ⅱ C-3 Ⅱ	Ⅱ
第71図 PL.86 10	青花	合子		8.5 －	白色。 やや鮮明	外面は蓋甲全体に山水図と「寿」字（？）、蓋甲端部に界線を施す。内面は無文。	C-2 C-3	Ⅱ Ⅱ
第71図 PL.86 11	青花	合子		8.5 2.6	淡灰白色。やや鮮明	外面は蓋甲上部に宝相華唐草文と界線を2本、蓋甲下部に界線と唐草文を施す。内面は無文。	B-1	Ⅱ
第71図 PL.86 12	青花	蓋		1.3 外 4.1 内 2.5	灰白色。 不鮮明	外面は蓋甲全体に崩れた花卉文と界線を2本施す。内面は無文。	A-2	Ⅱ

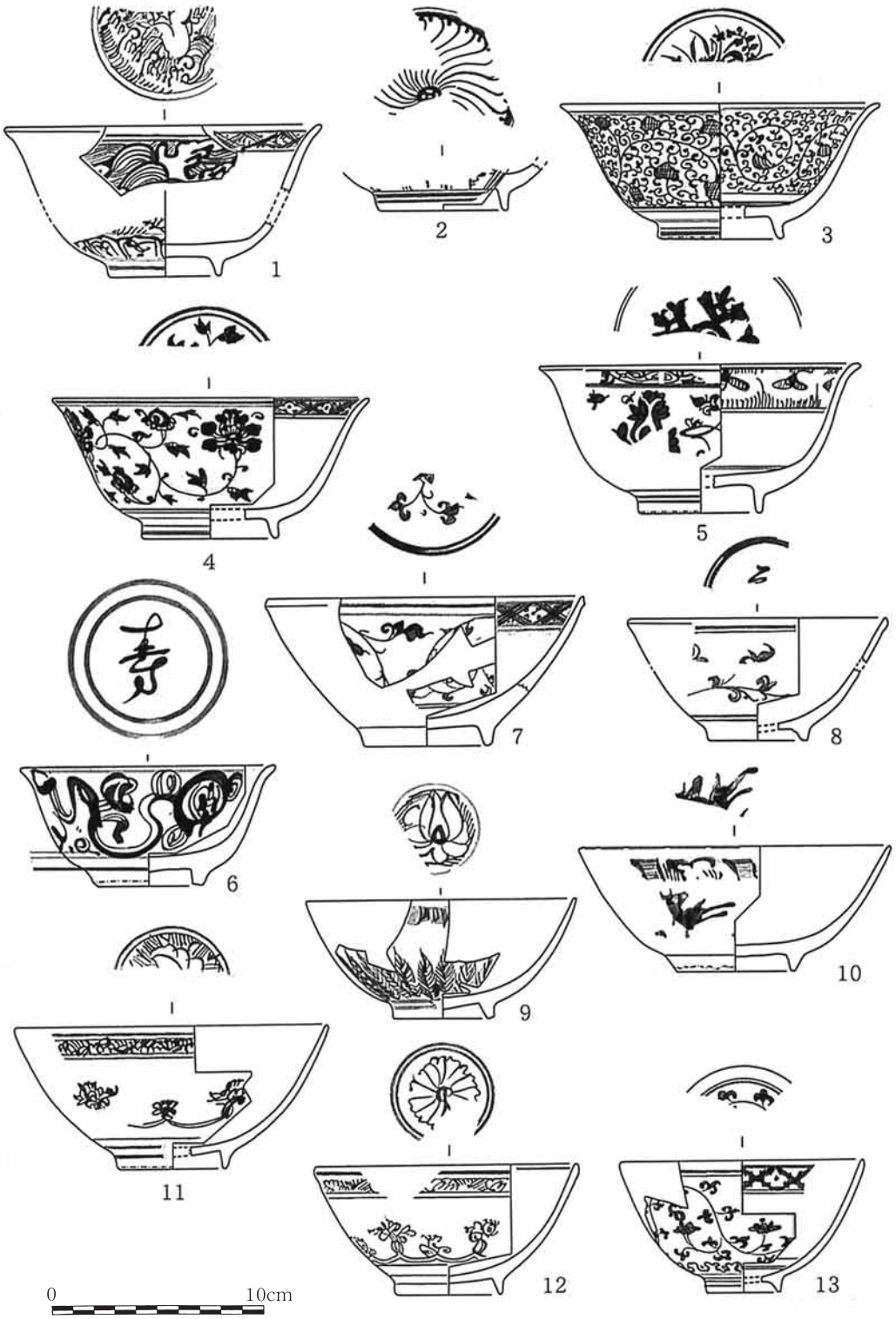
第51表　第Ⅰ～Ⅳ層　出土陶磁器観察表(23)



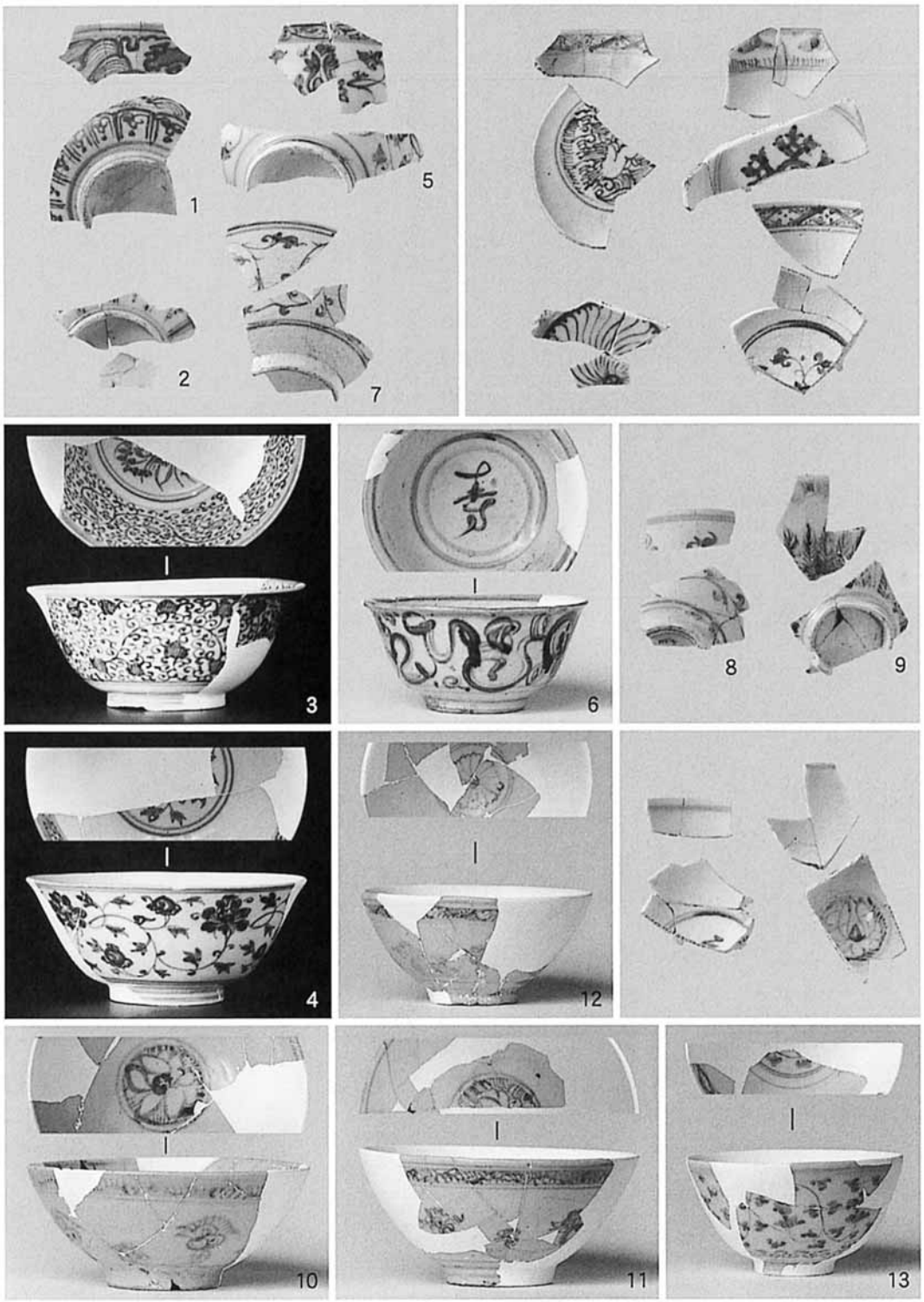
第 62 図 (PL.77)　第Ⅰ～Ⅳ層出土青花



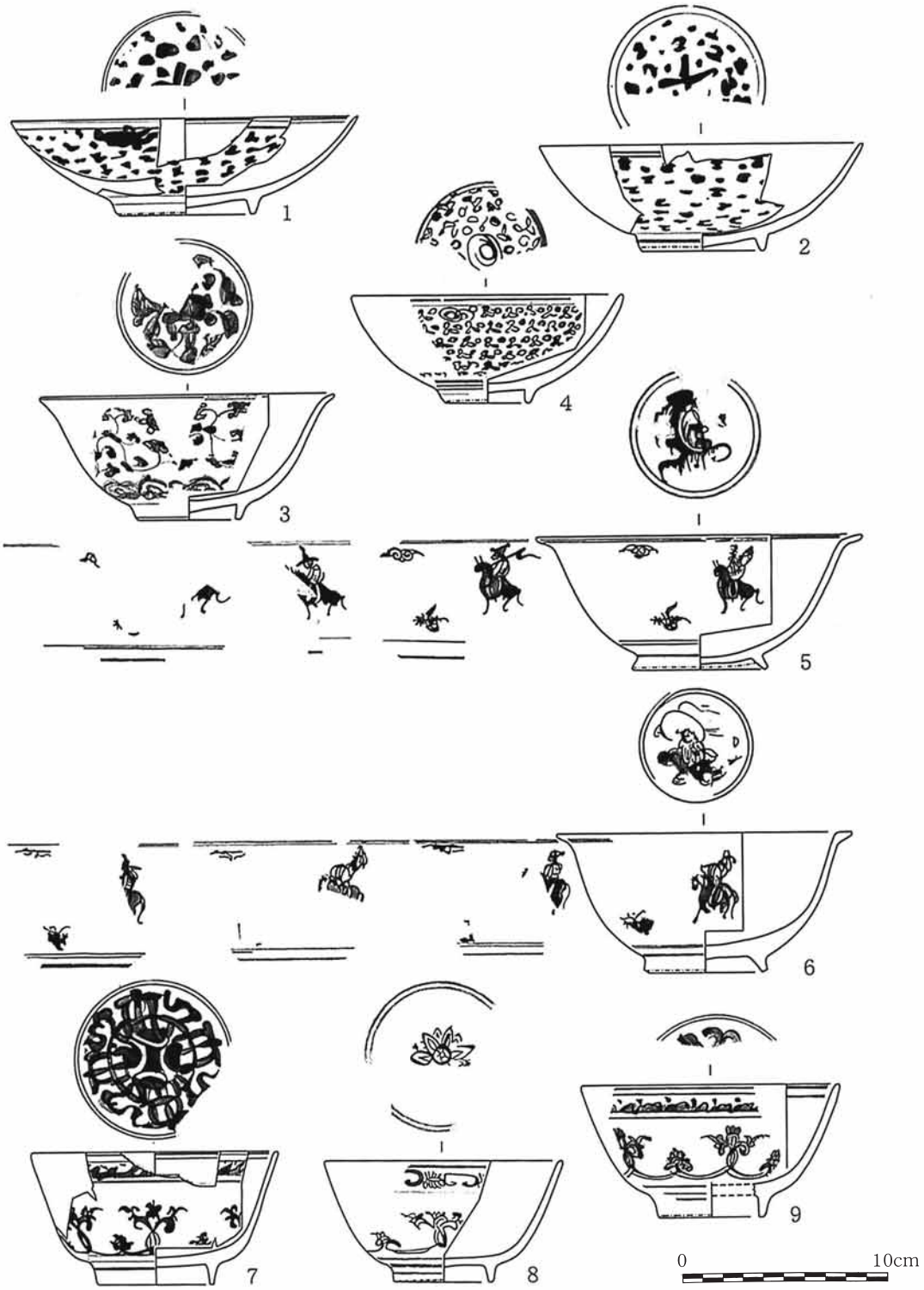
PL.77(第 62 図)　第Ⅰ～Ⅳ層出土青花



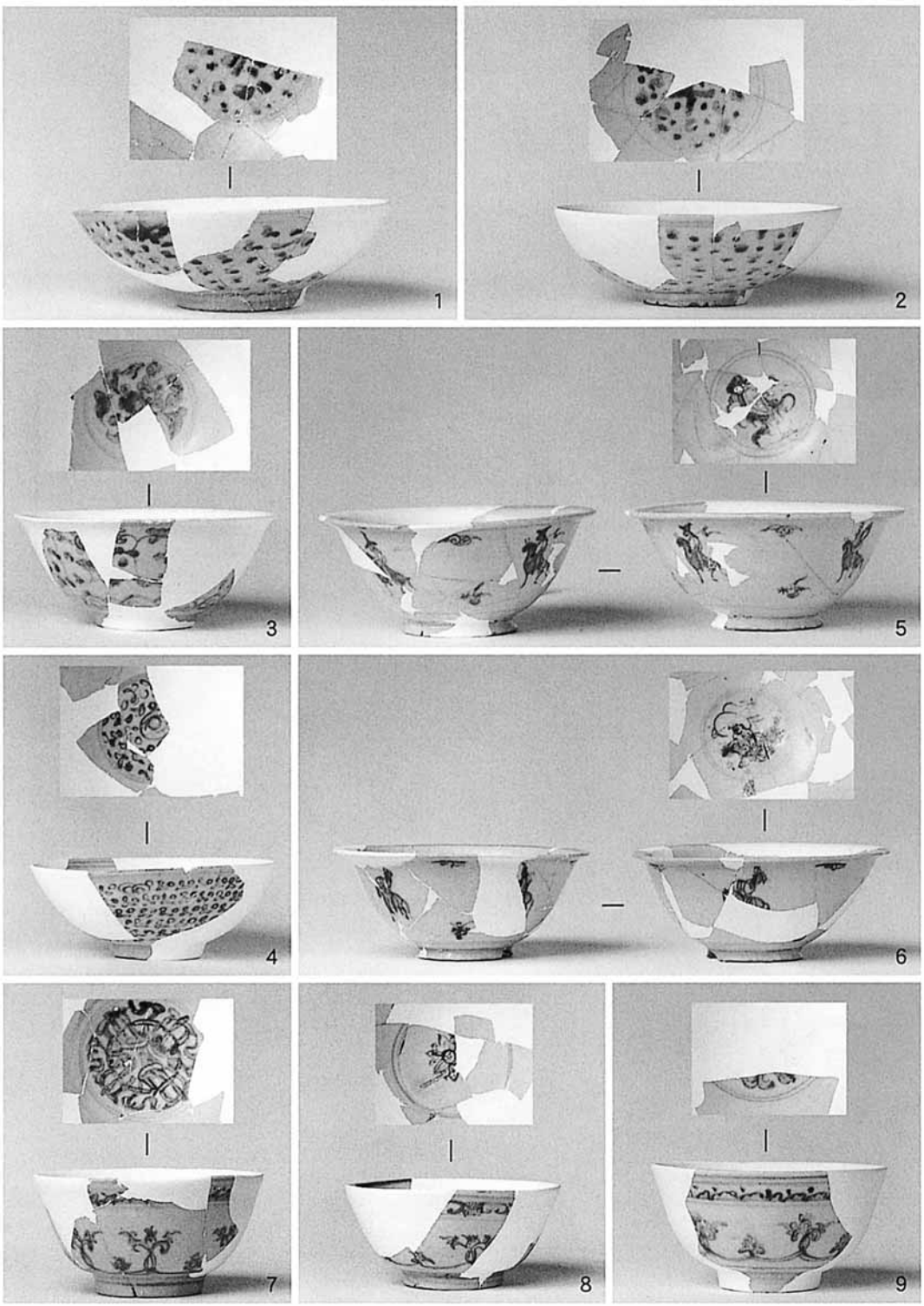
第 63 図 (PL.78)　第Ⅰ～Ⅳ層出土青花碗



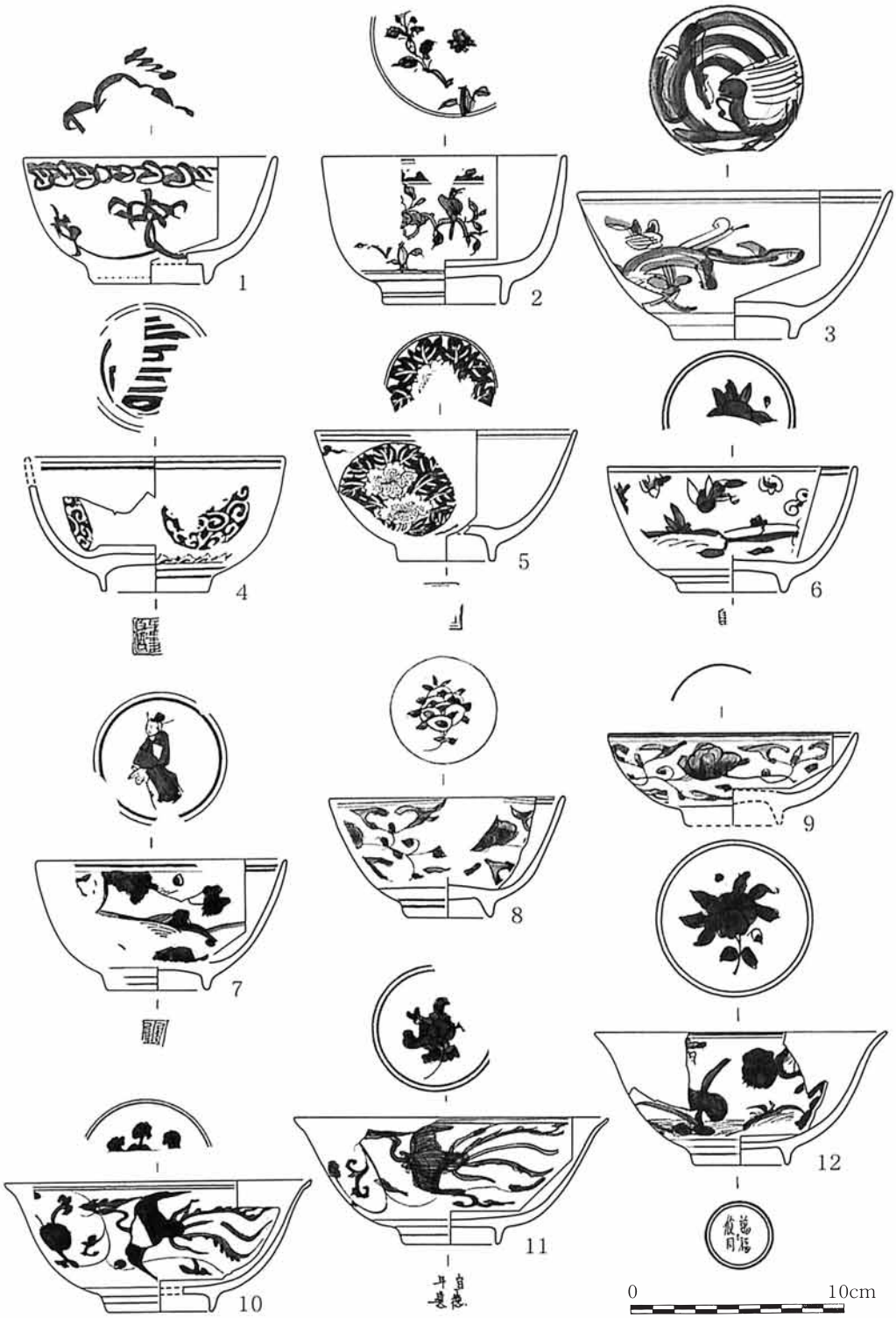
PL.78（第 63 図）　第Ⅰ～Ⅳ層出土青花碗



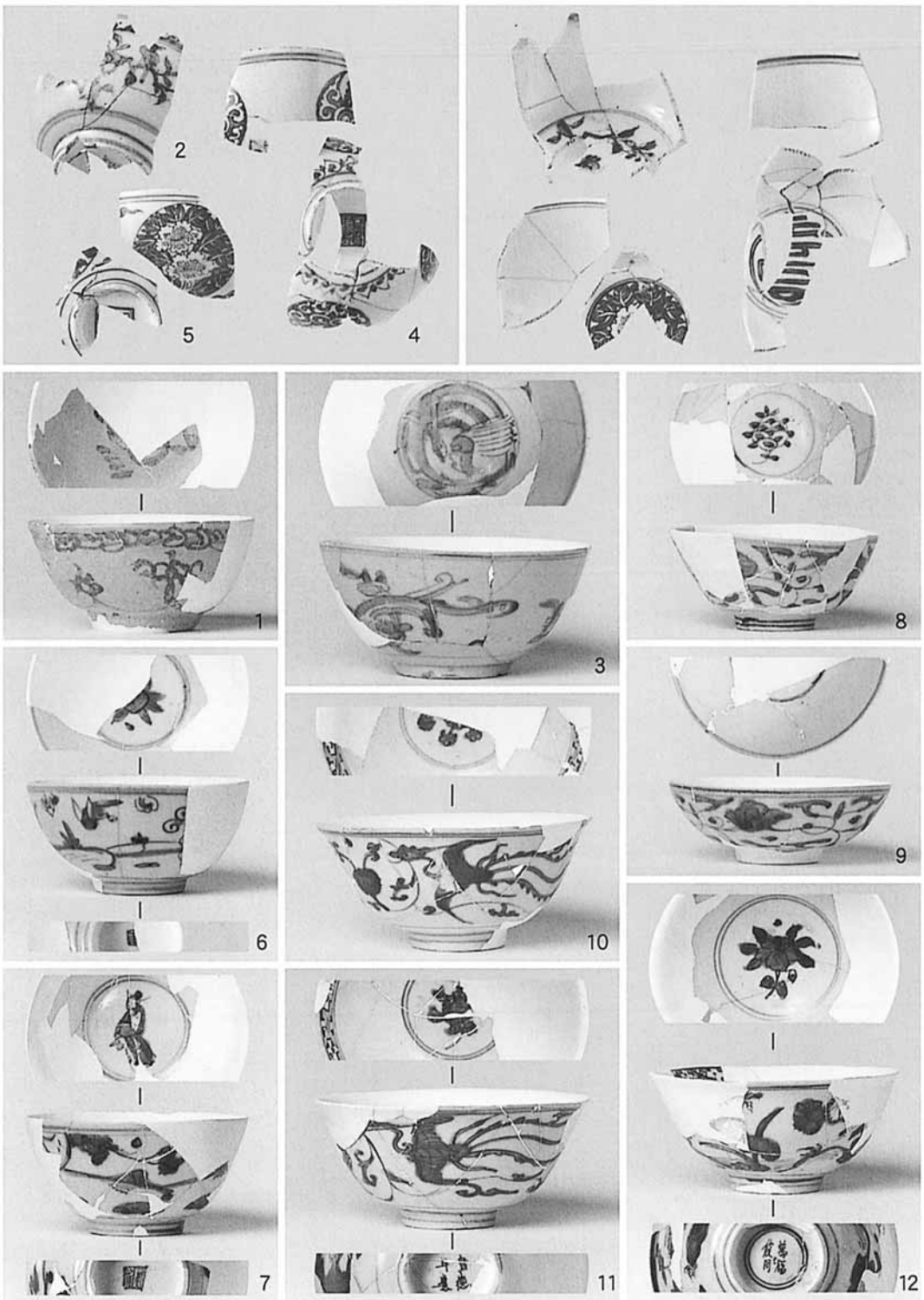
第 64 図 (PL.79)　第Ⅰ～Ⅳ層出土青花碗



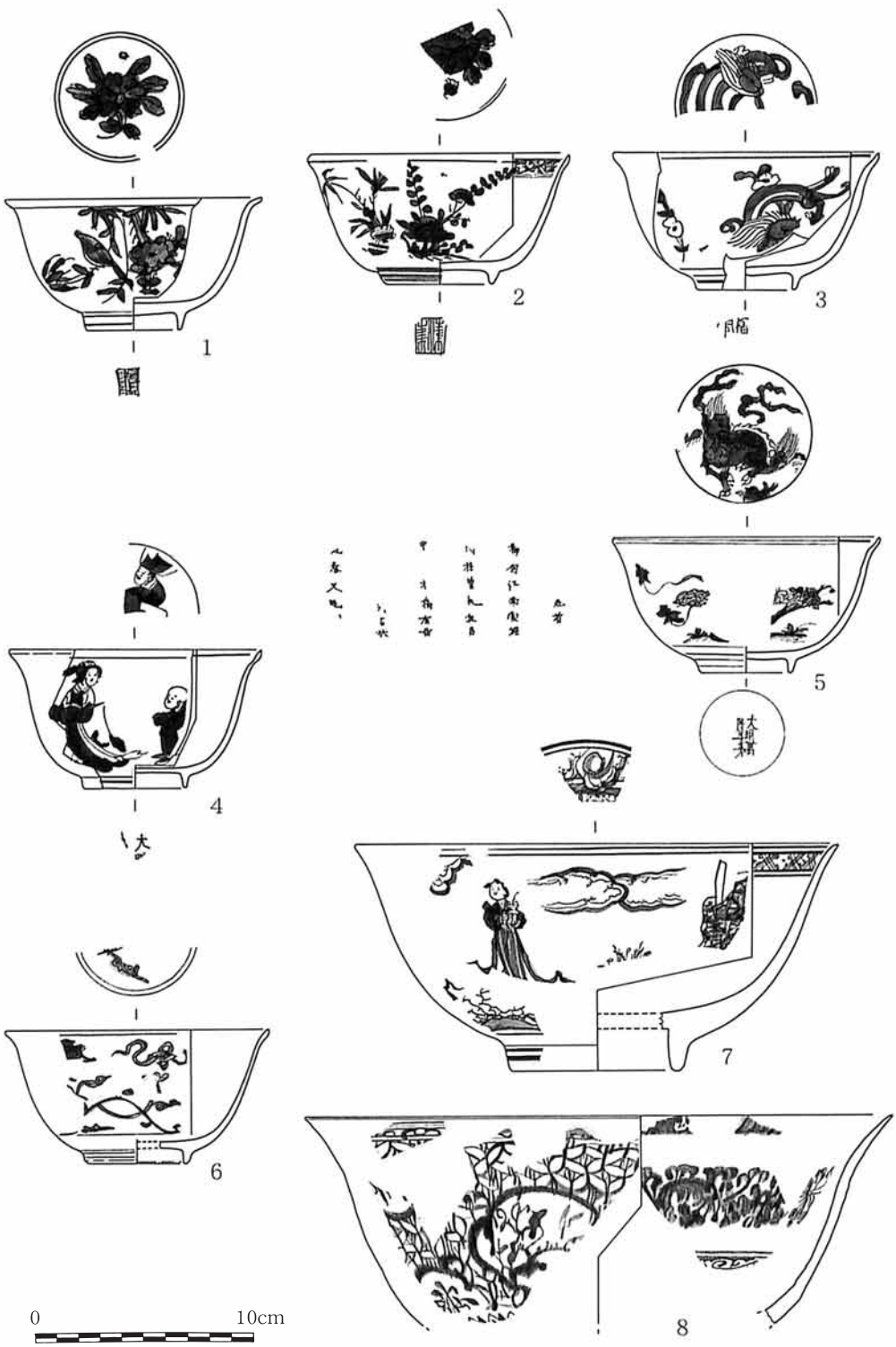
PL.79(第 64 図)　第Ⅰ～Ⅳ層出土青花碗



第 65 図 (PL.80)　第Ⅰ～Ⅳ層出土青花碗

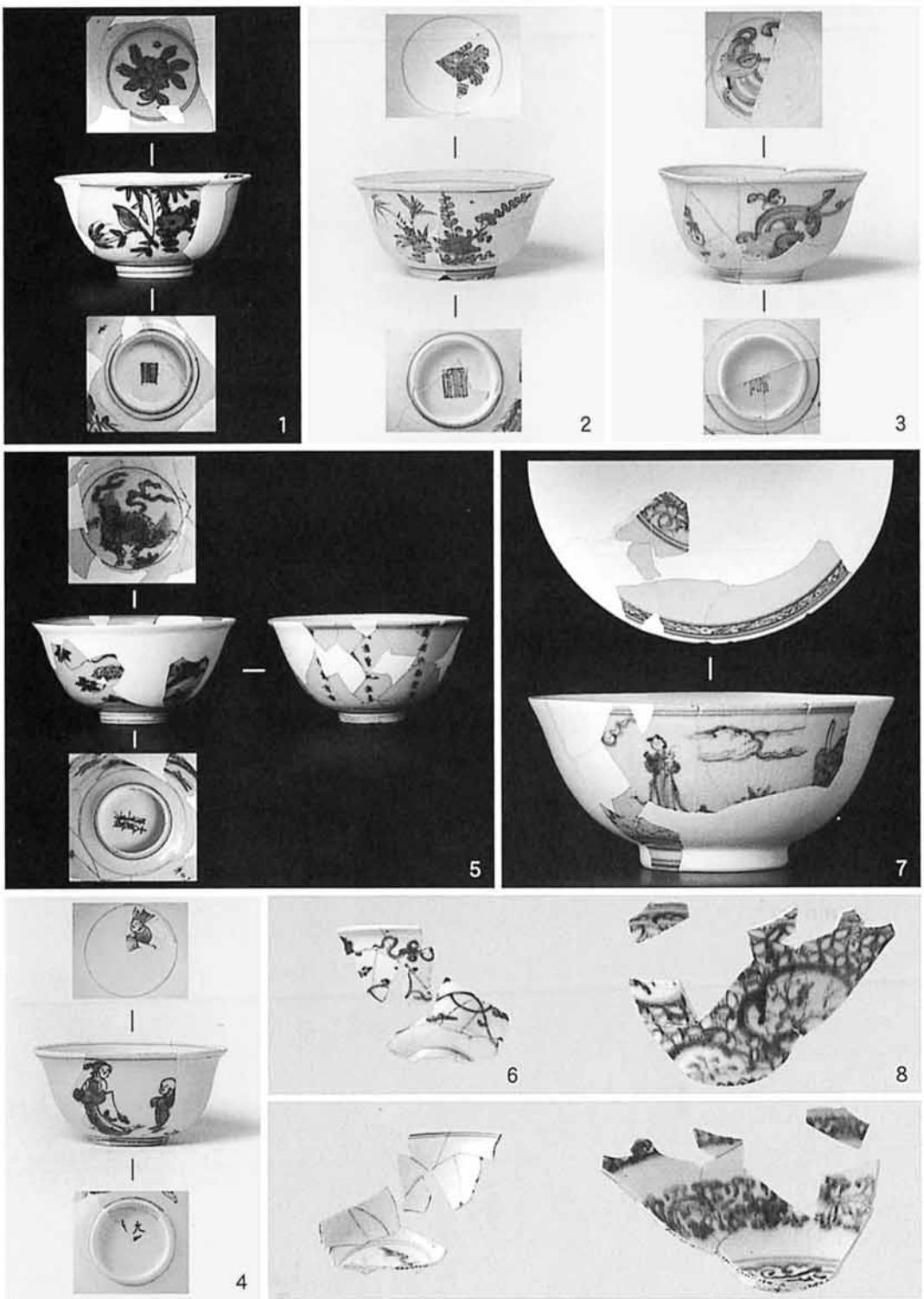


PL.80(第 65 図)　第Ⅰ～Ⅳ層出土青花碗

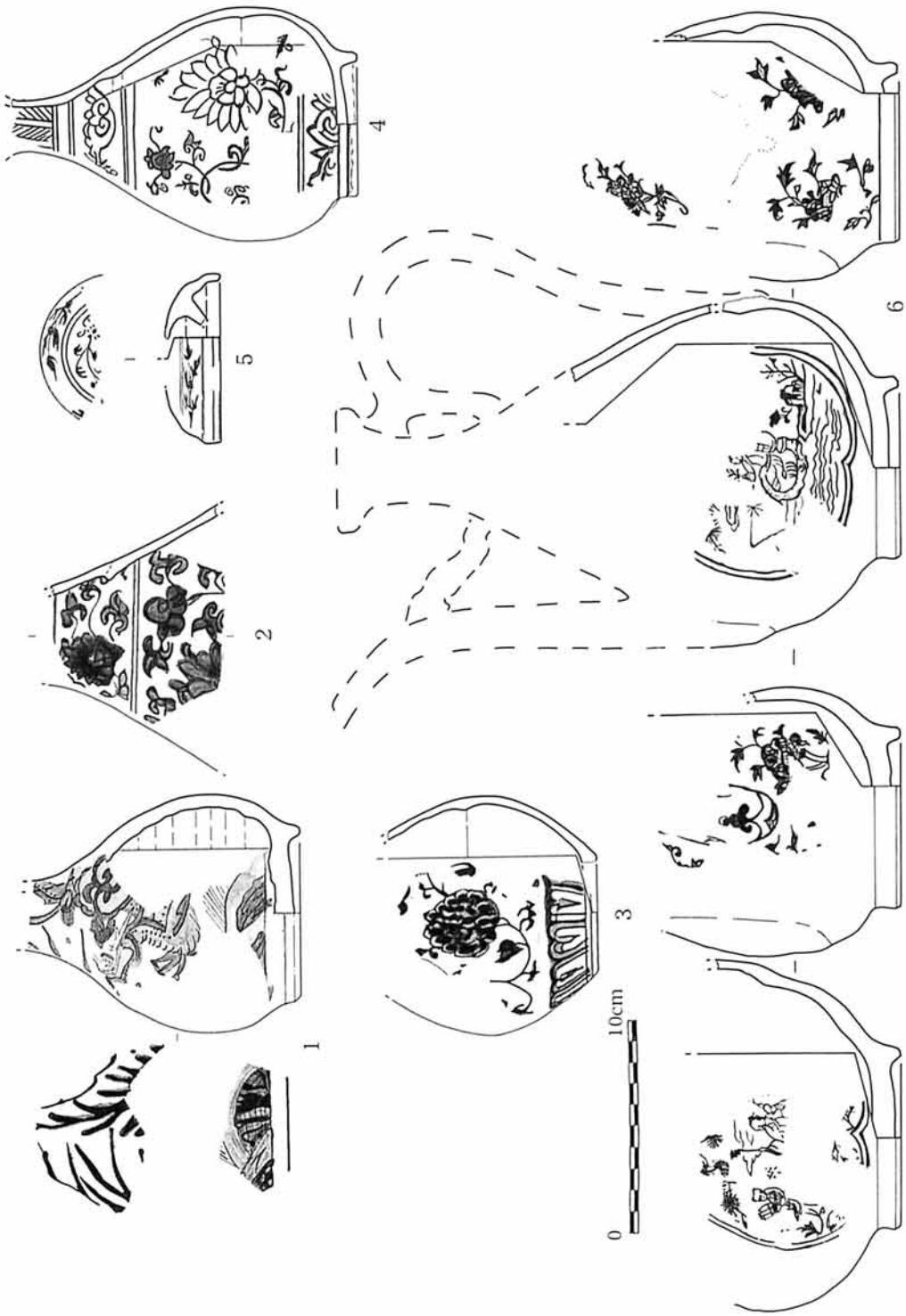


第 66 図 (PL.81)　第Ⅰ～Ⅳ層出土青花

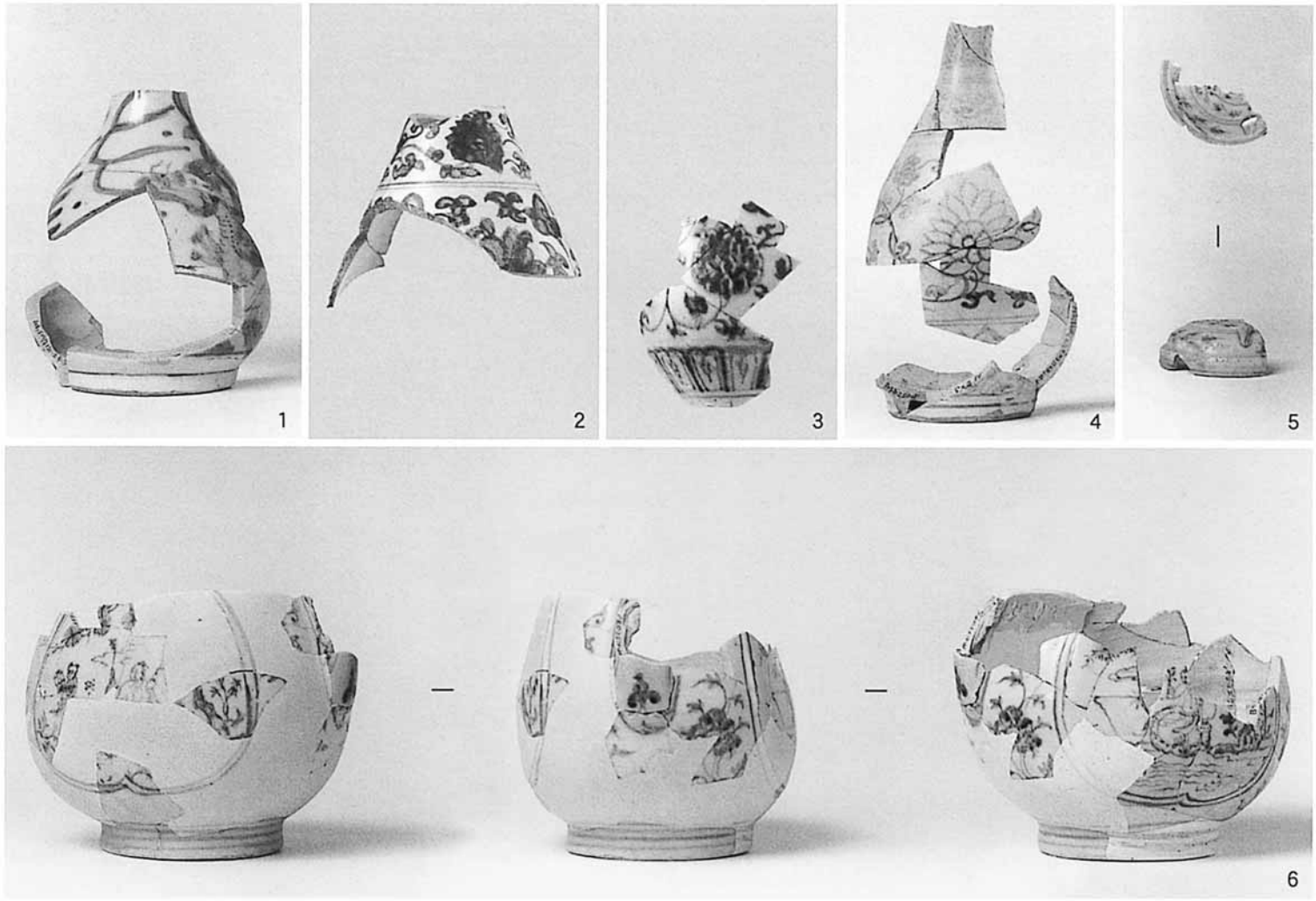
1 ～ 6. 碗　7・8. 鉢



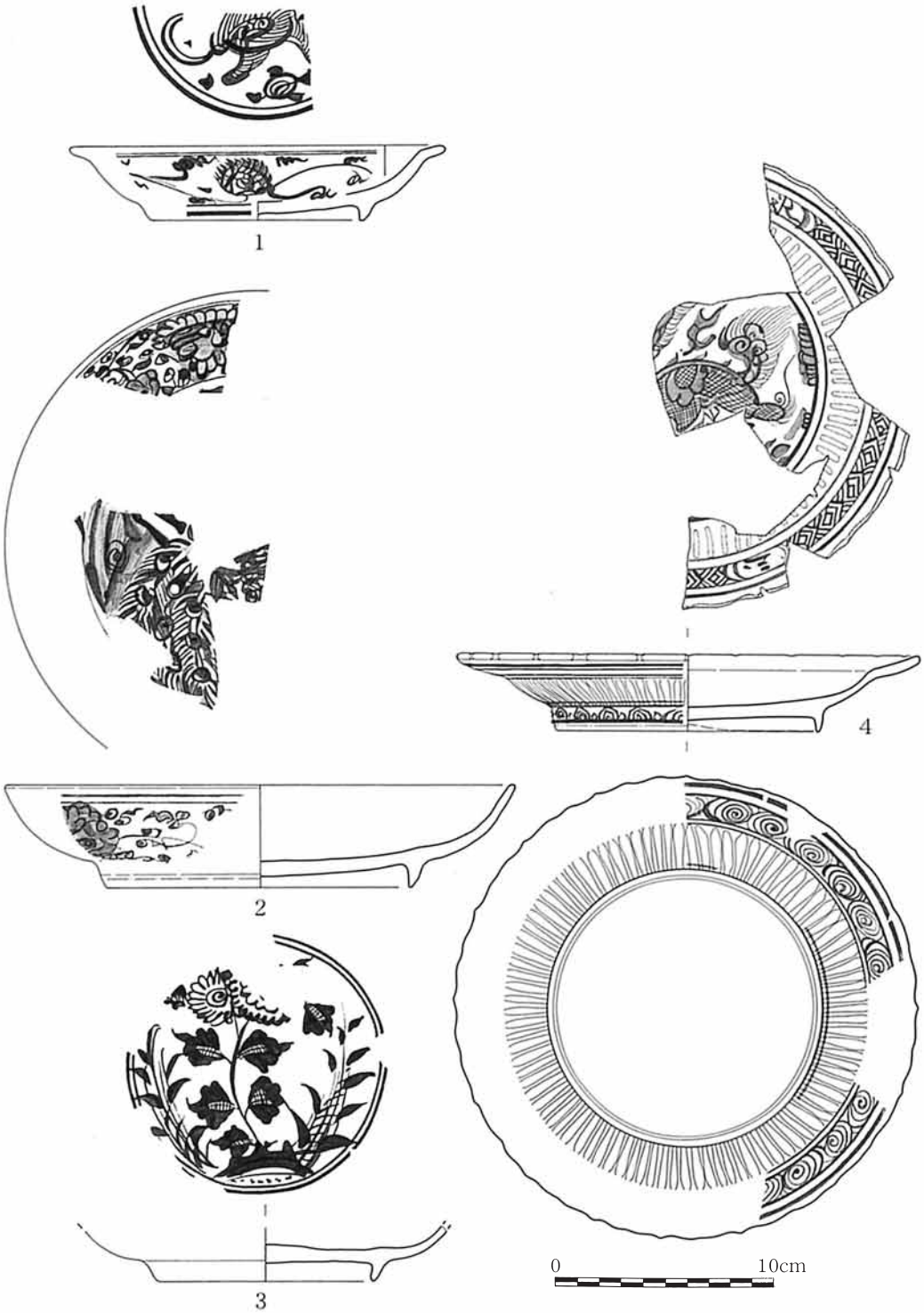
PL.81(第 66 図)　第Ⅰ～Ⅳ層出土青花
1 ～ 6. 碗　7・8. 鉢



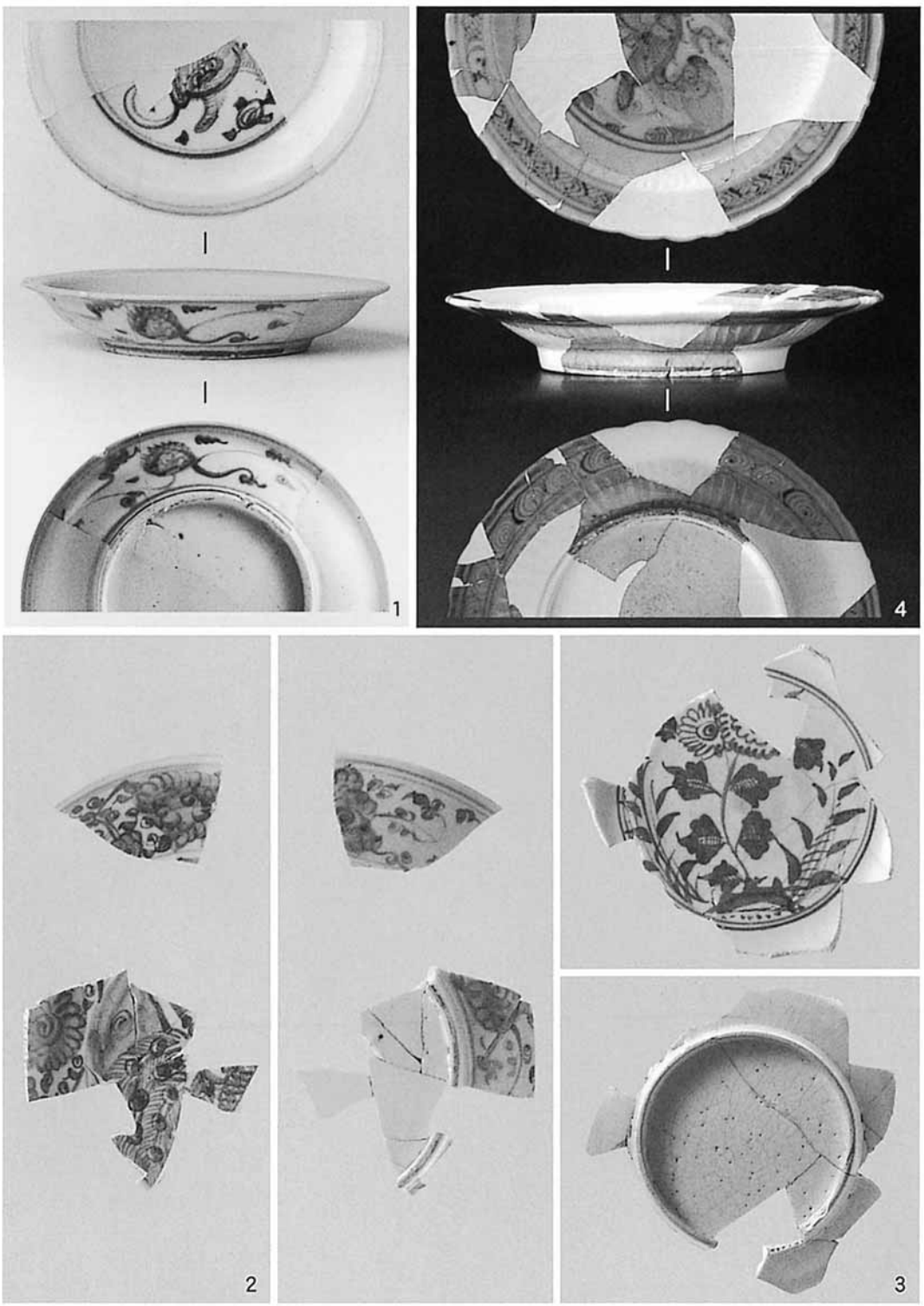
第67図(PL.82)　第Ⅰ～Ⅳ層出土青花　1～4. 玉壺春瓶　5. 蓋　6. 水注



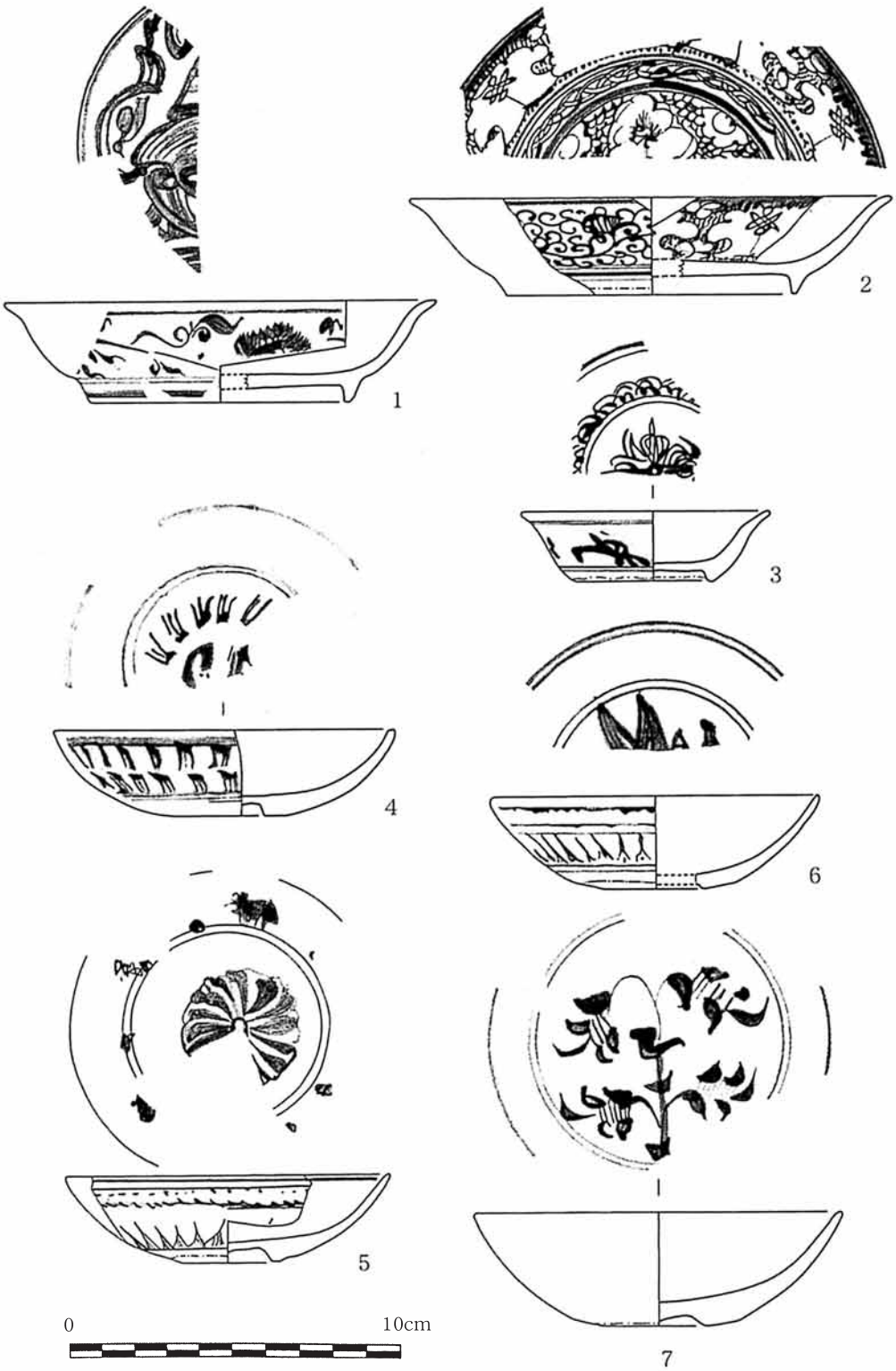
PL.82（第 67 図）　第Ⅰ～Ⅳ層出土青花　1 ～ 4. 玉壺春瓶　5. 蓋　6. 水注



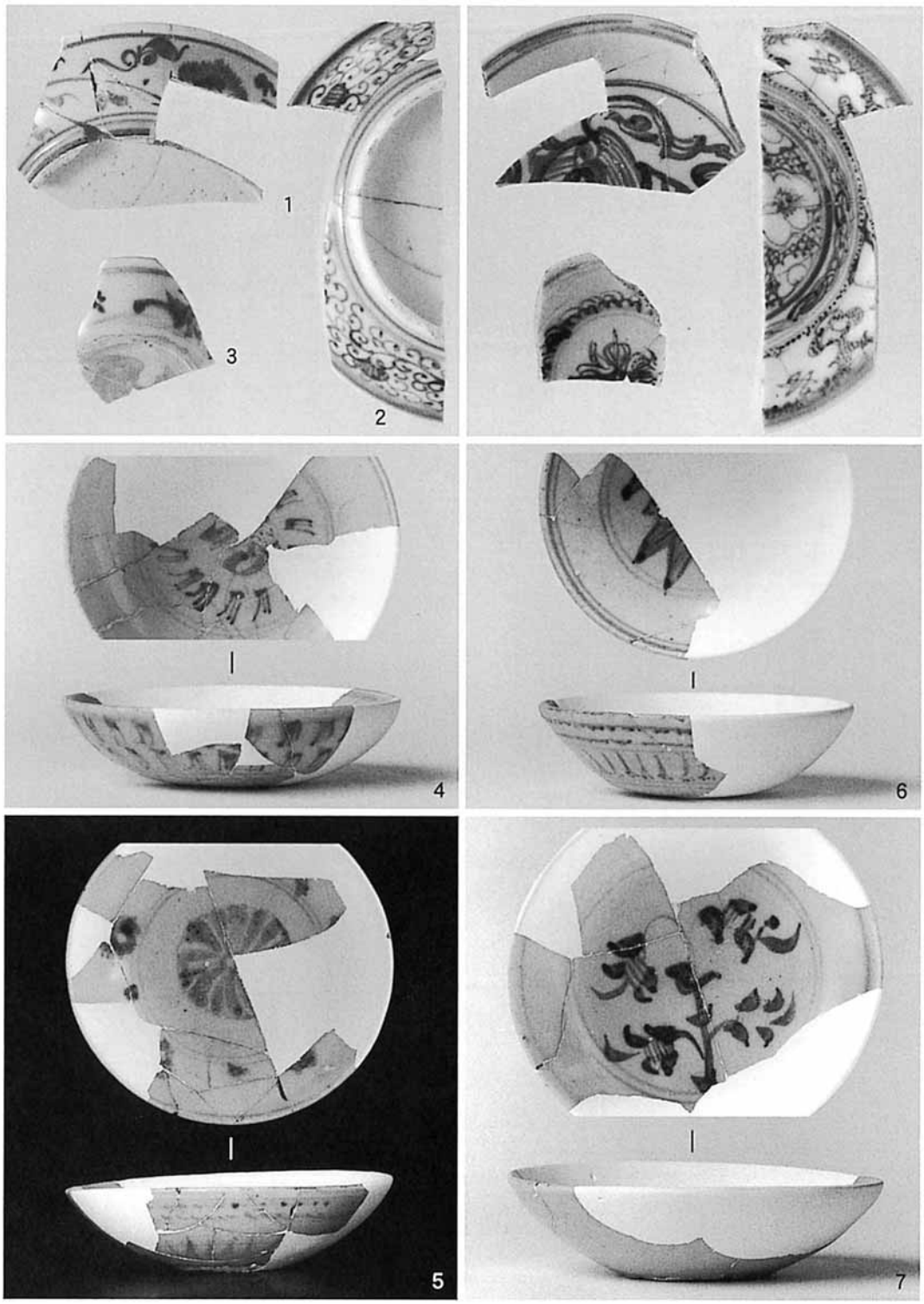
第 68 図 (PL.83)　第Ⅰ～Ⅳ層出土青花大皿（盤）



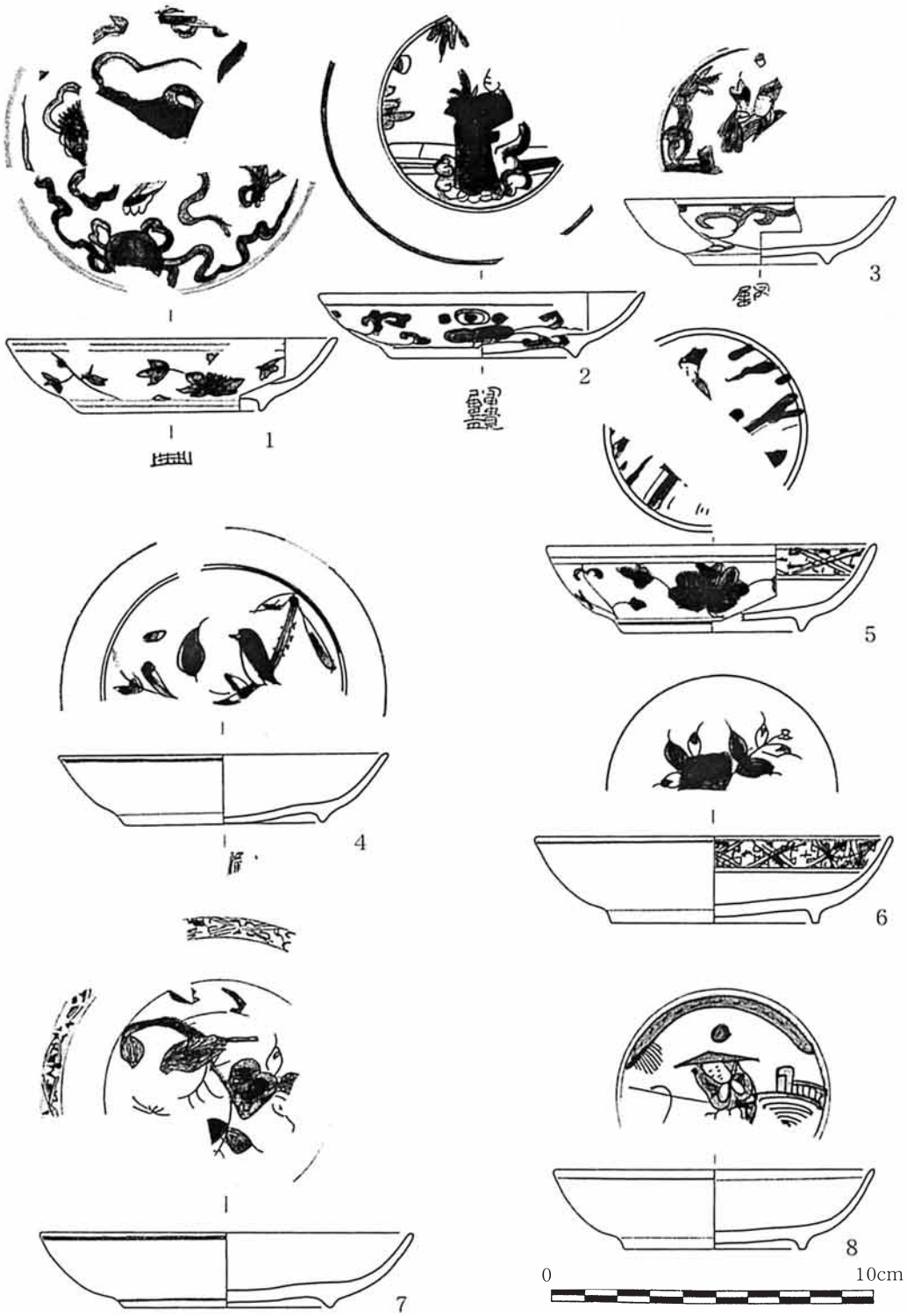
PL.83(第 68 図)　第Ⅰ～Ⅳ層出土青花大皿(盤)



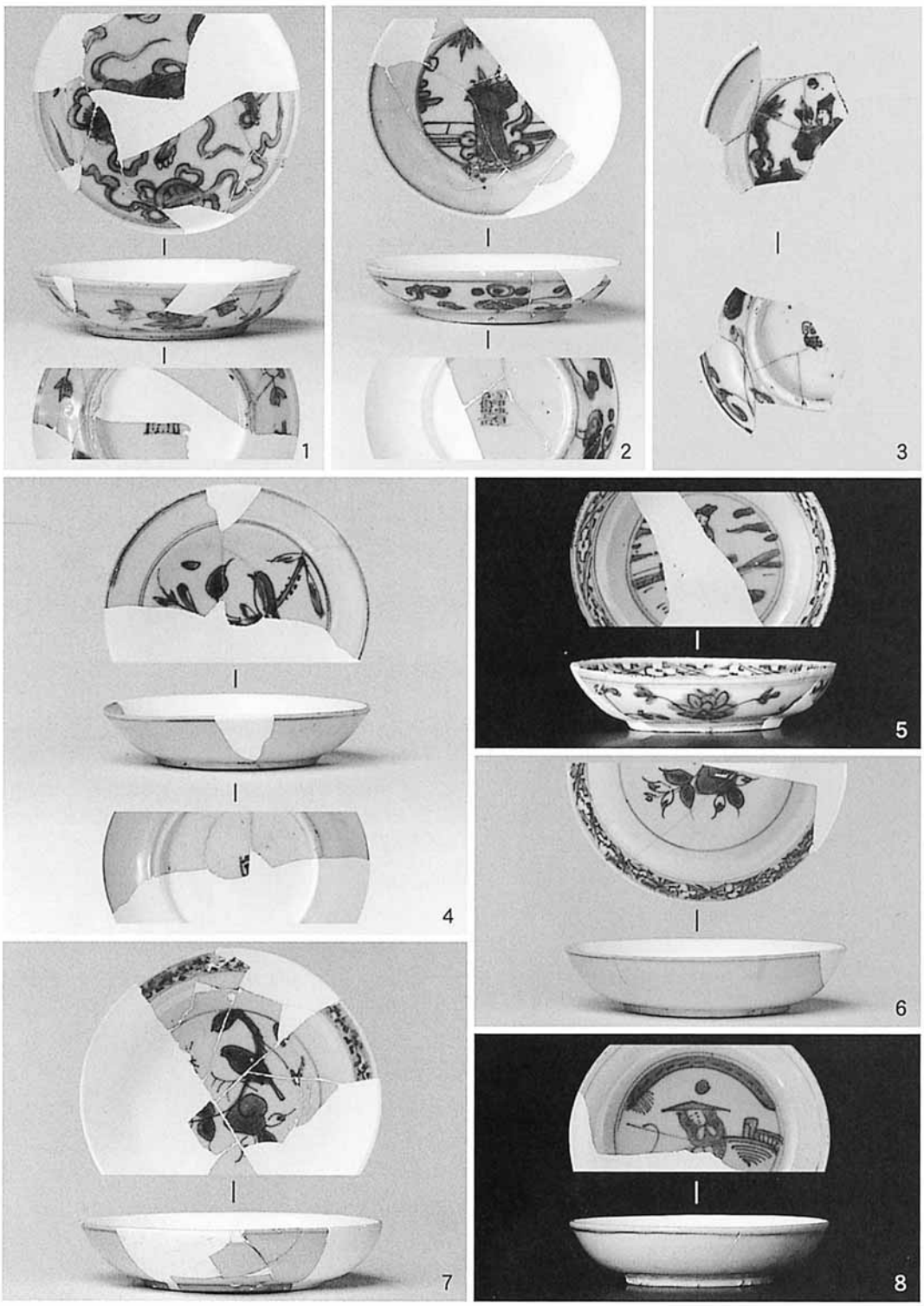
第 69 図 (PL.84)　第Ⅰ～Ⅳ層出土青花皿



PL.84(第 69 図)　第Ⅰ～Ⅳ層出土青花皿



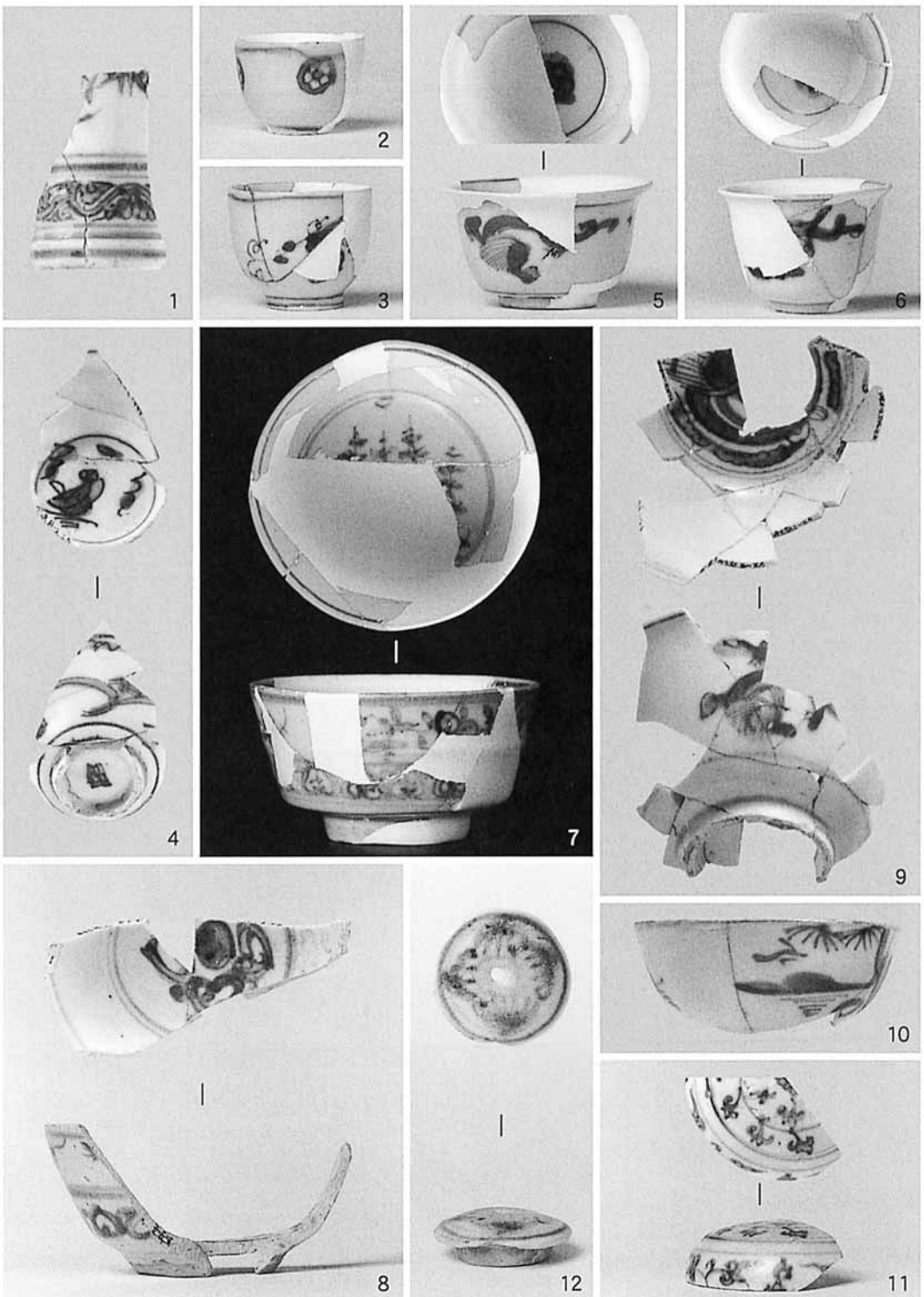
第 70 図 (PL.85)　第Ⅰ～Ⅳ層出土青花皿



PL.85（第 70 図）　第Ⅰ～Ⅳ層出土青花皿



第 71 図 (PL.86)　第Ⅰ～Ⅳ層出土青花
1. 馬上杯　2 ～ 9. 杯　11・12. 蓋



PL.86(第 71 図)　第Ⅰ～Ⅳ層出土青花
1.馬上杯　2～9.杯　11・12.蓋

黒釉（第 72 図）

黒釉陶器としたものには一部褐色釉を施すものも含まれるが、ここでは素地が精製され、いわゆる茶道具としての器を包括した黒釉として本項で紹介する。

碗－第 72 図-1 ～ 4 は最も一般的なタイプの黒釉碗で高台脇を水平に切り回した腰部から直線的に開き、口縁部は若干くびれ弱く外反する。胎土は黒色・灰白色で堅緻なものとやや黄味があり軟質なものがある。

合子－同図-6 は合子の蓋と目される資料で、外体面は黒色釉を厚く施釉し、内体面は露胎とする。

茶入れ－同図-7 尻張り茶入れ、同図-8・9 小肩衝茶入れ、同図-10 大海茶入れ、同図-12 耳付の驢蹄口、同図-11 は水注になる資料である。同図-13 は茶入れ等であると推測されるが詳細は不明。同図-14 は小肩衝茶入れの底部資料と推定され、同図-15 は尻張り茶入れの底部資料と推定される。

褐釉陶器（第 73 図～第 74 図-6）

壺－褐釉陶器は出土数が多く、一個体が大きいため遺物収納コンテで計ると約 100 箱を数える。図上復元可能なものから 9 個体と字款を確認できる胴部数点を図示した。第 73 図-1 は口縁部を小さく肥厚させる双耳壺の大品で、肩部の張りは比較的緩やかで、小さい耳が貼り付けられる。同図-4・5 は口縁部が略方形になる大形壺で、強く張る肩部には目跡が残り、胴部は同図-4 のよう不安定に立ち上がる例が多い。内外器面とも凹凸が著しいのも特徴の 1 つである。中・小型の褐釉壺は口縁部のつくりは小さく肥厚させる特徴では共有している。同図-2 は上面が小さく凹み、肩部の張りも少なく胴部はゆったりとする器形をなす無耳壺。同図-3 は肩部が明瞭で胴の張りも小さい無耳壺。第 74 図-1・2 は肩部の張りが明瞭で口縁部の肥厚も明瞭で、同図-1 は内側へも張り出す、口縁上端は凹む無耳壺、同図-2 は多耳壺である。同図-3 は口縁部を外反させる肩部の張りが明瞭な資料で大海茶入れ（第 32 図-14）に器形が近似する。同図-4 は肩の張りの弱い四耳壺で口縁は外に折れ肥厚する。同図-5・6 は胴部資料で同図-5 は「清香」、同図-6 は「天開」の字款を施す。

無釉陶器（第 74 図-7 ～ 9）

施釉されない焼締の陶器で、近世沖縄の荒焼にも近似する。混和財に石英を多く含み、粗粒子となる特徴を持つ。産地不詳だが本項で取り扱う。

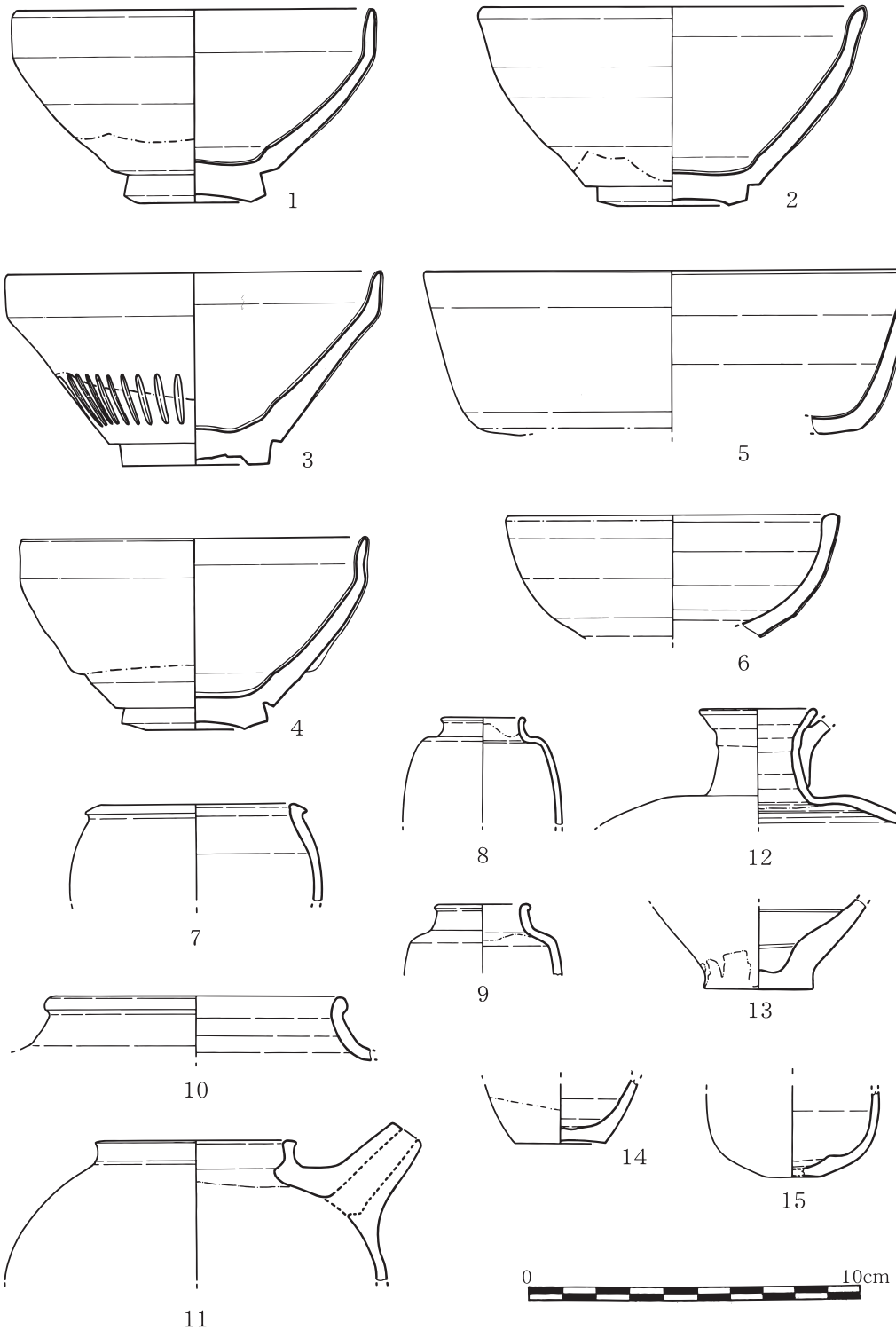
擂鉢－第74図-7は擂鉢になる資料で口縁を内側に肥厚させ、内面には9本櫛の擂目を施す。

香炉－同図-8 は香炉で口縁部は逆Ｌ字状に折れ、胴部で膨らみを持つ器形。

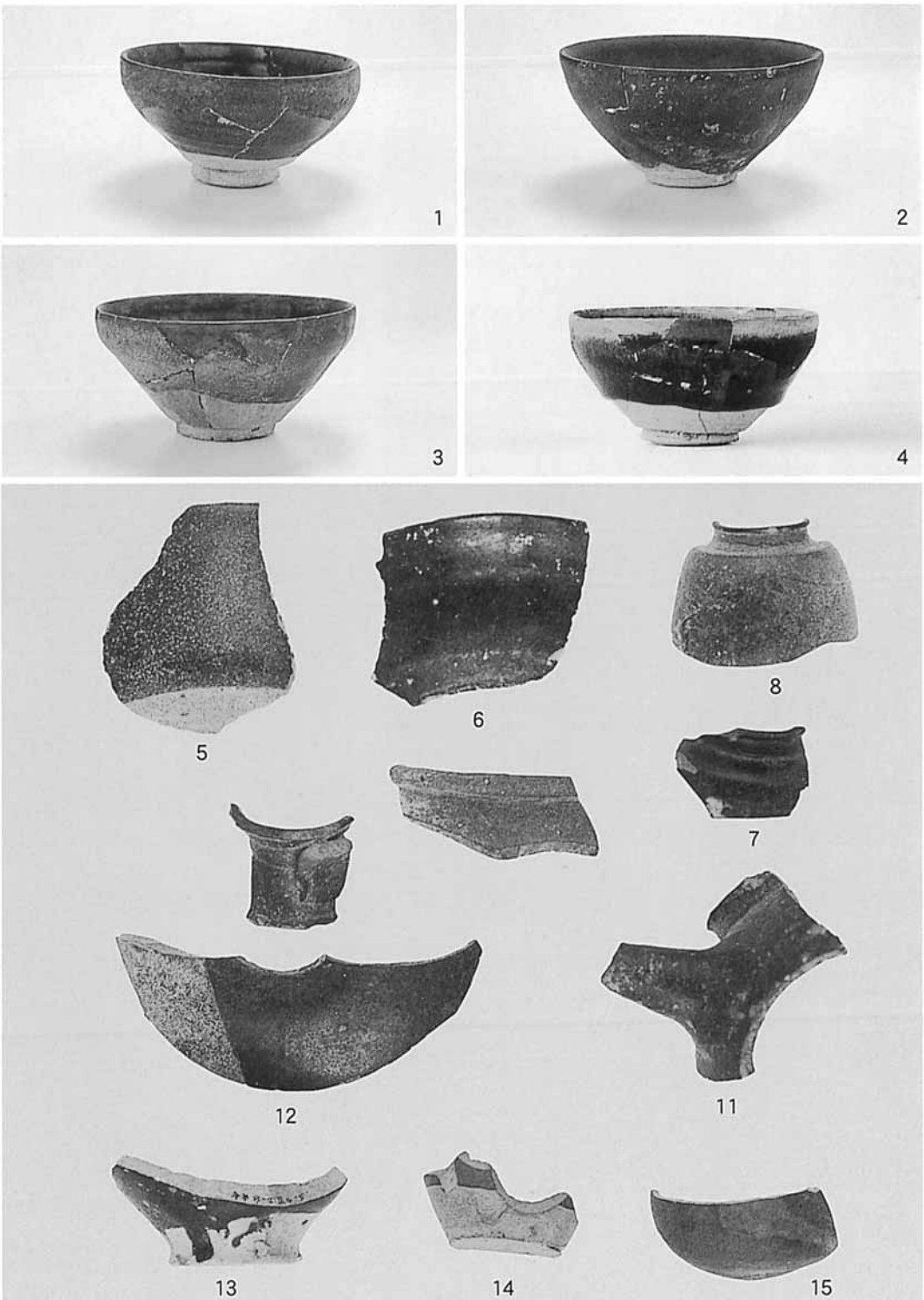
器種不明－同図-9 は大型の鉢と考えられ、口縁が内に強く折れる。

挿図番号 図版番号 枝番号	分類	器種	部位	口径 器高 底径	素地	施釉 (釉色) 貫入	文様 備考	出土地点 地点	層
第72図 PL.87 1	黒釉	茶碗		11.1 5.8 4.4	淡灰白色でやや粗粒子の素地	黒色の釉を内底から胴部中位まで施釉（貫入なし）	畳付外縁を面取り。	A-2 B-1 C-1	Ⅰ・Ⅱ上 Ⅱ上・Ⅱ下 Ⅱ・Ⅶ
第72図 PL.87 2	黒釉	茶碗		11.8 6.0 4.5	淡灰白色でやや粗粒子の素地	灰褐色の釉を厚く施釉（貫入なし）	畳付外縁に面取りを施す。	B-1 C-1	Ⅱ下・Ⅴ Ⅱ上
第72図 PL.87 3	黒釉	茶碗		11.5 5.8 4.5	淡灰白色でやや粗粒子の素地	黒・褐釉の釉を施釉（貫入なし）	口縁部のひねり返しが明瞭。腰部にトビガンナ痕が残る。畳付は水平に切られる。	A-2 A-3	ⅠⅡ
第72図 PL.87 4	黒釉	茶碗		10.6 5.8 4.4	灰白色で微粒子の素地	黒色の釉を厚く施釉（貫入なし）	口縁部のひねり返しが明瞭。畳付外縁に面取りを施す。（13号土坑最上部）	A-1	Ⅰ
第72図 PL.87 5	黒釉	碗		15.0 － －	にぶい黄橙色で粗粒子の素地	黒褐色の釉を内底から外面腰部まで薄く施釉（貫入なし）	腰部からまっすぐと口縁部に至る器形で口縁部は直立する。	F-3	Ⅰ
第72図 PL.87 6	黒釉	不明		10.0 － －	にぶい黄橙色粗粒子	黒色の釉外面に施釉器内面は露胎。	合子の身もしくは蓋と推定される資料で図化は身として復元した。	B-1	Ⅱ
第72図 PL.87 7	褐釉	壺		5.8 － －	非常に細かい暗赤褐色の泥土	黒色の釉を施釉	口径の広い茶入れ小壺。	D-1 D-2	Ⅱ上 ？
第72図 PL.87 8	褐釉	壺		2.4 － －	非常に細かい暗赤褐色の泥土	暗赤灰色の釉を施釉	肩に張りのある器形でいわゆる小肩衡の茶入れ小壺。	(A)-1	13号土坑
第72図 PL.87 9	褐釉	壺		2.6 － －	非常に細かい赤黒色の泥土	黒色の釉を施釉	肩に張りのある器形でいわゆる小肩衡の茶入れ小壺。	D-1	Ⅱ上
第72図 PL.87 10	褐釉	壺	注口部	9.2 － －	非常に細かい紫朱色の泥土	暗赤灰色の釉を施釉	口唇部を肥厚させるいわゆる大海茶入の小壺？。	F-1	Ⅰ-Ⅱ
第72図 PL.87 11	褐釉	水注		5.8 － －	暗赤灰色粗粒子の素地に粗砂含む	黒褐色の釉を外面に薄く施釉	口縁は受け口状に段を有し、注口が付く。	D-1	東ヘキ内
第72図 PL.87 12	褐釉	壺		3.4 － －	非常に細かい紫朱色の泥土	黒色の釉を器外面、口縁内面に施釉	長頸で肩部に張りのある器形で耳が付く、いわゆる耳付鑢蹄口の茶入れ小壺。	C-2 C-1	Ⅱ Ⅵ
第72図 PL.87 13	黒釉	壺	底部	－ － 3.3	灰白色の粗粒子。	黒色の厚い釉を施釉。	腰部に張りのある小壺の底部資料。	B-2	Ⅱ上
第72図 PL.87 14	褐釉	壺	底部	－ － 2.8	非常に細かい紫朱色の泥土	胴下部まで極暗赤褐色の釉が薄くかかる	茶入れの小壺でいわゆるナス形の器形。外底面には糸切底となる。	A-3	Ⅱ上
第72図 PL.87 15	褐釉	壺	底部	－ － 1.6	非常に細かい黄灰色の素地	黒褐色の釉を前面に施釉。器内は露胎	底径の小さないわゆるナス形の器形で、尻張の茶入れ小壺。	E-2	Ⅰ
第74図 PL.89 1	褐釉	壺		9.8 21.8 11.8	橙色、粗粒子の素地	胴下半、器内面は露胎。口縁上端は施釉しない	肩部に目痕が残る。頸部は屈曲し、口縁部上面は凹む。胴下半はロクロ痕が明瞭に残り凹凸を成す。	E-1 D-2 B-3	Ⅰ Ⅱ上 Ⅱ上
第74図 PL.89 2	褐釉	四耳壺		9.4 17.8 11.0	赤褐色の粗粒子の素地で、粗い混和材を含む	口縁内面から胴下半まで褐釉を施釉	口縁部は上面に溝を有し、やや張りのある肩部に耳が付く。	B-1	Ⅱ上
第74図 PL.89 3	褐釉	壺		8.7 15.1 7.9	灰褐色でやや粗粒子	暗灰黄色の釉を外底以外に薄く施釉	口縁部は肥厚し、肩部は少し張る。外底はわずかに上げ底状となり整形は雑に仕上げる。	A-1 A-2 A-3	Ⅱ上 Ⅱ上
第74図 PL.89 4	褐釉	四耳壺		9.2 18.2 11.0	灰褐～茶褐色で石英粗砂を含む粗粒子の素地	褐釉を外器面に施釉。5～10mm大に器表面が剥落しアバタ状となる	口縁を折り曲げ肥厚させ、ゆるやかな肩部に耳が付く。四耳壺？	A-1 A-2 A-3	Ⅱ上 Ⅱ上 Ⅱ上
第74図 PL.89 5	褐釉	胴部		－ － －	にぶい橙褐色で粗粒子の素地	外器面に褐色の釉を薄く施釉	字款が押印される「清香？」	E-3	西ヘキ内
第74図 PL.89 6	褐釉	胴部		－ － －	にぶい橙褐色で粗粒子の素地	外器面に暗褐色の釉を薄く施釉	字款が押印される「天開？」	E-1	東ヘキ沿い表土
第74図 PL.89 7	無釉	擂鉢		20.0 － －	灰褐～赤褐色、石灰質砂粒を多く含む素地	粗粒子の焼締陶器	口縁部を内側に肥厚させ、9本を単位とする擂目を内器面に間隔をもって施す。	B-1	Ⅰ
第74図 PL.89 8	無釉	香炉		12.4 8.7 9.9	灰褐～赤褐色、石灰質砂粒を多く含む素地	粗粒子の焼締陶器	高台付きの香炉。口縁部を逆L字状に成形。胴部は張りのある器形となる。	C-3 D-3	Ⅱ上 Ⅰ
第74図 PL.89 9	無釉	不明		38.8 － －	灰褐～赤褐色、石灰質砂粒を多く含む素地	粗粒子の焼締陶器	広い口径の器で、器種は不明。口縁部を内側に折る。	B-1 C-1	Ⅱ上 Ⅱ上

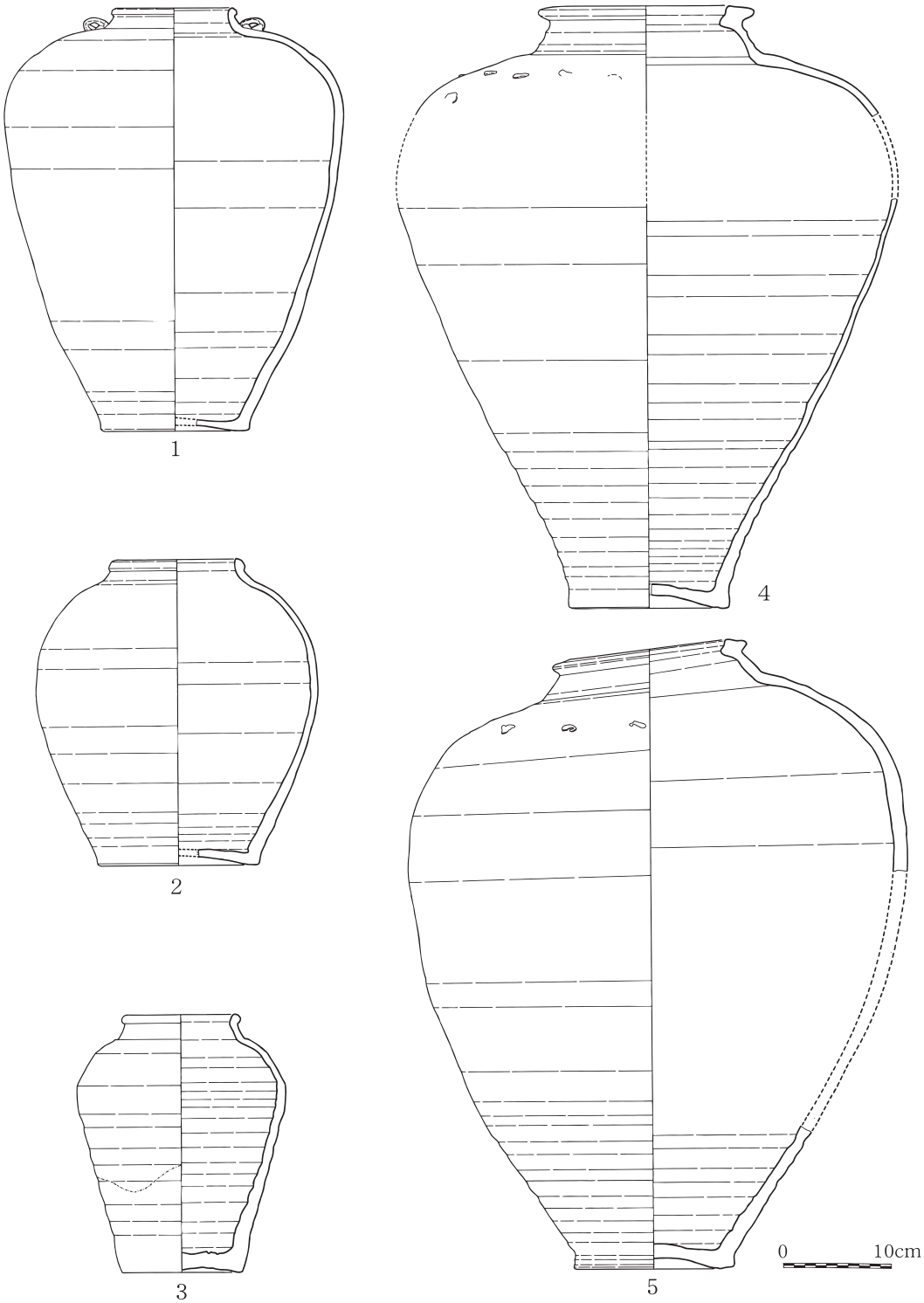
第52表　陶器観察表



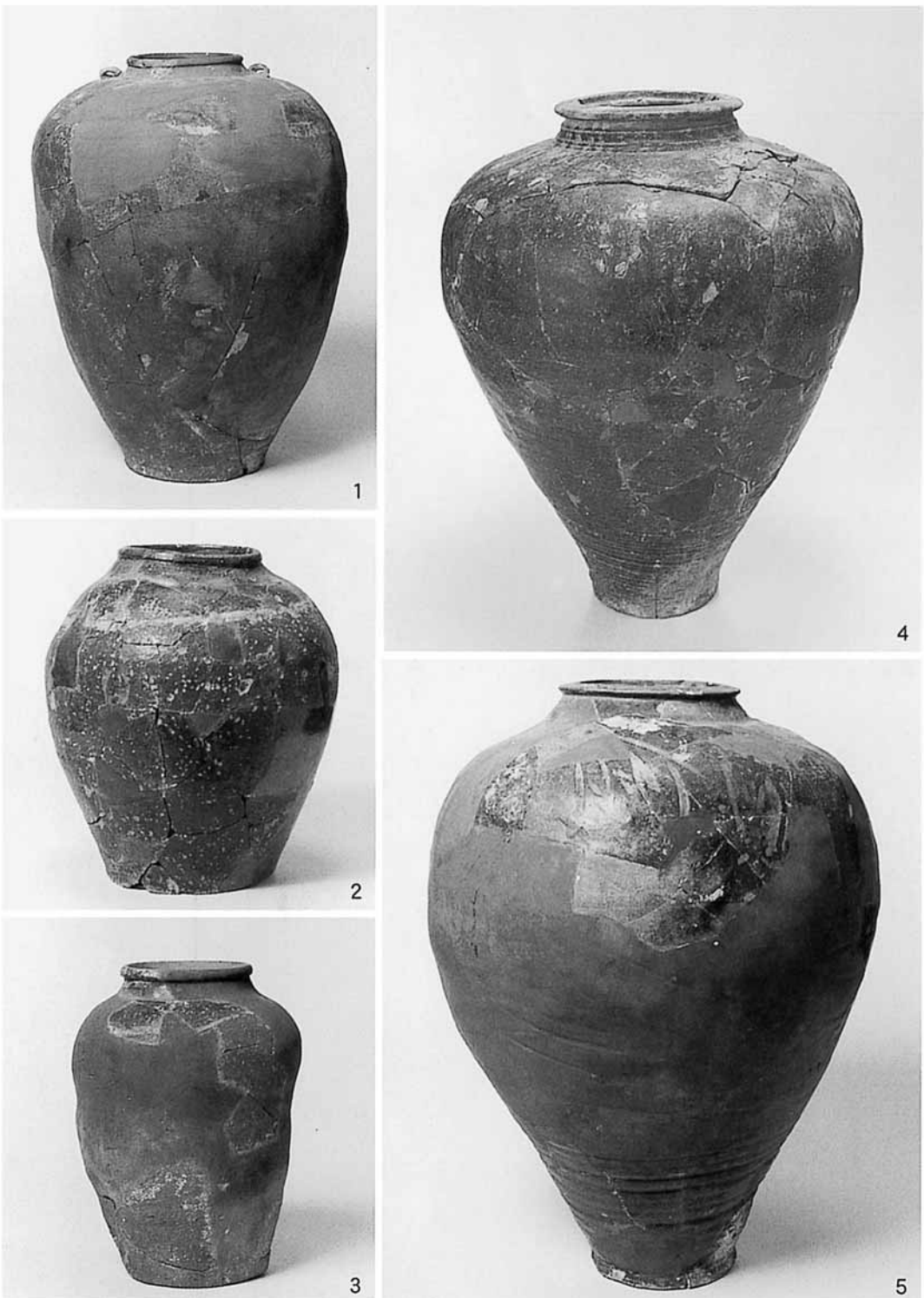
第 72 図 (PL.87)　第Ⅰ～Ⅳ層出土黒釉陶器・褐釉陶器



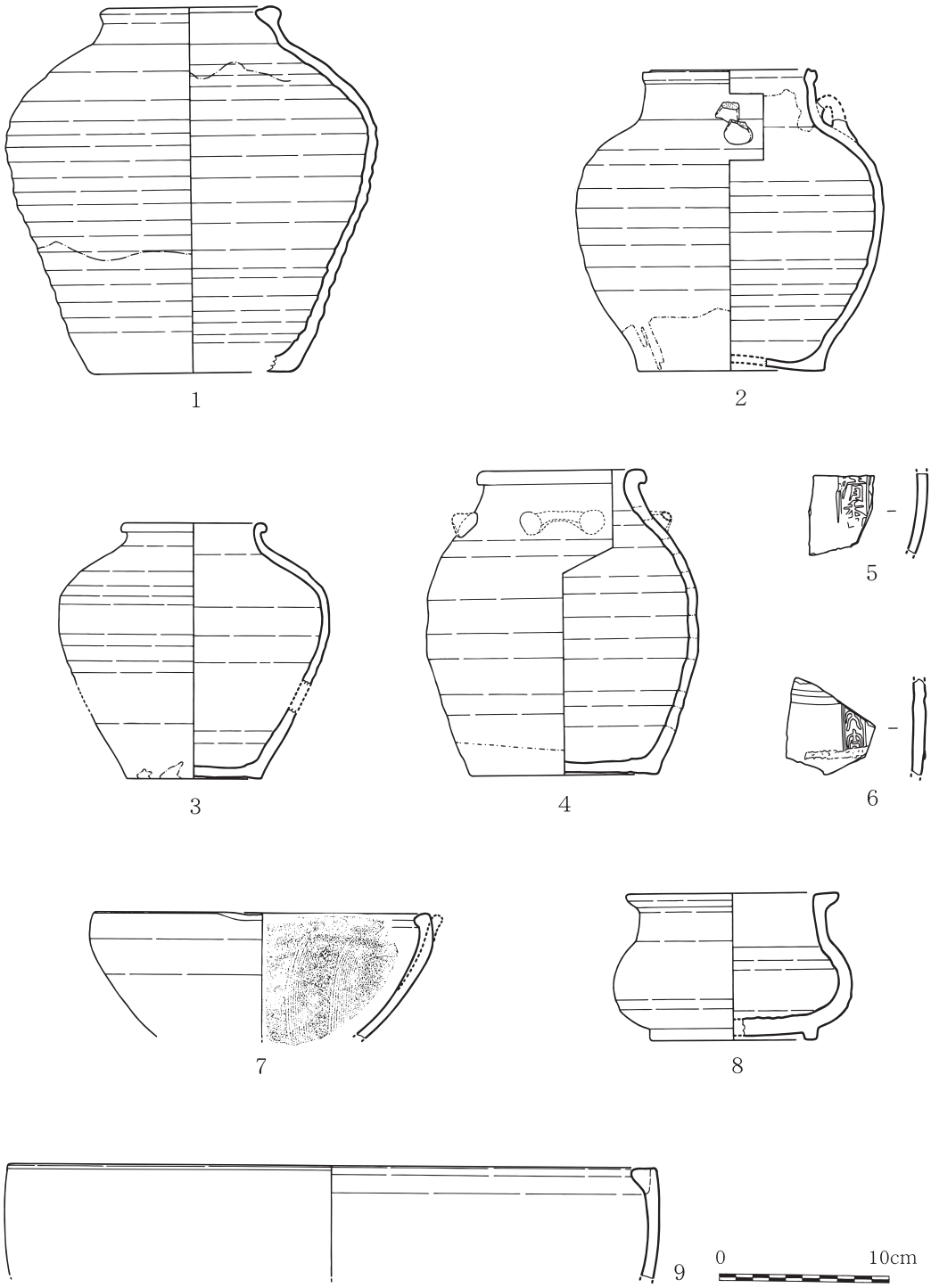
PL.87(第 72 図)　第Ⅰ～Ⅳ層出土黒釉陶器・褐釉陶器



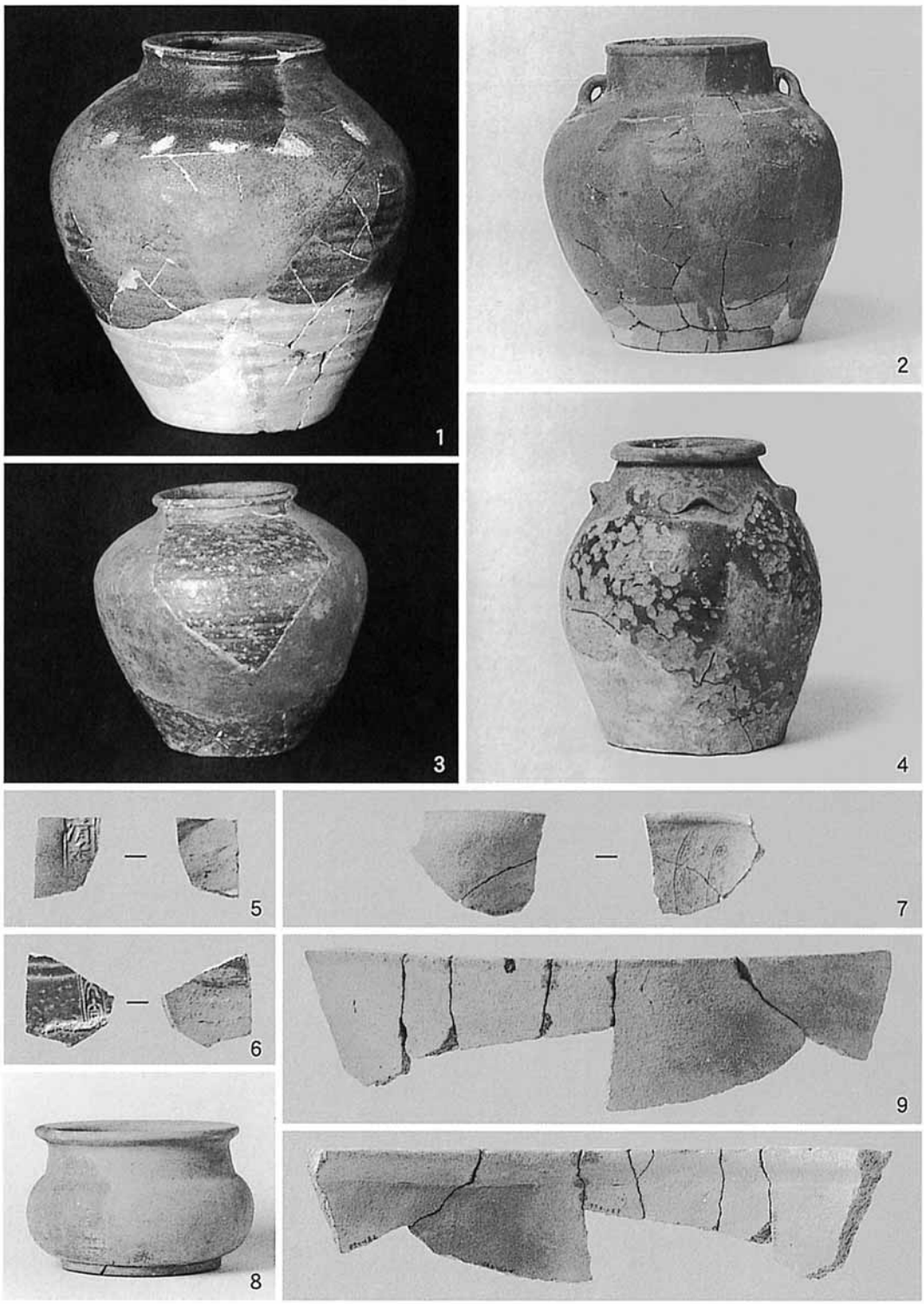
第 73 図 (PL.88)　第Ⅰ～Ⅳ層出土褐釉陶器壺



PL.88(第 73 図)　第Ⅰ～Ⅳ層出土褐釉陶器壺



第 74 図 (PL.89)　第Ⅰ～Ⅳ層出土褐釉陶器・無釉陶器　1 ～ 4. 褐釉陶器壺　5・6. 同胴部
7. 無釉陶器擂鉢　8. 同香炉　9. 同鉢



PL.89(第 74 図)　第Ⅰ～Ⅳ層出土褐釉陶器・無釉陶器　1 ～ 4. 褐釉陶器壺　5・6. 同胴部
7. 無釉陶器擂鉢　8. 同香炉　9. 同鉢

色絵（五彩）（第 75 図）

碗－直口口縁、外反口縁に大別され、文様は白磁釉の上に絵付けし、呈色剤は風化のため剥落し本来の色調を失う。第 75 図-1 は比較的薄手の直口口縁の碗、外面胴部の草花文を描き口縁部の界線で区画し、内面口縁部に四方襷文を施している（B-1 Ⅱ上、B-2 表土）。同図-2 は外反口縁碗で外面に草花文を描く（B-1 Ⅱ）。

皿－同図-3 は底部の破片で広い見込みに宝草華唐草が描かれる（F-3 方形石囲内）。

杯－同図-4 は口縁部で端反になり口唇を肥厚される杯（もしくわ小碗）資料で、外面に宝草華唐草、見込みに花文が描かれる（B-2 Ⅱ上、B-3 Ⅱ上）。

鉢－同図-5 に図上復元した鉢は口唇部を欠くがほぼ全形の窺える資料で、内外面及び見込みには大振りの花唐草が描かれる（B-1 Ⅱ上、D-2 表土、E-2 Ⅱ上ほか）。

器種不明－同図-6 は玉壺春瓶あるいは水注と推定される底部資料で、腰下部にラマ式蓮弁文、胴部主文様は不明だが宝草華唐草と思われる文様が描かれる。高台内に砂が付着する（A-2 南壁沿い表土、C-1 Ⅱ上、(A)-1，10 号土坑）。同図-7 は宝草華唐草が描かれる胴部資料である（B-1 表土）。同図-8 は底部資料で腰下部には蓮弁文が描かれ、高台は小さくやや上げ底になる器形である。

三彩（第 76 図 1 ～ 3）

壺－同図-2 は壺類と考えられ、浜の館[註47]で出土する標品や、悪石島で保有[註48]される長胴丸壺と類する標品と推測する。無文の部分は緑釉が掛けられ、胴部文様は不明だが、腰下部は崩れた如意頭文が描かれ黄・茶色の釉が施釉される、推算底径 5.5cm（D-1 表土・Ⅱ、B-1 Ⅱ上、C-1 表土Ⅱ上ほか）。

水注－同図-3 は鶴形水注で形造りで製作される（B-2・3 Ⅱ上）。豊見城村内の伝世資料[註49]が近似資料として知られ、村内でも鴨形水注を中城ノロが伝世品として所有しており、その用途を推定する上で興味深い。

器種不明－第 76 図-1 は不明の胴部資料で円形の貼り付け文が施され、周囲を獅子と推測される文様が線刻される（(A)-1，10 号土坑下部）。

緑釉（第 76 図-4 ～ 6・第 77 図-1 ～ 3）

壺－第 76 図-4 は壺の胴部で線彫りで花文が描かれる。同図-5・6 は小壺の口縁、底部資料で同一個体と判断され、胴部に蓮弁文が描かれる（B-1・2 Ⅱ上）。

玉壺春瓶－第 77 図-1 は玉壺春瓶で内器面は露胎し、外器面は白化粧を施した上に緑釉を高台脇まで施す。胴部主文様は宝相華唐草、腰部の 2 重界線、腰下部には如意頭文が線刻される（D-1 Ⅰ～Ⅱ、B-1 表土・Ⅱ、B-2 Ⅱ上ほか）。同図-2・3 は同一個体と思われる資料で、口径 3.5cm（A-2 Ⅱ上、D-3 表土、B-3 Ⅱ上ほか）、後者は推算底径 8cm（B-2 Ⅱ、C-2 表土・Ⅱ上ほか）。

翡翠釉（第 77 図 4 ～ 8）

皿－第 77 図-4 は赤褐色の陶胎素地の資料で、推算口径 13.8cm、器高 2.3cm、底径 6.5cm を計る（B-1 表土、B-2 Ⅱ上ほか）。同図-5 は推算口径 16.9cm、器高 3.6cm、底径 9.0cm を計り、白色微粒で堅い磁胎の資料で、薄い翡翠釉が施され、内底面は白磁釉が施される（A-2 表土、C-2 Ⅱ上、B-1 Ⅱ上、4 号土坑、今志第 3 テラスⅡほか）。いずれとも器肉が

薄手の底部から直線的に外開きになる端反の皿で、白化粧の上に青色の翡翠釉がかかっているがいずれも風化は著しく剥落している。

壺－同図-6 ～ 8 は翡翠釉の酒会壺で同図-7・8 は口縁部（前者大庭表採集、後者 B-3 Ⅱ上ほか）、同図-6 は肩部資料で同一個体と考えられる（A-1 Ⅱ上）。素地はベージュ色粗粒子で半磁胎、白化粧の上に翡翠釉が施される。肩部には鉄絵で文様が描かれるがモチーフは不明である。同図-11 は施釉した箇所が認められない底部資料だが、素地が当該資料壺に近似する、やや上げ底状になる底部資料である（A-2 南壁沿表土）。

黄釉（第 77 図-9）

玉壺春瓶－第 77 図-9 は黄色の釉を施す資料で、黄釉として報告する。玉壺春瓶の頸胴部資料で頸部に界線を廻らせ、唐草文が線刻される（東斜面）。

鉄絵（第 77 図-10）

壺－第 77 図-10 は褐色釉を施す陶器と近似するが、鉄絵を描く資料である。壺の肩部資料で草花文が筆で描かれる（A-1 表土、11 号土坑）。

瑠璃釉（第 78 図-1・2）

玉壺春瓶－第 78 図-1 は瑠璃釉の玉壺春瓶で一個体として図上復元した、復元資料は口径 4.4cm、器高 24.0cm、底径 7.5cm を推算し、外面は瑠璃釉が厚めに掛かり、内面は白色釉が胴上半と底に掛かる（A-1 Ⅰ、A-2 南壁沿い表土、A-2 Ⅱ上、B-1 Ⅱ上、B-1 表土、西壁内ほか）。

碗－同図-2 は瑠璃釉の端反碗で 1 個体を図上復元した。見込みは凹み口縁端部で外反する。白色微粒子の磁胎で白磁釉が施される。外面は瑠璃色の釉が厚めに施釉される（口縁部は今志第 6 テラス表土、底部は B-2 Ⅱ上、B-1 Ⅱ上ほか）。

韓　国　陶　磁

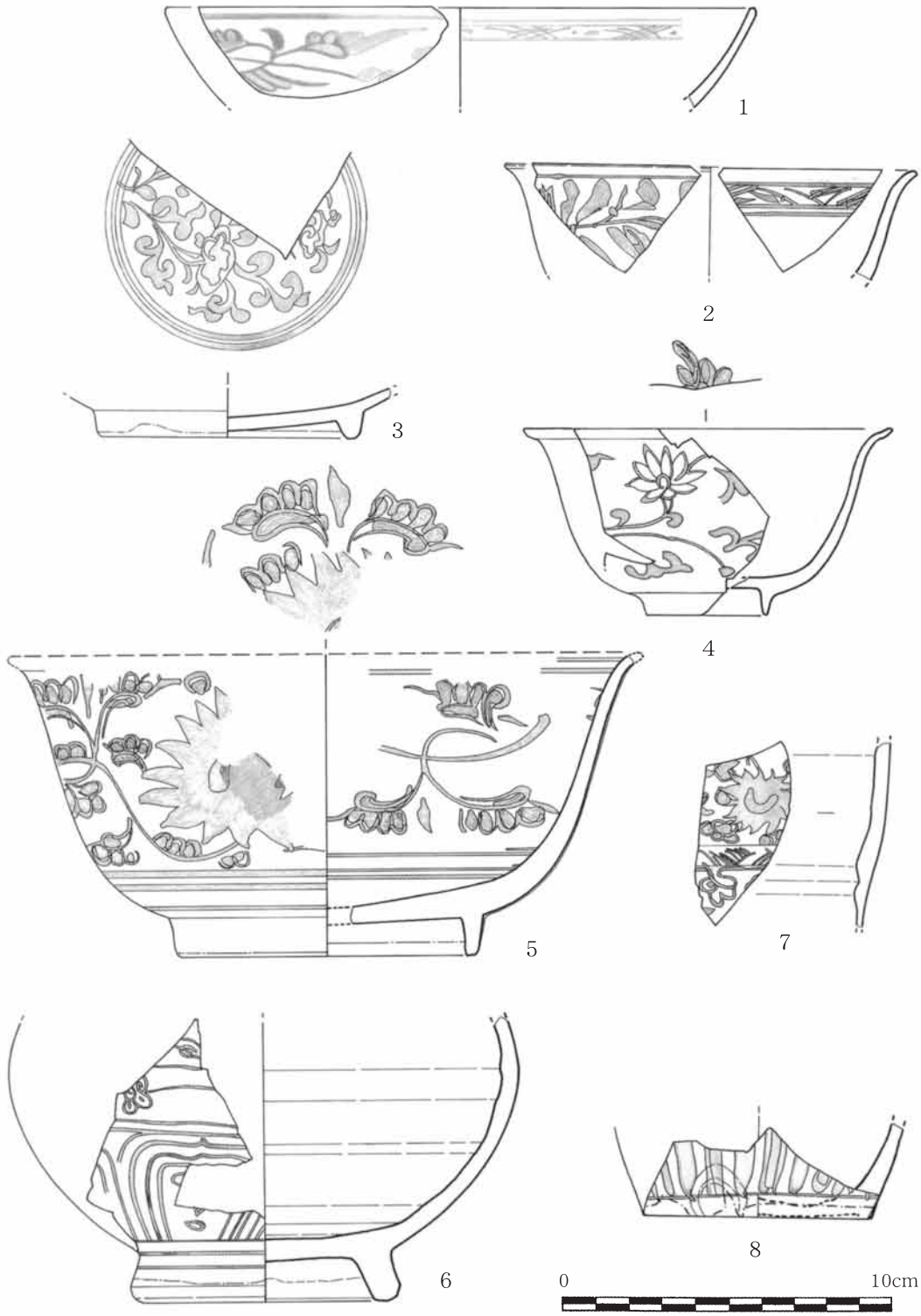
象嵌青磁（第 78 図-3 ～ 7）

瓶－第 78 図-3 は象嵌青磁で梅瓶等袋物の胴部資料と推測される。文様は花弁を白土で雄しべを黒土で象嵌し花文を描く。内面は露胎にしている（A-2 Ⅰ）。

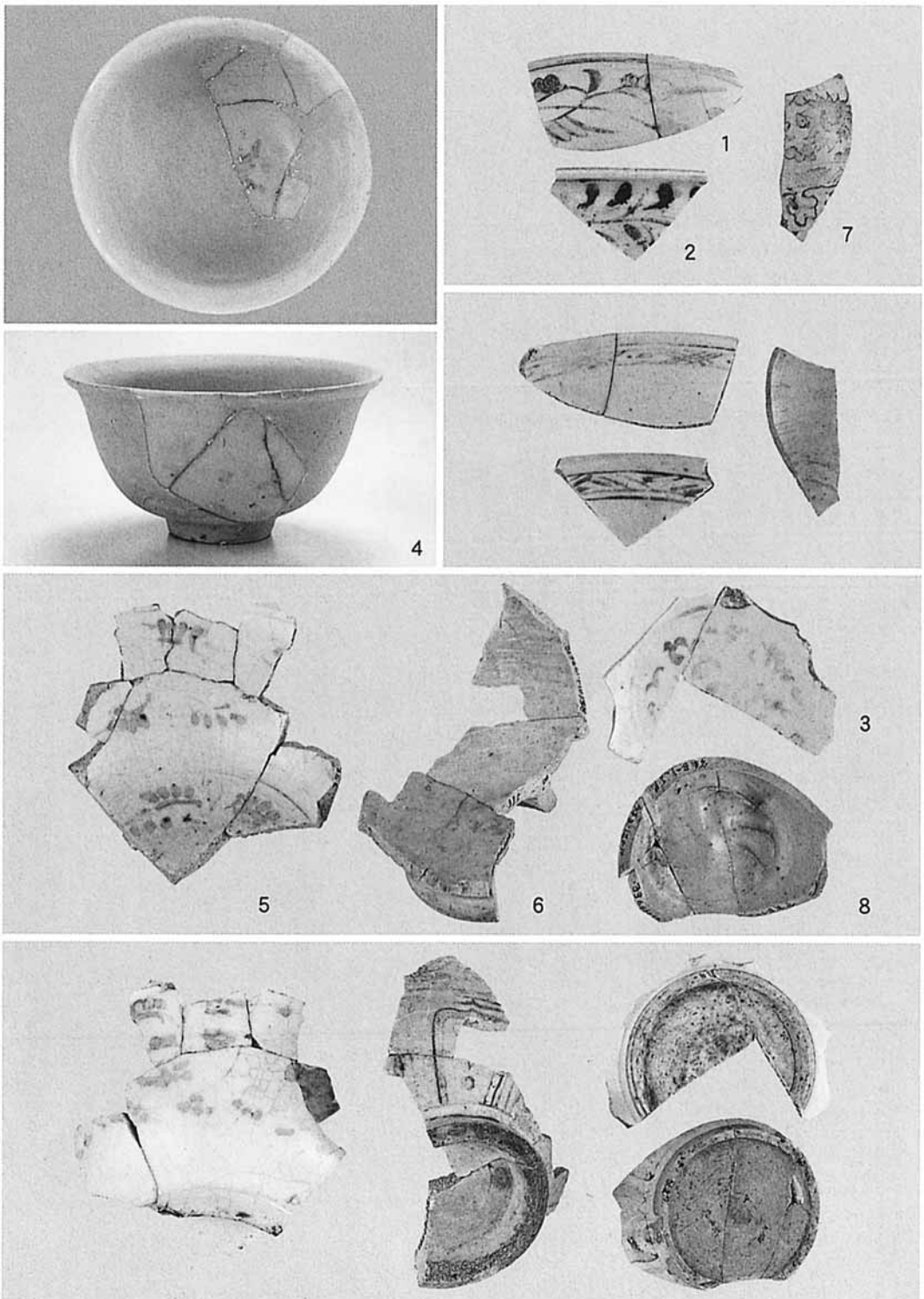
碗－同図-4 は外反の碗で志慶真門郭で出土した資料と同タイプのものである、推算口径 18.0cm を計る（E-2 Ⅱ上）。同図-5 は器高が浅くなる口径の広い碗で（B-1 Ⅱ下、B-2 Ⅱ下、C-1 Ⅳほか）、同図-6 は比較的小さな碗で推算口径 12.0cm を計る、内面には白土と黒土で梅花文が描かれる（C-3 表土、D-3 Ⅱ上ほか）。同図-7 は碗の底径 6.4cm の底部資料で全体に薄い青磁釉を施す。見込みは凹み重ね焼きの胎土目が残る（西壁内）。

註文献

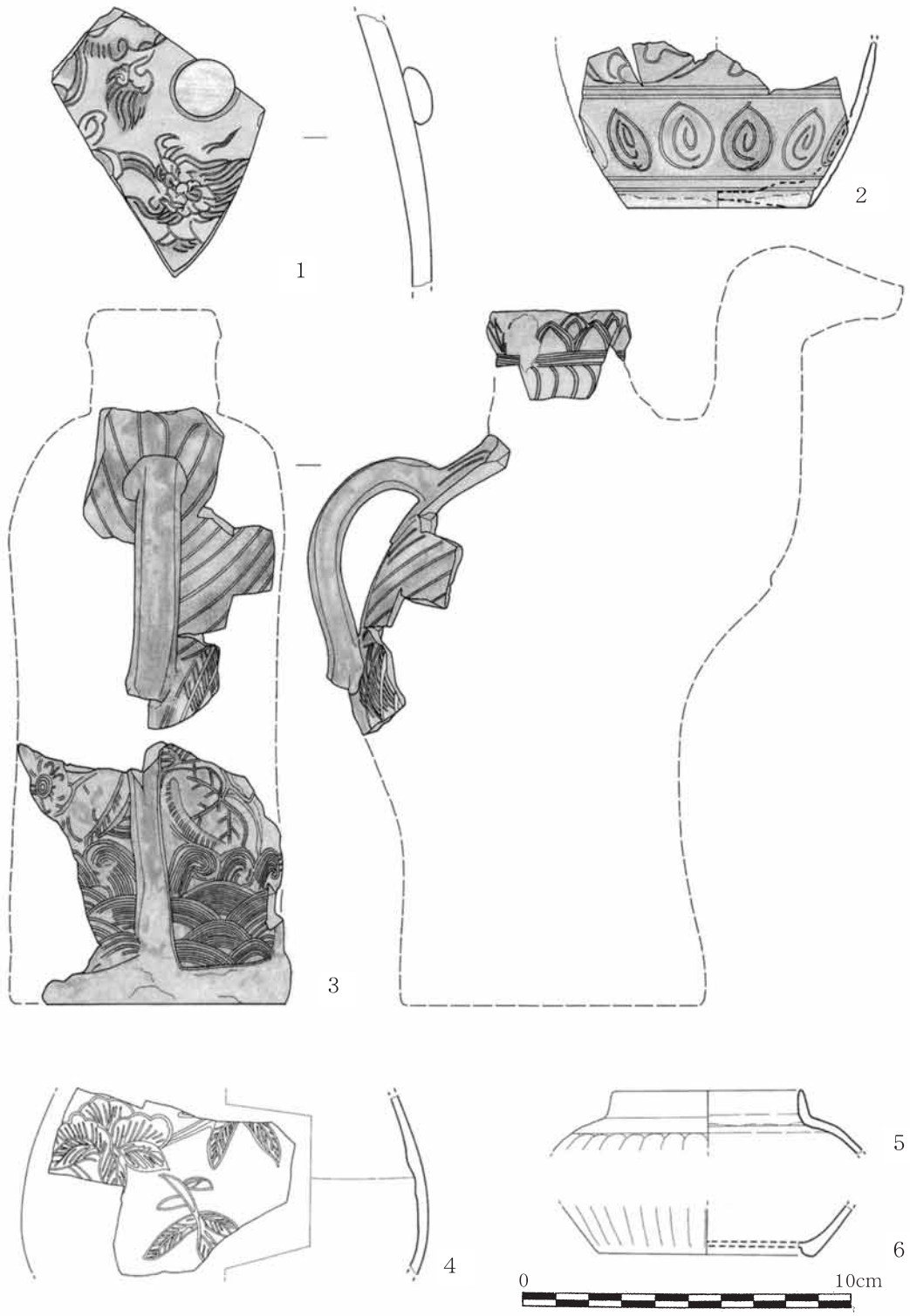
47. 熊本県立美術館編　1980 年『中国陶磁器の美　熊本県出土の中国陶磁　熊本明新聞社　熊本県立美術館』
48. 亀井明徳　1985 年「明代華南彩釉陶をめぐる諸問題」『三上次男博士喜寿記念論集　陶磁編』平凡社
49. 金城亀信 1990 年「豊見城村内確認の明代三彩鶴型水注」『文化課紀要』第 6 号　沖縄県教育委員会文化課



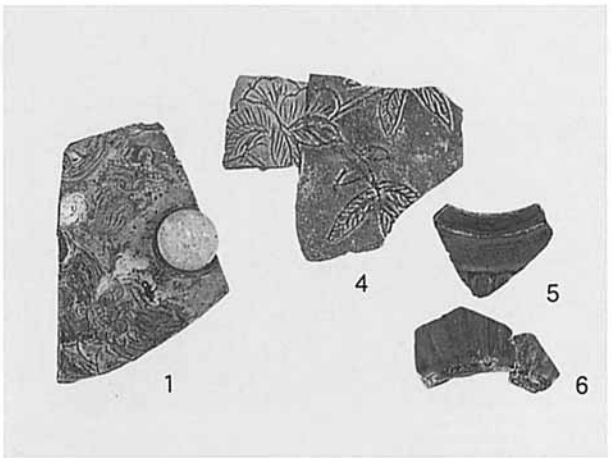
第 75 図 (PL.90)　第Ⅰ～Ⅳ層出土色絵磁器　1・2. 碗　3. 皿　4. 杯　5. 鉢　6 ～ 8. 袋物



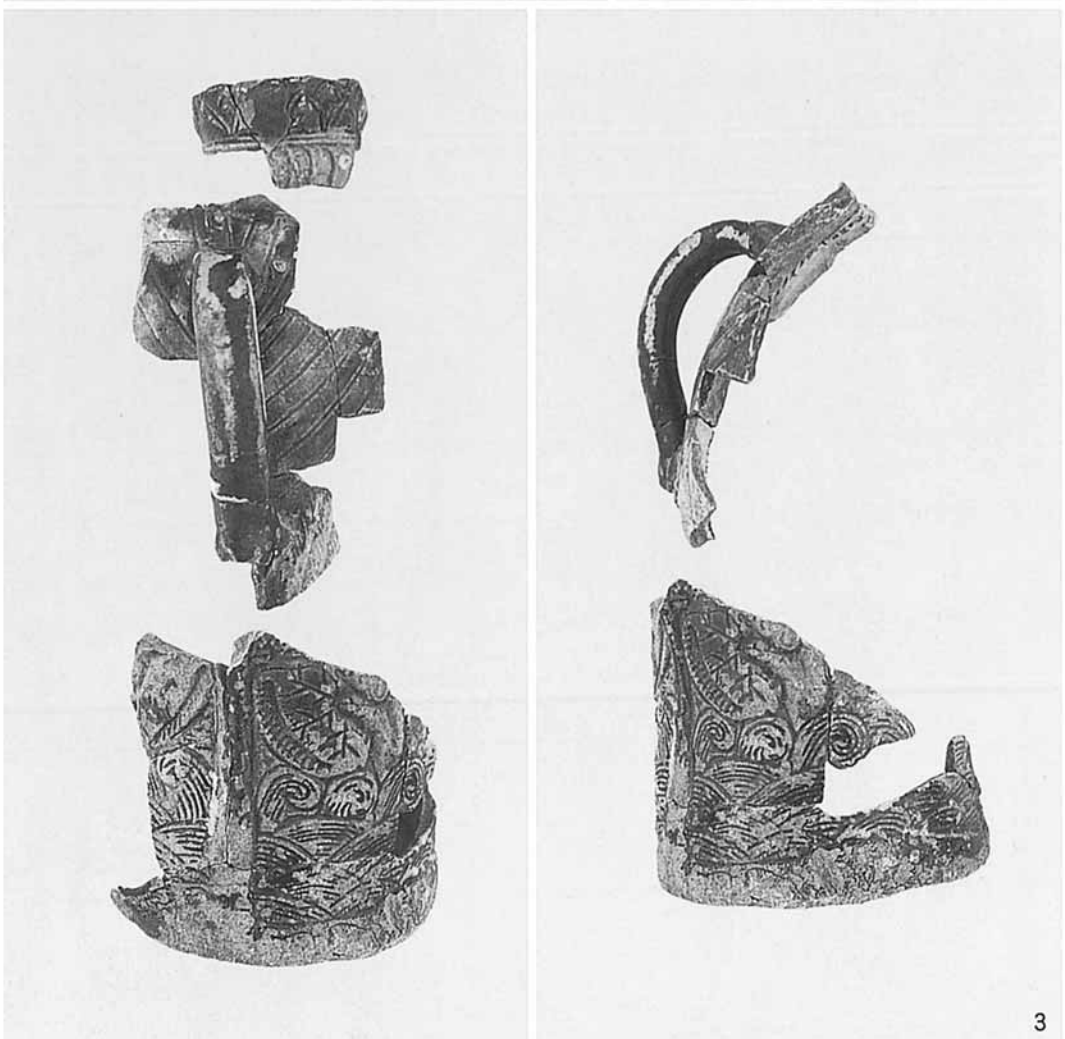
PL.90(第 75 図)　第Ⅰ～Ⅳ層出土色絵磁器　1・2. 碗　3. 皿　4. 杯　5. 鉢　6 ～ 8. 袋物



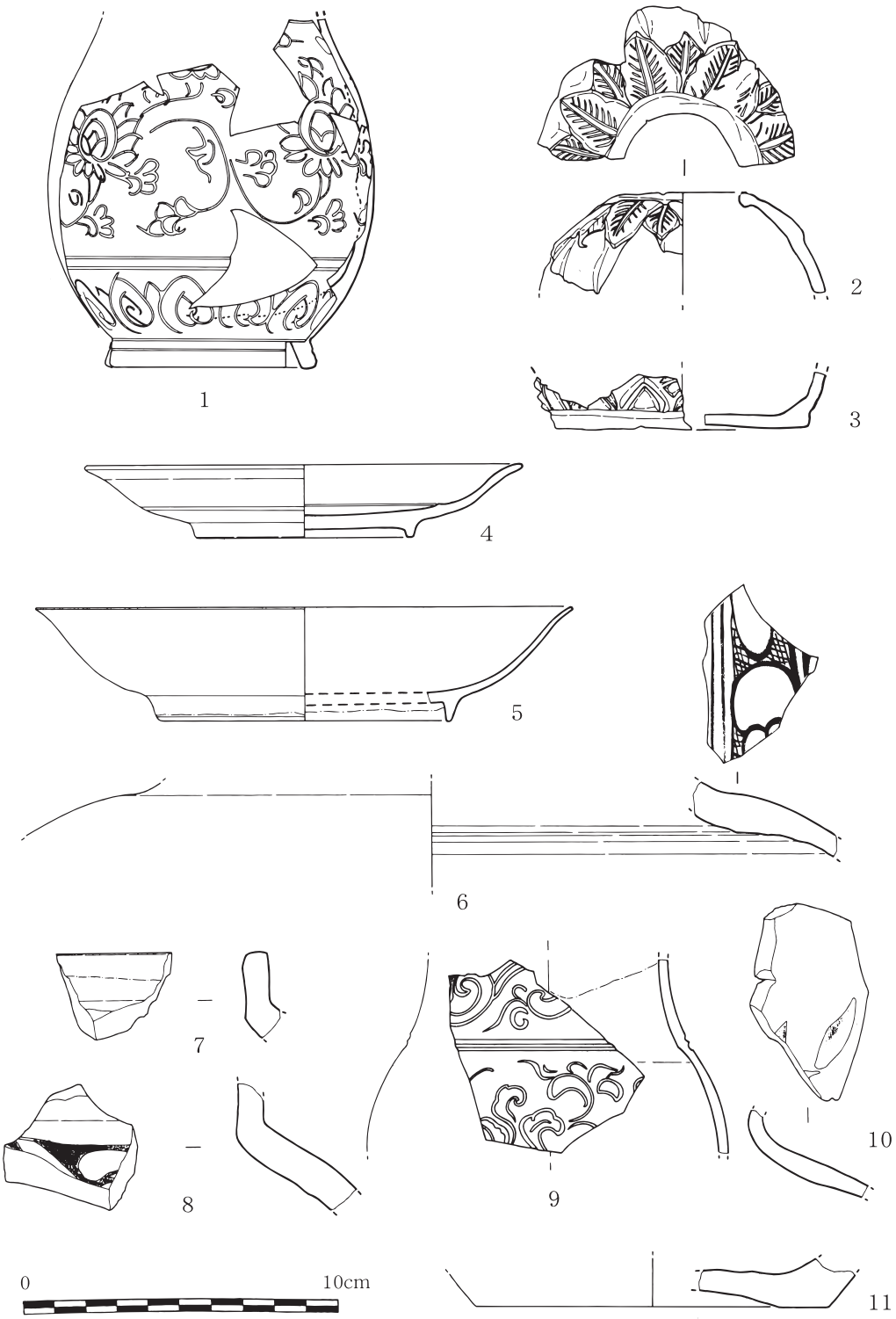
第 76 図 (PL.91)　第Ⅰ～Ⅳ層出土三彩・緑釉陶器
1 ～ 3. 三彩　4 ～ 6. 緑釉



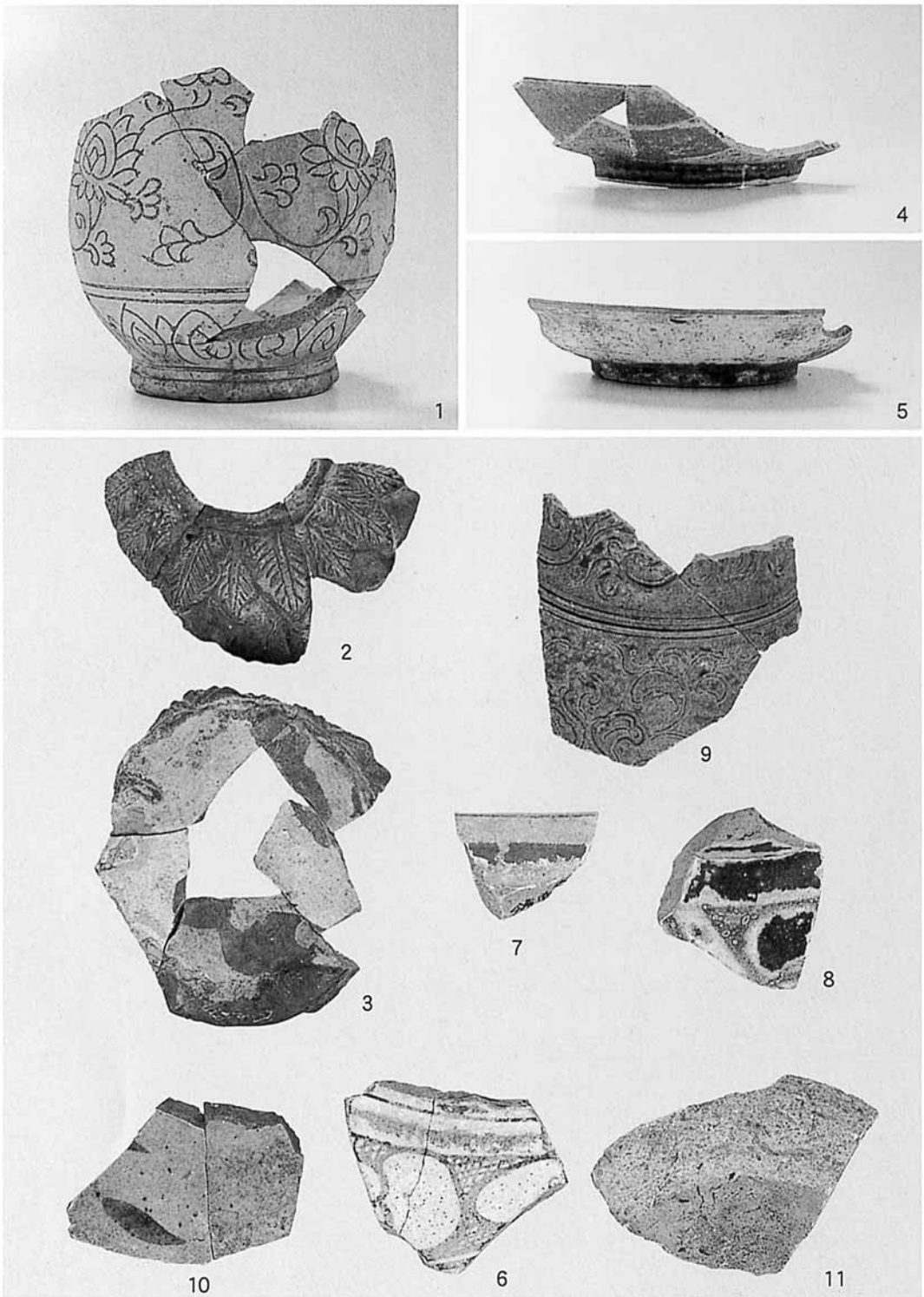




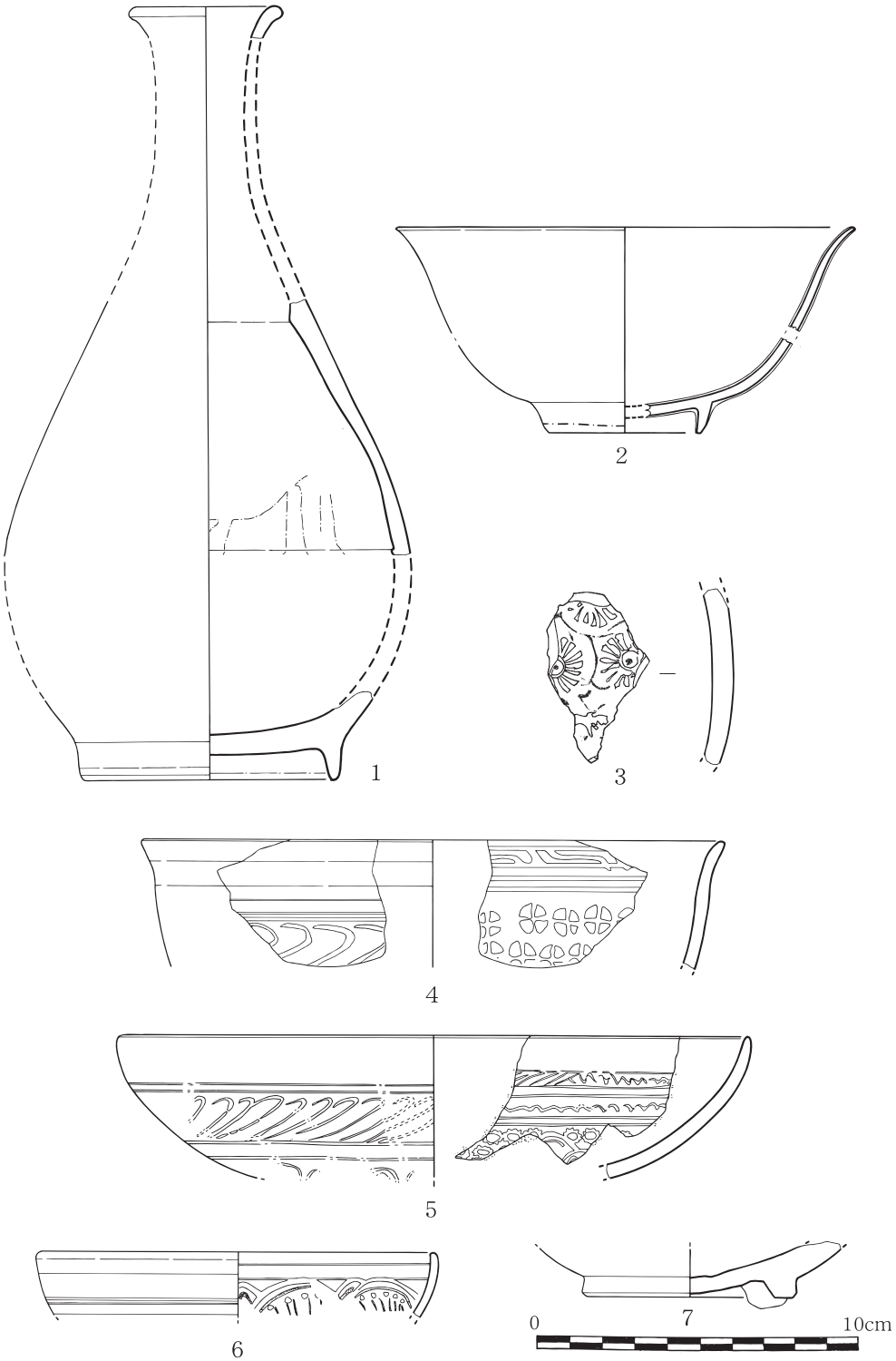
PL.91(第 76 図)　第Ⅰ～Ⅳ層出土三彩・緑釉陶器
1 ～ 3. 三彩　4 ～ 6. 緑釉



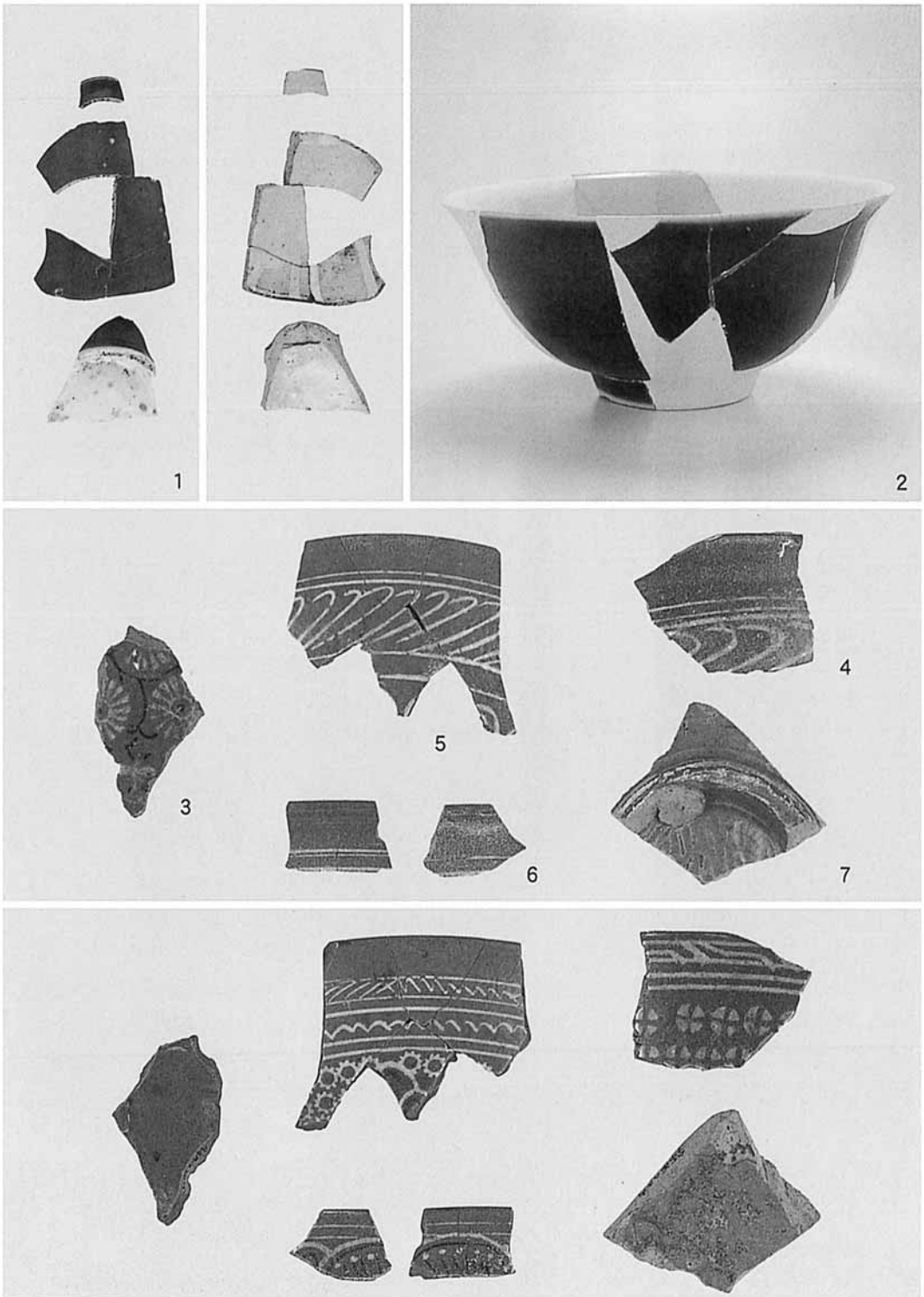
第 77 図 (PL.92)　第Ⅰ～Ⅳ層出土緑釉・翡翠釉・黄釉・白地褐彩陶器　1 ～ 3. 緑釉　4 ～ 8. 翡翠釉　9. 黄釉　10. 白地褐彩　11. 不明



PL.92(第 77 図)　**第Ⅰ～Ⅳ層出土緑釉・翡翠釉・黄釉・白地褐彩陶器**　1 ～ 3. 緑釉
4 ～ 8. 翡翠釉　9. 黄釉　10. 白地褐彩　11. 不明



第 78 図 (PL.93)　第Ⅰ～Ⅳ層出土瑠璃釉・韓国象嵌青磁　1. 瑠璃釉玉壺春瓶　2. 同碗　3. 韓国象嵌青磁瓶　4 ～ 7. 同碗



PL.93(第 78 図)　**第Ⅰ～Ⅳ層出土瑠璃釉・韓国象嵌青磁**　1. 瑠璃釉玉壺春瓶　2. 同碗
3. 韓国象嵌青磁瓶　4 ～ 7. 同碗

タ　イ　陶　磁

半練（第 79 図-1 ～ 6）

蓋－蓋の鈕や縁部の破片が 87 個検出された。器色は淡橙色で、素地には黒色細片鉱物が多量混入するのが大きな特徴である。蓋の鈕によって分類すると

Ａ：宝珠形（5 個）

Ｂ：饅頭形（1 個）

Ｃ：乳頭形（1 個）

の三つに分けられる。

　また、蓋端部の仕上げ方によって以下の三種に分けられる。

ａ、端部を折り曲げ、折り曲げた先端部を丁寧に仕上げ、三角状を呈するもの（9 個）。

ｂ、端部を折り曲げ、折り曲げた先端部をつまみ上げたもの（68 個）。

ｃ、端部を折り曲げてから上面を平坦に仕上げたもの（3 個）。

同図-1 は蓋径 14.8㎝ で、蓋甲に饅頭形の鈕が付いている。上記分類のＢとａの組合せである。器色は淡橙色を呈し、素地には黒色細片鉱物が多量に混入している。裏面中央には糸切り痕があるが、糸切り痕のまわりを篦削りして丸味をつけている。つまりこの半練（土器）の蓋は轆轤か回転台の上でつくり、糸切りで切り離したのちに、篦削りして仕上げている。同図-2・3 の蓋端部の仕上げ方はｂであるが、同図-4 はつまみ上げが高く蓋端部の仕上げ方はｃである。同図-5 は宝珠形、同図-6 は乳頭形の鈕である。

鉄絵（第 79 図 7 ～ 15）

合子－蓋が 5 個で、身は高台が 6 個で口縁部破片が 12 個検出された。素地には黒色細片鉱物が多量に混入するのが特徴である。第 79 図-7 の蓋と同図-9 の身は一対になると推定される。蓋には宝珠形の鈕が付き、身の高台はハの字状に広がる。蓋は甲のみに施釉。身は内面と外体面に施釉する。口唇部と高台際から外底までは露胎である。文様は鉄釉による太線文のみで構成されている。蓋は太線による重円文。同図-8 の蓋と同図-10 の身は一対の資料である。同図-7・9 と同じタイプの合子であり、蓋甲には鈕が付くものと考えられる。施釉方法も同図-7・9 とほぼ同じであるが、身の内面は全面施釉ではなく、内底だけに施釉されている。文様は甲上面に重円文、身下部に太線文、甲側面と身上部に唐草文が描かれている。同図-11 は口径 8㎝ の蓋である。蓋甲に施釉し、口唇から蓋裏は露胎、甲上面は重円文、甲側面は 2 本線を上・下に配し、その中に 3 角形を 2 つ合わせたような文様が廻っている。同図-12 は口径 8.5㎝ の身の破片である。内底と外体面に薄い釉を施し、合わせ口の部分は露胎となる。文様は上・下に弦文を配し、その中に蓮弁文を廻らしている。同図-13 は口径 6.5㎝ の身の破片である。内体面と外体面に薄い釉を施し、合わせ口の部分は露胎である。文様は口縁部直下に逆方向の円文に近い蓮弁文を廻らし、その下に弦文を描いているが弦文の本数は不明である。

壺－同図-14 に示した 1 点である。素地には黒色細片鉱物が多量に混入している。口径約 4㎝、胴部径約 8㎝ の小壺である。口縁部は低く垂直に立ち上がるいわゆる甑口である。文様は肩部と腰部に弦文を廻らし、窓枠と窓枠の間に 1 本の縦線を入れている。

水注－同図-15 に図上復元した、1 個体と推定され破片が 12 個検出された。俗にケンディと呼ばれている水注である。口径約 5cm。口は広く、頸部で狭くなるいわゆる盤口である。肩部には段が廻っている。注口は乳首状と考えられる。文様は口縁部に弦文と円文に近い蓮弁文が廻り、注口根部には蕉葉文が描かれている。胴部にはラマ式蓮弁の弁先を白抜きで表現し、その内・外を唐草文で埋めている。釉は内・外面に薄い透明釉。この水注と器形、サイズ、文様とも類似する水注が『タイ・ベトナムの陶磁』[註50]のグラビア版 50 の鉄絵花文水注である。ここで紹介されている水注は完品であり、器形や文様構成がなく理解できる。矢部良明氏は「タイ、スワンカローク窯 16 世紀　高さ 19.5cm」と説明している。実測図の紹介がないのでグラビアから図上復元を試みた。従ってこの復元図は理解を助けるために示したものである。

黄青釉陶器（第 80 図-1 ～ 4）

碗－薄い黄青釉を内底から外体面胴部まで施釉する一群である。素地は荒く、黒色細片鉱物を多量に混入する。一見して青磁にも見えるが素地や釉調などから、黄青釉陶器と仮称して報告する。産地に関しては本項に含めるべきかは判断しかねるが、タイ産鉄釉などと素地等が近似するため暫定的に本項に含めた。今後検討されよう。この黄青釉陶器には碗と皿がある。碗は口縁部破片 17 個と高台 4 個、皿は口縁部破片 5 個と高台 1 個検出された。県内の他の遺跡でも同種の碗が検出されており、今後増加することが予想される。碗には外反するものと内湾するものが見られる。外反碗の口縁破片 15 個、内湾碗の口縁破片が 2 個検出された。第 80 図-1 は口径 15cm、高台径 5.5cm、器高約 5.6cm、同図-2 は口径 14.2cm、高台径 5cm、器高 5.3cm の外反碗である。畳付は水平に切られ、高台内刳りは浅い。畳付から外底までは茶褐色を呈しており、鉄錆を施した痕かと考えられる。同図-3 は口径 14cm の内湾タイプの浅碗である。皿はすべて内湾タイプである。同図-4 は口径 14.6cm の皿で、口縁部は内側に僅かに肥厚している。

褐釉陶器（第 80 図-5 ～ 7・第 81 図）

褐釉陶器壺は素地に黒色細片鉱物が多く混入しているのが特徴である。検出された壺は小型、中型、大型に大別される。耳は小型壺では縦耳で、中型と大型は横耳だが立ち上がっている。また、小型には耳なし、二耳壺、四耳壺が検出されたが、中型と大型はすべて四耳壺が検出された。

小型壺－第 80 図-5 は口径 7.6cm、肩部径約 14.5cm の四耳壺である。口縁部は僅かに玉縁状に肥厚し、肩は張る。頸部には 4 本の段が廻り、その下に 4 つの縦耳が付いており、タイ陶器壺の特徴が明瞭である。薄い黒褐釉を内体面上部から外体面まで施釉したあと、口唇部の釉を削り取って露胎にしている。同図-6 は口径 4.6cm、高台径約 4.7cm、器高約 8.5cm の双耳壺である。口縁は僅かに玉縁状に肥厚し、肩上部に一対の縦耳が付く無頸壺である。薄い黄褐釉を内体面上部から外体面腰部まで施釉したあと、口唇部の釉を削り取って露胎にしている。同図-7 は口径が 7.6cm、高台径 5.3cm、器高 9.8cm の広口壺である。口縁部は肥厚せず外反し胴部で脹らむ、畳付は外端を面取りして竹節高台に仕上げている。薄い黒褐釉を内底から外体面腰部まで施釉してから、口唇部の釉を削り取って露胎にしている。

中型壺－第 81 図-1 に 1 個体を示した。口径 11cm、底径 9.7cm、器高 31.2cm の長胴四耳壺

である。短頸で、口縁部は大きく外反する。頸部直下に１本の段が廻り、その下に四つの耳が立ち上がっている状態で貼付されている。底部はベタ底である。薄い黒褐釉を逆Ｌ字状に外反する口縁下端から胴部中位まで施釉している。黒色細片鉱物の混入が特に多い。

大型壺－大型壺は大型四耳壺Ⅰと大型四耳壺Ⅱに大別される。いずれも薄い褐釉を頸上部から腰部まで施釉されている。頸部から肩部の釉は白く窯変しているのが多い。口内径は11.5 ～ 14.1cm におさまる。第 81 図-2 は大型四耳壺Ⅰで、口縁断面が隅丸方形状に肥厚し、頸部はやや筒形に立ち上がっている。頸部と肩部の境に１本の段が廻り、耳の貼付された部分やその下に２～３本単位の弦文（陰圏線）が廻っている。当該資料は口内径は14.1cm で、ほかに口内径 13cm になるものがある。同図-3 は大型四耳壺Ⅱで、口縁は玉縁状に肥厚、頸上部から大きく外反する。頸部と肩部の界に１本の段が廻り、その下に立ち上がる四つの横耳が貼付されている。口径 18cm で復元した底径約 26.5cm、器高約 66.0cm である。なお、口内径は 11.5cm で、ほかに口内径が 12cm、12.5cm、13.5cm のものがある。大型壺は２類に大別したが他にもバリエーションがあり今後検討されよう。

註文献

50. 矢部良明　1978 年『タイ・ベトナムの陶磁』平凡社

ベトナム陶磁

青磁（第 82 図-1 ～ 5）

碗－碗は口縁部 21 個、胴部 19 個、高台 11 個の破片が検出された。第Ⅰ層及びⅡ層上部からの出土である。高台から推算して 10 個前後の碗があったと考えられる。すべて鎬蓮弁文碗で、外底に鉄錆が塗られ、黒褐色を呈している。内底に重ね焼きの円形状目跡が数個見られるものと、目跡のないものがある。直口縁の薄手碗で、幅狭の鎬蓮弁が丁寧に削り出されている。鎬蓮弁の弁先を細い篦で剣先状に描いている。なお、内底は凹む。素地は灰白色でやや素粒子である。薄い透明釉を内底から高台外面まで施釉されている。畳付は露胎で、高台内面から外底までは鉄錆。この鎬蓮弁文碗は中国の砧青磁の鎬連弁文碗を模倣したものと考えられる。第 82 図-1 は口径 15.8cm、高台径 4.6cm、器高 6.8cm で、外体面には約 30 弁の鎬蓮弁文が廻っている。復元できた資料はこの１点限りである。ほかの遺跡でも復元資料は越来城跡[註51]出土の１点（口径 15.1cm、高台径 4.2cm、器高 7.0cm）だけである。この２点はサイズに若干の違いはあるが、器形、文様、施釉方法など類似している。同図１・２は内底に目跡がないもの、同図-3・４は目跡のあるものである。器形や施釉方法はすべて同じである。高台は薄く、畳付外端を面取りして竹の節状に仕上げているものが多い。同図-5・６は口縁部破片である。

青花（第 82 図-7 ～ 11）

瓶－第 82 図-7 は玉壺春瓶の頸部で、削りで縦溝を入れ、八角状に仕上げている。文様は頸部、肩部、胴部、腰下部に四分割されて描かれるタイプと考えられる。残存部分は肩部と胴部の文様である。胴部は長円形状の窓枠形が廻り、その窓枠の中に青海波文と唐草文が交互に描かれている。素地は白色微粒子で薄い透明釉が内・外面に施釉されている。

壺－同図-10 は口径 15.1cm、器高約 19cm の広口壺である。素地は灰白色でやや素粒子。釉は

内体面に薄く、外体面にやや厚くかかっている。外体面は白化粧してから透明釉を施釉している。外体面の釉はところどころ剥離している。口唇部は露胎で、文様は頸部、肩部、胴部、腰下部に分割して文様帯として描かれている。頸部は雷文帯くずれの文様が廻っている。肩部は四つの円形状窓枠が割り付けられ、窓枠と窓枠の間を下向きの青海波文で埋めている。なお、窓枠の中には草木文が描かれている。胴部は雲龍文が廻っている。腰下部は細い線描きによるラマ式蓮弁文が廻っているようであるが、僅かに残存しているだけである。同図-8・9も染付壺の破片と考えられる。いずれも腰下部の破片で、文様はラマ式蓮弁文の一部が残っている。

碗－第 82 図-11 は口径 13.0cm、高台径 4.8cm、器高 5.6cm の外反碗である。外底に「大明年造」の銘があるが、内底の文様が中国的でないことと、外体面が無文であることなどから「ベトナム」として扱った。素地は灰白色でやや素粒子である。内底の文様は中国産の染付では類例を見たことがなく、むしろベトナム染付にこの種の文様が散見される。なお、口唇に鉄釉が施釉されている。中国産の可能性もあるので今後検討が必要である。

色絵（第 82 図-12 ～ 15）

合子蓋－同図-12 は口径約 8.8cm の色絵合子の蓋である。素地は白色微粒子で、口唇部だけ露胎である。口縁部は円形だが、甲側面には縦の小溝が刻まれ、甲側面は波状を呈する。甲上面はほぼ平坦になり、中央に鈕があるかは不明。この合子は下絵付を呉須で、上絵付を赤などの色絵で描かれたいわゆる青花色絵である。

合子身－同図-13 で、口径 7.3cm、高台径 3.6cm、高さ 4.4cm の合子の身である。素地は白色微粒で、薄い透明釉が内面と外体面に施釉されている。合わせ口と畳付から外底までとは露胎である。この色絵合子は同図-12 の合子蓋とは違って、下絵付がなく上絵付だけである。赤と緑の上絵具で窓枠が描かれ、その中に 2 本線の斜め格子文と点描文で描かれたものと、如意頭のくずれた様な文様が交互に描かれている。細い 2 本線による斜め格子文と点描文は 12 と同じ文様であり、ベトナムの色絵の特徴であろう。

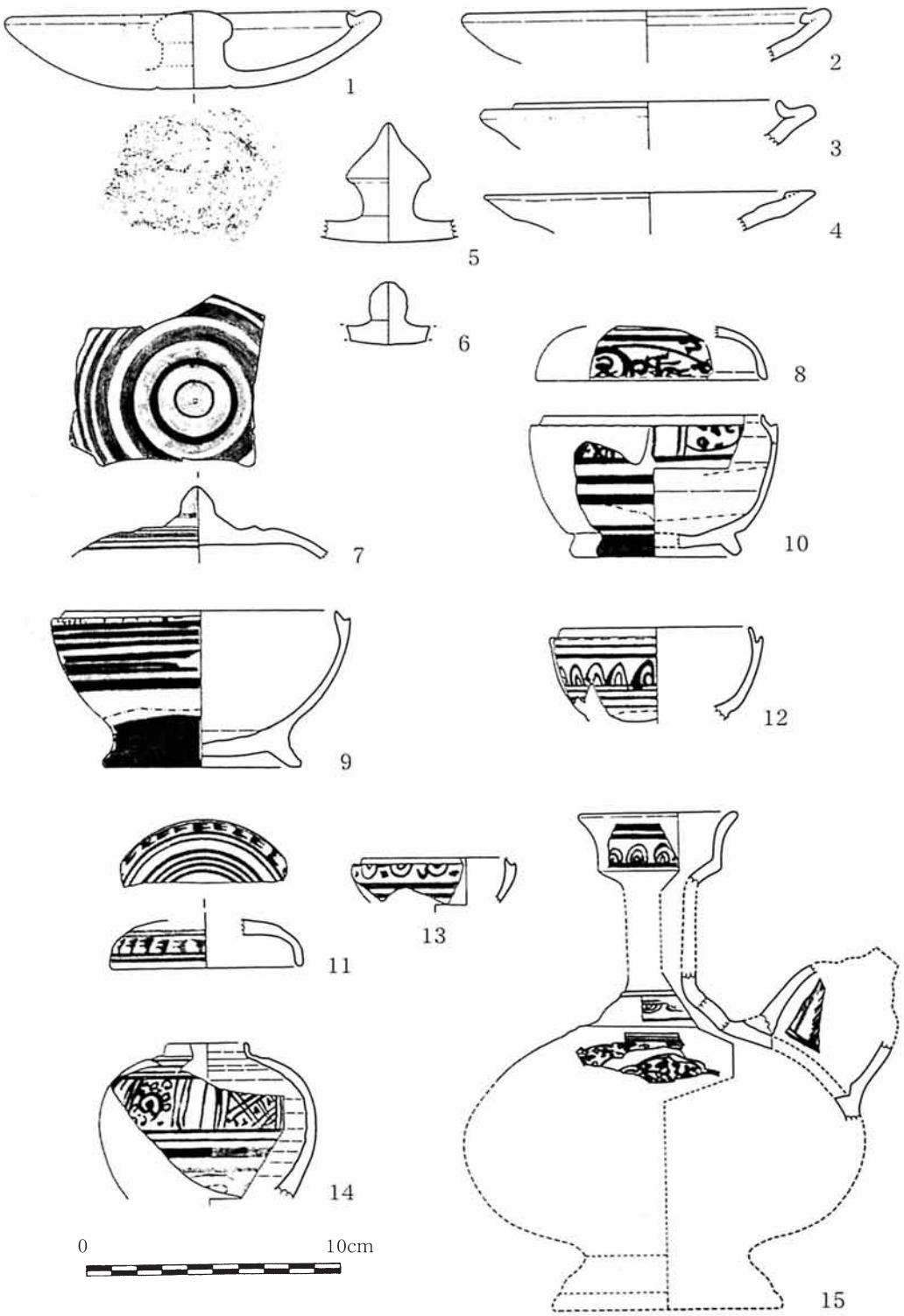
碗－同図-14 は口縁部、同図-15 は底部資料である。復元はできないが、同一個体と考えらる。素地は黄白色でやや粗粒子で焼成は弱く軟質である。薄い失透釉が内底から高台外面まで施釉されている。畳付けは露胎で外底には鉄錆が塗られていたようであるが、ほとんど消えて、わずかに茶褐色を呈するのみである。文様は下絵付けがなく、赤と緑の上絵付けのみである。内底には赤絵具で唐草文が描かれ、その間に緑絵具で円文が描かれている。口縁部内面には赤絵具で 2 本線が廻されている。外体面には赤絵具で草花文が描かれ、その間に僅かに緑絵具が残っている。

白磁（第 83 図）

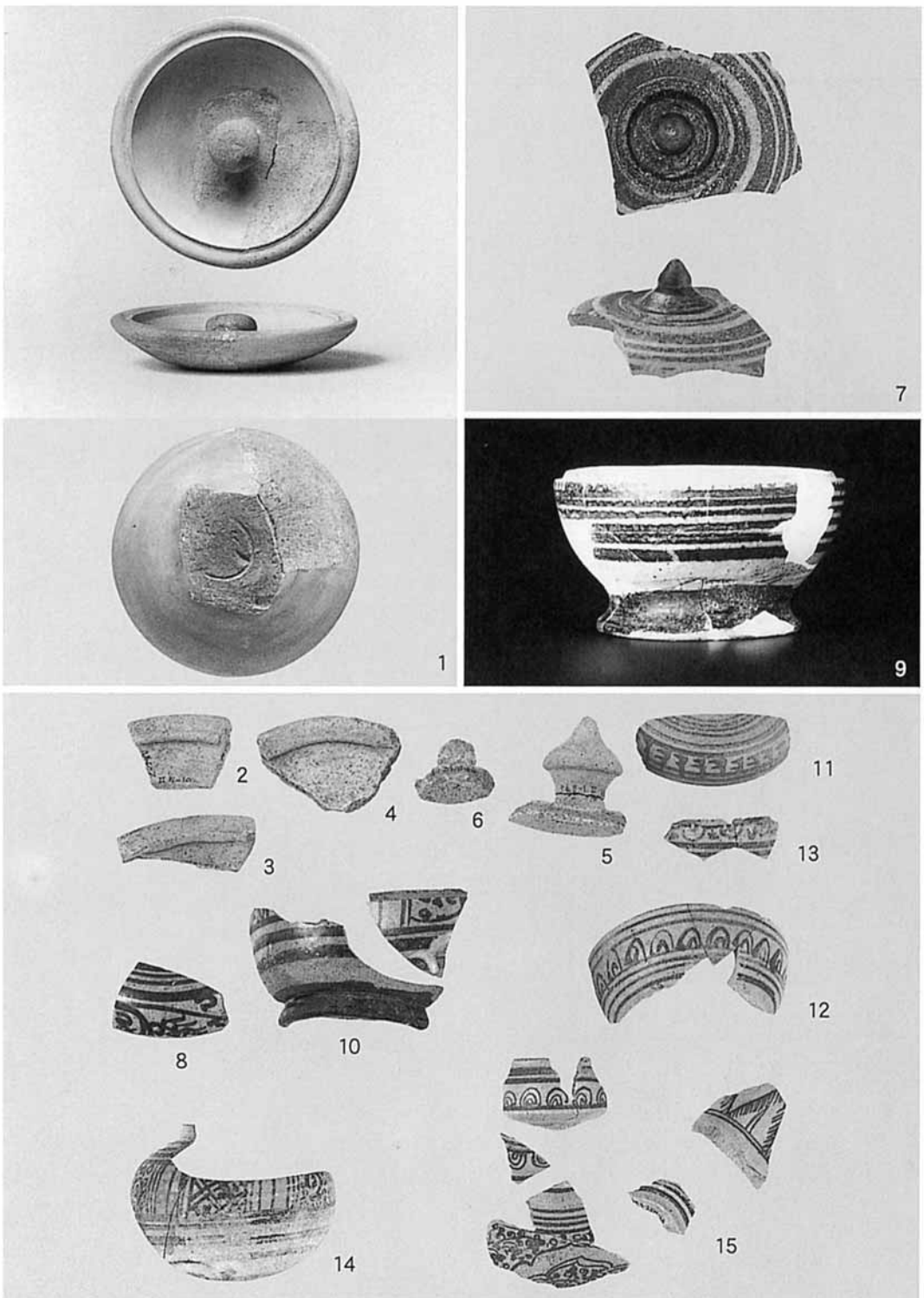
碗－第 83 図は白磁碗で 4 個体を図示した。器形はいずれも内刳りの浅い底部に直線気味に開く弱い端反の口禿げ碗である。同図-1 は内面を三段に割り付け上段を空白、中段に縦に並ぶ波状文、下段は型押しによる青海波文が見られる。同図-2 ～ 3 は内面を二段に割り付け界線で区画する。上段を空白、下段は型押しによる青海波文が見られる。いずれも白化粧後高台脇まで施釉され口縁部は釉を掻き取り口禿げとする。

註文献

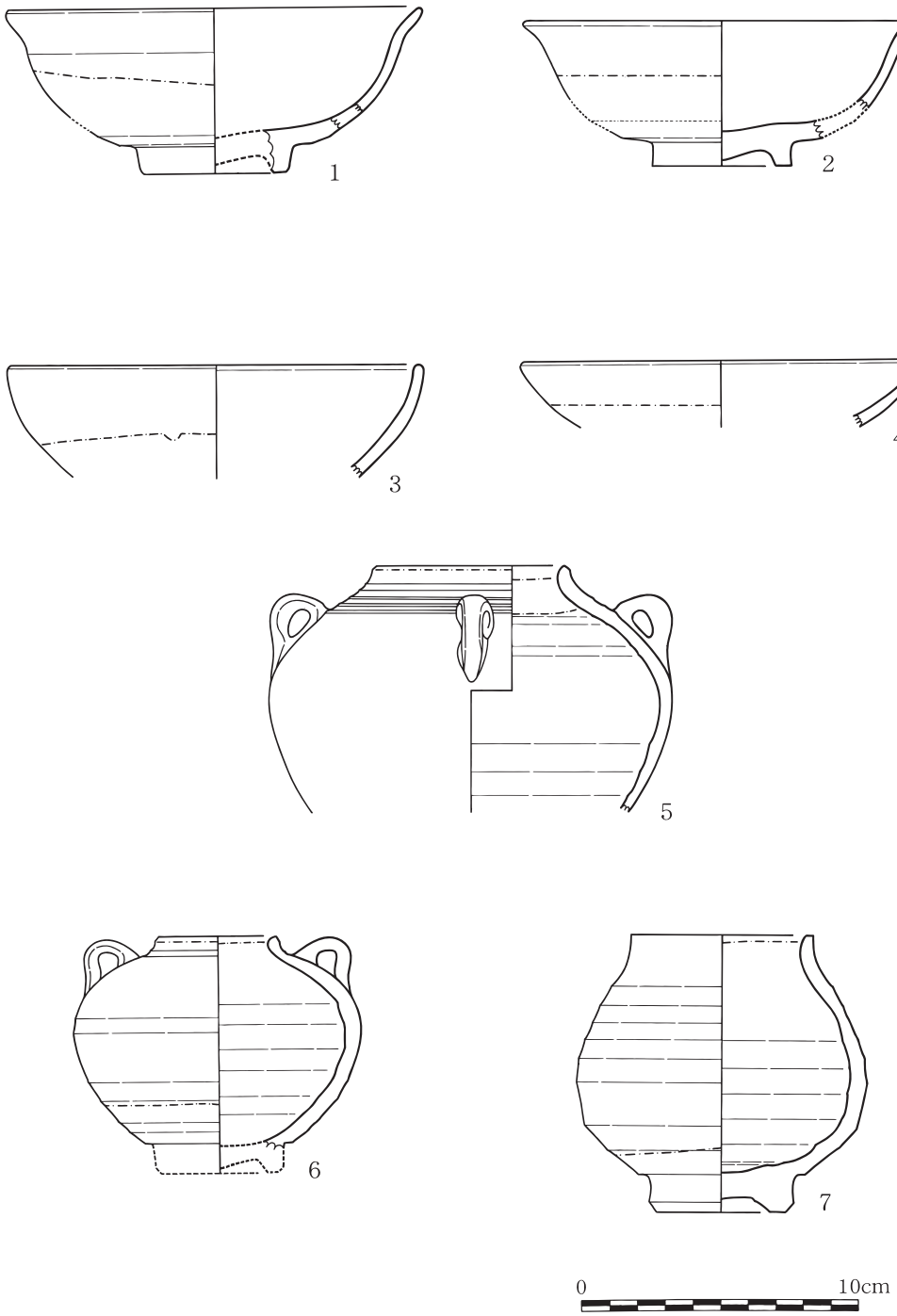
51. 沖縄市教育委員会編　1988 年『越来城』沖縄市文化財調査報告書第 11 集（p 51 第 12 図- 9）



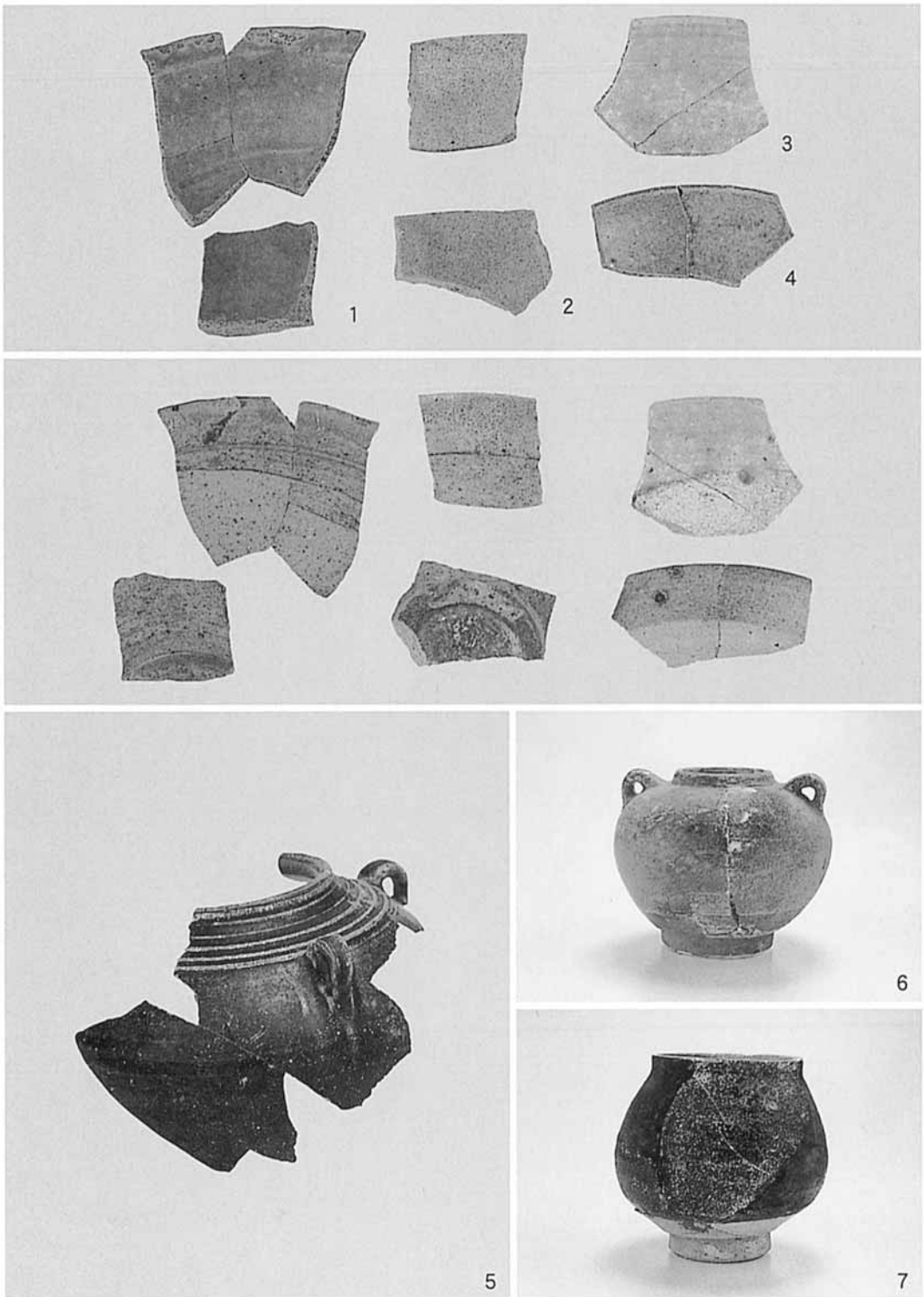
第 79 図 (PL.94)　第Ⅰ～Ⅳ層出のタイ陶磁
1 ～ 6. 半練（土器）の蓋　7 ～ 15. 鉄絵



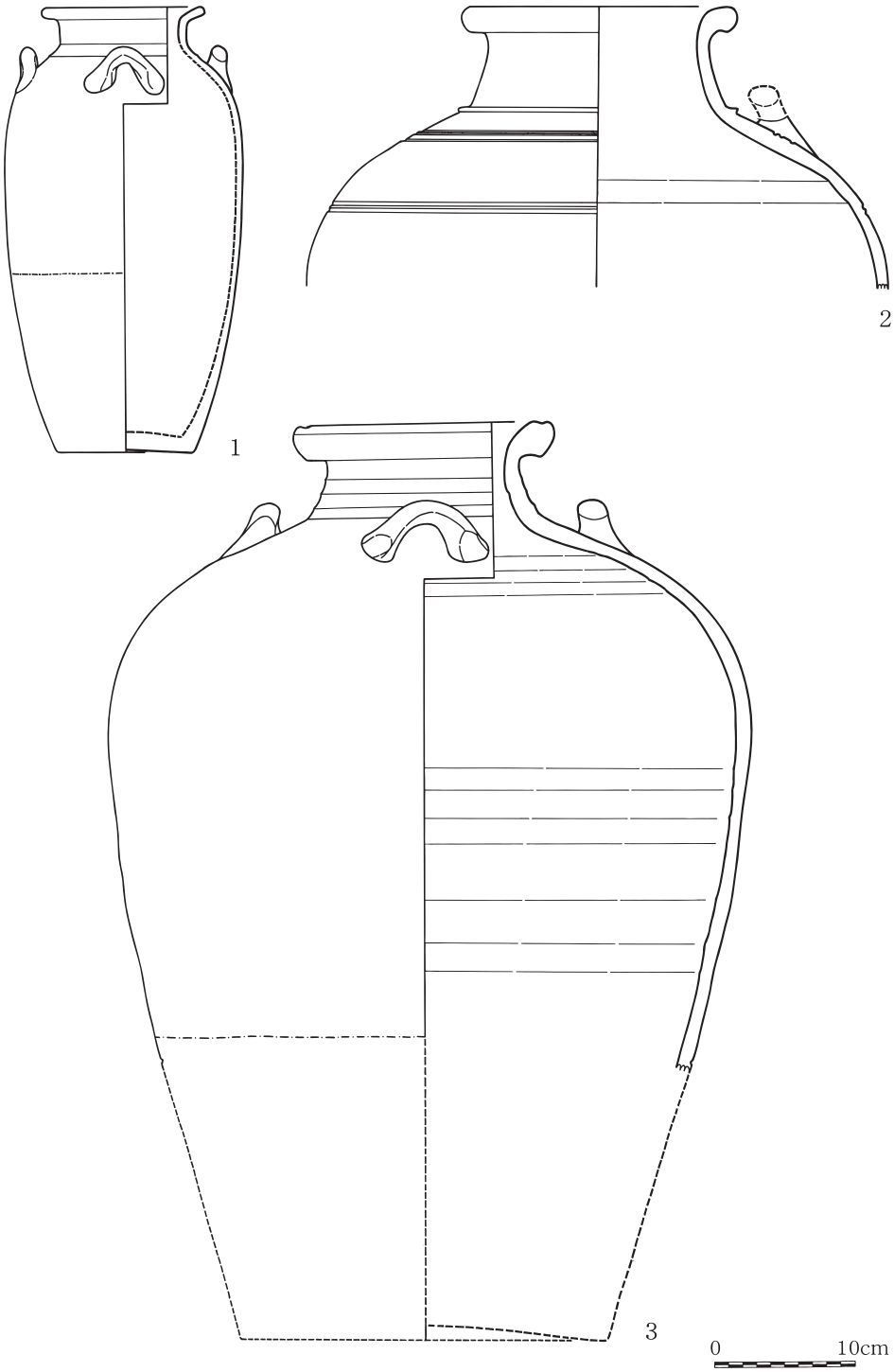
PL.94（第 79 図）　第Ⅰ～Ⅳ層出のタイ陶磁
1 ～ 6. 半練（土器）の蓋　7 ～ 15. 鉄絵



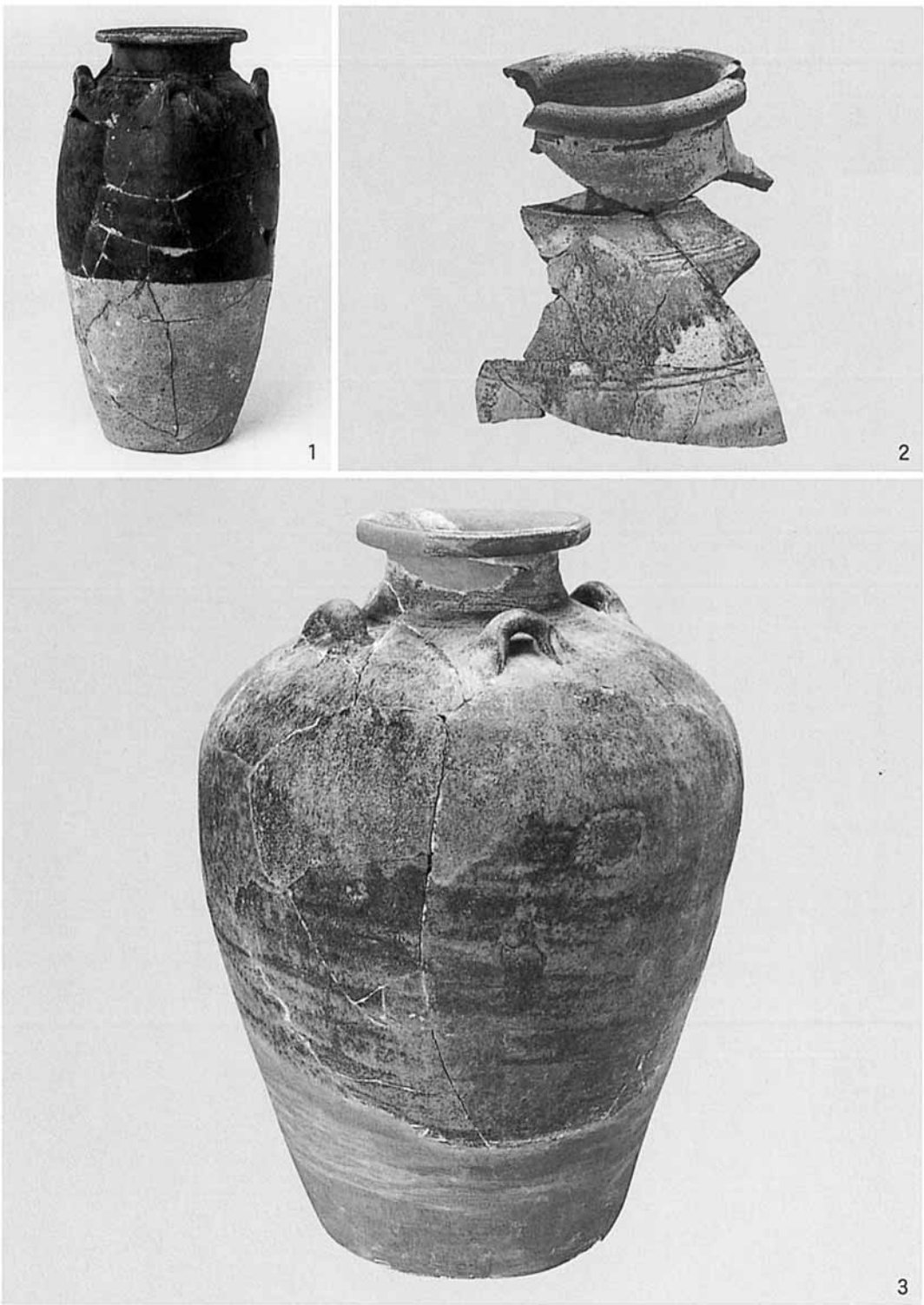
第 80 図 (PL.95)　第Ⅰ～Ⅳ層出のタイ陶磁
1 ～ 4. 黄青釉陶器　5 ～ 7. 褐釉陶器



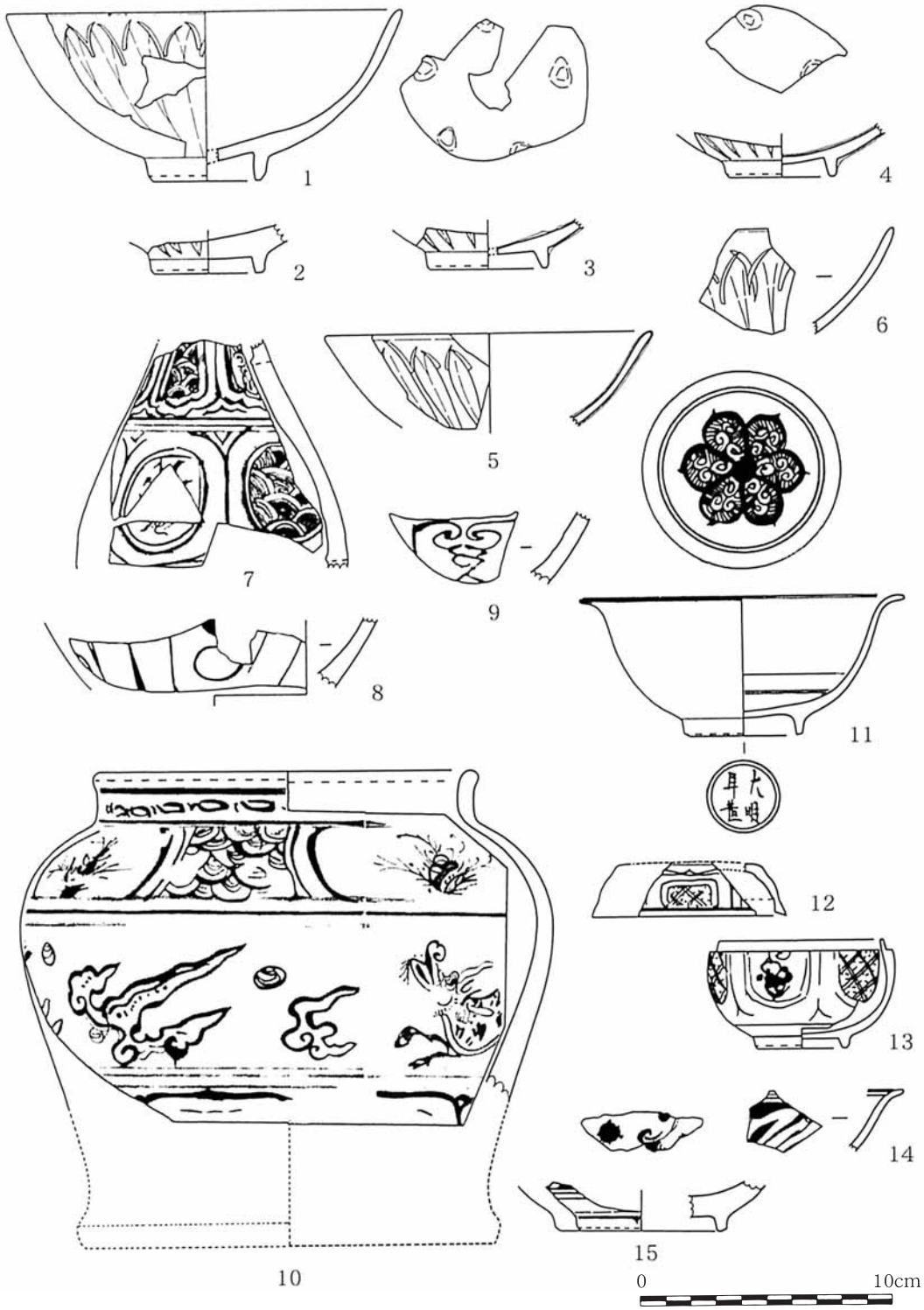
PL.95(第 80 図)　第Ⅰ～Ⅳ層出のタイ陶磁
1 ～ 4. 黄青釉陶器　5 ～ 7. 褐釉陶器



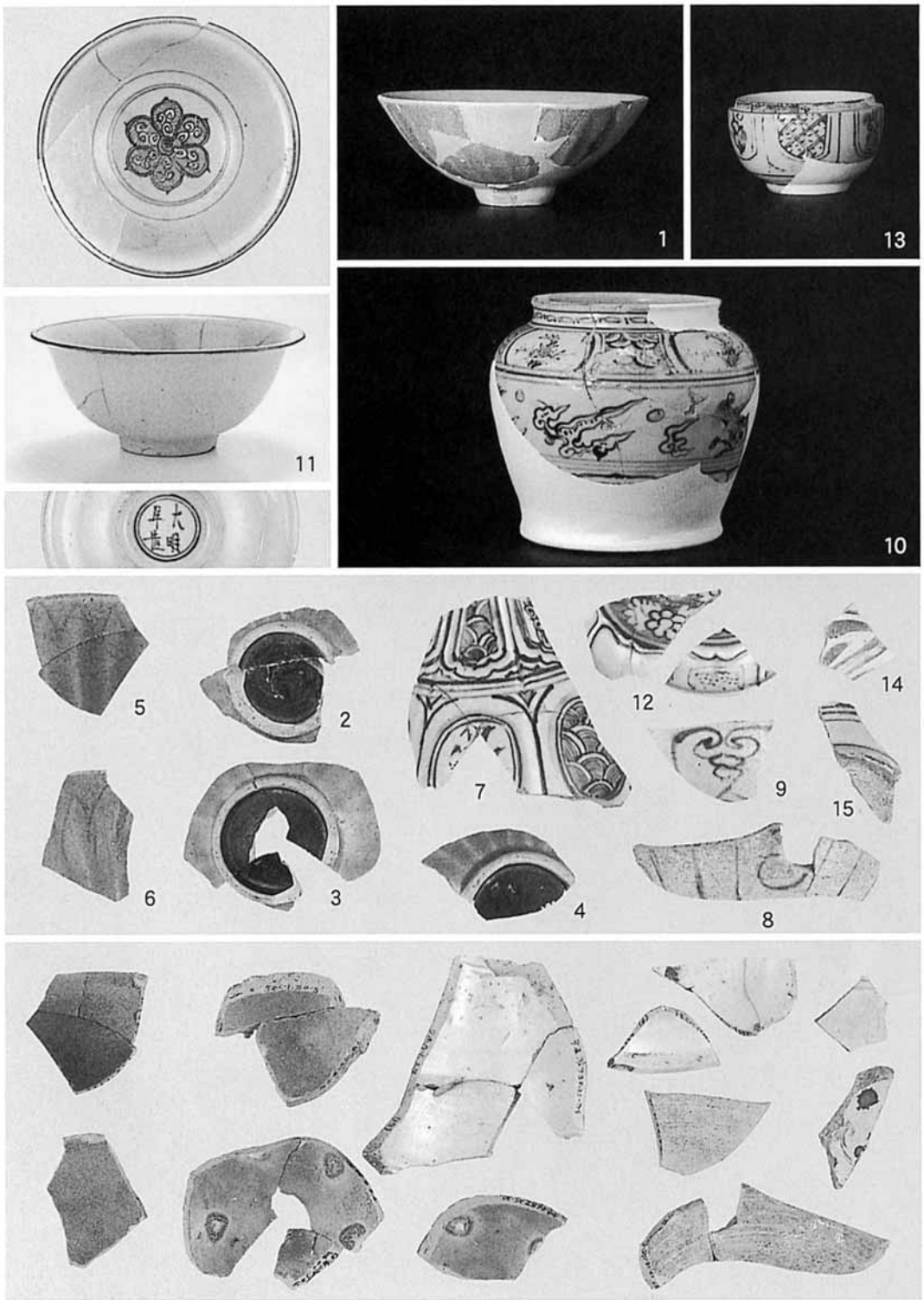
第 81 図 (PL.96)　第Ⅰ～Ⅳ層出のタイ陶磁
1 ～ 3. 褐釉陶器



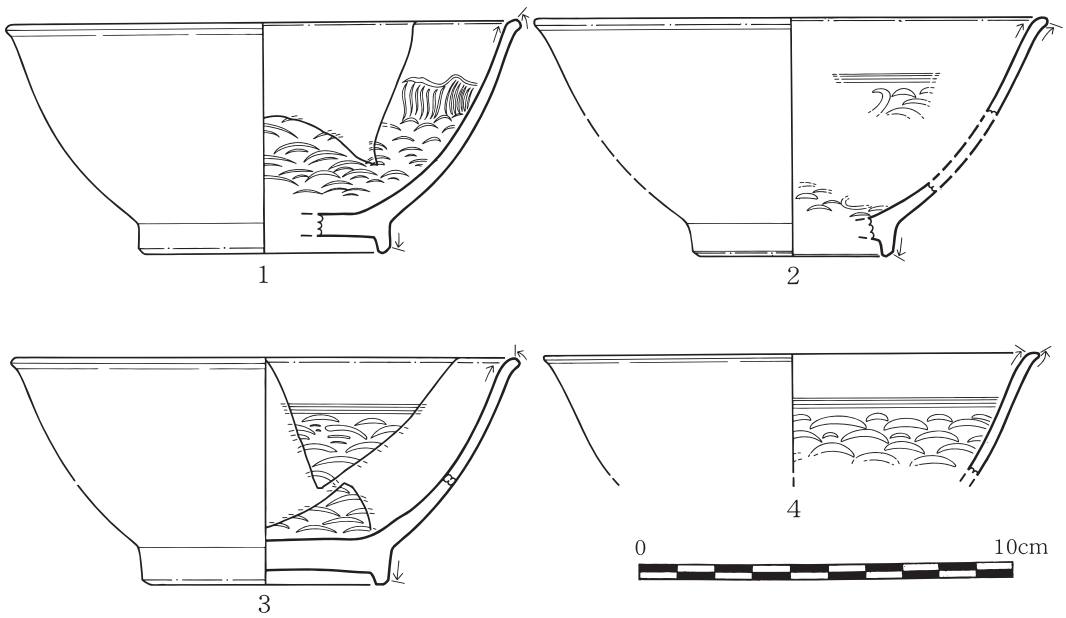
PL.96（第 81 図）　第Ⅰ～Ⅳ層出のタイ陶磁
1 ～ 3. 褐釉陶器



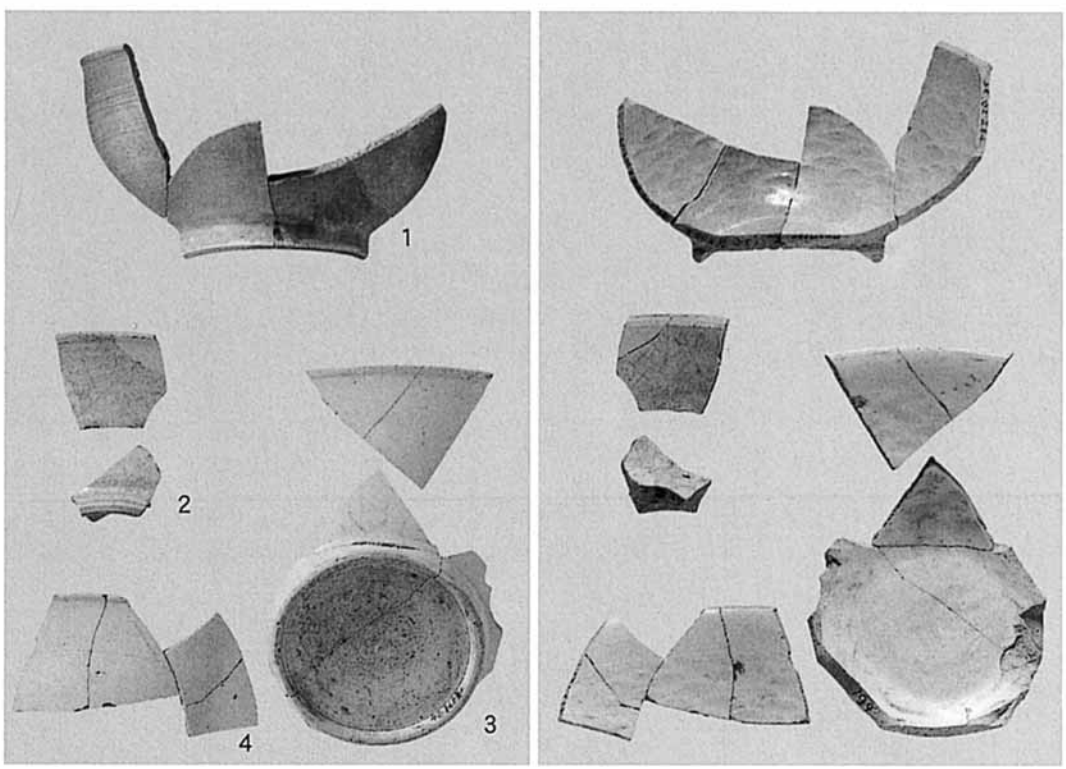
第 82 図 (PL.97)　第Ⅰ～Ⅳ層出のベトナム陶磁
1 ～ 6. 青磁　7 ～ 11. 青花　12 ～ 15. 色絵



PL.97(第 82 図)　第Ⅰ～Ⅳ層出のベトナム陶磁
1 ～ 6. 青磁　7 ～ 11. 青花　12 ～ 15. 色絵



第 83 図 (PL.98)　第Ⅰ～Ⅳ層出のベトナム陶磁　1 ～ 4. 白磁碗



PL.98 (第 83 図)　第Ⅰ～Ⅳ層出土のベトナム陶磁　1 ～ 4. 白磁碗